

# 綺堂むかし語り

岡本綺堂

青空文庫





I  
思い出草





# 思い出草

## 赤蜻蛉

私はこうじまち麴町 もとぞのちよう元園町 一丁目に約三十年も住んでいる。その間に二、三度転宅したが、それは単に番地の変更にとどまって、とにかくちまたに元園町という土地を離れたことはない。このごろ秋晴れの朝、巷ちまたに立って見渡すと、この町も昔とはずいぶん変ったも

のである。懐旧の感がむらむらと湧く。

江戸時代えいどに元園町という町はなかった。このあたりは徳川幕府とくがわの調練場となり、維新後は桑茶栽付所となり、さらに拓ひらかれて町となった。昔は薬園であつたので、町名を元園町という。明治八年、父が初めてここに家を建てた時には、百坪の借地料が一円であつたそうだ。

わたしが幼い頃の元園町は家並がまだ整わず、到るところに草原があつて、蛇へびが出る、狐きつねが出る、兎うさぎが出る、私の家のまわりにも秋の草が一面に咲き乱れていて、姉と一緒にいっしょに笹ささを持って花を摘みに行つたことを微かすかに記憶している。その草叢くさむらの中には、ところどころに小さい池や溝どぶがわ、川かわのようなものもあつて、釣りなど



をしている人も見えた。

蟹かにや蜻蛉とんぼもたくさんにいた。蝙蝠こうもりの飛ぶのもしばしば見た。

夏の夕暮れには、子供が草鞋わらじを提さげて「蝙蝠来い」と呼びながら、蝙蝠を追い廻していたものだが、今は蝙蝠の影など絶えて見ない。秋の赤蜻蛉、これがまた実におびただしいもので、秋晴れの日は小さい竹竿ざおを持って往来に出ると、北の方から無数の赤とんぼがいわゆる雲霞うんかの如くに飛んで来る。これを手当り次第たに叩たたき落とすと、五分か十分のあいだに忽たちまち数十匹の獲物えものがあつた。今日こんにちの子供は多寡たかが二疋ひき三疋の赤蜻蛉を見つけて、珍しそうに五人六人もで追い廻している。

きょうは例の赤とんぼ日び和よりであるが、ほとんど一疋も見えない。

わたしは昔の元園町がありありと眼の先に泛うかんで、年ごとに榮えてゆく此の町がだんだんに詰まらなくなつて行くようにも感じた。

## 茶碗

〇君が来て古い番茶茶碗を呉くれた。おてつ牡丹餅ぼたもちの茶碗である。おてつ牡丹餅は維新前から麴町の一名物であつた。おてつという美人の娘が評判になつたのである。元園町一丁目十九番地の角かどみせ店で、その地続きが元は徳川幕府の薬園、後には調練場となつていたので、若い侍などが大勢集おおぜいまつて来る。その傍わきに美しい

娘が店を開いていたのであるから、評判になつたも無理はない。

おてつの店は明治十八、九年頃まで営業を続けていたかと思う。私の記憶に残っている女主人のおてつは、もう四十くらいであつたらしい。眉まゆを落して齒を染めた、小作りの年増としまであつた。髻むこを貰もらつたがまた別れたとかいうことで、十一、二の男の児こを持つていた。美しい娘も老いておもかげが變つたのであろう、私の稚おさない眼には格別の美人とも見えなかつた。店の入口には小さい庭があつて、飛び石伝いに奥へはいるようになっていた。門のきわには高い八つ手が栽うえてあつて、その葉かげに腰をかがめておてつが毎朝入口を掃はいでいるのを見た。汁粉しること牡丹餅とを売っているのであるが、私の知っている頃には店もさびびれて、汁粉も牡丹餅も

余り旨くはなかつたらしい。近所ではあつたが、わたしは滅多に食いに行つたことはなかつた。

おてつ牡丹餅の跡へは、万屋よろずやという酒屋が移つて来て、家屋も全部新築して今日まで繁昌はんじょうしている。おてつ親子は麻布あざぶの方へ引つ越したとか聞いているが、その後の消息は絶えてしまつた。

わたしの貰もらつた茶碗はそのおてつの形見である。O君の阿父おとつさんは近所に住んでいて、昔からおてつの家とは懇意こんいにしていた。維新の当時、おてつ牡丹餅は一時閉店するつもりで、その形見と云つたような心持で、店の土瓶どびんや茶碗などを知己しるべの人々に分配した。O君の阿父おとつさんも貰つた。ところが、何かの都合からおてつ

は依然その営業をつづけていて、私の知っている頃までやはりお  
てつ牡丹餅の看板を懸けていたのである。

汁粉屋の茶碗と云うけれども、さすがに維新前に出来たものだ  
けに、焼きも薬も悪くない。平仮名でおてつと大きく書いてある。  
わたしは今これを自分の茶碗に遣つかっている。しかし此この茶碗には  
幾人の唇くちびるが触れたであろう。

今この茶碗で番茶をすすっていると、江戸時代の麴町が湯気の  
あいだから蜃しんきりょう気楼のように朦朧もうろうと現われて来る。店の八つ手  
はその頃も青かった。文ぶん金きん高島田にやの字の帯を締めた武家の  
娘が、供の女を連れて徐しずかにはいつて来た。娘の長い袂たもとは八つ手  
の葉に触れた。娘は奥へ通つて、小さい白扇を遣つかっていた。

この二人の姿が消えると、芝居で観る久松ひさまつのような丁稚てつちがは  
いって来た。丁稚は大きい風呂敷包みをおろして縁えんに腰をかけた。  
どこへか使いに行く途中と見える。彼は人に見られるのを恐れる  
ように、なるたけ顔を隠して先まず牡丹餅を食った。それから汁粉  
を食った。銭を払って、前垂れで口を拭ふいて、逃げるようにこそ  
こそと出て行つた。

講武こうぶしよ所しよふうの鬻まげに結ゆつて、黒木綿もめんの紋付、小倉こくらの馬乗り袴ばかま、  
朱しゆぞや鞞ざやの大小の長いのをぶつ込んで、朴齒ほおばの高い下駄げだをがらつか  
せた若侍わかしよが、大手を振つてはいつて来た。彼は鉄扇てつせんを持って  
た。悠々と蒲団ふとんの上にすわつて、角細工つのの骸骨がいこつを根付ねつけにした煙た  
草ばこ入れを取り出した。彼は煙りを強く吹きながら、帳場に働くお

てつの白い横顔を眺めた。そうして、低い声で頼山陽らいさんようの詩を吟じた。

町の女房らしい二人連れが日傘を持ってはいつて来た。かれらも煙草入れを取り出して、鉄漿おはぐろを着けた口から白い煙りを軽く吹いた。山の手へ上のぼつて来るのはなかなかくたびれると云った。帰りには平河ひらかわの天神さまへも参詣して行こうと云った。

おてつと大きく書かれた番茶茶碗は、これらの人々の前に置かれた。調練場の方ではどツと云う鬨ときの音が揚がった。焙烙調練ほうろくが始まったらしい。

わたしは巻煙草を喫のみながら、椅子いすに寄りかかつて、今この茶碗を眺めている。かつてこの茶碗くちびるに唇を触れた武士も町人も美人

も、皆それぞれの運命に従って、落着く所へ落着いてしまったのであろう。

## 芸妓

有名なおてつ牡丹餅の店が私の町内の角に存していたころ、その頃の元園町には料理屋も待合も貸席もあつた。元園町と接近した麴町四丁目には芸妓屋げいしやもあつた。わたしが名を覚えてゐるのは、玉吉、小浪などという芸妓で、小浪は死んだ。玉吉は吉原よしわらに巣を替えたとか聞いた。むかしの元園町は、今のような野暮やぼな町では無かつたらしい。



また、その頃のことので私がよく記憶しているのは、道路のおびただしく悪いことで、これは確かに今の方がよい。下町したまちは知らず、われわれの住む山の手では、商家でも店でこそランプを用いたれ、奥の住居すまいではたいてい行燈あんどうをとぼしていた。家によつては、店先にも旧式のカンテラを用いていたのもある。往来に瓦斯ガス燈もない、電燈もない、軒ランプなども無論なかつた。したがつて、夜の暗いことはほとんど今の人の想像の及ばないくらいで、湯に行くにも提灯ちようちんを持ってゆく。寄席よせに行くにも提灯を持ってゆく。おまけに路がわるい。雪どけの時などには、夜はうつかり歩けないくらいであつた。しかし今日こんにちのように追剥おいはぎや出歯でば亀かめの樽うわさなどは甚はなだ稀まれであつた。

遊芸の稽古所けいこと云うものもいちじるしく減じた。私の子供の頃には、元園町一丁目だけでも長唄の師匠が二、三軒、常磐津ときわづの師匠が三、四軒もあつたように記憶しているが、今ではほとんど一軒もない。湯帰りに師匠のところへ行つて、一番唸うなろうという若い衆も、今では五十銭均一か何かで新宿しんじゆくへ繰り込む。かくの如くにして、江戸つ子は次第ほろに亡びてゆく。浪花節の寄席が繁はんじ昌ようする。

半鐘はんしようの火の見梯子ぼしじと云うものは、今は市中に跡を絶つたが、わたしの町内にも高い梯子があつた。或る年の秋、大嵐のために折れて倒れて、凄まじい響きに近所を驚かした。翌あくる朝、私が行つてみると、梯子は根もとから見事に折れて、その隣りの垣を倒

していた。その頃には烏からすうり 瓜うりが真つ赤に熟して、蔓つるや葉はが擲からみ合つたままで、長い梯子と共に横たわっていた。その以来、わたしの町内に火の見梯子は廃せられ、そのあとに、関せき運漕店の旗竿が高く樹たつていたが、それも他に移つて、今では立派な紳士の邸宅になっている。

## 西郷星

かの西南戦せんえき役は、わたしの幼い頃のことでは何んにも知らないが、絵草紙屋えぞうしやの店にいろいろの戦争絵のあつたのを記憶している。いずれも三枚続きで、五銭くらい。また、そのころ流行はやつた唄に、

あか  
シャツポ  
紅い帽子は兵隊さん、西郷に追われて、

トツピキピーノピー。

今思えば十一年八月二十三日の夜であつた。夜半よなかに近所の人が  
みな起きた。私の家でも起きて戸を明けると、何か知らないがポ  
ンポンパチパチいう音がきこえる。父は鉄砲の音だと云う。母は  
心配する、姉は泣き出す。父は表へ見に出たが、やがて帰つて来  
て、「なんでも竹たけばし橋内で騒動が起きたらしい。時どきに流れだ  
まが飛んで来るから戸を閉めて置け。」と云う。わたしは衾よぎをか  
ぶつて蚊帳かやの中に小さくなっていると、暫しばらくくしてパチパチの音も  
止やんだ。これは近衛兵このえの一部が西南役えきの論功行賞ろんこうこうしょうに不平いふだを懷  
いて、突然暴拳を企てたものと後に判つた。

やはり其の年の秋と記憶している。毎夜東の空に当つて<sup>ほうきぼ</sup>箒星<sup>せいせい</sup>が見えた。誰が云い出したか知らないが、これを西郷星<sup>さいごうぼし</sup>と呼んで、さき頃のハレー<sup>すいせい</sup>彗星<sup>せいせい</sup>のような騒ぎであつた。しまいは錦絵まで出来て、西郷桐野篠<sup>きりのしのはら</sup>原らが雲の中に現われている図などが多かつた。

また、その頃に西郷鍋というものを売る商人が来た。怪しげな洋服に金紙<sup>きんがみ</sup>を着けて金モールと見せ、付け髭<sup>ひげ</sup>をして西郷の如く<sup>こしら</sup>拵え、竹の皮で作つた船のような形の鍋を売る、一個一錢<sup>もちろ</sup>。勿論、一種の玩具<sup>おもちゃ</sup>に過ぎないのであるが、なにしろ西郷というのが呼び物で、大繁昌であつた。私などは母にせがんで幾度も買った。

そのほかにも西郷糖という菓子を売りに来たが、「あんな物を食つては毒だ。」と叱しかられたので、買わずにしまった。

## 湯屋

湯屋ゆうやの二階というものは、明治十八、九年の頃まで残っていたと思う。わたしが毎日入浴する麴町四丁目の湯屋にも二階があつて、若い小綺麗こぎれいな姐ねえさんが二、三人居た。

わたしが七つか八つの頃、叔父に連れられて一度その二階に上がったことがある。火鉢に大きな薬罐やかんが掛けてあつて、そのわきには菓子なの箱ばが列ならべてある。のちに思えば例の三馬さんばの「浮世風呂」

をその儘で、茶を飲みながら将棋をさしている人もあつた。

時はちようど五月の初めで、おきよさんという十五、六の娘が、  
 菖蒲しやうぶを花瓶かびんに挿さしていたのを記憶している。松平紀義まつだいらのりよしのお  
 茶ちやみずの水事件で有名な御世梅ごせめお此このという女も、かつてこの二階にい  
 たと云うことを、十幾年の後に知つた。

その頃の湯風呂には、旧式の石榴口ざくろぐちと云うものがあつて、夜  
 などは湯煙ゆげが濛々もうもうとして内は真つ暗。しかもその風呂が高く出  
 来ているので、男女ともに中途の階段を登つてはいる。石榴口に  
 は花鳥風月もしくは武者絵などが画かいてあつて、私のゆく四丁目  
 の湯では、男湯の石榴口に水滸すいこでん伝の花和尚かおしようと九紋龍くもんりゆう、女湯  
 の石榴口には例の西郷桐野篠原の画像が掲げられてあつた。

男湯と女湯とのあいだは硝子戸ガラスで見透かすことが出来た。これを禁止されたのはやはり十八、九年の頃であろう。今も昔も變らないのは番台の拍子木の音。

## 紙鳶

春風が吹くと、紙鳶たこを思い出す。暮れの二十四、五日ごろから春の七草ななくさ、すなわち小学校の冬季休業のあいだは、元園町十九と二十の両番地に面する大通り（麴町三丁目から靖国神社やすくにに至る通路）は、紙鳶を飛ばすわれわれ少年軍によつてほとんど占領せられ、年賀の人などは紙鳶の下をくぐつて往来したくらいであ



つた。暮れの二十日頃になると、玩具屋駄菓子店などまでがほとんど臨時の紙鳶屋に化けるのみか、元園町の角には市商人のいちあきうどような小屋掛けの紙鳶屋が出来た。印半纏しるしばんてんを着た威勢のいい若い衆の二、三人が詰めていて、糸目を付けるやら鳴弓うなりを張るやら、朝から晩まで休みなしに忙がしい。その店には、少年軍が隊をなして詰め掛けていた。

紙鳶は種類もいろいろあったが、普通は字紙鳶じだこ、絵紙鳶、奴紙やつこ鳶で、一枚、二枚、二枚半、最も多いのは二枚半で、四枚六枚となつては子供には手が付けられなかつた。二枚半以上の大紙鳶おおは、職人か、もしくはは大家たいけの書生などが揚げることになつていた。松の内は大おお供小供入りおおもこどもこども乱れて、到るところに糸を手繰たぐる。またそ

の間に娘子供は羽根を突く。ぶんぶんという鳴弓の声、かつかつという羽子はごの音。これがいわゆる「春の声」であつたが、十年以来の春の巷は寂々寥々せきせきりようりよう。往来で迂闊うかつに紙鳶などを揚げていると、巡查が来てすぐに叱られる。

寒風に吹き晒さらされて、両手に胼ひびを切らせて、紙鳶に日を暮らした三十年前の子供は、随分乱暴であつたかも知れないが、襟卷えりまきをして、帽子をかぶつて、マントにくるまつて懐ろ手ふとこをして、無意味にうろうろしている今の子供は、春が来ても何だか寂しそうに見えてならない。

## 獅子舞

獅子ししというものも甚だ衰えた。今日こんにちでも来るには来るが、いわゆる一文獅子いちもんじしというものばかりで、ほんとうの獅子舞はほとんど跡を断つた。明治二十年頃までは随分立派な獅子舞いが来た。まず一行数人、笛を吹く者、太鼓を打つ者、鉦かねを叩く者、これに獅子舞が二人もしくは三人付き添っている。獅子を舞わすばかりでなく、必ず仮面めんをかぶつて踊つたもので、中にはすこぶる巧みに踊るのがあつた。かれらは門かどぐち口で踊るのみか、屋敷内へも呼び入れられて、いろいろの芸を演じた。鞠まりを投げて獅子の玉取りなどを演ずるのは、余ほどむずかしい芸だとか聞いていた。

元園町には竹内たけうちさんという宮内省の侍医が住んでいて、新年

には必ずこの獅子舞を呼び入れていろいろの芸を演じさせ、この日に限って近所の子供を邸やしきへ入れて見物させる。竹内さんに獅子が来たと言うと、子供は雑煮はしの箸ほおを投り出して皆んな駈け出したものであった。その邸は二十七、八年頃に取り毀こわされて、その跡に数軒の家が建てられた。私が現在住んでいるのは其の一部である。元園町は年毎に栄えてゆくと同時に、獅子を呼んで子供に見せてやろうなどと云うのんびりした人は、だんだんに亡びてしまった。口を明いて獅子を見ているような奴は、いちがいに馬鹿だののしと罵られる世の中となった。眉が険けわしく、眼が鋭い今の元園町人は、獅子舞を見るべく余りに怜悧りこうになった。

万まんざい歳ざいは維新以後全く衰えたと見えて、わたしの幼い頃にも已すで

に昔のおもかげはなかつた。

## 江戸の残党

明治十五、六年の頃と思う。毎日午後三時頃になると、一人のおでん屋が売りに来た。年は四十五、六でもあろう、頭には昔ながらの小さい鬘まげを乗せて、小柄ではあるが色白の小粋こいきな男で、手てつこうきやはん

甲脚絆あしづなのかいがいしい扮装いでたちをして、肩にはおでんの荷を担ぎ、手には洩団扇しふうちわを持って、おでんや〜と呼んで来る。実に佳い声であつた。

元園町でも相当の商売があつて、わたしもたびたび買ったこと

がある。ところが、このおでん屋は私の父に逢うと互いに挨拶をする。子供心に不思議に思つて、だんだん聞いてみると、これは市ヶ谷<sup>いちがや</sup>辺に屋敷を構えていた旗本八万騎の一人で、維新後思い切つて身を落し、こういう稼業を始めたのだと云う。あの男も若い時にはなかなか道楽者であつたと、父が話した。なるほど何処<sup>どこ</sup>かきりりとして小粋なところが、普通の商人<sup>あきんど</sup>とは様子が違ふと思つた。その頃にはこんな風の商人がたくさんあつた。

これもそれと似寄りの話で、やはり十七年の秋と思ふ。わたしが、父と一緒に四谷<sup>よつや</sup>へ納涼<sup>すずみ</sup>ながら散歩にゆくと、秋の初めの涼しい夜で、四谷伝馬町<sup>よつやてんまちょう</sup>の通りには幾軒の露店<sup>よみせ</sup>が出ていた。そのあいだに筵<sup>むしろ</sup>を敷いて大道<sup>だいどう</sup>に坐つている一人の男が、半紙を前に置

いて頻りに字を書いていた。今日では大道で字を書いても、  
錢を呉れる人は多くあるまいと思うが、その頃には通りがかりの  
人がその字を眺めて幾許かの錢を置いて行ったものである。

わたしらも其の前に差しかかると、うす暗いカンテラの灯影に  
その男の顔を透かして視た父は、一間ばかり行き過ぎてから私に  
二十錢紙幣を渡して、これをあの人にやって来いと命じ、かつ遣  
つたらば直ぐに駈けて来いと注意された。乞食同様の男に二十錢  
はちつと多過ぎると思つたが、云わるるままに札を掴んでその店  
先へ駈けて行き、男の前に置くや否や一散に駈け出した。これ  
に就いては、父はなんにも語らなかつたが、おそらく前のおでん  
屋と同じ運命の人であつたらう。

この男を見た時に、「霜しも夜よ鐘かね」の芝居しげに出る六浦正三郎むつらと  
いうのはこんな人だろうと思つた。その時に彼は半紙に向つて  
「……茶立虫ちやたてむし」と書いていた。上の文字は記憶してないが、  
おそらく俳句を書いていたのであろう。今日でも俳句その他で、  
茶立虫という文字を見ると、夜露の多い大道に坐つて、茶立虫と  
書いていた浪人者のような男の姿を思い出す。江戸の残党はこん  
な姿で次第に亡びてしまったものと察せられる。

### 長唄の師匠

元園町に接近した麴町三丁目きねやに、杵屋ろくお路久という長唄の師匠



が住んでいた。その娘のお花さんはなと云うのが評判の美人であつた。この界限かいわいの長唄の師匠では、これが一番繁昌して、私の姉も稽古にかよつた。三宅花圃女史みやけかほもこの門弟であつた。お花さんは十九年頃のコレラで死んでしまつて、お路久さんもつづいて死んだ。一家ことごとく離散して、その跡は今や阪川牛乳店の荷車置場になつている。長唄の師匠と牛乳屋、おのずからなる世の變化を示しているのも不思議である。

## お染風

この春はインフルエンザが流行した。

日本で初めて此の病いがはやり出したのは明治二十三年の冬で、二十四年の春に至つてますます猖獗しょうけつになつた。われわれは其の時初めてインフルエンザという病いを知つて、これはフランスの船から横浜に輸入されたものだと言ふ噂を聞いた。しかし其の当時はインフルエンザと呼ばずに普通はお染そめかぜ風と云つていた。なぜお染という可愛らしい名をかぶらせたかと詮議せんぎすると、江戸時代にもやはりこれによく似た感冒が非常に流行して、その時に誰かがお染という名を付けてしまった。今度の流行性感冒もそれから縁を引いてお染と呼ぶようになったのだらうと、或る老人が説明してくれた。

そこで、お染という名を与えた昔の人の料簡りょうけんは、おそらく

恋風と云うような意味で、お染が久松ひさまつに惚れたように、すぐに感染するという謎であるらしく思われた。それならばお染に限らない。お夏なつでもお俊しゅんでも小春こはるでも梅川うめがわでもいい訳であるが、お染という名が一番可愛かれんらしくあどけなく聞える。猛烈な流行性をもつて往々に人を斃たおすような此の怖るべき病いに対して、特にお染という最も可愛らしい名を与えたのは頗すこぶるおもしろい対照である、さすがに江戸っ子らしいところがある。しかし、例の大コレおおラが流行した時には、江戸っ子もこれには辟易へきえきしたと見えて、小春とも梅川とも名付け親になる者がなかつたらしい。ころりと死ぬからコロリだなどと知恵のない名を付けてしまった。

すでに其の病いがお染と名乗る以上は、これに憑よりつかれる患

者は久松でなければならぬ。そこで、お染のちんにゆう闖入を防ぐには「久松留守」という貼札をするがいいと云うことになった。新聞にもそんなことを書いた。勿論、もちろん新聞ではそれを奨励した訳ではなく、単に一種の記事として、昨今こんなことが流行すると報道したのであるが、それがいよいよ一般の迷信をあお煽つて、明治二十三、四年頃の東京には「久松留守」と書いた紙札を軒に貼り付けることが流行した。中には露骨に「お染御免」と書いたものあつた。

二十四年の二月、私は叔父と一緒に向島むこうじまの梅屋敷へ行つた。風のない暖い日であつた。三二みめぐり圀の堤下どてしたを歩いていると、一軒の農家の前に十七、八の若い娘が白い手拭てぬぐいをかぶつて、今書い

たばかりの「久松るす」という女文字の紙札を軒に貼っているのを見た。軒のそばには白い梅が咲いていた。その風情は今も眼に残っている。

その後にもインフルエンザは幾たびも流行を繰り返したが、お染風の名は第一回限りで絶えてしまった。ハイカラの久松に憑よりつくには、やはり片仮名のインフルエンザの方が似合うらしいと、私の父は笑っていた。そうして、その父も明治三十五年にやはりインフルエンザで死んだ。

どんぐり

時雨しぐれのふる頃となった。

この頃の空を見ると、どんぐり団栗の実を思い出さずにはいられない。

麴町二丁目と三丁目との町ざかいから靖国神社の方へむかう南北の大通りを、一丁ほど北へ行つて東へ折れると、ちょうど英国大使館の横手へ出る。この横町が元園町とごばんちよう五番町との境で、大通

りの角から横町へ折り廻して、長い黒くろべい堀がある。江戸の絵図によると、昔は藤ふじむら村なにかしという旗本の屋敷であつたらしい。

私の幼い頃には麴町区役所になつていた。その後、幾たびか住む人が代つて、石いしもと本陸軍大臣が住んでいたこともあつた。板堀の内には眼隠しとして幾株の古いかし檜の木が一行をなして栽うえられてゐる。おそらく江戸時代からの遺物であろう。繁つた枝や葉は堀

を越えて往来の上に青く食<sup>は</sup>み出している。

この横町は比較的<sup>に</sup>往来が少ないので、いつも子供の遊び場になつていた。わたしも幼い頃には毎日ここで遊んだ。ここで紙鳶<sup>たこ</sup>をあげた、独楽<sup>こま</sup>を廻した。戦争ごっこをした、縄飛びをした。われわれの跳ねまわる舞台は、いつもかの黒塀と櫓の木とが背景になつていた。

時雨<sup>しぐれ</sup>のふる頃になると、櫓の実が熟して来る。それも青いうちは誰も眼をつけないが、熟してだんだんに栗のような色になって来ると、俗にいう団栗なるものが私たちの注意<sup>ひ</sup>を惹くようになる。初めは自然に落ちて来るのをおとなしく拾うのであるが、しまいにはだんだんに大胆になつて、竹竿を持ち出して叩き落す、ある

いは小石に糸を結んで投げつける。椎しいの実よりもやや大きいかつし褐よく色の木の實あられが霰あられのようにはらはらと降つて来るのを、われ先にと駈け集まつて拾う。懐ろへ押し込む者もある。紙袋へ詰め込む者もある。たがいに其の分量の多いのを誇つて、少年の欲を満足させていた。

しかし白しら櫛かしは格別、普通のどんぐりを食うと唾になるとか云い伝えられているので、誰も口へ入れる者はなかつた。多くは戦争ごつごつこの弾薬に用いたのであつた。時には細い短い竹を団栗の頭へ挿して小さい独樂を作つた。それから弥次郎兵衛やじろべえというものを作つた。弥次郎兵衛という玩おも具ちやはもう廃すたつたらしいが、その頃には子供たちの間になかなか流行つたもので、どんぐりで作る



場合には先ず比較的に拉の大きいのを選んで、その横腹に穴をあけて左右に長い細い竹を斜めに挿し込み、その竹の端には左右とも同じく大きい団栗の実を付ける。で、その中心になつた団栗を鼻の上に乗せると、左右の団栗の重量が平均してちつとも動かずに立っている。無論、頭をうっかり動かしてはいけない、まるで作りつけの人形のように首を据<sup>す</sup>えている。そうして、多くの場合には二、三人で歩きくらべをする。急げば首が動く。動けば次郎兵衛が落ちる。落ちれば負けになるのである。ずいぶん首の痛くなる遊びであつた。

どんぐりはそんな風にいろいろの遊び道具をわれわれに与えてくれた。横町の黒塀の外は、秋から冬にかけて殊<sup>こと</sup>に賑<sup>にぎ</sup>わつた。人

家の多い町なかに住んでいる私たちに取っては、このどんぐりの木が最も懐かしい友であつた。

「早くどんぐりが生なればいいなあ。」

私たちは夏の頃から青い梢こずえを見上げていた。この横町には赤とんぼも多く来た。秋風が吹いて来ると、私たちは先ず赤とんぼを追う。とんぼの影がだんだんに薄くなると、今度は例のどんぐりに取りかかる。どんぐりの実が漸く肥えて、褐色の光沢つやが磨いたように濃くなつて来ると、とかくに陰つた日がつづく。薄い日が洩もれて来たかと思うと、又すぐに陰つて来る。そうして、雨が時々にはらはらと通つてゆく。その時には私たちはあわてて黒堀のわきに隠れる。檜の枝や葉は青い傘をひろげて私たちの小さい頭

の上をおほ掩おほつてくれる。雨が止むと、私たちはすぐに其の恩人にむかつて礫つぶてを投げる。どんぐりは笑い声を出してからからと落ちて来る。湿ぬれた泥と一緒につかんで懐ろに入れる。やがてまた雨が降ふつて来る。私たちは木の蔭へまた逃げ込む。

そんなことを繰り返しているうちに、着物は湿ぬれる、手足は泥だらけになる。家うちへ帰かえつて叱なぐられる。それでも其の面白さは忘れられなかった。その檜ひのきの木は今でもある。その頃の友達はどこへ行いつてしまったか、近所にはほとんど一人も残のこっていない。

## 大綿

時雨のふる頃には、もう一つの思い出がある。沼波瓊ぬなみけいおん音氏の「乳のぬくみ」を読むと、その中にオボーと云う虫に就いて、作者が幼い頃の思い出が書いてあった。蓮はすの実を売る地藏盆の頃になると、白い綿のような物の着ている小さい羽虫が町を飛ぶのが怖ろしく淋しいものであった。これを捕とらえる子供らが「オボー三尺下さンがれよ」という、極めて幽暗な唄を歌つたと記してあつた。

作者もこのオボーの本名を知らないと云つてゐる。わたしも無論知つてゐない。しかし此の記事を読んでゐるうちに、私も何だか悲しくなつた。私もこれによく似た思い出がある。それが測らずも此の記事に誘い出されて、幼い昔がそぞろに懐かしくなつた。

名古屋なごやの秋風に飛んだ小さい羽虫とほとんど同じような白い虫が東京にもある。瓊音氏も東京で見たと書いてあった。それと同じものであるかどうかは知らないが、私の知っている小さい虫は俗に「大綿おおわた」と呼んでいる。その羽虫は裳もすそに白い綿のようなものを着けているので、綿という名をかぶせられたものであろう。江戸時代からそう呼ばれているらしい。秋も老いて、むしろ冬に近い頃から飛んで来る虫で、十一月から十二月頃に最も多い。赤とんぼの影が全く尽きると、入れ替って大綿が飛ぶ。子供らは男も女も声を張りあげて「大綿来い〜飯食ままわしよ」と唄った。

オボーと同じように、これも夕方に多く飛んで来た。殊に陰つた日に多かった。時雨を催した冬の日の夕暮れに、白い裳を重そ

うに垂れた小さい虫は、細かい雪のようにふわふわと迷つて来る。飛ぶと云うよりも浮かんでいると云う方が適當かも知れない。彼はどこから何処へ行くともなしに空中に浮かんでいる。子供らがこれを追い捕えるのに、男も女も長い袂たもとをあげて打つのが習いであつた。

その頃は男の児も筒袖つつそでは極めて少なかつた。筒袖を着る者は裏店うらだなの子だと卑いやしまれたので、大抵の男の児は八つ口やくちの明いた長い袂をもつていた。私も長い袂をあげて白い虫を追つた。私の八つ口には赤い切きれが付いていた。

それでも男の袂は女より短かつた。大綿を追う場合にはいつも女の児に勝利を占められた。さりとて棒ぼうや箒ほうきを持ち出す者もなか

った。棒や箒を揮うには、相手が余りに小さく、余りに弱々しいためであつたらう。

横町で鮎売りの声がきこえる。大通りでは大綿来い〜の唄がきこえる。冬の日は暗く寂しく暮れてゆく。自分が一緒に追つてゐる時はさのみにも思わないが、遠く離れて聞いていると、寒い寂しいような感じが幼い心にも沁み渡つた。

日が暮れかかつて大抵の子供はもう皆んな家へ歸つてしまつたのに、子守をしている女の兎一人はまだ往来にさまよつて「大綿来い〜」と寒そうに唄っているなどは、いかにも心細いような悲しいような気分を誘い出すものであつた。

その大綿も次第に絶えた。赤とんぼも昔に較べると非常に減つ

たが、大綿はほとんど見えなくなつたと云つてもよい。二、三年前に靖国神社の裏通りで一度見たことがあつたが、そこらにいる子供たちは別に追おうともしていなかった。外套がいつうの袖で軽く払うと、白い虫は消えるように地に落ちた。わたしは子供の時の癖が失うせなかつたのである。

(明治43・11俳誌「木太刀」、その他)



## 島原の夢

「しばいきんもうずい劇場訓蒙凶彙」や「とうとさいじき東都歳事記」や、さてはもろもろの浮世絵にみる江戸の歌舞伎かぶきの世界は、たといそれがいかばかり懐かしいものであつても、しよせん所詮は遠い昔の夢の夢であつて、それに引かれ寄ろうとするにはあまりに縁が遠い。何かの架け橋がなければ渡つてゆかれないような気がする。その架け橋は三十年ほど前からほとんど断えたと云つてもいい位に、朽ちながら残つていた。

それが今度の震災と共に、東京の人と悲しい別離わかれをつけて、架け橋はまったく断えてしまったらしい。

おなじ東京の名をよぶにも、今後はおそらく旧東京と新東京とに区別されるであろう。しかしその旧東京にもまた二つの時代が劃かくされていた。それは明治の初年から二十七、八年の日清戦争までと、その後の今年までとで、政治経済の方面から日常生活の風俗習慣にいたるまでが、おのずからに前期と後期とに分かたれていた。

明治の初期にはいわゆる文明開化の風が吹きまくって、鉄道が敷かれ、瓦斯ガス燈がひかり、洋服や洋傘こうもりがさ傘やトンビが流行しても、詮せんずるにそれは形容ばかりの進化であって、その鉄道に乗る人、

瓦斯燈に照らされる人、洋服を着る人、トンビを着る人、その大多数はやはり江戸時代から食はみ出して来た人たちである事を記憶しなければならぬ。わたしは明治になってから初めて此の世の風に吹かれた人間であるが、そういう人たちにはぐくまれ、そういう人たちに教えられて生長した。すなわち旧東京の前期の人である。それだけに、遠い江戸歌舞伎の夢を追うには聊いささか便りのよい架け橋を渡つて来たとも云い得られる。しかし、その遠いむかしの夢の夢の世界は、単に自分のあこがれを満足させるにとどまらず、他人にむかつては語るにも語られない夢幻の境地である。わたしはそれを語るべき詞ことばを知らない。

しかし、その夢の夢をはなれて、自分がたしかに踏ふみ渡つて来

た世界の姿であるならば、たといそれがやはり一場の過去の夢にすぎないとしても、私はその夢の世界を明らかに語ることが出来る。老いさらばえた母をみて、おれは曾かつてこの母の乳を飲んだのかと怪しく思うようなことがあつても、その昔の乳の味はやはり忘れ得ないとおなじように、移り変つた現在の歌舞伎の世界をみていながらも、わたしはやはり昔の歌舞伎の夢から醒さめ得ないのである。母の乳のぬくみを忘れ得ないのである。

その夢は、いろいろの姿でわたしの眼の前に展開される。

劇場は日本一の新富座しんとみざ、グラント將軍が見物したという新富座、はじめて瓦斯燈を用いたという新富座、はじめて夜芝居を興

行したという新富座、さしき棧敷五人詰ひとま一間の値あたいい四円五十銭で世間をおどろかした新富座——その劇場のまえに、十二、三歳の少年のすがたが見いだされる。少年は父と姉とに連れられている。かれらは紙捻かみやりでこしらえた太い鼻緒ぞうりの草履をはいている。

劇場の両側には六、七軒の芝居茶屋がならんでいる。そのあいだには芝居みやげの菓子や、辻つじうら占せんべいや、花かんざしなどを売る店もまじっている。向う側にも七、八軒の茶屋がならんでいる。どの茶屋も軒には新しい花暖簾はなのれんをかけて、さるやとか菊きくおか岡とか梅ばいりん林とかいう家号を筆ふでぶと太さぬしにしるした提灯やくしやがかけつらねてある。劇場の木戸まえには座主ざぬしや俳優やくしやに贈られたいろいろの幟のぼりが文字通りに林立している。その幟のあいだから幾枚の絵看

板が見えがくれに仰がれて、木戸の前、茶屋のまえには、幟とおなじ種類の積み物が往来へはみ出すように積みかざられている。

ここを新富町しんとみちようだの、新富座だのと云うものはない。一般に

しまばら島原とか、島原の芝居とか呼んでいた。明治の初年、ここに新

島原の遊廓が一時栄えた歴史をもっているので、東京の人はその後もし島原の名を忘れなかつたのである。

築地つぎじの川は今よりも青くながれている。高い建物のすくない町

のうえに紺こんじよう青の空が大きく澄んで、秋の雲がその白いかげを

ゆらゆらと浮かべている。河岸かしの柳は秋風にかるくなびいて、そ

こには釣りをしている人もある。その人は俳優いぎの配りものらしい

浴衣ゆかたを着て、日よけの頬かむりをして粋いきな苘たばこい入れを腰にさげて

いる。そこには笛をふいている飴屋あめもある。その飴屋の小さい屋  
台店の軒には、俳優の紋どころを墨や丹あかや藍あいで書いた庵看板いおりがか  
けてある。居付きの店で、今川焼を売るものも、稲荷鮓いなりずしを売る  
ものも、その看板や障子や暖簾には、なにかの形式で歌舞伎の  
世界に縁のあるものをあらわしている。仔細しさいに検査したら、そこ  
らにあるいている女のかんざしも扇子も、男の手拭うちわも団扇も、み  
な歌舞伎に縁の離れないものであるかも知れない。

こうして、築地橋から北の大通りにわたるこの一町内はすべて  
歌舞伎の夢の世界で、いわゆる芝居町しばいまちの空気につつまれている。  
もちろん電車や自動車や自転車や、そうした騒雑な音響をたてて、  
ここの町の空気をかき乱すものは一切いっさい通過しない。たまたま此こ

処<sup>こ</sup>を過ぎる人力車があつても、それは徐<sup>しず</sup>かに無言で走つてゆく。あるものは車をとどめて、乗客も車夫もしばらくその絵看板をながめている。その頃の車夫にはなかなか芝居の消息を諳<sup>そら</sup>んじている者もあつて、今度の新富チヨウは評判がいいとか、猿若マチは景気がよくないとか、車上の客に説明しながら挽<sup>ひ</sup>いてゆくのをしばしば聞いた。

秋の真昼の日かげはまだ暑いが、少年もその父も帽子をかぶつていない。姉は小さい扇<sup>ひた</sup>を額<sup>たい</sup>にかざしている。かれらは幕のあいだに木戸の外を散歩しているのである。劇場内に運動場を持たないその頃の観客は、窮屈<sup>どま</sup>な土間に行儀好くかしまっているか、茶屋へ戻つて休息するか、往來をあるいているかのほかはないの



で、天気の良い日にはぞろぞろとつながって往来に出る。帽子をかぶらずに、紙捻りの太い鼻緒の草履をはいているのは、芝居見物の人であることが証明されて、それが彼らの誇りでもあるらしい。少年も芝居へくるたびに必ず買うことに決めているらしい辻占せんべいと八やつはし橋との籠かごをぶら下げて、きわめて愉快そうに徘徊いかいしている。彼らにかぎらず、すべて幕間まくあいの遊歩に出ている彼らの群れは、東京の大通りであるべき京橋きょうばし区新富町の一部を自分たちの領分と心得ているらしく、摺すれ合い摺れちがって往來のまん中を悠々と散歩しているが、角の交番所を守っている巡查もその交通妨害を咎とがめないらしい。土地の人たちも決して彼らを邪魔者とは認めていないらしい。

やがて舞台の奥で柝きの音ねがきこえる。それが木戸の外まで冴えてひびき渡ると、遊歩の人々は牧童の笛をきいた小羊の群れのよ  
うに、皆ぞろぞろと繋つながって帰ってゆく。茶屋の若い者や出方でかたの  
うちでも、如じよさい才さいのないものは自分たちの客をさがしあるいて、  
もう幕があきますと触れてまわる。それにうながされて、少年も  
その父もその姉もおなじく急いで帰ろうとする。少年はぶら下げ  
ていた煎餅の籠を投げ出すように姉に渡して、一番さきに駈け出  
してゆく。柝の音はつづいて聞えるが、幕はなかなかあかない。  
最初からかしこまっていた観客は居ずまいを直し、外から戻って  
来た観客はようやく元の席に落ちついた頃になっても、舞台と客  
席とをさえぎる華やかな大きい幕は猶なほいつまでも閉じられて、舞

台の秘密を容易に観客に示そうとはしない。しかも観客は一人も忍耐力を失わないらしい。幽霊の出るまえの鐘の音、幕のあく前の拍子木の音、いずれも観客の気分を緊張させるべく不可思議の魅力をたくわえているのである。少年もその柝の音の一つ一つを聴くたびに、胸を跳おどらせて正面をみつめている。

幕があく。「妹背山いもせやま婦女庭訓いもせやまおんなていきん」吉野川よしのがわの場である。岩にせかれて咽むせび落ちる山川を境いにして、上かみの方かたの背山にも、下しもの方の妹山いもやまにも、武家の屋形がある。川の岸には桜が咲きみだれている。妹山の家には古風な大きい雛段ひなだんが飾られて、若い美しい姫が腰元どもと一緒にさびしくその雛にかしずいている。背山の

家には簾すだれがおろされてあつたが、腰元のひとりが小石に封じ文ぶみを  
むすび付けて打ち込んだ水の音におどろかされて、簾がしずかに  
巻きあげられると、そこにはむらさきの小袖ちやうに茶宇ちやうの袴をつけた  
美少年が殊しゆしやう勝しょうげに経きやうかん巻まきを讀どく誦じゆしている。高島屋たかしまと  
よぶ声がしきりに聞える。美少年は市川左団次さだんじの久我之助こがのすけである。  
姫ひなどりは太宰だざいの息女雛鳥ひなどりで、中村福助ふくすけである。雛鳥ひなどりが恋びとの  
すがたを見つけて庭に降りたつと、これには新駒屋しんこまアとよぶ声  
がしきりに浴びせかけられたが、かれの姫はめずらしくない。左  
団次が前髪立ちの少年に扮して、しかも水のしたたるように美し  
いというのが観客の眼を奪つたらしい。少年の父も唸るような吐  
息を洩らしながら眺めていると、舞台の上の色や形はさまぎまの

美しい錦絵をひろげてゆく。

背山の方はかた大判司清澄だいはんじきよすみ

——チヨボの太夫の力強い声によび出

されて、かり仮花道にあらわれたのは織物のかみしも

をきた立派な老人

である。これこそほんとうに昔の錦絵から抜け出して来たかと思

われるような、いかにも役者らしい彼の顔、いかにも型に嵌はまった

ような彼の姿、それは中村芝翫しかんである。同時に、本花道からし

かにあゆみ出た切り髪の女は太宰だざいの後室こうしつ定高さだかで、眼の大きい、

顔の輪郭のはつきりして、一種の気品をそなえた男まさりの女、

それは市川だんじゆうろう團十郎である。大判司に対して、なりこま成駒屋アの声

が盛んに湧くと、それを圧倒するように、定高に対してなりた成田屋ア、

親玉アの声が三方からどつと起る。

大判司と定高は花道で向い合つた。ふたりは桜の枝を手に持つてゐる。

「畢ひつきよう 竟、親の子のと云うは人間の私わたくし、ひろき天地より観るときは、おなじ世界に湧いた虫。」と、大判司は相手に負けないよ  
うな眼をみはつて空うそぶく。

「枝ぶり悪き桜木は、切つて接つぎ木をいたさねば、太宰いえの家が立ちませぬ。」と、定高は凜りんとした声で云い放つ。

観客はみな酔つてしまつたらしく、誰ももう声を出す者もない。少年も酔つてしまつた。かれは二時間にあまる長い一幕の終るまで身動きもしなかつた。

その島原の名はもう東京の人から忘れられてしまった。周囲の世界もまったく変化した。妹背山の舞台に立った、かの四人の歌舞伎俳優のうちで、三人はもう二十年も前に死んだ。わずかに生き残るものは福助の歌右衛門うたえもんだけである。新富座も今度の震災で灰となつてしまった。一切の過去は消滅した。

しかも、その当時の少年は依然として昔の夢をくり返して、ひとり楽しみ、ひとり悲しんでいる。かれはおそらく其の一生を終るまで、その夢から醒める時はないのであろう。

(大正二・二「随筆」)

## 昔の小学生より

十月二十三日、きようは麴町尋常小学校同窓会の日である。この小学校にも同窓会はある。ここにも勿論同窓会を有して<sup>ゆう</sup>いたのであるが、何かの事情でしばらく中絶していたのを、震災以後、復興の再築が竣工して、いよいよこの九月から新校舎で授業をはじめることになったので、それを機会に同窓会もまた復興されて、きようは新しい校内でその第一回を開くことになった。その発起



人のうちに私の名も列つらなっている。巖谷小波いわやさぎなみ氏兄弟の名もみえる。そのほかにも軍人、法律家、医師、実業家、種々の階級の人々の名が見いだされた。なにしろ、五十年以上の歴史を有している小学校であるから、それらの発起人以外、種々の方面から老年、中年、青年、少年の人々が参加することであろうと察せられる。

それにつけて、わたしの小学校時代のむかしが思い出される。

わたしは明治五年十月の生まれで、明治十七年の四月に小学を去って、中学に転じたのであるから、わたしの小学校時代は今から四十幾年のむかしである。地方は知らず、東京の小学校が今日のような形を具そなえるようになったのは、まず日清戦争以後のことで、その以前、すなわち明治初年の小学校なるものは、建物といい、

設備といい、ほとんど今日の少年または青年諸君の想像し得られないような不体裁のものであった。

ひと口に麴町小学校出身者と云いながら、巖谷小波氏やわたしの如きは実は麴町小学校という学校で教育を受けたのではない。

その当時、いわゆる公立の小学校は麴町の元園町に女学校というのがあり、ひらかわちよう平河町ひらかわちように平河小学校というのがあつて、その附近

に住んでいる我々はどちらかの学校へ通学しなければならぬのであつた。女学校と云つても女の子ばかりではなく、男の生徒をも收容するのであつたが、女学校という名が面白くないので、距離はすこし遠かつたが私は平河小学校にかよつていた。その二校が後に併合されて、今日の麴町尋常小学校となつたのであるから、

校舎も又その位置も私たちの通学当時とはまったく変ってしまつた。したがつて、母校とは云いながら、私たちに取つては縁の薄い方である。

そのほかに元園町に堀江小学、やまもとちよう山元町に中村小学というのがあつて、いわゆる代用小学校であるが、その当時は私立小学校と呼ばれていた。この私立の二校は江戸時代のてならいしなんじよ手習指南所から明治時代の小学校に変わったものであるから、在来の關係上、商人や職人の子弟は此処ここに通うものが多かつた。公立の学校よりも、私立の学校の方が、先生が物柔らかに親切に教えてくれるとかいう噂もあつたが、わたしは私立へ行かないで公立へ通わせられた。

その頃の小学校は尋常と高等とを兼ねたもので、初等科、中等

科、高等科の三種にわかれていた。初等科は六級、中等科は六級、高等科は四級で、学年制度でないから、初学の生徒は先ず初等科の第六級に編入され、それから第五級に進み、第四級にすすむという順序で、初等科第一級を終ると中等科第六級に編入される。但し<sup>ただ</sup>高等科は今日の高等小学とおなじようなものであったから、小学校だけで済ませるものは格別、その以上の学校に転じるものは、中等科を終ると共に退学するのが例であった。

進級試験は一年二回で、春は四月、秋は十月に行なわれた。それを定期試験といい、俗に大試験と呼んでいた。それであるから、級の数はひどく多いが、初等科と中等科をやはり六年間で終了するわけで、そのほかに毎月一回の小試験があった。小試験の成績

に因つて、その都度に席順が変るのであるが、それは其の月限りのもので、定期試験にはなんの影響もなく、優等賞も及第も落第もすべて定期試験の点数だけによつて定まるのであつた。免状授与式の日は勿論であるが、定期試験の当日も盛装して出るのが習いで、わたしなども一いっちょうら張羅の紋付の羽織を着て、よそ行きの袴をはいて行つた。それは試験というものを一種の神聖なるものと認めていたらしい。女の子はその朝に髪を結び、男の子もその前日あるいは二、三日前に髪を刈つた。校長や先生は勿論、小使こづかいに至るまでも髪を刈り、髭ひげを剃そつて、試験中は服装を改あらためていた。授業時間や冬季夏季の休暇は、今こんにち日と大差はなかつた。授業の時間割も先ず一定していたが、その教授の仕方は受持教師の思

い思いと云った風で、習字の好きな教師は習字の時間を多くし、読書の好きな教師は読書の時間を多くすると云うような傾きもあつた。教え方は大体に嚴重で、怠ける生徒や不成績の生徒はあたまから叱り付けられた。時には竹の教鞭きょうべんで背中を引っぱたかれた。癩かんしゃく癩やく持ちの教師は平手で横つ面をびしやりと食らわすのもあつた。わたしなども授業中に隣席の生徒とおしやべりをして、教鞭の刑をうけたことも再三あつた。

今日ならば、生徒虐待ぎやくたいとか云つて忽たちまちに問題をひき起すのであろうが、寺子屋の遺風の去らない其の当時にあつては、師匠が弟子を仕込む上に於おいて、そのくらいの仕置きを加えるのは当然であると見なされていたので、別に怪しむものも無かつた。勿

論、怖い先生もあり、優しい先生もあつたのであるが、そういうわけであるから怖い先生は生徒間に甚だ恐れられた。はなは

生徒に加える刑罰は、叱つたり殴つたりするばかりでなかつた。授業中に騒いだり悪戯いたずらをしたりする者は、席から引き出して壇のうしろに立たされた。さすがに線香を持たせたり水を持たせたりはしなかつたが、寺子屋の芝居に見る涎よだれくりを其の儘の姿であつた。更に手重いのになると、教授用の大きい算露盤そろばんを背負わせて、教師が付き添つて各級の教場を一巡し、この子はかくかくの不都合を働いたものであると触れてあるくのである。所詮しよせんはむかしの引廻しの格で、他に対する一種の見せしめであらうが、ずいぶん思い切つて残酷な刑罰を加えたものである。

もつとも、今とむかしとを比べると、今日の児童は皆おとなしい。私たちの眼から観ると、おとなしいのを通り越して弱々しいと思われるようなのが多い。それに反して、むかしの児童はみな頑強で乱暴である。また、その中でも所謂いわゆるいたずらツ児というものになると、どうにも手にも手に負えないのがある。父兄が叱ろうが、教師が説諭しようが、なんの利き目もないという持て余し者がずいぶん見いだされた。

学校でも始末に困って退学を命じると、父兄が泣いてあやまつて来るから、再び通学を許すことにする。しかも本人は一向平気で、授業中に騒ぐのは勿論、運動時間にはさんざんに暴れまわつて、椅子をぶち毀す、窓硝子を割る、他の生徒を泣かせる、甚だ



しいのは運動場から石や瓦を投げ出して往来の人を脅すおどというのであるから、とても尋常一様の懲戒法では彼らを矯正する見込みはない。したがって、教師の側でも非常手段として、引廻し其の他の嚴刑を案出したのかも知れない。

教師はみな羽織袴または洋服であつたが、生徒の服装はまちまちであつた。勿論、制帽などは無かつたから、思い思いの帽子をかぶつたのであるが、帽子をかぶらない生徒が七割であつて、大抵は炎天にも頭を晒さらしてあるいていた。袴をはいている者も少なかった。商家の子どもは前垂れをかけているのもあつた。その当時の風習として、筒袖をきるのは裏うら店だなの子に限つていたので、男の子も女の子とおなじように、八つ口のあいた袂をつけていて、

その袂は女の子に比べてやや短いぐらいの程度であつたから、ふざけるたびに袂をつかまれるので、八つ口からほころびる事がしばしばあるので困つた。これは今日の筒袖の方が軽快で便利である。屋敷の子は兵児帯へこおびをしめていたが、商家の子は大抵角帯かくおびをしめていた。

靴は勿論すくない、みな草履であつたが、強い雨や雪の日には、尻はしよを端折り、あるいは袴ももだの股立ちを取つて、はだしで通学する者も随分あつた。学校でもそれを咎とがめなかつた。

運動場はどこどこの小学校も狭かつた。教室の建物がすでに狭く、それに準じて運動場も狭かつた。平河小学校などは比較的比較的に広い方であつたが、往来に面したところに低い堤どてを作つて、大きい櫓かし

の木を栽えつらねてあるだけで、ほかにはなんらの設備もなかった。片隅にブランコが二つ設けてあつたが、いつこうに地ならしがしてないので、雨あがりなどには其処そこらは一面の水溜りになつてしまつて、ブランコの傍そばなどへはとても寄り付くことは出来なかつた。勿論、アスファルトや砂利が敷いてあるでもないから、雨あがりばかりでなく、冬は雪どけや霜どけで路みちが悪い。そこで転んだり起たつたりするのであるから、着物や袴は毎日泥だらけになるので、わたしなどは家で着る物と学校へ着てゆく物とが區別されていて、学校から帰るとすぐに着物を着かえさせられた。

運動時間は一時間ごとに十分間、午ひるの食後に三十分間であつたが、別に一定の遊戯というものも無いから、男の子は縄飛び、相

撲、鬼ごっこ、いくざ軍ごっこなどをする。女の子も鬼ごっこをするか、まり鞠をついたりする。男の子のあそびには相撲が最も行なわれた。そのころの小学校では体操を教えなかったから、生徒の運動といえば唯むやみに暴れるだけであつた。したがって今日のようなおとなしい子供も出来なかつたわけであろう。その頃には唱歌も教えなかつた。運動会や遠足会もなかつた。

もし運動会に似たようなものを求むれば、土曜日の午後や日曜日に大勢おおぜいが隊を組んで、他の学校へ喧嘩けんかにゆくことである。相手の学校でも隊を組んで出て来る。その頃は所々に屋敷あとの広い草原などがあつたから、そこで石を投げ合つたり、棒切れで叩き合つたりする。中には自分の家から親父おやじの脇わきざし差さしを持ち出して

来るような乱暴者もあつた。時には往来なかで闘う事もあつたが、巡査も別に咎めなかつた。学校では喧嘩をしてはならぬと云うことになつていたが、それも表向きだけのことで、若い教師のうちには他の学校に負けるなど云つて、内々で種々の軍略を授けてくれるのもあつた。それらの事をかنگえると、くどくも云うようであるが、今日の子供たちは実におとなしい。

その当時は別に保護者会とか父兄会とかいうものも無かつたが、むかしの寺子屋の遺風が存していたとみえて、教師と父兄との関係はすこぶる親密であつた。父兄や姉も学校に教師をたずねて、子弟のことをいろいろ頼むことがある。教師も学校の帰途に生徒の家をたずねて、父兄にいろいろの注意をあたえることもある。

したがって、学校と家庭の連絡は案外によく結び付けられているようであった。その代りに、学校で悪いことをすると、すぐに家へ知れるので、私たちは困った。

（昭和2・10「時事新報」）

## 三崎町の原

十一月の下旬の晴れた日に、所用あつて神田かんだの三崎町みさきちょうまで出かけた。電車道に面した町はしばしば往来しているが、奥の方へは震災以後一度も踏み込んだことがなかったので、久し振りでぶらぶらあるいてみると、震災以前もここらは随分混雑しているところであつたが、その以後は更に混雑して来た。区画整理が成就した暁には、町の形が又もや変ることであろう。

市内も開ける、郊外も開ける。その変化に今更おどろくのは甚だ迂闊うかつであるが、わたしは今、三崎町三丁目の混雑ちまたの巷ちまたに立つて、自動車やトラックに脅おびやかされてうろろしながら、周囲の情景のあまりに変化したのに驚かされずにはいられなかった。いわゆる隔かくせい世せいの感かんというのは、全くこの時の心持であつた。

三崎町一、二丁目は早く開けていたが、三丁目は旧幕府の講武所、大名屋敷、旗本屋敷の跡で、明治の初年から陸軍の練兵場となつていた。それは一面の広い草原で、練兵中は通行を禁止されることもあつたが、朝夕または日曜祭日には自由に通行を許された。しかも草刈りが十分に行き届かなかつたとみえて、夏から秋にかけては高い草むらが到るところに見いだされた。北は水道橋



に沿うた高い堤<sup>どて</sup>で、大樹が生い茂っていた。その堤の松には首<sup>くびく</sup>縊<sup>く</sup>りの松などという忌<sup>いや</sup>な名の付いていたのもあった。野犬が巢を作っていて、しばしば往来の人を咬<sup>か</sup>んだ。追剥<sup>おいは</sup>ぎも出た。明治二十四年二月、富士見町の玉子屋の小僧が懸け取りに行った帰りに、ここで二人の賊に絞め殺された事件などは、新聞の三面記事として有名であった。

わたしは明治十八年から二十一年に至る四年間、すなわち私が十四歳から十七歳に至るあいだ、毎月一度ずつはほとんど欠かさずに、この練兵場を通り抜けなければならなかった。その当時はもう練兵をやめてしまって、三菱に払い下げられたように聞いていたが、三菱の方でも直ぐにはそれを開こうともしないで、唯そ

のままの草原にして置いたので、普通にそれを三崎町の原と呼んでいた。わたしが毎月一度ずつ必ずその原を通り抜けたのは、本郷ほんごうの春木座はるきざへゆくためであつた。

春木座は今日こんにちの本郷座である。十八年の五月から大阪の鳥熊とりくまという男が、大阪から中ちゆうどお通りの腕達者な俳優一座を連れ

て来て、値安興行をはじめた。土間は全部開放して大入り場として、入場料は六銭というのである。しかも半札はんふだを呉れるので、

来月はその半札に三銭を添えて出せばいいのであるから、要するに金九銭を以つて二度の芝居が観られるというわけである。ともかくも春木座はいわゆる檜舞台ひのきの大劇場であるのに、それが二回九銭で見物できるというのであるから、確かにやすに相違ない。

それが大評判となつて、毎月爪も立たないような大入りを占めた。

芝居狂の一少年がそれを見逃す筈がない。わたしは月初めの日曜毎に春木座へ通うことを怠おこたらなかつたのである。ただ、困ることとは開場が午前七時というのである。なにしろ非常の大入りである上に、日曜日などは殊に混雑するので、午前四時か遅くも五時頃までには劇場の前にゆき着いて、その開場を待っていないなければならない。麴町の元園町から徒歩で本郷まで行くのであるから、午前三時頃から家を出てゆく覚悟でなければならぬ。わたしは午前二時頃に起きて、ゆうべの残りの冷飯を食つて、腰弁当をたずさえて、小倉の袴の股立ちを取つて、朴ほおば齒の下駄をはいて、本郷までゆく途中、どうしても、かの三崎町の原を通り抜けなけれ

ばならない事になる。勿論、須田町すだちょうの方から廻つてゆく道がないでもないが、それでは非常の迂廻うかいであるから、どうしても九段くだん下したから三崎町の原をよぎつて水道橋へ出ることになる。

その原は前にいう通りの次第であるから、午前四時五時の頃に入通りなどのあろう筈はない。そこは真つ暗な草原で、野犬の巢そ窟うくつ、追剥ぎの稼ぎ場である。闇の奥で犬の声がきこえる。狐の声もきこえる。雨のふる時には容赦なく吹っかける。冬のあけ方には霜を吹く風が氷のように冷たい。その原をようように行き抜けて水道橋へ出ても、お茶の水の堤ぎわはやはり真つ暗で、人通りはない。幾らの小遣い銭を持っているでもないから、追剥ぎはさのみに恐れなかったが、犬に吠え付かれるには困った。あると

きには五、六匹の大きい犬に取りまかれて、実に弱り切ったことがあつた。そういう難儀も廉価の芝居見物には代えられないので、わたしは約四年間を根こんよく通いつづけた。その頃の大劇場は、一年に五、六回か三、四回しか開場しないのに、春木座だけは毎月必ず開場したので、わたしは四年間にずいぶん数多くの芝居を見物することが出来た。

三崎町三丁目は明治二十二、三年頃からだんだんに開けて来たが、それでも、かの小僧殺しのような事件は絶えなかつた。二十四年六月には三崎座みさきざが出来た。殊に二十五年一月の神田の大火以来、俄にわかにここらが繁昌して、またたくうちに立派な町になつてしまつたのである。その当時は、むかしの草原を知っている人も

あつたらうが、それから三十幾年を経過した今日では、現在その土地に住んでいる人たちでも、昔の草原の**茫漠**ぼうぼくたる光景をよく知っている者は少ないかも知れない。武蔵野むさしのの原に大江戸の町が開かれたことを思えば、このくらいの変遷は何でも無いことかも知れないが、もくぜん目前にその変遷をよく知っている私たちに取つては、一種の感慨がないでもない。殊にわたしなどは、かの春木座がよいの思い出があるので、その感慨がいつそう深い。あの当時、ここらがこんなに開けていたら、わたしはどんなに楽であつたか。まして電車などがあつたらば、どんなに助かつたか。

暗い原中をたどつてゆく少年の姿——それがまぼろしのようにわたしの眼に浮かんだ。

(昭和2・1「不同調」)

## 御堀端三題

## 一 柳のかげ

海に山に、涼風に浴した思い出もいろいろあるが、最も忘れ得ないのは少年時代の思い出である。今日こんにちの人はもちろん知るまいが、麴町の桜田門外さくらだもん、地方裁判所の横手、のちに府立第一中学の正門前になった所に、五、六株の大きい柳が繁っていた。

堀端ほりばたの柳は半蔵門はんぞうもんから日比谷ひびやまで続いていくが、此処ここの柳はその反対の側に立っているのである。どういう訳でこれだけの柳が路ばたに取り残されていたのか知らないが、往来のまん中よりもやや南寄りに青い蔭を作っていた。その当時の堀端はすこぶる狭く、路幅はほとんど今日の三分の一にも過ぎなかつたであろう。その狭い往来に五、六株の大樹が繁っているのであるから、邪魔といえは邪魔であるが、電車も自動車もない時代にはさみの邪魔とも思われないばかりか、長い堀端を徒歩する人々にとつては、その地帯が一種のオアシスとなっていたのである。

冬はともあれ、夏の日盛りになると、往来の人々はこの柳のかげに立ち寄って、大抵はひと休みをする。片肌ぬいで汗を拭いて



いる男もある。蝙蝠傘こうもりがきを杖つえにして小さい扇を使っている女もある。それらの人々を当て込みに甘酒屋が荷をおろしている。小さい氷屋くるまやたいの車屋台が出ている。今日ではまったく見られない堀端の一風景であった。

それにつづく日比谷公園は長州ちようしゆう屋敷の跡で、俗に長州ヶ原と呼ばれ、一面の広い草原となつて取り残されていた。三宅坂みやけさかの方面から参謀本部の下に沿つて流れ落ちる大溝おおとぶは、裁判所の横手から長州ヶ原の外部に続いていて、むかしは河瀬かわうそが出るとか云われたそうであるが、その古い溝の石垣のあいだから鰻うなぎが釣れるので、うなぎ屋の印半纏を着た男が小さい岡持おかもちをたずさえ、て穴釣りをしているのをしばしば見受けた。その穴釣りの鰻屋も、

この柳のかげに寄つて来て甘酒などを飲んでゐることもあつた。岡持にはかなり大きい鰻が四、五本ぐらいのた蜿くつてゐるのを、私は見た。

そのほかには一種のかるこ軽子、いわゆる立ちン坊も四、五人ぐらいは常に集まつていた。下町から麴町四谷方面の山の手へ登るには、ここらから道路が爪先あがりになる。殊に眼の前には三宅坂がある。この坂も今よりはけわ嶮しかつた。そこで、下町から重い荷車をひ挽いて来た者は、ここから後押あとおしを頼むことになる。立ちン坊はその後押しを目あてに稼いぎに出ているのであるが、距離の遠近によつて二銭三銭、あるいは四銭五銭、それを一日に数回も往復するので、その当時の彼らとしては優に生活が出来たらしい。その

立ちん坊もここで氷水を飲み、あま酒を飲んでいた。

立ちん坊といつても、毎日おなじ顔が出ているのである。直ぐ傍わきには桜田門外の派出所もある。したがって、彼らは他の人々に対して、無作法や不穩の言動を試みることはない。ここに休んでいる人々を相手に、いつも愉快に談笑しているのである。私もこの立ちん坊君を相手にして、しばしば語ったことがある。

私が最も多くこの柳の蔭に休息して、堀端の涼風の恩恵にあずかったのは、明治二十年から二十二年の頃、すなわち私の十六歳から十八歳に至る頃であつた。その当時、府立の一中は築地の河岸、今日の東京劇場所在地に移っていたので、麴町に住んでいる私は毎日この堀端を往来しなければならなかつた。朝は登校を急

ぐのと、まだそれ程に暑くもないので、この柳を横眼に見るだけで通り過ぎたが、帰り道は午後の日盛りになるので、築地から銀座を横ぎり、すきやばしみつけ数寄屋橋見附をはいって、ゆうらくちよう有楽町を通り抜けて来ると、ここらが丁度休み場所である。

日蔭のない堀端の一本道を通って、例のうなぎ釣りなどを覗きながら、この柳の下にたどり着くと、そこにはいつでも三、四人多い時には七、八人が休んでいる。立ちん坊もまじっている。氷水も甘酒も一杯八厘りん、その一杯が実に甘露の味であった。

長い往来は強い日に白く光っている。堀端の柳には蝉せみの音がきこえる。重い革包カバンを柳の下枝にかけて、帽子をぬいで、洋服のボタンをはずして、額の汗をふきながら一杯八厘の甘露をすすって

いる時、どこから吹いて来るのか知らないが、一陣の涼風が青い影をゆるがして颯さつと通る。まったく文字通りに、涼味骨に透るのであった。

「涼しいなあ。」と、私たちは思わず声をあげて喜んだ。時には跳おどりあがって喜んで、周囲の人々に笑われた。私たちばかりでなく、この柳のかげに立ち寄って、この涼風に救われた人々は、毎日何十人、あるいは何百人の多きにのぼったであろう。幾人の立ちん坊もここを稼ぎ場とし、氷屋も甘酒屋もここで一日の生計を立てていたのである。いかに鬱うつ蒼そうというべき大樹であっても、わずかに五株か六株の柳の蔭がこれほどの功德くどくを施していようとは、交通機関の発達した現代の東京人には思いも及ばぬことであ

るに相違ない。その昔の江戸時代には、ほかにもこういうオアシスがたくさん見いだされたのであろう。

少年時代を通り過ぎて、わたしは銀座<sup>ぎんざ</sup>辺の新聞社に勤めるようになった。やはり此の堀端を毎日往復した。しかも日が暮れてから帰宅するので、この柳のかげに休息して涼風に浴するの機会がなく、年ごとに繁ってゆく青い蔭をながめて、昔<sup>せきねん</sup>年の涼味を偲<sup>しの</sup>ぶに過ぎなかつたが、わが国に帝国議会というものが初めて開かれても、ここの柳は伐られなかつた。日清戦争が始まって、ここの柳は伐られなかつた。人は昔と違つているであろうが、氷屋や甘酒屋の店も依然として出ていた。立ちン坊も立つていた。その懐かしい少年時代の夢を破る時が遂に來たつた。かの長州

ヶ原がいよいよ日比谷公園と改名する時代が近づいて、まず其の周囲の整理が行なわれることになった。鰻の釣れる溝どぶの石垣が先ず破壊された。つづいてかの柳の大樹が次から次へと伐り倒された。それは明治三十四年の秋である。涼しい風が薄寒い秋風に変つて、ここの柳の葉もそろそろ散り始める頃、むぎんの斧おのや鋸のこがこの古木たたに崇たつて、浄瑠璃じょうるりに聞き慣れている「さんじゅうさんげんど卅二間堂うむなぎのゆらい棟由来」の悲劇をここに演出した。立ちん坊もどこへか巢を換えた。氷屋も甘酒屋も影をかくした。

それから三年目の夏に日比谷公園は開かれた。その冬には半蔵門から数寄屋橋に至る市内電車が開通して、ここらの光景は一変した。その後幾たびの変遷を経て、今日は昔に三倍するの大道と

なった。街路樹も見ごとに植えられた。昔の涼風は今もその街路樹の梢におとずれているのであろうが、私に涼味を思い起させるのは、やはり昔の柳の風である。（昭和20・8「文藝春秋」）

## 二 怪談

お堀端の夜歩きについて、ここに一種の怪談をかく。但し本当の怪談ではないらしい。いや、本当でないに決まっている。

わたしが二十歳<sup>はたち</sup>の九月はじめである。夜の九時ごろに銀座から麴町の自宅へ帰る途中、日比谷の堀端にさしかかった。その頃は日比谷にも昔の見附<sup>みつけ</sup>の跡があつて、今日の公園は一面の草原であ



った。電車などはもちろん往来していない時代であるから、このあたりに灯の影の見えるのは桜田門外の派出所だけで、他は真っ暗である。夜に入っては往来も少ない。ときどきに人力車の提灯が人魂ひとたまのように飛んで行くくらいである。

しかも其の時は二百十日前後の天候不穩、風まじりの細雨こさめの飛ぶ暗い夜であるから、午後七、八時を過ぎるとほとんど人通りがない。わたしは重い雨傘をかたむけて、有楽町から日比谷見附を過ぎて堀端へ来かかると、俄にわかにうしろから足音が聞えた。足駄あしだの音ではなく、草履ぞうりか草鞋わらじであるらしい。その頃は草鞋もめずらしくないので、わたしも別に気に留めなかつたが、それが余りに私のうしろに接近して来るので、わたしは何ごころなく振り返る

と、直ぐうしろから一人の女があるいて来る。

傘を傾けているので、女の顔は見えないが、白地に桔梗ききようを染め出した中形ちゆうがたの単衣ひとえものを着ているのが暗いなかにもはつきりと見えたので、私は実にぎよつとした。右にも左にも灯のひかりの無い堀端で、女の着物の染め模様などが判ろう筈がない。幽霊か妖怪か、いずれ唯者ただものではあるまいと私は思った。暗い中で姿の見えるものは妖怪であるという古来の伝説が、わたしを強くおびやかしたのである。

まさかにきやつと叫んで逃げる程でもなかったが、わたしは再び振り返る勇氣もなく、ただ真つ直ぐに足を早めてゆくと、女もわたしを追うように付いて来る。女の癖になかなか足がはやい。

そうになると、私はいよいよ気味が悪くなった。江戸時代には三宅坂下の堀に河かわ獺うそが棲んでいて、往来の人を嚇おどしたなどという伝説がある。そんなことも今更に思い出されて、わたしはひどく臆病になった。

この場合、唯一ゆいいつの救いは桜田門外の派出所である。そこまで行き着けば灯の光があるから、私のあとを付けて来る怪しい女の正体も、ありありと照らし出されるに相違ない。私はいよいよ急いで派出所の前までたどり着いた。ここで大胆に再び振り返ると、女の顔は傘にかくされてやはり見えないが、その着物は確かに白地で、桔梗の中形にも見誤やせがたまりはなかった。彼女は瘦形やせがたの若い女であるらしかった。

正体は見届けたが、不安はまだ消えない。私は黙って歩き出すと、女はやはり付いて来た。わたしは気味の悪い道連れ（？）をうしろに背負いながら、とうとう三宅坂下までたどり着いたが、女は河瀬にもならなかった。坂上の道はふた筋に分かれて、はやぶ隼さちよう町 の大通りと半蔵門方面とに通じている。今夜の私は、灯の多い隼町の方角へ、女は半蔵門の方角へ、ここで初めて分かれわかれになった。

まずほつとして歩きながら、さらに考え直すと、女は何者か知れないが、暗い夜道のひとり歩きがさびしいので、おそらく私のあとに付いて来たのであろう。足の早いのが少し不思議だが、私にはぐれまいとして、若い女が一生懸命に急いで来たのであろう。

さらに不思議なのは、彼女は雨の夜に足駄を穿かないで、素足に竹の皮の草履をはいていた事である。しかも着物の裾をも引き揚げないで、湿れるがままにびちやびちやと歩いていった。誰かと喧嘩して、台所からでも飛び出して来たのかも知れない。

もう一つの問題は、女の着物が暗い中ではつきりと見えたことであるが、これは私の眼のせいかも知れない。幻覚や錯覚と違って、本当の姿がそのままに見えたのであるから、私の頭が怪しいという理窟になる。わたしは女を怪しむよりも、自分を怪しまなければならぬ事になった。

それを友達に話すと、若は精神病者になるなぞと嚇された。しかもそんな例はあとにも先にもただ一度で、爾来四十余年、幸い

に蘆原將軍あしわらの部下にも編入されずにいる。

(昭和二・八「モダン日本」)

### 三 三宅坂

次は怪談ではなく、一種の遭難談である。読者には余り面白くないかも知れない。

話はかなりに遠い昔、明治三十年五月一日、わたしが二十六歳の初夏の出来事である。その日の午前九時ごろ、わたしは人力車に乗って、半蔵門外の堀端を通った。去年の秋、京橋に住む知人の家に男の児こが生まれて、この五月は初の節句はつであると云うので、

私は祝い物の人形をとどけに行くのであった。わたしは金太郎の人形と飾り馬との二箱を風呂敷につつんで抱えていた。

わたしの車の前を一台の車が走って行く。それには陸軍の軍医が乗っていた。今日こんにちの人はあまり気の付かないことであるが、人力車の多い時代には、客を乗せた車夫がとかくに自分の前をゆく車のあとに付いて走る習慣があつた。前の車のあとに付いてゆけば、前方の危険を避ける心配が無いからである。しかもそれがために、却つて危険を招く虞おそれがある。わたしの車なども其の一例であつた。

前は軍医、あとは私、二台の車が前後して走るうちに、三宅坂上の陸軍衛えいじゆ成病院の前に来かかった時、前の車夫は突然に梶かじほ

棒<sup>う</sup>を右へ向けた。軍医は病院の門に入るのである。今日と違って、その当時の衛戍病院の入口は、往来よりも少しく高い所にあつて、さしたる勾<sup>こう</sup>配<sup>ぱい</sup>でもないが一種の坂路をなしていた。

その坂路にかかつて、車夫が梶棒を急転した為に、車はずりその後戻りをして、そのあとに付いて来た私の車の右側に衝突すると、はずみは怖ろしいもので、双方の車はたちまち顛<sup>てん</sup>覆<sup>ふく</sup>した。軍医殿も私も路上に投げ出された。

ぞつとしたのは、その一刹那である。単に投げ出されただけならば、まだしも災難が軽いのであるが、私の車のまたあとから外国人を乗せた二頭立ての馬車が走つて来たのである。軍医殿は幸いに反対の方へ落ちたが、私は路上に落ちると共に、その馬車が



乗りかかって来た。私ははつと思つた。それを見た往来の人たちも思わずあつと叫んだ。私のからだは完全に馬車の下敷きになつたのである。

馬車に乗っていたのは若い外国婦人で、これも帛きぬを裂くような声をあげた。私を轢ひいたと思つたからである。私も無論に轢かれるものと覚悟した。馬車の馬丁ばていもあわてて手綱をひき留めようとしたが、走りつづけて来た二頭の馬は急に止まることが出来ないで、私の上をズルズルと通り過ぎてしまった。馬車がようよう止まると、馬丁ぎよしやは馭者台から飛び降りて来た。外国婦人も降りて来た。私たちの車夫も駈け寄つた。往来の人もあつまつて来た。

誰の考えにも、私は轢かれたと思つたのであろう。しかも天佑

というのか、好運というのか、私は無事に起き上がったので、人々はまたおどろいた。私は馬にも踏まれず、車輪にも触れず、身には微傷だも負わなかったのである。その仔細は、私のからだだが縦たてに倒れたからで、もし横に倒れたならば、首か胸か足かを車輪に轢かれたに相違なかった。私が縦に倒れた上を馬車が真つ直ぐに通過したのみならず、馬の蹄ひづめも私を踏まずに飛び越えたので、何事も無しに済んだのである。奇蹟的という程ではないかも知れないが、私は我れながら不思議に感じた。他の人々も、「運が良かったなあ。」と口々に云った。

この当時のことを追想すると、私は今でもぞつとする。このごろの新聞紙上で交通事故の多いのを知ること、私は三十数年前

の出来事を想いおこさずにはいられない。シナにこんな話がある。大勢の集まったところで虎の話が始まると、その中の一人がひどく顔の色を変えた。聞いてみると、その人はかつて虎に出逢って危うくも逃れた経験の有していたのである。私も馬車に轢かれそうになった経験があるので、交通事故には人一倍のシヨツクを感じられてならない。

そのとき私の中からは無事であったが、抱えていた五月人形のは箱は無論投げ出されて、金太郎も飾り馬もメチャメチャに毀れた。よんどころなく銀座へ行つて、再び同じような物を買つて持参したが、先方へ行つては途中の出来事を話さなかつた。初の節句の祝い物が途中で毀れたなどと云つては、先方の人たちが心持を悪

くするかも知れないと思ったからである。その男の児は成人に到らずして死んだ。

(昭和10・8「文藝春秋」)

## 銀座

わたしは明治二十五年から二十八年まで満三年間、正しく云えば京橋区三十間堀一丁目三番地、俗にいえば銀座の東仲ひがしなか通りに住んでいたのです、その当時の銀座の事ならば先ずひと通りは心得ている。すなわち今から四十余年前の銀座である。その記憶を一々ならべ立ててもいられないから、ここでは歳末年始の風景その他を語ることにする。

由来、銀座の大通りに夜店が出るのは、夏の七月、八月、冬の十二月、この三カ月に限られていて、その以外の月には夜店を出さないのが其の当時の習わしであつたから、初秋の夜風が氷屋の暖簾のれんに訪ずれる頃になると、さすがの大通りも宵から寂寥せきりょう、勿論そぞろ歩きの人影は見えず、所用ある人々が足早に通りすぎるに過ぎない。商店は電燈をつけてはいたが、今から思えば夜と昼との相違で、名物の柳の木蔭などは薄暗かつた。裏通りはほとんどみな住宅で、どこの家でもランプを用いていたから、往来はいつそう暗かつた。

その薄暗い銀座も十二月に入ると、急に明るくなる。大通りの東側は勿論、西側にも露店がいっぱい列ぶこと、今日の歳末と

同様である。尾張町おわりちようの角や、京橋きわの際には、歳としの市商人いちじんの小屋も掛けられ、その他の角々にも紙鳶たこや羽子板などを売る店も出た。この一カ月間は実に繁昌で、いわゆる押すな押すなの混雑である。二十日過ぎからはいよいよ混雑で、二十七、八日ごろからは、夜の十時、十一時ごろまで露店の灯が消えない。大晦日おおみそかは十二時過ぎるまで賑わっていた。

但しその賑わいは大晦日かぎりで、一夜明ければ元の寂寥にかえる。さすがに新年早々はどこの店でも門松かどまつを立て、国旗をかかげ、回礼者の往来もしげく、鉄道馬車は満員の客を乗せて走る。いかにも春の銀座らしい風景ではあるが、その銀座の歩道で、追い羽根をしている娘たちがある。小さい紙鳶をあげている子供が

ある。それを咎める者もなく、さのみ往来の妨害にもならなかつたのを考えると、新年の混雑も今日とは全然比較にならない事がよく判るであろう。大通りでさえ其の通りであるから、裏通りや河岸通りは追い羽根と紙鳶の遊び場所で、そのあいだを万まんざい歳や獅子舞がしばしば通る。その当時の銀座界限には、まだ江戸の春のおもかげが残っていた。

新年の賑わいは昼間だけのことで、日が暮れると寂しくなる。露店も元日以後は一軒も出ない。商店も早く戸を閉める。年始歸りの酔っ払いがふらふら迷い歩いている位のもので、午後七、八時を過ぎると、大通りは暗い街まちになつて、その暗いなかに鉄道馬車の音がひびくだけである。



今日と違つて、その頃は年賀郵便などと云うものもなく、大抵は正直に年始まわりに出歩いたのであるから、正月も十日過ぎまでは大通りに回礼者の影を絶たず、昼は毎日賑わっていたが、日が暮れると前に云つた通りの寂寥、露店も出なければ散歩の人も出ず、寒い夜風のなかに暗い町の灯が沈んで見える。今日では郊外の新開地へ行つても、こんなに暗い寂しい新年の宵の風景は見いだされまい。東京の繁華の中心という銀座通りが此の始末であるから、他は察すべしである。

その頃、銀座通りの飲食店といえ、東側に松田という料理屋がある。それを筆頭として天ぷら屋の大新、同じく天虎、藪蕎麦やぶそば、牛肉屋の古川、鳥屋の大黒屋ぐらゐに過ぎず、西側では料理屋の

千歳、そば屋の福寿庵、横町へはいつて例の天金、西洋料理の清新軒。まずザツとこんなものであるから、今日のカフェーのように遊び半分にはいるという店は皆無で、まじめに飲むか食うかのほかはない。吉川のおますさんという娘が評判で、それが幾らか若い客を呼んだという位のこと、他に色っぽい噂はなかった。したがって、どこの飲食店も春は多少賑わうと云う以外に、春らしい気分も漂っていなかった。こう云うと、甚だ荒涼寂寥たるものであるが、飲食店の姐さん達も春は小綺麗な着物に新しい襷たすきでも掛けている。それを眺めて、その当時の人々は春だと思つたのである。

その正月も過ぎ、二月も過ぎ、三月も過ぎ、大通りの柳は日ま

しに青くなつて、世間は四月の春になつても、銀座の町の灯は依然として生暖かい靄の底に沈んでいるばかりで、夜はそぞろ歩きの人もない。ただ賑わうのは毎月三回、出世地蔵の縁日の宵だけであるが、それとても交通不便の時代、遠方から来る人もなく、往来のまん中で犬ころが遊んでいた。

今日の銀座が突然ダーク・チェンジになつて、四十余年前の銀座を現出したら、銀ブラ党は定めて驚くことであろう。

(昭和二・一「文藝春秋」)

## 夏季雑題

### 市中の夏

市中に生まれて市中に暮らして来た私たちは、繁はんか華ねつ熱つ鬧とうのあいだにもおのずからなる涼味を見いだすことに多年馴らされてい  
る。したがって、盛夏の市中生活も遠い山村水郷は勿論、近い郊  
外に住んでいる人々が想像するほどに苦しいものではないのであ

る。

地方の都市は知らず、東京の市中では朝早くから朝顔あさがお売りや草花売りが来る。郊外にも売りに来るが、朝顔売りなどはやはり市中のもので、ほとんど一坪の庭をも持たないような家つづきの狭い町々を背景として、かれらが売り物とする幾鉢かの白や紅やむらさきの花の色が初めてあざやかに浮き出して来るのである。郊外の朝顔売りは絵にならない。夏のあかつきの薄い靄もやがようやく剥はげて、一町内の家々が大戸おおどをあける。店を飾り付ける。水をまく。そうして、きよう一日の活動に取りかかろうとする時、かの朝顔売りや草花売りが早くも車いっぱいの花を運んで来る。花も葉もまだ朝の露が乾かない。それを見て一味いちみの涼を感じないで

あろうか。

売りに来るものもあれば、無論、買う者もある。買われたひと鉢あるいはふた鉢は、店の主人または娘などに手入れをされて、それから幾日、長ければひと月ふた月のあいだも彼らの店先を飾って、朝夕の涼味を漂わしている。近ごろは店の前の街路樹を利用して、この周囲に小さい花壇を作つて、そこに白粉おしろいや朝鮮朝顔ほうせんかや鳳仙花ほうせんかのたぐいを栽えているのもある。

釣つり葱しのぶは風流に似て俗であるが、東京の夏の景物として詩趣と画趣と涼味とを多分に併せ持っているのは、かの虎耳草ゆきのしたである。村園にあれば勿論、たとい市中にあつてもそれが人家の庭園に叢生そうせいする場合には、格別の値

いあるものとして観賞されならしいが、ひとたび鮑あわびの貝に養われて人家の軒にかけられた時、俄かに風趣を添うること幾層倍である。鮑の貝と虎耳草、富貴の家にはほとんど縁のないものである、いわゆる裏うらだな店に於いてのみそれを見るようであるが、その裏長屋の古い軒先に吊るされて、苔こけの生えそうな古い鮑の貝から長い蔓は垂れ、白い花はこぼれかかっているのを仰ぎ視れば、誰でも涼しいという心持を誘い出されるに相違ない。周囲が穢きたなければ穢ないほど、花の涼しげなのがよいよ眼立ってみえる。いつの頃に誰がかんがえ出したのか知らないが、おそらく遠い江戸の昔、うら長屋の奥にも無名の詩人が住んでいて、かかる風流を諸人に教え伝えたのであろう。

虫の声、それを村園や郊外の庭に聴く時、たしかに幽寂ゆうじやくの感かんをひくが、それが一つならず、二つならず、無数の秋虫一度にみだれ咽むせんで、いわゆる「虫声満地」とか「虫声如雨」とかいう境きように至ると、身にしみるような涼しさは搔き消されてしまう憾みがある。むしろ白日炎天に汗をふきながら下町の横町を通った時、どこかの窓の虫籠できりぎりすの聲がひと声、ふた声、土用どようのうちの日盛りにも秋をおぼえしめるのは、まさにこの声ではあるまいか。

秋虫一度にみだれ鳴くのは却って涼味を消すものであると、私は前に云った。しかもその騒がしい虫の声を市中の虫売りの家台やたいのうちに聴く場合には、まったくその趣ことを異にするのである。夜



涼をたずねる市中の人は、往来の少ない幽暗の地を選ばないで、却つて燈火のあかるい雑沓ざつとうの巷へ迷つてゆく。そこにはさまざまの露店が押し合つて列んでいる。人もまた押し合つて通る。その混雑のあいだに一軒の虫売りが市松障子いちまつしょうじの家台をおろしている。松虫、鈴虫、草雲雀くさひばりのたぐいが掛行燈かけあんどうの下に声をそろえて鳴く。ガチャガチャ虫がひとときわ高く鳴き立てている。周囲がそうぞうしい為であるかも知れないが、この時この声はちつとも騒がしくないばかりか、昼のように明るい夜の町のまんなかで俄かに武蔵野の秋を見いだしたかのようにも感じられて、思わずその店先に足を停めるものは子供ばかりではあるまい。楊誠齋ようせいさいの詩に「時に微涼あり、是れ風ならず。」とあるのは、こうい

場合にも適応されると思う。

夏の夜店で見るから涼しげなものは西瓜すいかの截たち売りである。衛生上の見地からは別に説明する人があろう。私たちは子供のときから何十たびか夜店の西瓜を買って食ったが、幸いに赤痢せきりにもチブスにもならないで、この年まで生きて来た。夜の灯に照らされた西瓜の色は、物の色の涼しげなる標本と云つてもよい。唐蜀とうもろこしの付け焼きも夏の夜店にふさわしいものである。強い火に焼いて売るのであるから、本来は暑苦しそうな筈であるが、街路樹などの葉蔭に小さい店を出して唐もろこしを焼いているのを見れば、決して暑い感じは起らない。却つてこれも秋らしい感じをあたえるものである。

金魚も肩にかついで売りあるくよりも、夜店に金魚桶おけをならべ  
て見るべきものであろう。幾つもの桶をならべて、緋鯉ひごい、金魚、  
目高のたぐいがそれぞれの桶のなかに群がり遊んでいるのを、夜  
の灯にみると一層涼しく美しい。一緒に大きい亀の子などを売っ  
ていれば、更におもしろい。

こんなことを一々かぞえたてていたら際限がない。

しんとう

心頭しんとうを滅却すれば火もおのずから涼し。——そんなむずかし  
い悟りさとを開くまでもなく、誰でもおのずから暑中の涼味を見いだ  
すことを知っている。とりわけて市中に住むものは、山によらず、  
水に依らずして、到るところに涼味を見いだすことを最もよく知  
っているのである。

わたしは滅多に避暑旅行などをしたことは無い。

### 夏の食いもの

ひろく夏の食いものと云えば格別、それを食卓の上のみにのみ限る場合には、その範囲がよほど狭くなるようである。

勿論、コールドビールやハムサラダでビールを一杯飲むのもいい。日本流の洗肉あらひや水みず貝がいも悪くない。果物にパンぐらいで、あつさりあつさりと冷やし紅茶を飲むのもいい。

その人の趣味や生活状態によつて、食い物などはいろいろの相違のあるものであるから、もちろん一概には云えないことである

が、旧東京に生長した私たちは、やはり昔風の食い物の方が何だか夏らしく感じられる。とりわけて、夏の暑い時節にはその感が多いようである。

今日の衛生論から云うと余り感心しないものであろうが、かの冷ひややつこ奴なるものは夏の食い物の大関である。奴豆腐を冷たい水

にひたして、どんぶりに盛る。氷のぶつ搔きでも入れれば猶さらぜいたく贅沢である。別に一種の薬味として青紫蘇あおじそか茗荷みょうがの子を細か

に刻んだのを用意して置いて、鰹かつおぶし節をたくさんにかき込んで

生醤油きじょうゆにそれを混ぜて、冷え切った豆腐に付けて食う。しよせ

んは湯豆腐を冷たくしたものに過ぎないが、冬の湯豆腐よりも夏の冷奴の方が感じがいい。湯豆腐から受取る温か味よりも、冷奴

から受取る涼し味の方が遥かに多い。樋口一葉女史の「にぎり江」のうちにも、源七げんしちの家の夏のゆう飯に、冷奴に紫蘇の香たかく盛り出すという件くだりが書いてあつて、その場の情景が浮き出していたように記憶している。

「夕顔や一丁残る夏豆腐」許六きよろくの句である。

ある人は洒落しやれて「水貝」などと呼んでいるが、もとより上等の食いものではない。しかもほんとうの水貝に比較すれば、その価が廉やすくて、夏向きで、いかにも民衆的であるところが此の「水貝」の生命で、いつの時代に誰が考え出したのか知らないが、江戸以来何百年のあいだ、ほとんど無数の民衆が夏の一日の汗ぎを行ぎようず水いに洗い流した後、ゆう飯ぜんの膳ぜんの上にならべられた冷奴の白い

肌いぢみに一味の清涼を感じたであろうことを思う時、今日ラツパを吹いて来る豆腐屋の声にも一種のなつかしさを感ぜずにはいられない。現にわたしなども、この「水貝」で育てられて来たのである。但し近年は胃腸を弱くしているので、冬の湯豆腐に箸を付けることはあつても、夏の「水貝」の方は残念ながら遠慮している。

冷奴の平民的なるに対して、貴族的なるは鰻うなぎの蒲焼かばやきである。

前ぜんしや者の甚だ淡泊なるに対して、後こうしや者は甚だ濃厚なるものであるが、いづれも夏向きの食い物の両大関である。むかしは鰻を食うのと駕籠かごに乗るのを平民の贅沢と称していたという。今はさすがにそれほどでもないが、鰻を食つたり自動車に乗つたりするのは、懐中の冷たい時にはやはりむずかしい。国学者の斎藤さいとうひこ

彦<sup>まろ</sup>磨翁はその著「神代余波」のうち、盛んに蒲焼の美味を説いて、「一天四海に比類あるべからず」と云い、「われ六、七歳のころより好みくひて、八十歳まで無病なるはこの靈薬の効験にして、草根<sup>そうこんぼくひ</sup>木皮のおよぶ所にあらず」とも云っている。今日でも彦磨翁の流れを汲んで、長生きの靈薬として鰻を食う人があるらしい。それほどの靈薬かどうかは知らないが、「一天四海に比類あるべからず」だけは私も同感である。しかもそれは昔のこと、江戸前ようやくやくに亡び絶えて、旅うなぎや養魚場生まれの鰻<sup>ま</sup>で、<sup>んこう</sup>公が到るところにのたくる当世と相成つては、「比類あるべからず」も余ほど割引きをしなければならぬことになった。

次に瓜<sup>うり</sup>である。夏の野菜はたくさんあるが、そのうちでも代表



的なのは瓜と枝豆であろう。青々した枝豆の塩ゆでも悪くない。しかも見るから夏らしい感じをあたえるものは、きゅうり胡瓜と白瓜である。胡瓜は漬け物のほかに、胡瓜揉もみという夏向きの旨い調理法がむかしから工夫されていて、かの冷奴と共に夏季の食膳の上には欠くべからざる民衆的の食い物となっている。白瓜は漬け物のほかに使い道はないようであるが、それだけでも十分にその役目を果たしているではないか。そのほかに茄子なすや生しょうが姜のたぐいがあるとしても、夏の漬け物はやはり瓜である。茄子の濃こむらさき、生姜の薄くれない、皆それぞれに美しい色彩に富んでいるが、青く白く、見るから清すがすが々すがしいのは瓜の色におよぶものはない。味はすこしく茄子に劣るが、その淡い味がいかにも夏のものである。

る。

百人一首の一人、中納言朝忠あさただ卿は干瓜を山のごとくに積んで、水漬けの飯をしたたかに食つて人をおどろかしたと云うが、その干瓜というのは、かの雷かみなりぼし干のたぐいかも知れない。白瓜を割さいて炎天に干すのを雷干という。食つてはさのみ旨いものでもないが、一種の俳味のあるもので、誰が云い出したか雷干とは面白い名をつけたものだと思う。

## 花火

俳諧はいかいでは花火を秋の季に組み入れているが、どうもこれは夏

のものらしい。少なくとも東京では夏の宵の景物けいぶつである。

衰えたと云つても、両国の川開きに江戸以来の花火のおもかげは幾分か残っている。しかし私は川開き式の大花火をあまり好まない。由来、どこの土地でも大仕掛けの花火を誇りとする傾きがあるらしいが、いたずらに大仕掛けを競うものには、どうも風趣が乏しいようである。花火はむしろ子供たちがもてあそぶ細い筒の火にかぎるように私は思う。

わたしの子供の頃には、花火をあげて遊ぶ子供たちが多かつた。夏の長い日もようやく暮れて、家々の水撒きみずまもひと通り済んで、町の灯がまばらに燦きらめいてくると、子供たちは細い筒の花火を持ち出して往来に出る。そこらの涼み台では団扇うちわの音や話し声なき

こえる。子供たちは往来のまん中に出るのもある、うす暗い立木のかげにあつまるものもある。そうして、思い思いに花火をうち揚げる。もとより細い筒であるから、火は高くあがらない。せいぜいが二階家の屋根を越えるくらいで、ほんと揚がるかと思うと、すぐに開いて直ぐに落ちる。まことに単純な、まことに呆気ないものではあるが、うす暗い町で其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>にも此<sup>ここ</sup>処<sup>こ</sup>にもこの小さい火の飛ぶ影をみるのは、一種の涼しげな気分を誘い出すものであった。

白地の浴衣<sup>ゆかた</sup>を着た若い娘が虫籠をさげて夜の町をゆく。子供の小さい花火は、その行く手を照らすかのように低く飛んでいる。

——こう書くと、それは絵であるというかも知れない。しかし私たちの子供のときには、こういう絵のような風情はめずらしくな

かつた。絵としてはもちろん月つきなみ並の画題でもあろうが、さて実際にそういう風情をみせられると、決して悪くは感じない。まわり燈籠、組みあげ燈籠、虫籠、蚊いぶしの煙り、西瓜の截ち売り、こうしたものが都会の夏の夜らしい気分を作り出すとすれば、子供たちの打ち揚げる小さい花火もたしかにその一部を担当していなければならない。

花火は普通の打ち揚げのほかに、鼠花火、線香花火のあることは説明するまでもあるまい。鼠花火はいたずら者が人を嚇おどしてよろこぶのである。線香花火は小さい児や女の児をよろこばせるのである。そのほかに幽霊花火というものもあつた。これはお化け花火とも云つて、鬼火のような青い火がただトロトロと燃えて落ち

だけであるが、いたずら者は暗い板塀や土蔵の白壁のかげにか  
 くれて、蚊に食われながらその鬼火を燃やして、臆病者の通りか  
 かるのを待っているのであつた。

学校の暑中休暇中の仕事は、勉強するのでもない、避暑旅行に  
 出るのでもない、活動写真にゆくのでもない。昼は泳ぎにゆくか、  
 蝉やとんぼを追いまわしに出る。そうして、夜はきつと花火をあ  
 げに出る。いわゆる悪戯いたずらっ子ことして育てられた自分たちの少年  
 時代を追懐して、わたしは決してそれを悔くやもうとは思わない。

その時代にくらべると、今は世の中がまったく変つてしまった。  
 大通りには電車が通る。横町にも自動車や自転車が駆け込んでく  
 る。警察官は道路の取締りにいそがしい。春の紙鳶も、夏の花火

も、秋の独こ楽まも、だんだんに子供の手から奪うばわれてしまった。今でも場末のさびしい薄暗い町を通ると、ときどきに昔なつかしい子供の花火をみることもある。神経の尖とがった現代の子供たちはおそらくこの花火に対して、その昔の私たちほどの興味を持つていないであろうと思われる。「花火間もなき光かな」などと云つて、むかしから花火は果敢はかないものに謳うたわれているが、その果敢はかないものの果敢はかない運命もやがては全くほろび尽くして、花火といえりばり両り国こく式の大仕掛けの物ばかりであると思われるような時代が来るであろう。どんなに精巧な螺ぜん旋まい仕掛けのおもちやが出来ても、あの粗末な細い竹筒が割れて、あかい火の光がぽんとあがるのを眺めていた昔の子供たちの愉快と幸福とを想像することは

出来まい。

花火は夏のものであると私は云った。しかし、秋の宵の花火もまた一種の風趣がないでもない。鉢の朝顔の蔓がだんだんに伸びて、あさ夕はもう涼風がひとえもの単衣の襟にしみる頃、まだ今年の夏を忘れ得ない子供たちが夜露のおりた町に出て、未練らしく花火をあげているのもある。勿論、その火の数は夏の頃ほどに多くない。秋の螢——そうした寂しさを思わせるような火の光がところどころに揚がっていると、暗い空から弱い稲妻がときどきに落ちて来て、その光を奪いながら共に消えてゆく。子供心にも云い知れない淡い哀愁を誘い出されるのは、こういう秋の宵であった。

(大正十四・五「週刊朝日」)



## 雷雨

夏季に入つていつも感じるのは、夕立ゆうだちと雷鳴の少なくなつたことである。私たちの少年時代から青年時代にかけては、夕立と雷鳴がずいぶん多く、いわゆる雷嫌いをおびやかしたものであるが、明治末期から次第に減じた。時平公しへいこうの子孫万歳である。

地方は知らず、都会は周囲が開けて来る關係上、気圧や氣流にも変化を生じたとみえて、東京などは近年たしかに雷雨が少なく

なつた。第一に夕立の降り方までが違つて来た。むかしの夕立は、今までカンカン天気であつたかと思うと、俄かに蟬の声がやむ、頭の上が暗くなる。おやツと思う間に、一朵いちだの黒雲が青空に拡がって、文字通りの驟雨しゅうう沛然はいぜん、水けむりを立てて瀧のように降つて来る。

往来の人々はあわてて逃げる。家々では慌あわてて雨戸をしめる、干物ほしものを片付ける。周章しゅうしょう狼狽ろうばい、いやもう乱痴氣騒ぎである

が、その夕立も一時間とはつづかず、せいぜい二十分か三十分でカラリと晴れて、夕日が赫かつと照る、蟬がまた啼き出すという始末。急がずば湿ぬれざらましを旅人の、あとより晴るる野路の村雨むらさめ——  
 太田道灌おおたどうかんよく詠んだとは、まったく此の事であつた。近年こ

んな夕立はめつたにない。

空がだんだんに曇つて来て、今に降るかと用意していても、この頃の雷雨は待機の姿勢を取つて容易に動かない。三、四十分ないし一時間の余裕をあたえて、それからポツポツ降り出して来るという順序で、昔のような不意撃ちを食わせない。いわんや青<sup>せい</sup>天<sup>てん</sup>の霹<sup>へ</sup>靨<sup>き</sup>などは絶無である。その代りに揚がりぎわもよくない。雷も遠くなり、雨もやむかと思えながら、まだ思い切りの悪いようにビショビショと降っている。むかしの夕立の男性的なるに引きかえて、このごろの夕立は女性的である。雷雨一過の後も爽<sup>さわ</sup>やかな涼気を感じる場合が少なく、いつまでもジメジメして、蒸し暑く、陰鬱で、こんな夕立ならば降らないほうが優<sup>ま</sup>しだと思ふ

ことがしばしばある。

こう云うと、ひどく江戸っ子で威勢がいいようであるが、正直をいえば私はあまり雷を好まない。いわゆる雷嫌いという程でもないが、聞かずに済むならば聞きたくない方で、電光がピカリピカリ、雷鳴がゴロゴロなどは、どうも愉快に感じられない。しかも夕立には雷電を伴うのが普通であるから、自然に夕立をも好まないようになる。殊に近年の夕立のように、雨後の気分がよくなければ、降ってくれない方が仕合せである。雷ばかりでなく、わたしは風も嫌いである。夏の雷、冬の風、いずれも私の平和を破ること少くない。

むかしの子供は雷を呼んでゴロゴロ様とか、かみなり様とか云

つていたが、わたしが初めてかみなり様とお近付き（？）になつたのは、六歳の七月、日は記憶しないが、途方もなく暑い日であった。わたしの家は麴町の元園町にあつたが、その頃の麴町辺はこんにち今日の旧郊外よりもさびしく、どこの家も庭が広くて、家の周囲にも空地あきちが多かつた。

わたしの家と西隣りの家とのあいだにも、五、六間の空地があつて、隣りの家には枸杞くこの生垣いけがきが青々と結いまわしてあつた。わたしはその枸杞の実を食べたこともあつた。その生垣の外にひと株の大きい柳が立っている。それが自然の野生であるか、あるいは隣りの家の所有であるか、そんなこともよく判らなかつたが、ともかくも相当の大木で、夏から秋にかけては油蟬やミンミンや

カナカナや、あらん限りの蝉が来てそうぞうしく啼いた。柳の近所にはモチ竿や紙袋を持った子供のすがたが絶えなかつた。前にいう七月のある日、なんでも午後三時頃であつたらしい。大夕立の真つ最中、その柳に落雷したのである。

雷雨を恐れて、わたしの家では雨戸をことごとく閉じていたのだ、落雷当時のありさまは知らない。唯ただすさまじい雷鳴と共に、家内が俄かに明るくなつたように感じただけであつたが、雨が晴れてから出てみると、かの柳は真つ黒に焦こげて、大木の幹が半分ほども裂けていた。わたしは子供心に戦せんりつ慄した。その以来、わたしはかみなり様が嫌いになつた。

それでも幸いに、ひどい雷嫌いにもならなかつたが、さりとて

平然と落着いているような勇士にはなれなかつた。雷鳴を不愉快に感ずることは、昔も今も変りがない。その私が暴雷におびやかされた例が三回ある。

その一は、明治三十七年の九月八日か九日の夜とおぼえている。わたしは東京日日新聞の従軍記者として満洲の戦地にあつて、遼<sup>り</sup>

<sup>ようよう</sup>

陽 陥落の後、半月ほどは南門外の迎陽子という村落の民家に

止宿していたが、そのあいだの事である。これは夕立というのではなく、午後二時頃からシトシトと降り出した雨が、暮ると共に<sup>はげ</sup>烈しく降りしきつて、九時を過ぎる頃から大雷雨となつた。

雷光は青く、白く、あるいは紅<sup>あか</sup>く、あるいは紫に、みだれて裂けて、乱れて飛んで、暗い村落をいろいろに照らしている。雨は

ごうごうと降っている。雷はすさまじく鳴りはためいて、地震のような大きい地ひびきがする。それが夜の白らむまで、八、九時間も小歇こやみなしに続いたのであるから、実に驚いた。大袈裟おおげさに言えば、最後の審判の日が来たのかと思われる程であった。もちろん眠られる筈もない。わたしは頭から毛布を引つかぶって、小さくなつて一夜をあかした。

「毎日大砲の音を聞き慣れている者が、雷なんぞを恐れるものか。」

こんなことを云つて強がつていた連中も、仕舞いにはみんな降参したらしく、夜の明けるまで安眠した者は一人もなかった。夜が明けて、雨が晴れて、ほっとすると共にがっかりした。



その二は、明治四十一年の七月である。午後八時を過ぎる頃、わたしは雨を衝ついて根岸方面から麴町へ歸つた。普通は池の端いはたから本郷台へ昇つてゆくのであるが、今夜の車夫は上野のうえの広小路ひろこうじから電車線路をまつすぐに神田にむかつて走つた。御成街道へさしかかる頃から、雷鳴と電光が強くなって来たので、臆病な私は用心して眼鏡めがねをはずした。

もう神田区へ踏み込んだと思う頃には、雷雨はいよいよ強くなつた。まだ宵ながら往来も途絶えて、時どきに電車が通るだけである。眼の先もみえないように降りしきるので、車夫も思うようには進まれない。ようように五軒町附近ごけんちようまで来かかった時、ゆく先がぱつと明るくなって、がんといいうような霹靂一声、車夫は

たちまちに膝を突いた。車は幌ほろのまままで横に倒れた。わたしも一緒に投げ出された。幌が深いので、車外へは転げ出さなかったが、ともかくもはつと思ふ間にわたしの体は横倒しになっていた。二、三丁さきの旅籠町はたごちよう辺の往来のまんなかに落雷したのである。わたしは別に怪我けがもなかった。車夫も膝がしらを少し擦り剥むいたぐらいで、さしたる怪我もなかった。落雷が大地にひびいて、思わず膝を折ってしまったと、車夫は話した。しかし大難が小難で済んだわけで、もし私の車がもう一、二丁も南へ進んでいたら、どんな禍わざわいを蒙こうむったか判らない。二人はたがいに無事を祝して、豪雨のなかをまた急いだ。

その三は、大正二年の九月、仙せん台だいの塩しお竈がまから金華山きんかざん参詣

の小蒸汽船に乗って行って、島内の社務所に一泊した夜である。午後十時頃から山もくずれるような大雷雨となった。

「なに、直ぐに晴れます。」

社務所の人は慰めてくれたが、なにしろ場所が場所である。孤島の雷雨はいよいよ凄<sup>せい</sup>愴<sup>そう</sup>の感が深い。あたまの上の山からは瀧のように水が落ちて来る、海はどうどうと鳴っている。雷は縦横無尽に駆けめぐってガラガラとひびいている。文字通りの天地震動である。こんなありさまで、あしたは無事に帰られるかと危ぶまれた。天候の悪いときには幾日も帰られないこともあるが、社務所の倉には十分の食料がたくわえてあるから、決して心配には及ばないと云い聞かされて、心細いなかにも少しく意を強うした。

社務所の人の話に嘘はなかつた。さすがの雷雨も十二時を過ぎる頃からだんだんに衰えて、枕もとの時計が一時を知らせる頃には、山のあたりで鹿の鳴く声聞きこえた。喜んで窓をあけて見ると、空は拭ぬぐつたように晴れ渡つて、旧暦八月の月が昼のように明るく照らしていた。私はあしたの天気を楽しみながら、窓に倚よつて徐しずかに鹿の声を聞いた。その爽さわやかな心持は今も忘れないが、その夜の雷雨のおそろしさも、おなじく忘れ得ない。

しらやなぎしゅうこ

白柳秀湖氏の研究によると、東京で最も雷雨の多いのは杉

ぎなみ

並のあたりであると云う。わたしの知る限りでも、東京で雷雨

の多いのは北多摩郡の武蔵野町から杉並区の荻窪おぎくぼ、阿佐ヶ谷あさがやの

あたりであるらしい。甲信盆地こうしんで発生した雷雲が武蔵野の空を

通過して、房<sup>ぼう</sup>総<sup>そう</sup>の沖へ流れ去る。その通路があたかも杉並辺の上空にあたり、下町方面へ進行するにしたがって雷雲も次第に稀薄になるように思われる。但し俗に「北鳴り」と称して、日光<sup>にっこう</sup>方面から押し込んで来る雷雲は別物である。

(昭和二・七「サンデー毎日」)

## 鳶

去年の十月頃の新聞を見た人々は記憶しているであろう。日にほん本橋ばしかきがらちよう蠅殻町のある商家の物干へ一羽の大きい鳶とびが舞い降りたのを店員大勢が捕獲して、警察署へ届け出たというのである。あの新聞には、その鳶の写真まで掲げてあった。

そのとき私が感じたのは、鳶という鳥がそれほど世間から珍しがられるようになった事である。今から三、四十年前であつたら、

鳶などがそこらに舞つていても、降りていても、誰も見返る者もあるまい。云わばからすすずめ鴉や雀も同様で、それを捕獲して警察署へ届け出る者もあるまい。鳶は現在保護鳥の一種になっているから、それで届け出たのかも知れないが、昔なら恐らくそれを捕獲しようとする者もあるまい。それほどに鳶は普通平凡の鳥類と見なされていたのである。

私は山の手の麴町に生長したせいにか、子供の時から鳶などは毎日のように見ている。天気晴朗の日には一羽や二羽はかならず大空に舞つていた。トロトロトロと云うような鳴き声も常に聞き慣れていた。鳶が鳴くから天気がよくなるだろうなぞと云った。

鳶にあぶらげ油揚をさら攫われると云うのは嘘ではない。子供が豆腐屋へ

使いに行つて笹ざるや味噌みそこしに油揚を入れて帰ると、その途中で鳶とびに攫つて行かれる事はしばしばあつた。油揚ばかりでなく、魚さかな屋やが人家の前に盤はん台だいをおろして魚をこしらえている処へ、鳶が突然にサツと舞いくだつて来て、その盤台の魚や魚の腸はらわたなどを引つ掴んで、あれという間に虚空こくう遙かに飛び去ることも珍しくなかつた。鷲わしが子供を攫つて行くのも恐らく斯こうであらうかと、私たちも小さい魂きもをおびやかされたが、それも幾たびか見慣れると、やあまた攫われたなぞと面白がつて眺めているようになった。往來で白昼搔つ払いを働く奴を東京では「昼とんび」と云つた。

小石川こいしかわに富坂町とみざかまちというのがある。富坂はトビ坂から転じたので、昔はここらの森にたくさんの鳶が棲んでいた為であるとい



う。してみると、江戸時代には更にたくさんの鳶が飛んでいたに相違ない。鳶ばかりでなく、鶴つるも飛んでいたのである。明治以後、鶴を見たことはないが、鳶は前に云う通り、毎日のように東京の空を飛び廻っていたのである。

鳶も鷺と同様に、いわゆる鷺しちよう鳥とか猛もうきん禽とか云うものにかぞえられ、前に云ったような悪わるいたずらをも働くのであるが、鷺のように人間から憎まれ恐れられないのは、平生から人家に近く棲んでいるのと、鷺ほどの兇暴を敢あえてしない為であろう。子供の飛ばすたこ凧は鳶から思い付いたもので、日本ではトンビ凧といひ、漢字では紙鳶と書く。英語でも凧をカイトという。すなわち鳶と同じことである。それを見ても、遠い昔から人間と鳶とは余

ほどの親しみを持っていたらしいが、文明の進むに連れて、人間と鳶との縁がだんだんに遠くなつた。

日露戦争前と記憶している。麴町の英国大使館の旗竿に一羽の大きい鳶が止まっているのを見付けて、英国人の館員や留学生が嬉し<sup>うれ</sup>がって眺めていた。留学生の一人が私に云つた。

「鳶は男らしくていい鳥です。しかし、ロンドン附近ではもう見られません。」

まだ其の頃の東京には鳶のすがたが相当に見られたので、英国人はそんなに鳶を珍しがったり、嬉しがったりするのかと、私は心ひそかに可笑しく思<sup>おか</sup>つた位であつたが、その鳶もいつか保護鳥になつた。東京人もロンドン人と同じように、鳶を珍しがる時代

が来たのである。もちろん鳶に限ったことではなく、大都会に近  
いところでは、鳥類、虫類、魚類が年々に亡びて行く。それは余  
儀なき自然の運命であるから、特に鳶に対して感傷的の詠嘆を洩  
らすにも及ばないが、初春の空にかのトンビ風を飛ばしたり、大  
きな口をあいて「トンビ、トロロ」と歌った少年時代を追懐する  
と、鳶の衰滅に対して一種の悲哀を感じずにはいられない。

むかしは矢羽根きじに雉きじまたは山鳥はねの羽を用いたが、それらは多く  
得られないので、下等の矢には鳶の羽を用いた。その鳶の羽すら  
もふつていも払底ふつていになった頃には、矢はすたれて鉄砲となった。そこにも  
需要と供給の変遷が見られる。

私はこのごろ上目黒かみめぐろに住んでいるが、ここらにはまだ鳶が棲

んでいて、晴れた日には大きい翼をひろげて悠々と舞っている。雨のふる日でもトロトロと鳴いている。私は旧友に逢つたような懐かしい心持で、その鳶が輪を作つて飛ぶ影をみあげている。鳶はわが巣を人に見せないという俗説があるが、私の家のあたりへ飛んで来る鳶は近所の西郷山に巣を作っているらしい。その西郷山もおいおいに拓ひらかれて分譲地となりつつあるから、やがてはここらにも鳶の棲家を失うことになるかも知れない。いかに保護されても、鳶は次第に大東京から追いやらるるのほかはあるまい。

私はよく知らないが、金鷄勳章きんしの鷄は鳶のたぐいであると言ふ。然らば、たとい鳶がいずこの果てへ追いやられても、あるいはその種族が絶滅ひんに瀕しても、その雄姿は燦さんとして永久に輝いている

のである。鳶よ、憂うる勿<sup>なか</sup>れ、悲しむ勿れと云いたくもなる。

きょうも暮春の晴れた空に、二羽の鳶が舞っている。折りから一台の飛行機が飛んで来たが、かれらはそれに驚かされたような<sup>けしき</sup>気色も見せないで、やはり悠悠々として大きい翼を空中に浮かべていた。

(昭和二・五「政界往来」)

## 旧東京の歳晩

昔と云つても、遠い江戸時代のことはわたしも知らない。ここ  
でいう昔は、わたし自身が目撃した明治十年ごろから三十年頃  
にわたる昔のことである。そのつもりで読んで貰いたい。

その頃のむかしに比べると、最近の東京がいちじるしく膨ぼうちよ

脹うし、いちじるしく繁昌して来たことは云うまでもない。その  
繁昌につれて、東京というものの色彩もまたいちじるしく華やか

になった。家の作り方、ことに商店の看牌かんばんや店飾りのたぐいが、今と昔とはほとんど比較にならないほどに華やかになった。勿論、一歩あやまって俗悪に陥ったような点もみえるが、いずれにしても賑やかになったのは素晴らしいものである。今から思うと、その昔の商店などは何商売にかかわらず、いずれも甚だ質素な陰気なもので、大きな店ほど何だか薄暗いような、陰気な店構えをしているのが多かった。大通りの町々と云つても、平日へいじつは寂しいもので——その当時は相当に賑やかだと思つていたのであるが——人通りもまた少なかった。

それが年末から春初にかけては、俄かに景気づいて繁昌する。平日がさびしいだけに、その繁昌がひどく眼に立って、いかにも

歳の暮れらしい、忙がしい気分や、または正月らしい浮いた気分を誘い出すのであつた。今日こんにちのように平日から絶えず賑わつていると、歳の暮れも正月も余りいちじるしい相違はみえないが、くどくも云う通り、ふだんが寝入つているだけに、暮れの十五、六日頃から正月の十五、六日まで約一カ月のあいだは、まったく世界が眼ざめて来たように感じられたものである。

今日のように各町内連合の年末大売出しなどというものはない。楽隊で囃はやしし立てるようなこともない。大福引きで筆筥や座蒲団をくれたり、商品券をくれたりするようなこともない。しかし二十はっ日過かぎになると、各商店では思い思いに商品を店いっばいに列べたり、往來まで食はみ出すように積みかさねたりする。景氣づけに



ほおずき提灯をかけるのもある。福引きのような大当りはないが、大抵の店では買物相当のお景物をくれることになっているので、その景品をこれ見よとばかりに積み飾って置く。それがまた馬鹿に景気のいいもので、それに惹ひかされると云うわけでもあるまいが、買手がぞろぞろと繋がってはいる。その混雑は実におびただしいものであった。

それらの商店のうちでも、絵草紙屋——これが最も東京の歳晩いろいろどを彩るもので、東京に育った私たちに取っては生涯忘れ得ない思い出の一つである。絵草紙屋は歳の暮れにかぎられた商売ではないが、どうしても歳の暮れに無くてはならない商売である事を知らなければならぬ。錦絵の板はんもと一元では正月を当て込みにいる

ろの新版を刷り出して、小売りの絵草紙屋の店先を美しく飾るのが習いで、一枚絵もある、二枚つづきもある、三枚つづきもある。各劇場の春狂言が早くきまつている時には、先廻りをして三枚つづきの似顔絵を出すこともある。そのほかにいろいろのすごろく双六も絵草紙屋の店先にかけられる。そのなかには年々歳々おなじ版をかさねているような、例のいろは短歌や道中すごろく双六のたぐいもあるが、何か工夫して新しいものを作り出すことになっているので、武者絵むしやえ双六、名所双六、お化け双六、歌舞伎双六のたぐい、主題はおなじでも画面の違つたものを撰んで作る。ことに歌舞伎双六は羽子板とおなじように、大抵はその年の当り狂言を撰むことになつていて、人物はすべてやくしや俳優の似顔であること勿論である。

その双六だけでも十種、二十種の多きに達して、それらが上に下に右に左に掛け連ねられて、師走の風に軽くそよいでいる。しかもみな彩<sup>さいしき</sup>色の新版であるから、いわゆる千紫<sup>せんしばんこう</sup>万紅<sup>ばんこう</sup>の絢爛<sup>けんらん</sup>をきわめたもので、眼も綾<sup>あや</sup>というのはまったく此の事であった。

女子供は勿論、大抵の男でもよくよくの忙がしい人でないかぎりは、おのずとそれに吸い寄せられて、店先に足を停めるのも無理はなかった。絵草紙屋では歌がるたも売る、十六むさしも売る、福笑いも売る、正月の室内の遊び道具はほとんどみなここに備わっていると言うわけであるから、子供のある人にかぎらず、歳晩年始の贈り物を求めるために絵草紙屋の前に立つ人は、朝から晩まで絶え間がなかった。わたしは子供の時に、麴町から神田、日

本橋、京橋、それからそれへと絵草紙屋を見てあるいて、とうとう芝しばまで行つたことがあつた。

歳としの市いちを觀みないでも、餅搗もちつきや煤掃すすはきの音を聞かないでも、ふ

ところ手をして絵草紙屋の前に立ちさえすれば、春の来るらしい気分は十分に味わうことが出来たのである。江戸以来の名物たる錦絵がほろびたと云うのは惜しむべきことに相違ないが、わたしは歳晚ちまたの巷ちまたを行くたびに特にその感を深うするもので、いかに連合大売出しが旗や提灯で飾り立てても、楽隊や蓄音器で囃し立てても、わたしをして一種寂寥の感を覚えしめるのは、東京市中にかの絵草紙屋の店を見いだし得ないためであるらしい。

歳晚の寄席——これにも思い出がある。いつの頃から絶えたか

知らないが、昔は所々の寄席に大景物だいけいぶつということがあった。十二月の下しも席せきは大抵休業で、上かみ十五日もあまりよい芸人は出席しなかつたらしい。そこで、第二流どころの芸人の出席する寄席では、客を寄せる手段として景物を出すのである。

中入りになつた時に、いろいろの景品を高座に持ち出し、前座の芸人が客席をまわつて、めいめいに籤くじを引かせてあるく。そうして、その籤の番号によつて景品をくれるのであるが、そのなかには空くじもたくさんある。中あたつたものには、安物の羽子板や、紙鳶や、羽根や、菓子あなごの袋などをくれる。箒すや播りこ木や、鉄瓶や、提灯や、小桶や、薪や、炭俵や、火鉢などもある。安物があった時は仔細ないが、すこしい物をひき当てた場合には、空

くじの連中が妬みねた半分なに声をそろえて、「やってしまえ、やってしまえ。」と呶鳴どなる。自分がそれを持ち帰らずに、高座の芸人にやってしまえと云うのである。そう云われて躊躇ちゆうちよしていると、芸人たちの方では如才なくお辞儀をして、「どうもありがとうございませう。」と、早々にその景品を片付けてしまうので、折角いい籤をひき当てても結局有名無実有名無実に終ることが多い。それを見越して、たくさんの景品のうちにはいかさま物もならべてある。羊よ羹うかんとみせかけて、実は拍子木を紙につつんだたぐいの物が幾らもあるなどと云うが、まさかそうでもなかったらしい。

わたしも十一の歳のくれに、麴町の万よしという寄席で紙鳶をひき当てたことを覚えている。それは二枚半で、龍という字風で

あつた。わたしは喜んで高座の前へ受取りにゆくと、客席のなかで例の「やってしまえ。」を呶鳴るものが五、六人ある。わたしも負けない気になって、「子供が紙鳶を取って、やってしまう奴があるものか。」と、大きな声で呶鳴りかえすと、大勢の客が一度に笑い出した。高座の芸人たちも笑った。ともかくも無事に、その紙鳶を受取って元の席に戻つてくると、なぜそんな詰まらないことを云うのだと、一緒に行つていた母や姉に叱られた。その紙鳶はよくよく私に縁が無かつたとみえて、あくる年の正月二日に初めてそれを揚げに出ると、たちまちに糸が切れて飛んでしまつた。

近年は春秋二季の大掃除というものがあるので——これは明治

三十二年の秋から始まったように記憶している。——特に煤掃きすすはをする家は稀であるらしいが、その頃はどこの家でも十二月にはいつて煤掃きをする。手廻しのいい家は月初めに片付けてしまいが、もう数え日かぞといびう二十日過ぎになつてトントンバタバタほこりと埃を掃き立てている家がたくさんある。商店などは昼間の商売が忙がしいので、日がくれてから提灯をつけて煤掃きに取りかかるのもある。なにしろ戸々ここで思い思いに掃き立てるのであるから、その都度つどに近所となりの迷惑は思いやられるが、お互いのことと諦あきらめて別に苦情もなかつたらしい。

江戸時代には十二月十三日と大抵きまつていたのを、維新後にはその慣例が頽くずれてしまったので、お互いに迷惑しなければなら



ないなどと、老人たちは呟つぶやいていた。

もう一つの近所迷惑は、かの餅搗きであつた。米屋や菓子屋で餅を搗くのは商売として已やむを得ないが、そのころには俗にひきずり餅というのが行なわれた。搗屋が臼うすや釜かまの諸道具を車につんで来て、家々の門内や店先で餅を搗くのである。これは依頼者の方であらかじめ糯もちこめ米こめを買い込んでおくので、米屋や菓子屋にあつらえるよりも経済であると云うのと、また一面には世間に対する一種の見栄もあつたらしい。又なんとという理窟もなしに、代々の習慣でかならず自分の家で搗かせることにしているのもあつたらしい。勿論、この搗屋も大勢あつたには相違ないが、それでも幾人か一組になつて、一日に幾カ所も掛いて廻るのであるから、

夜のあけないうちから押し掛けて来る。そうして、幾白かの餅を搗いて、祝儀を貰つて、それからそれへと移つてゆくので、遅いところへ来るのは夜更よふけにもなる。なにしろ大勢がわいわい云つて餅を搗き立てるのであるから、近所となりにつつては安眠妨害である。殊に釜の火を熾さかんに焚たくので、風のふく夜などは危険でもある。しかしこれに就ついても近所から苦情が出たという噂も聞かなかつた。

運が悪いと、ゆうべは夜ふけまで隣りの杵きねの音にさわがされ、今朝は暗いうちから向うの杵の音に又おどろかさされると云うようなこともあるが、これも一年一度の歳の暮れだから仕方がないと覚悟していたらしい。現にわたしなども霜夜の枕にひびく餅の音

を聴きながら、やがて来る春のたのしみを夢みたもので——有ありあ  
 明けは晦日みそかに近し餅の音——こうした俳句のおもむきは到るところに残っていた。

冬至とうじの柚湯ゆずゆ——これは今も絶えないが、そのころは物価が廉やすい  
 ので、風呂のなかには柚がたくさんに浮かんでいるばかりか、心  
 安い人々には別に二つ三つぐらいの新しい柚の実をくれたくらい  
 である。それを切つて酒にひたして、ひび薬にすると云つて、み  
 んなが喜んで貰つて帰つた。なんと云つても、むかしは万事が鷹お  
 揚うようであつたから、今日のように柚湯とは名ばかりで、風呂じゆ  
 うをさがし廻つて僅わずかに三つか四つの柚を見つけ出すのとは雲うんで  
 泥いの相違であつた。

冬至の日から獅子舞が来る。その囃子の音を聴きながら柚湯のなかに浸っているのも、歳の暮れの忙せわしいあいだに何となく春らしい暢のびやかな気分を誘い出すものであった。

わたしはこういう悠長な時代に生まれて、悠長な時代に育つて来たのである。今日の劇はげしい、目まぐるしい世のなかに堪えられないのも無理はない。

(大正三・二「女性」)

## 新旧東京雑題

## 祭礼

東京でいちじるしくすた廃れたものは祭礼まつりである。江戸以来の三大祭りといえば、麴町の山王さんのう、神田の明神みょうじん、深川ふかがわの八幡と  
して、ほとんど日本国じゆうに知られていたのであるが、その祭礼はむかしの姿をとどめないほどに衰えてしまった。たとい東京

に生まれたといっても、二十代はもちろん、三十代の人では、ほんとうの祭礼らしいものを見た者はあるまい。それほど遠い昔から、東京の祭礼は衰えてしまったのである。

震災以後は格別、その以前には型ばかりの祭礼を行なわないうもなかったが、それは文字通りの「型ばかり」で、軒提灯に花山車<sup>だし</sup>ぐらいにとどまっていた。その花山車も各町内から曳<sup>ひ</sup>き出すというわけではなく、氏子<sup>うじこ</sup>の町々も大体においてひっそり閑としていて、いわゆる天下祭りなどという素晴らしい威勢はどこにも見いだされなかった。

わたしの記憶しているところでは、神田の祭礼は明治十七年の九月が名残<sup>なご</sup>りで、その時には祭礼番附が出来た。その祭礼ちゆう

に九月十五日の<sup>おおあらし</sup>大風雨があつて、東京府下だけでも丸潰れ<sup>つぶ</sup>千八十戸、半つぶれ二千二百二十五戸という大被害で、神田の山車小屋などもみな吹き倒された。それでも土地柄だけに、その後も隔年の大祭を怠らなかつたが、その繁昌は遂に十七年度の昔をくり返すに至らず、いつとはなしに型ばかりのものになつてしまつた。

山王の祭礼は三大祭りの王たるもので、氏子の範囲も麴町、四谷、京橋、日本橋にわたつて、山の手と下町の中心地区を併合しているの、江戸の祭礼のうちでも最も華麗をきわめたのである。わたしは子供のときから麴町に育つて、氏子の一人であつたために、この祭礼を最もよく知っているが、これは明治二十年六月の大祭を名残りとして、その後はいちじるしく衰えた。近年は神田

よりも寂しいくらいである。

深川の八幡はわたしの家から遠いので、詳しいことを知らないが、これも明治二十五年の八月あたりが名残りであつたらしく、その後に深川の祭礼が賑やかに出来たという噂を聞かないようである。ここは山車や踊り屋台よりも各町内の神輿みこしが名物で、俗に神輿祭りと呼ばれ、いろいろの由緒つきの神輿が江戸の昔からたくさんに保存されていたのであるが、先年の震災で大かたしょうも焼亡うしたと察せられる。

そういうわけで、明治時代の中ごろから東京には祭礼らしい祭礼はないといつてよい。明治の末期や大正時代における型ばかりの祭礼を見たのでは、とても昔せきじつ日の壯觀を想像することは出来



ない。京の祇園ぎおん会や大阪おおさかの天満てんま祭りは今日どうなっているか知らないが、東京の祭礼は実際においてほろびてしまった。しよせん再興はおぼつかない。

## 湯屋

湯屋を風呂屋という人が多くなっただけでも、東京の湯屋の変遷が知られる。三馬さんばの作に「浮世風呂」の名があっても、それは書物の題号であるからで、それを口にする場合には銭湯せんとうとか湯屋うやとかいうのが普通で、元禄げんろくのむかしは知らず、文化文政ぶんかぶんせいから明治に至るまで、東京の人間は風呂屋などと云う者を田舎者と

して笑ったのである。それが今日では反対になって来たらしい。

湯屋の二階はいつ頃まで残っていたか、わたしにも正確の記憶がないが、明治二十年、東京の湯屋に対して種々のむずかしい規則が発布されてから、おそらくそれと同時に禁止されたのである。う。わたしの子供のときには大抵の湯屋に二階があつて、そこには若い女が控えていて、二階にあがつた客はそこで新聞をよみ、将棋をさし、ラムネをのみ、麦湯を飲んだりしたのである。それを禁じられたのは無論風俗上の取締りから来たのであるが、たといその取締りがなくても、カフェーやミルクホールの繁昌する時代になつては、とうてい存続すべき性質のものではあるまい。しかし、湯あがりに茶を一ぱい飲むのも悪くはない。湯屋のとなり

に軽便な喫茶店を設けたらば、相当に繁昌するであろうと思われるが、東京ではまだそんなことを企てたのはいないようである。

五月節句の菖蒲湯しょうぶ、土用のうちの桃湯もも、冬至の柚湯ゆず——そのなかで桃湯は早くすたれた。暑中に桃の葉を沸かした湯にはいると、虫に食われないとか云うのであつたが、客が喜ばないのか、湯屋の方で割に合わないのか、いつとはなしに止められてしまったので、今の若い人は桃湯を知らない。菖蒲湯も柚湯も型ばかりになってしまつて、これもやがては止められることであろう。

むかしは菖蒲湯または柚湯の日には、湯屋の番台に三方さんぼうが据えてあつて、客の方では「お拵ひねり」と唱え、湯銭を半紙にひねつて三方の上に置いてゆく。もちろん、規定の湯銭よりも幾分か余

計につつむのである。ところが、近年はそのふうがやんで、菖蒲湯や柚湯の日でも誰もおひねりを置いてゆく者がない。湯屋の方でも三方を出さなくなった。そうになると、湯屋に取っては菖蒲や柚代だけが全然損失に帰きするわけになるので、どこの湯屋でもたくさんの菖蒲や柚を入れない。甚だしいのになると、風呂から外へ持ち出されないように、菖蒲をたばねて縄でくくりつけるものがある。柚の実を麻袋に入れてつないで置くのもある。こんな殺風景なことをする程ならば、いつそ桃湯同様に廃止した方がよさそうである。

朝湯は江戸以来の名物で、東京の人間は朝湯のない土地には住めないなどと威張ったものであるが、その自慢の朝湯も大正八年

の十月から一斉に廃止となった。早朝から風呂を焚いては湯屋の経済が立たないと云うのである。しかし客からの苦情があるので、近年あさ湯を復活したところもあるが、それは極めて少数で、大體においては午後一時ごろに行ってもまだ本当に沸いていないというのが通例になってしまった。

江戸っ子はさんざんであるが、どうも仕方がない。朝湯は十銭取つたらよかろうなどと云う説もあるが、これも実行されそうもない。

## そば屋

そば屋は昔よりもいちじるしく綺麗になった。どういふわけか知らないが、湯屋と蕎麦屋そばとその歩調をおなじくするもので、湯銭があがれば蕎麦の代もあがり、蕎麦の代が下がれば湯屋も下がるといふことになっていたが、近年は湯銭の五銭に対して蕎麦の盛もり・掛かけは十銭という倍額になった。もつとも、湯屋の方は公衆の衛生問題という見地から、警視庁でその値あげを許可しないのである。

私たちの書生時代には、東京じゆうで有名の幾軒を除いては、どこの蕎麦屋もみな汚きたないものであつた。綺麗な蕎麦屋に蕎麦の旨いのは少ない、旨い蕎麦を食いたければ汚い家へゆけと昔から云い伝えたものであるが、その蕎麦屋がみな綺麗になった。そうし

て、大体においてまぶしくなつた。まことに古人われを欺かずである。あざむ山路愛山氏やまじあいざんが何かの雑誌に蕎麦のことを書いて、われわれの子供などは蕎麦は庖丁ほうちようで切るものであると云うことを知らず、機械で切るものと心得て食つているとか云つたが、確かに機械切りの蕎麦は旨くないようである。そば切り庖丁などという詞ことばはいつか消滅するであらう。

人間が贅沢になつて来たせいか、近年はそば屋で種物たねものを食う人が非常に多くなつた。それに応じて種物の種類もすこぶる殖えふた。カレー南蛮などという不思議なものさえ現われた。ほんとうの蕎麦を味わうものは盛か掛を食うのが普通で、種物などを喜んで食うのは女子供であると云うことになつていたが、近年はそれ

が一変して、ぜに銭のない人間が盛・掛を食うと云うことになったらしい。種物では本当のそばの味はわからない。そば屋が蕎麦を吟味しなくなったのも当然である。

地方の人が多くなった証拠として、うどん饅頭を食う客が多くなった。蕎麦屋は蕎麦を売るのが商売で、そば屋へ行つて饅頭をくれなどと云うと、田舎者として笑われたものであるが、この頃は普通のそば屋ではみな饅頭を売る。おかめ阿亀とか天ぷらとかいって注文すると、おそばでございますか、饅頭台でございますかと聞き返される場合が多い。黙っていれば蕎麦にきまつていると思うが、それでも念のために饅頭であるかないかを確かめる必要がある程に、饅頭を食う客が多くなったのである。



かの鍋焼うどんなども江戸以来の売り物ではない。上方では

昔から夜なきうどんの名があつたが、江戸は夜そば売りで、俗に

風鈴ふうりんそばとか夜鷹よたかそばとか呼んでいたのである。鍋焼うどんが

東京に入り込んで来たのは明治以後のことで、黙阿弥もくあみの「嶋衛しまちど

りつきのしらなみ

月白浪」は明治十四年の作であるが、その招魂社しょうこんしゃ鳥居前

の場で、堀の内まいの男が夜そばを食いながら、以前とちがつて夜鷹そばは売り手が少なくなつて、その代りに鍋焼うどんが一年増しに多くなつた、と話しているのを見ても知られる。その夜そば売りも今ではみな鍋焼うどんに變つてしまった。中にはシユウマイ屋に化けたのもある。

そば屋では大正五、六年頃から天どんや親子どんぶりまでも売

りはじめた。そば屋がうどんを売り、さらに飯までも売ることに  
 なったのである。こうなると、蕎麦のうまいますずいなどはいよい  
 よ論じていられなくなる。

(昭和2・4「サンデー毎日」)

## ゆず湯

## 一

本日ゆず湯というビラを見ながら、わたしは急に春に近づいたような気分になって、いつもの湯屋の格子をくぐると、出あいがしらに建具屋のおじいさんが濡ぬ手て拭ぬぐで額ひたいをふきながら出て来た。

「旦那、徳とくがとうとう死にましたよ。」

「徳さん……。左官屋の徳さんが……。」

「ええ、けさ死んだそうで、今あの書生さんから聞きましたから、これからすぐに行つてやろうと思つているんです。なにしろ、別に親類というようなものも無いんですから、みんなが寄りあつまつて何とか始末してやらなけりやあなりますまいよ。運のわるい男でしてね。」

こんなことを云いながら、氣の短いおじいさんは下駄を突っかけて、そそくさと出て行つてしまった。午後二時頃の錢湯は広々と明るかつた。狭い庭には縁日で買つて来たらしい大きい鉢の梅が、硝子戸ガラスど越しに白く見えた。

着物をぬいで風呂場へゆくと、流しの板は白く乾いていて、あかるい風呂の隅には一人の若い男の頭がうしろ向きに浮いているだけであった。すき透るような新しい湯は風呂いっぱいみなぎに漲たかって、輪切りの柚ゆずがあたたかい波にゆらゆらと流れていた。窓硝子を洩れる真昼の冬の日このみに照らされて、陽かげろう炎こものように立ち迷う湯気こころよのなかに、黄いろい木実このみの強い匂こもいが籠こもっているのも快こころよかった。わたしはいい心持こもになつて先こもずからだを湿しめしていると、隅の方に浮いていた黒い頭こもがやがてくるりと振り向いた。

「今日こんにち日は。」

「押し詰こもまつてお天気で結構です。」と、私も挨拶した。

彼は近所の山やまぐち口ぐちという医師の薬局生であった。わたしと別に

懇意でもないが、湯屋なじみで普通の挨拶だけはするのであった。建具屋のおじいさんが書生さんと云つたのはこの男で、左官屋の徳さんはおそらく山口医師の診察を受けていたのであろうと私は推量した。

「左官屋の徳さんが死んだそうですね。」と、わたしもやがて風呂にはいつて、少し熱い湯に顔をしかめながら訊きいた。

「ええ、けさ七時頃に……。」

「あなたのところの先生に療治して貰っていたんですか。」

「そうです。慢性の腎臓炎でした。わたしのところへ診察を受けに来たのは先月からでしたが、何でもよつぽど前から悪かったらしいんですね。先生も最初からむずかしいと云っていたんですが、

おととい頃から急に悪くなりました。」

「そうですか。気の毒でしたね。」

「なにしろ、気の毒でしたよ。」

鸚鵡返おうむしにこんな挨拶をしながら、薬局生はうずたかい袖を搔

きわけて流し場へ出た。それから水船みずぶねのそばへたくさんの小桶

をならべて、真赤まっかに茹ゆられた胸や手足を石鹼の白い泡に埋めてい

た。それを見るときもなしに眺めながら、わたしはまだ風呂のなか

に浸ひたっていた。

表には師走しわすの町らしい人の足音が忙がしそうにきこえた。冬至とうじ

の獅子舞の囃子の音も遠くひびいた。ふと眼をあげて硝子窓の外

をうかがうと、細い路地を隔てた隣りの土蔵の白壁のうえに冬の

空は青々と高く晴れて、下界のいそがしい世の中を知らないように鳶が一羽ゆるく舞っているのが見えた。こういう場合、わたしはいつものんびりした心持になって、何だかぼんやりと薄ら眠くなるのが習いであつたが、きようはなぜか落ちついた気分になれなかつた。徳さんの死ということが、私の頭をいろいろに動かし、ているのであつた。

「それにしても、お玉さんはどうしているだろう。」

わたしは徳さんの死から惹ひいて、その妹のお玉さんの悲しい身の上をも考えさせられた。

お玉さんは親代々の江戸っ児で、阿父おとつさんは立派な左官の棟とうり梁よう株であつたと聞いている。昔はどこに住んでいたか知らない



が、わたしが麴町の元園町に引越して来た時には、お玉さんは町内のあまり広くもない路地の角に住んでいた。わたしの父はその路地の奥のあき地に平家を新築して移った。お玉さんの家は二階家で、東の往来にむかった格子作りであつた。あらい格子の中は広い土間になっていて、そこには漆喰しつくいの俵や土舟つちぶねなどが横たわっていた。住居の窓は路地のなかの南にむかつていて、住居につづく台所のまえは南から西へ折りまわした板塀に囲まれていた。塀のうちには小さい物置と四、五坪の狭い庭があつて、庭には柿や桃や八つ手のたぐいが押しかぶさるように繁り合っていた。いずれも庭不相当の大木であつた。二階はどうなっているか知らないが、わたしの記憶しているところでは、一度も東向きの窓を

明けたことはなかつた。北隣りには雇い人の口入屋くちいれやがあつた。どういふわけか、お玉さんの家うちとその口入屋とはひどく仲が悪くつて、いつも喧嘩が絶えなかつた。

わたしが引つ越して来た頃には、お玉さんの阿父さんという人はもう生きていなかつた。阿母さんおつかと兄の徳さんとお玉さんと、水入らずの三人暮らしであつた。

阿母さんの名は知らないが、年の頃は五十ぐらいで、色の白い、瘦形で背のたかい、若いときには先ず美いい女の部であつたらしく思われる人であつた。徳さんは二十四、五で、顔付きもからだの格好も阿母さんに生き写しであつたが、男としては少し小柄の方であつた。それに引きかえて妹のお玉さんは、眼鼻立ちこそ兄さ

んに肖にているが、むしろ兄さんよりも大柄の女で、平べったい顔と厚ぼったい肉とをもっていた。年は二十歳はたちぐらいで、いつも銀杏がえしに髪を結つて、うすく白粉おしろいをつけていた。

となりの口入屋ばかりでなく、近所の人はすべてお玉さん一家に対してあまりいい感情をもっていないらしかった。お玉さん親子の方でも努めて近所との交際つきあいを避け、孤立の生活に甘んじているらしかった。阿母さんは非常に口やかましい人で、私たち子供仲間から左官屋の鬼婆と綽名あだなされていた。

お玉さんの家の格子のまえには古風の天水桶があつた。私たちがもしその天水桶のまわりに集まつて、夏はぼうふらを探し、冬は氷をいじったりすると、阿母さんはたちまちに格子をあけて、

「誰だい、いたずらするのは……」と、かみ付くように呶鳴りつけた。雨のふる日に路地をぬける人の傘が、お玉さんの家の羽目か扉にがさりとでも障る音さわがすると、阿母さんはすぐに例の「誰だい」を浴びせかけた。わたしも学校のゆきかえりに、たびたびこの阿母さんから「誰だい」と叱られた。

徳さんは若い職人に似合わず、無口で陰気な男であつた。見かけは小粋な若い衆であつたが、町内の祭りなどにも一切いっさいかからなかつた。その癖、内で一杯飲むと、阿母さんやお玉さんの三味線で清元や端唄はうたを歌つたりしていた。お玉さんが家うちじゆうで一番陽気な質たちらしく、近所の人をみればいつもにこにこ笑つて挨拶していた。しかし阿母さんや兄さんがこういう風変り

であるので、娘盛りのお玉さんにも親しい友達はなかつたらしく、麴町通りの夜店をひやかしにゆくにも、平河天神の縁日に参詣するにも、お玉さんはいつも阿母さんと一緒に出あるいていた。時どきに阿母さんと連れ立って芝居や寄席へ行くこともあるらしかつた。

この一家は揃そろつて綺麗好きであつた。阿母さんは日に幾たびも格子のまえを掃いていた。お玉さんも毎日かいがいしく洗濯や張り物などをしていた。それで決して髪を乱していたこともなく、毎晩かならず近所の湯に行つた。徳さんは朝と晩とに一日二度ずつ湯にはいった。

徳さん自身は棟梁株ではなかつたが、一人前の職人としては相

当の腕をもっているので、別に生活に困るような風はみせなかつた。お玉さんもいつも小綺麗な装なりをしていた。近所の噂によると、お玉さんは一度よそへ縁付いて子供まで生んだが、なぜだか不縁になつて歸つて来たのだと云うことであつた。そのせいか、私がお玉さんを知つてからもう三、四年も経つても、嫁にゆくような様子は見えなかつた。お玉さんもだんだんに盛りを通り過ぎて、からだの幅のいよいよ広くなつてくるのばかりが眼についた。

そのうちに誰が云い出したのか知らないが、お玉さんには旦那があるという噂が立つた。もちろん旦那らしい人の出入りする姿を見かけた者はなかつた。お玉さんの方から泊まりにゆくのだと、ほんとうらしく吹ふいちよう聴ちようする者もあつた。その旦那は異人さんだ

などと云う者もあつた。しかしそれには、どれも確かな証拠はなかつた。この怪けしからぬ噂がお玉さん一家の耳にも響いたらしく、その後のお玉さんの様子はがらりと變つて、買物にでも出るほかには、滅多にその姿を世間へ見せないようになった。近所の人たちには逢つても情すげなく顔をそむけて、今までのようなにこにこした笑い顔を見せなくなつた。三味線の音もちつとも聞かせなくなつた。

なんでもその明くる年のことと記憶している。日枝神社の本祭りひえで、この町内では踊り屋台を出した。しかし町内には踊る子が揃そろわないので、誰かの発議でそのころ牛込うしごめの赤城下あかぎしたにあつた赤城座という小芝居の俳優やくしやを雇うことになつた。俳優はみんな

十五、六の子供で、嵯峨<sup>さが</sup>や御室<sup>おむろ</sup>の花盛り……の光国と瀧夜叉<sup>たきやしや</sup>と御注進の三人が引抜いてどんつくの踊りになるのであつた。この年の夏は陽気がおくれて、六月なかばでも若い衆たちの中<sup>ちゆうがた</sup>形<sup>がた</sup>のお揃い着がうすら寒そうにみえた。宵宮<sup>よみや</sup>の十四日には夕方から霧のような細かい雨が花笠の上にしとしとと降つて来た。

踊り屋台は湿れながら町内を練り廻つた。囃子の音が浮いてきこえた。屋台の軒にも牡丹<sup>ぼたん</sup>のような紅い提灯がゆらめいて、「それおぼえてか君<sup>きみさま</sup>様の、袴も春のおぼろ染……」瀧夜叉がしどけない細紐<sup>しじぎ</sup>をしやんと結んで少しく胸をそらしたときに、往来を真<sup>ま</sup>つくる黒にうずめている見物の雨傘が一度にゆらいだ。

「うまいねえ。」



「上手だねえ。」

「そりやほんとの役者だもの。」

こんな褒め詞ほことばがそこにもここにも囁ささやかれた。

お玉さんの家の人たちも格子のまえに立って、同じくこの踊り屋台を見物していたが、お玉さんの阿母さんはさも情けないと云うように顔をしかめて、誰に云うともなしに舌打ちしながら小声で罵った。

「なんだろう、こんな小穢こぎたないものを……。芸は下手でも上手でも、お祭りには町内の娘さん達が踊るもんだ。こんな乞食芝居みたいなものどつを何処いから引つ張つて来やあがつて、お祭りも無いもんだ。ああ、忌いやだ、忌いやだ。長生きはしたくない。」

こう云つて阿母さんは内へついと引つ込んでしまった。お玉さんも徳さんもつづいてはいつてしまった。

「鬼婆アめ、お株を云つてやあがる。長生きがしたくなければ、早くくたばつてしまえ。」と、花笠をかぶつた一人が罵つた。

それが讖しんをなしたわけでもあるまいが、阿母さんはその年の秋からどつと寝付いた。その頃には庭の大きい柿の実もだんだん紅あからんで、近所のいたずら小僧が塀越しに竹竿を突つ込むこともあったが、阿母さんは例の「誰だい」を呶鳴る元氣もなかった。そうして、十一月の初めにはもう白木の棺にはいつてしまった。さすがに見ぬ顔もできないので、葬式には近所の人が五、六人見送つた。おなじ仲間の職人も十人ばかり来た。寺は四谷の小さい寺

であつたが、葬儀の案外立派であつたのには、みんなもおどろかされた。当日の会葬者一同にはしろこわめし白強飯とにしめ煮染の弁当が出た。三十五日には見事なよねまんじゅう米饅頭と麦饅頭とのむしもの蒸物に茶を添えて近所に配つた。

万事が案外によく行きとどいているので、近所の人たちも少しの毒になつたのと、もう一つは口やかましい阿母さんがいなくなつたと云うのが動機になつて、以前よりは打ち解けて付き合おうとする人も出来たが、なぜかそれも長くつづかなかつた。三月みつき半年と経つうちに、近所の人はだんだんに遠退とおのいてしまつて、お玉さんの兄きょうだい妹は再び元のさびしい孤立のすがたに立ち歸つた。

それでも或る世話好きの人がお玉さんに嫁入りさきを媒妁しよ

うと、わざわざ親切に相談にゆくと、お玉さんは切り口上でことわった。

「どうせ異人の妾めかけだなんて云われた者を、どこでも貰つて下さる方はありますまい。」

その人も取り付く島がないので引き退がった。これに懲こりて誰もその後は縁談などを云い込む人はなかった。

詳しく調べたならば、その当時まだほかにもいろいろの出来事があったかも知れないが、学校時代のわたしは斯こうした問題に就いてあまり多くの興味をもっていなかったので、別に穿せん索さくもしなかつた。むかしのお玉さん一家に関して、わたしの幼い記憶に残っているのは先ずこのくらいのこと過ぎなかつた。

こんなことをそれからそれへと手繰り出して考えながら、わたしはいつの間にか流し場へ出て、半分は浮わの空で顔や手足を洗っていた。石鹸の泡が眼にしみたのに驚いて、わたしは水で顔を洗った。それから風呂へは行って、再び柚湯に浸っていると、薬局生もあとからはいつて来た。そうして、又こんなことを話しかけた。

「あの徳さんという人は、まあ行き倒れのように死んだんですね。」  
「行き倒れ……。」と、わたしは又おどろいた。

「病気が重くなっても、相変らず自分の方から診察を受けにかよって来ていたんです。そこで今朝も家を出て、薬やかん罐をさげてよろ

よろと歩いてくると、床屋とこやの角の電信柱の前でもう歩けなくなつたんでしよう、電信柱に寄り掛かつてしばらく休んでいたかと思つううちに、急にぐたぐたとくず頽れるように倒れてしまつたんです。床屋でもおどろいて、すぐに店へかかえ込んで、それから私の家うちへ知らせて来たんですが、先生の行つた頃にはもういけなくなつていたんです。」

こんな話を聴かされて、私はいよいよ情けなくなつて来た。折角の柚湯にもいい心持に浸っていることは出来なくなつた。私はこちらからだをなま拭きにして早々に揚がつてしまつた。

家へ帰ってからも、徳さんとお玉さんのことが私の頭にまつわ  
って離れなかつた。殊にきよようの柚湯については一つの思い出が  
あつた。

わたしは肩揚げが取れてから下町したまちへ出ていて、山の手の実家  
へは七、八年帰らなかつた。それが或る都合で再び帰って住むよ  
うになつた時には、私ももう昔の子供ではなかつた。十二月のあ  
る晩に遅く湯に行つた。今では代が變つてゐるが、湯屋はやはり  
おなじ湯屋であつた。わたしは夜の湯は嫌いであるが、その日は  
某所の宴会へ行つたために帰宅が自然遅くなつて、よんどころな  
く夜の十一時頃に湯に行くことになつた。その晩も冬至の柚湯で

仕舞湯しまいゆに近い濁った湯風呂の隅には、さんざん煮くたれた柚の白い実が腐った綿のように穢きたならしく浮いていた。わたしは気味悪そうにからだを縮めてはいつていた。もやもやした白い湯気が瓦斯のひかりを陰らせて、夜ふけの風呂のなかは薄暗かった。

常ぬしから主あだの仇な気を、知っていないながら女房に、なつて見たい

の慾が出て、神や仏をたのまずに、義理もへちまの皮羽織……

少し錆さびのある声で清元きよもとを唄っている人があつた。音曲おんぎよくに

就いてはまんざらのつんぼうでもない私は、その節廻しの巧いのに驚かされた。じつと耳をかたむけながら其の声の主を湯気のかに透かしてみると、それはかの徳さんであつた。徳さんが唄うことは私も子供のときから知っていたが、こんなにいい喉のどをもつ



ていようとは思ひも付かなかつた。琵琶歌や浪花節が無遠慮に方々の湯屋を搔きまわしている世のなかに、清元の神田祭——しかもそれを偏人のように思つていた徳さんの喉から聞こうとは、まったく思いがけないことであつた。

私のほかには商家の小僧らしいのが二人はいつているきりであつた。徳さんはいい心持そうに続けて唄つていた。しみじみと聴いているうちに、私はなんだか寂しいような暗い気分になつて来た。お玉さんの兄きょうだい妹が今の元園町に孤立しているのも、無理がないようにも思われて来た。

「どうもおやかましゅうございました。」

徳さんはいい加減に唄つてしまうと、誰に云うとも無しに挨拶

して、流し場の方へすたすた出て行ってしまった。そうして、手早くからだを拭いて揚がって行つた。私もやがてあとから出た。路地へさしかかった時には、徳さんの家はもう雨戸を閉めて燈火あかりのかげも洩れていなかった。霜曇りとも云いそうな夜の空で、弱々しい薄月のひかりが庭の八つ手の葉を寒そうに照らしていた。

わたしは毎日、大抵明るいうちに湯にゆくので、その柚湯の晩ぎりでも再び徳さんの唄を聴く機会がなかった。それから半年以上も過ぎた或る夏の晩に又こんなことがあった。わたしが夜の九時頃に涼みから帰つてくると、徳さんの家のなかから劈つんざくような女の子の聲がひびいた。格子の外には通りがかりの人や近所の子供がのぞいていた。

「なんでえ、畜生。ざまあ見やがれ、うぬらのような百姓に判るもんか。」

それはお玉さんの声らしいので、私はびつくりした。なにか兄妹喧嘩でも始めたのかとも思った。店先に涼んでいる八百屋のおかみさんに聞くと、おかみさんは珍しくもないという顔をして笑っていた。

「ええ、気ちがいがまたあばれ出したんですよ。急に暑くなったんで逆上のぼせたんでしよう。」

「お玉さんですか。」

「もう五、六年まえから可怪おかしいんですよ。」

わたしは思わず戦慄した。わたしにはそれが初耳であった。お

玉さんはわたしが下町へ行っているあいだに、いつか気がいになつていたのであつた。私が八百屋のおかみさんと話しているうちに、お玉さんはなにかしきりに呶鳴っていた。息もつかずに「べらぼう、畜生」などと罵っていた。徳さんの声はちつとも聞こえなかつた。

家<sup>うち</sup>へ歸つて其の話をすると、家の者もみんな知つていた。お玉さんの気がいと云うことは町内に隠れもない事実であつたが、その原因は誰にも判らなかつた。しかし別に乱暴を働くと云うのでもなく、夏も冬も長火鉢の前に坐つて、死んだように鬱<sup>ふさ</sup>いでいるかと思つと、時々だしぬけに破<sup>わ</sup>れるような大きい声を出して、誰を相手にするとも無しに「なんでえ、畜生、べらぼう、百姓」

などと罵りはじめるのであった。兄の徳さんも近頃は馴れたとみえて、別に取り鎮めようとしめない。気のおかしい妹一人に留守番をさせて、平気で仕事に出てゆく。近所でも初めは不安に思ったが、これもしまいには馴れてしまつて別に気に止める者もなくなつた。

お玉さんは自分で髪を結う、ぎようずい行水をつかう、気分のない時には針仕事などもしている。そんな時にはなんにも変つたことはないのであるが、ひと月かふた月に一遍ぐらい急にむらむらとなつて例の「畜生、べらぼう」を呶鳴り始める。それが済むと、狐が落ちたようにけろりとしているのであった。気がいというほどのことではない、一種のヒステリーだろうと私は思っていた。

気持ちがいにしても、ヒステリーにしても、一人の妹がああ始末ではさぞ困ることだろうと、わたしは徳さんに同情した。ゆず湯で清元を聴かされて以来、わたしは徳さんの一家をおお掩おほっている暗い影を、悼いたましく眺めるようになって来た。

「畜生……べらぼう」

お玉さんはなにを罵っているのでしょうか、誰を呪のろっているのでしょうか。進んでゆく世間と懸けはなれて、自分たちの周囲に対して無意味の反抗をつづけながら、自然にほろびてゆく、いわゆる江戸っ子の運命をわたしは悲しく思いやった。お祭りの乞食芝居を痛罵つうばした阿母さんは、鬼うたばばアと謳うたわれながら死んだ。清元の上手な徳さんもお玉さんも、不幸な母と同じ路をあゆんでゆくら

しく思われた。取り分けてお玉さんは可哀そうでならなかった。母は鬼婆、娘は狂女、よくよく呪われている母子だと思つた。

お玉さんは一人も友達をもつていなかったが、私の知つているところでは徳さんには三人の友達があつた。一人は地主の長左衛門えもんさんで、もう七十に近い老人であつた。格別に親しく往來をする様子もなかつたが、徳さんもお玉さんもこの地主さまにはいつも丁寧ていねいに頭をさげていた。長左衛門さんの方でもこの兄妹の顔を見れば打ち解けて話などをしていた。

もう一人は上田屋うえだという貸本屋の主人であつた。上田屋は江戸時代からの貸本屋で、番町ばんちよう一円の屋敷町を得意にして、昔はなかなか繁昌したものだど伝えられている。わたしが知つてから

でも、土蔵付きの大きい角店で、見るからに基礎のしつかりと  
ているらしい家構えであつた。わたしの家でも此<sup>ここ</sup>処<sup>こ</sup>からいろいろ  
の小説などを借りたことがあつた。わたしが初めて読んだ里見八  
犬伝もこの本であつた。活版本がだんだんに行なわれるに付け  
て、むかしの貸本屋もだんだんに亡びてしまふので、上田屋もと  
うとう見切りをつけて、日清戦争前後に店をやめてしまつた。し  
かしほかにも家<sup>かきく</sup>作<sup>さく</sup>などをもっているの、店は他人にゆずつて、  
自分たちは近所でもた家暮らしをすることになつた。ここの主  
人ももう六十を越えていた。徳さんの兄妹は時々ここへ遊びに行  
くらしかつた。もう一人はさつき湯で逢つた建具屋のおじいさん  
であつた。この建具屋の店にも徳さんが腰をかけている姿を折り



おりに見た。

こう列べて見渡したところで、徳さんの友達には一人も若い人はなかった。地主の長左衛門さんも、上田屋の主人も、徳さんとほとんど親子ほども歳が違っていた。建具屋の親方も十五、六の歳上であった。したがって、これらの老いたる友達は、頼りない徳さんをだんだんに振り捨てて、別の世界へ行ってしまった。上田屋の主人が一番さきに死んだ。長左衛門さんも死んだ。今生き残っているのは建具屋のおじいさん一人であった。

わたしの家では父が死んだのちに、おなじ路地のなかで南側の二階家にひき移って、わたしの家の水みずぐち口がお玉さんの庭の板塀と丁度むかい合いになった。わたしの家の者が徳さんと顔を見合せる機会が多くなった。それでも両方ながら別に挨拶もしなかつた。その時はわたしが徳さんの清元を聴いてからもう四、五年も過ぎていた。

その年の秋に強い風雨あらしがあつて、わたしの家の壁に雨漏りの汚しみ点みが出た。たいした仕事でもないから近所の人に頼もうと云うことになつて、早速徳さん呼びにやると、徳さんは快こころよく来てくれた。多年近所に住んでいながら、わたしの家で徳さんに仕事を頼むのはこれが初めてであつた。わたしはこの時はじめて徳さんと

正面にむき合つて、親しく彼と会話を交換したのであつた。

徳さんはもう四十を三つ四つ越えてゐるらしかつた。髪の毛の薄い、色の蒼黒い、眼の峻しい、頤あごの尖とがつた、見るから神経質らしい男で、手足は職人に不似合あひなくらいに纖細かほそくみえた。紺の匂いの新しい印半纏つくろをきて、彼は行儀よくかしまつていた。私から繕つくろいの注文をいちいち聞いて、徳さんは丁寧ていねいに、はきはきと答えた。

「あんな人がなぜ近所と折合いが悪いんだらう。」

徳さんの歸つたあとで、家内の者はみんな不思議がつていた。

あくる日は朝早くから仕事に来て、徳さんは一日黙つて働いていた。その働き振りのいかにも親切なのが嬉しかつた。今どきの職

人にはめずらしいと家内の評判はますますよかった。多寡が壁の繕いであつたから、仕事は三日ばかりで済んでしまった。

徳さんは勘定を受取りにくる時に、庭の青柿の枝をたくさん切つて来てくれて、「渋くつてとても食べられません、花活けへでもお挿してください。」と云つた。

なるほど粒は大きい渋くつて食べなかつた。わたしは床の間の花瓶に挿した。

「妹はこの頃どんな塩梅あんばいですね。」と、そのとき私はふいと訊きいてみた。

「お蔭さまでこの頃はだいぶ落ちついているようですが、あいつのこつてすから何時あばれ出すか知れやあしません。しかしあ

つも我<sup>わがまま</sup>儘者ですから、なまじつかの所へ嫁なんぞに行つて苦勞するよりも、ああやつて家で精いっぱい威張り散らして終る方が、仕合せかも知れませんよ。」と、徳さんは寂しく笑つた。「おふくろも丁度あんな人間ですから、みんな血を引いているんでしようよ。」

それからだんだんに話してみると、徳さんは妹のことをさのみ苦勞にしてもいないらしかつた。氣のおかしくなるのは当り前だぐらゐに思つてゐるらしかつた。時どきに大きな声などを出して呶鳴つたり騒いだりしても、近所に対して氣の毒だとも思つていないらしかつた。しかし徳さんが妹を可愛がつていることは私にもよく判つた。かれは妹が可哀そうだから、自分もこの歳まで独

身でいると云った。その代りに少しは道楽もしましたと笑っていた。

これが縁になって、徳さんは私たちとも口を利くようになった。途中で会っても彼は丁寧な時候の挨拶などをした。わたしの家へ仕事に来てから半月ばかりも後のことであつたらう、私がある日の夕方銀座から帰つてくると、町内の酒屋の角で徳さんに逢つた。

徳さんも仕事の帰りであるらしく、印半纏を着て手には薄すすきのひと束を持っていた。十月の日はめつきり詰まって、酒屋の軒ランプにはもう灯ひがはいっていた。徳さんの持っている薄の穂が夕闇のなかに灰ほのしろ白くみえた。

「今夜は十三夜ですか。」と、私はふと思ひ出して云った。

「へえ、片月見になるのも忌いやですから。」

徳さんは笑いながら薄をみせた。二人は云い合わせたように暗い空をみあげた。後の月のちつきは雨に隠れそうな雲の色であった。私はさびしい心持で徳さんと並んであるいた。裕あわせでももう薄ら寒いよ  
うな心細い秋風が、すすきの白い穂をそよそよと吹いていた。

路地の入口へ来ると、あかりもまだつけない家の奥で、お玉さんの尖った声がひびいた。

「なんでえ、なに云つてやあがるんでえ。畜生。馬鹿野郎。」

お玉さんがまた狂い出したかと思うと、私はいよいよ寂しい心持になった。もう珍しくもないので、薄暗い表には誰も覗いて  
いる者もなかった。徳さんは黙つて私に会えしやく釈して格子をあけては

いった。格子のあく音がきこえると同時に、南向きの窓が内からがらりと明いた。前にも云った通り、窓は南に向いているので、路地を通っている私は丁度その窓から出た女の顔と斜めに向き合った。女の齒の白いのがまず眼について物凄ものすごかった。

わたしは毎朝家を出て、夕方でなければ帰って来ない。お玉さんは滅多めったに外へ出たことはない。お玉さんがこのごろ幽霊のように寔やっれているということは、家の者の話には聞いていたが、わたしは直接にその変った姿をみる機会がなくて過ぎた。それを今夜初めて見たのである。お玉さんの平べったい顔は削られたように痩せて尖つて、櫛くしまき巻まきにしているらしい髪の毛は一本も乱さずに搔き上げられていた。その顔の色は気味の悪いほどに白かった。



「旦那、旦那。」と、お玉さんはひどく若々しい声で呼んだ。私も呼ばれて立ちどまった。

「あなたは洋服を着ているんですか。」

その時、私は和服を着ていたので、わたしは黙って蝙蝠のように両袖をひろげて見せた。お玉さんはかの白い歯をむき出してにやにやと笑った。

「洋服を着て通りやあがると、あたまから水をぶっ掛けるぞ。気をつけやあがれ。」

窓はぴっしやり閉められた。お玉さんの顔は消えてしまった。私は物に魔おそわれたような心持で早々に家へ帰った。その当時、わたしは毎日出勤するのに、和服を着て出ることもあれば、洋服を

着て出ることもあった。お玉さんから恐ろしい宣告を受けて以来、わたしは洋服を着るのを一時見合せたが、そうばかりもゆかない事情があるので、よんどころなく洋服を着て出る場合には、なるべく足音をぬすんでお玉さんの窓の下をそつと通り抜けるようにしていた。

それからひと月ばかり経つて、寒い雨の降る日であった。わたしは雨傘をかたむけてお玉さんの窓ぎわを通ると、さながら待ち設けていたかのように、窓が不意に明いたかと思うと、柄杓ひしゃくの水がわたしの傘の上にぎぶりと降つて来た。幸いに傘をかたむけていたので、さしたることも無かったが、その時わたしは和服を着ていたにも拘かわらず、こういう不意討ちの難に出会ったのであつ

た。その以来、自分はもちろん、家内の者にも注意して、お玉さんの窓の下はいつも忍び足で通ることになっていた。それでも時どきに内から鋭い声で叱り付けられた。

「馬鹿野郎。百姓。水をぶっかけるぞ。しつかりしろ。」

口で云うばかりでない、実際に水の降って来ることがたびたびあつた。酒屋の小さい御用聞きなどは寒中に頭から水を浴びせられて泣いて逃げた。近所の子供などは口惜くやしがって、窓へ石を投げ込むのもあつた。お玉さんも負けずに何か罵りながら、内から頻りに水を振りまいた。石と水との鬨こゝろいが時どきにこの狭い路地のなかで演ぜられた。

そのうちにお玉さんの家は路地のそばを三尺通り切り縮められ

ることになった。それは路地の奥の土蔵付きの家へ新しく越して来た某実業家の妾が、人力車の自由に入りのでできるだけに路地の幅をひろげて貰いたいと地主に交渉の結果、路地の入口にあるお玉さんの家をどうしても三尺ほどそぎ取らなければならぬことになったのである。こういう手前勝手の要求を提出した人は、地主に対しても無論に高い地代を払うことになったに相違なかつた。お玉さんの家の修繕費用も先方で全部負担すると云つた。

「長左衛門さんがおいでなら、わたくしも申すこともありますが、今はもう仕様がありません。」と、徳さんは若い地主からその相談を受けた時に、存外素直に承知した。しかし修繕の費用などは一銭も要らないと、きつぱり撥<sup>は</sup>ね付けた。

それからひと月の後に路地は広くなった。お玉さんの家はそれだけ痩せてしまった。その年の夏も暑かったが、お玉さんの家の窓は夜も昼も雨戸を閉めたままであった。お玉さんの乱暴があまり激しくなったので、徳さんは妹が窓から危険な物を投げ出さない用心に、路地にむかった窓の雨戸を釘付けにしてしまったのであった。お玉さんは内から窓をたたいて何か呶鳴っていた。

暑さが募るにつれて、お玉さんの病気もいよいよ募つて来たらしかつた。この頃では家のなかで鉄瓶や土瓶を投げ出すような音もきこえた。ときどきには跣足はだしで表へ飛び出すこともあった。建具屋のおじいさんももう見ていられなくなつて、無理に徳さんをすすめて妹を巢鴨すがもの病院へ入れさせることにした。今の徳さんに

は入院料を支弁する力もない。さりとして仮りにも一戸こを持つている者の家族には施療せりようを許されない規定になつていたので、徳さんはとうとうその家を売ることになつた。そうして、建具屋のおじいさんの尽力で、お玉さんはいよいよ巢鴨へ送られた。それは九月はじめの陰つた日で、お玉さんはこの家を出ることを非常に拒こぼんだ。ようように宥なだめて人力車に乗せると、お玉さんは幌ほろをかけることを嫌つた。

「畜生。べらぼう。百姓。ざまあ見やがれ。」

お玉さんは町じゆうの人を呪うように大きな声で叫びつづけながら、傲然ごうぜんとして人力車にゆられて行つた。わたしは路地の口に立つて見送つた。建具屋のおじいさんと徳さんとは人力車のあ

とに付いて行つた。

「妹もながなが御厄介になりました。」

巢鴨から帰つて来て、徳さんは近所へいちいち挨拶にまわつた。そうして、その晩のうちに世帯をたたんで、元の貸本屋の上田屋の二階に同居した。そのあとへは更に手入れをして質屋の隠居さんが越して来た。近所ではあるが町内が違うので、わたしはその後徳さんの姿を見かけることはほとんど無かつた。

それからまた二年過ぎた。そうして、柚湯の日に徳さんの死を突然きいたのである。徳さんの末路は悲惨であつた。しかし徳さんもお玉さんもあくまで周囲の人間を土百姓と罵つて、自分たち

だけがほんとうの江戸っ児であると誇りつつ、長い一生を強情に押し通して行ったかと思うと、単に悲惨というよりも、むしろ悲壮の感がないでもない。

そのあくる日の午後にわたしは再び建具屋のおじいさんに湯屋で逢った。おじいさんは徳さんの葬式から今帰ったところだと云った。

「徳の野郎、あいつは不思議な奴ですよ。なんだか貧乏しているようでしたけれど、いよいよ死んでから其の葛籠つづらをあらためると、小新しい双子ふたごの綿入れが三枚と羽織が三枚、銘仙の着物と羽織の揃ったのが一組、帯が三本、印半纏が四枚、ほかに浴衣が五枚と、それから現金が七十円ほどありましたよ。ところが、今までめっ



たに寄り付いたことのねえ奴らが、やれ姪めいだの従弟いとこだのと云つて方々からあつまつて来て、片っ端からみんな持つて行つてしまいましたよ。世の中は薄情に出来てますね。なるほど徳の野郎が今の奴らと付き合わなかつた筈ですよ。」

わたしは黙つて聴いていた。そうして、お玉さんは此の頃どうしているかと訊いた。

「お玉は病院へ行つてから、からだはますます丈夫になつて、まるで大道うす白うすのように肥つてしまいましたよ。」

「病氣の方はどうなんです。」

「いけませんね。もうどうしても癒らないでしょうよ。まあ、あすこで一生を終るんですね。」と、おじいさんは溜息をついた。

「だが、当人としたら其の方が仕合せかも知れませんか。」

「そうかも知れませんか。」

二人はそれぎり黙って風呂へはいった。

(掲載誌不詳、『十番随筆』所収)

II  
旅  
つ  
れ  
づ  
れ



## 昔の従軍記者

\*

××さん。

仰せの通り、今回の事変（支那事変）について、北支方面に、  
上<sup>シャンハイ</sup>海方面に、従軍記者諸君や写真班諸君の活動は実にめざま  
しいもので、毎日の新聞を見るたびに、他人<sup>ひとごと</sup>事とは思われないよ

うに胸を打たれます。取分けて私などは自分の経験があるだけに、人一倍にその労苦が思いやられます。

その折柄、あたかもあなたから「昔の従軍記者」に就ついておたずねがありましたので、自分が記憶しているだけの事を左にお答え申します。御承知の通り、日露戦争の当時、わたしは東京日日新聞社に籍を置いていて、従軍新聞記者として満まん洲しゅうの戦地に派遣されましたので、なんと云つても其の当時のことが最も多く記憶に残っています。お話の順序として、まず日清戦争当時のことから申上げましょう。

日清戦争当時は初めての対外戦争であり、従軍記者というものの待遇や取締りについて、一定の規律はありませんでした。朝

鮮に東学党の乱が起つて、清国がまず出兵する、日本でも出兵して、二十七年六月十二日には第五師団の混成旅団が仁川じんせんに上陸する。こうなると、鷄林けいりん（朝鮮の異称）の風雲おだやかならずと云うので、東京大阪の新聞社からも記者を派遣することになりましたが、まだ其の時は従軍記者というわけではなく、各社から思い思いに通信員を送り出したというに過ぎないので、直接には軍隊とは何の関係もありませんでした。

そのうちに事態いよいよ危急に迫つて、七月二十九日には成せい歡かん牙山がさんのシナ兵を撃ち攘はらうことになる。この前後から朝鮮にある各新聞記者は我が軍隊に附属して、初めて従軍記者ということになりました。戦局がますます拡大するに従つて、内地の本社か

らは第二第三の従軍記者を送つて来る。これらはみな陸軍省の許可を受けて、最初から従軍新聞記者と名乗つて渡航したのでした。これらの従軍記者は宇品うしなから御用船に乗り込んで、朝鮮の釜山ふさんまたは仁川に送られたのですが、前にもいう通り、何分にも初めての事で、従軍記者に対する規律というものが無いので、その扮ふ装そうも思い思いでした。どの人もみな洋服を着ていましたが、腰こしに白木綿もめんの上帯を締めて、長い日本刀を携えているのがある。槍やりを持つているのがある。仕込杖しこみづえをたずさえているのがある。今から思えば嘘うそのようですが、その当時の従軍記者としては、戦地へ渡つた暁あかつきに軍隊がどの程度まで保護してくれるか判らない。万一負け軍いくさとでもなった場合には、自衛行動をも執らなければなら



ない。非戦闘員として油断は出来ない。まかり間違えばシナ兵と一騎討ちをするくらいに覚悟が無ければならないので、いずれも嚴重に武装して出かけたわけです。実際、その当時はシナ兵ばかりでなく、朝鮮人だって油断は出来ないので、この位の威容を示す必要もあつたのです。軍隊の方でも別にそれを咎めませんとがでした。

\*

前にもいう通り、従軍新聞記者に対する待遇や規定がハッキリしていないので、その配属部隊の待遇がまちまちで、非常に優遇

するのもあれば、邪魔物扱いにするのもある。記者の方にも、おれは軍人でないから軍隊の拘束を受けない、と云つたような心持があつて、めいめいが自由行動を執るといふ風がある。軍隊の方でも余りやかましく云うわけにも行かない。それがために、軍隊側にも困ることがあり、記者側にも困ることがあり、陣中におけるいろいろの挿話が生み出されたようでした。

明治三十三年の北清事件当時にも、各新聞社から従軍記者を派出しましたが、これは戦争というほどの事でもないので、やはり日清戦争当時と同様、特に規律とか規定とか云うようなものも設けられませんでした。

次は三十七、八年の日露戦争で、この時から従軍新聞記者に対

する待遇その他が一定されました。従軍記者は大尉相当の待遇を受ける。その代りに軍人と同様、軍隊の規律にいつさい服従すべしと云うことになりました。もう一つ、従軍記者は一人一人に限るといふのです。こうなると、画家も写真班も同行することを許されないわけです。

これには新聞社も困りました。画家や写真班はともあれ、記者一人ではどうにもなりません。軍の方では第一軍、第二軍、第三軍、第四軍を編成して、それが別々の方面へ向って出動するのに、一人の記者が掛持かけもちをすることは出来ません。そこで、まず自分の社から一人の従軍願いを出して置いて、さらに他の新聞社の名義を借りるといふ方法を案出しました。

京阪は勿論<sup>もちろん</sup>、地方でも有力の新聞社はみな従軍願いを出して  
いますが、地方の小さい新聞社では従軍記者を出さないのがある。  
その新聞社の名儀で出願すれば、一社一人は許されるので、東京  
の新聞社は争って地方の新聞社に交渉することになりました。東  
京日日新聞社からは黒田<sup>くろだ</sup>甲子郎君がすでに従軍願いを出して、第  
一軍配属と決定しているので、わたしは東京通信社の名をもつて  
許可を受けました。

東京通信社などはいい方で、そんな新聞があるか無いか判らな  
いような、遠い地方の新聞社員と称して、従軍願いを出す者が続  
々あらわれる。陸軍省でその新聞社の所在地を訊<sup>き</sup>かれても、御本  
人はハッキリと答えることが出来ないと言うような滑稽<sup>こっけい</sup>もあり

ました。陸軍側でもその魂胆を承知していたでしょうが、一社一人の規定に触れない限りは、いずれも許可してくれました。それで東京の各新聞社も少なきは二、三人、多きは五、六人の従軍記者を送り出すことが出来たのでした。

勿論、それは内地を出発するまでのことで、戦地へ行き着くと皆それぞれに正体をあらわして、自分は朝日だとか日日だとか名乗って通る。配属部隊の方でも怪しみませんでした。しかし袖そでじ印るしだけは届け出での社名を用いることになっていて、わたしもカーキ服の左の腕に東京通信社と紅あかく縫きった帛きれを巻いていました。日清戦争当時と違って、槍や刀などを携帯することはいい許されません。武器はピストルだけを許されていたので、私た

ちは腰にピストルを着けていました。

\*

従軍記者の携帯品は、ピストルのほかに雨具、ざつ雑のう囊または背は囊、い飯のう盒、はん飯ごう盒、水筒、望遠鏡で、通信用具は雑囊か背囊に入れるだけですから、たくさんに用意して行くことが出来ないので困りました。万年筆はまだ汎ひろく行なわれない時代で、万年筆を持つている者は一人もありませんでした。鉛筆は折れ易くて不便であるので、どの人も小さい毛筆を用いていました。従つて、矢立やたてを持つ者もあり、小さいすずり硯と墨を使っている者もあり、今から思えば

ずいぶん不便でした。

しかしまた、一利一害の道理で、われわれは机にむかつて通信を書く場合はほとんど無い。シナ家屋のアンペラの上に俯伏うつぶして書くか、或いは地面に腹這ばいながら書くのですから、ペンや鉛筆では却かえつて不便で、むしろ柔かい毛筆を用いた方が便利だと云う場合もありました。紙は原稿紙などを用いず、巻紙に細かく書きつづけるのが普通でした。

宿舎は隊の方から指定してくれた所に宿泊することになっていて、妄みだりに宿所を更かえることは出来ません。大抵は村落の農家でした。しかし戦闘継続中は隊の方でもそんな世話を焼いてもらえないので、私たちは勝手に宿所を探さなければなりません。空家

へはいったり、古廟こびように泊まったり、時には野宿することもありました。草原や畑に野宿していると、夜半から寒い雨がビシヨビシヨ降り出して来て、あわてて雨具をかぶって寝る。こうなると、少々心細くなります。鬼が出るといふ古廟に泊まると、その夜なかに寝相ねそうの悪い一人が関羽かんうの木像を蹴倒けたおして、みんなを驚かせましたが、ほかには怪しい事もありませんでした。鬼が出るなどと言い触らして、土地のごろつきどもの賭場とばになつていたらしいのです。

食事は監理部へ貰もらいに行つて、米は一人について一日分が六合、ほかに罐詰などの副食物をくれるのですが、時には生きた鶏とりや生の野菜をくれることがある。米は焚たかなければならず、鶏や野菜



は調理しなければならず、三度の食事の世話もなかなか面倒でした。私たちは七人が一組で、二人の苦力クーリーを雇っていましたが、シナの苦力は日本の料理法を知らないのです、七人の中から一人の炊事当番をこしらえて、毎日交代で食事の監督をしていました。煮物をするにはシナの塩を用い、或いは醤油エキスを水に溶かして用いました。砂糖は監理部で呉れることもあり、私たちが町のある所へ行って買うこともありました。

苦力の日給は五十銭でしたが、みな喜んで忠実に働いてくれました。一人は高秀庭こうしゅうてい、一人は丁禹良ていいうりようというのでしたが、そんなむずかしい名を一つ呼ぶのは面倒なので、わたしの考案で一人を十郎じゅうろう、他を五郎ごろうという事にしました。この二人が「新聞

記者雇苦力、十郎、五郎」と大きく書いた白布を胸に縫い付けているので、誰の眼にも着き易く、往來の兵士らが面白半分に「十郎、五郎」と呼ぶので、二人もいちいちその返事をするのに困っているようでした。苦力の曾我兄弟はまったく珍しかったかも知れません。

東京へ帰つてから聞きますと、伊井蓉峰の新派一座が中洲の真砂座で日露戦争の狂言を上演、曾我兄弟が苦力に姿をやつして満洲の戦地へ乗り込み、父の仇の露国将校を討ち取るという筋であったそうで、苦力の五郎十郎が暗合しているには驚きました。但し私たちの五郎十郎は真正銘の苦力で、かたき討などという芝居はありませんでした。

\*

「なにか旨い物が食いたいなあ。」

そんな贅沢ぜいたくを云っているのは、駐屯無事の時で、ひとたび戦鬪いくさが開始すると、飯どころの騒さわぎでなく、時には唐蜀黍とうもろこしを焼いて食ったり、時には生玉子二個で一日の命つなを繋つないだこともありました。沙河会戦しゃか中には、農家へはいつて一椀の水もらを貰もらったきりで、朝から晩まで飲まず食わずの日もありました。不眠不休の上に飲まず食わずで、よくも達者に駈かけ廻まわられたものだと思いますが、非常の場合にはおのずから非常の勇氣が出るものです。そんな場

合でも露西亞<sup>ロシアへい</sup>兵携帯の黒パンはどうしても喉<sup>のど</sup>に通りませんでした。シナ人が常食の高<sup>コーリヤン</sup>梁も再三試食したことがあります。これは食えない事ありませんでした。戦鬪が始まると、シナ人はみな避難してしまふので、その高粱飯も戦鬪中には求めることが出来ず、空腹をかかえて駈けまわることになるのです。

燈火は蠟燭<sup>ろうそく</sup>か火縄で、物をかく時は蠟燭を用い、暗夜に外出する時には火縄を用いるのですが、この火縄を振るのが案外にむずかしく、緩<sup>ゆる</sup>く振れば消えてしまい、強く振れば振り消すと云うわけで、五段目の勘<sup>かんべい</sup>平のような器用なお芝居は出来ません。今<sup>こと</sup>に戦地ですから己<sup>や</sup>むを得ないのです。火縄を振るのは路<sup>みち</sup>を照らす

為ばかりでなく、野犬を防ぐためです。満洲の野原には獐<sup>どうもう</sup>猛<sup>もう</sup>な  
 野犬の群れが出没するので困りました。殊にその野犬は戦場の血  
 を嘗<sup>な</sup>めていたので、ますます獐<sup>どうもう</sup>猛<sup>もう</sup>、ほとんど狼にひとしいので、  
 我々を恐れさせました。そのほかには、蝮<sup>さそり</sup>、南<sup>ナン</sup>京<sup>キン</sup>虫、虱<sup>しらみ</sup>など、  
 いずれも夜となく、昼となく、我々を悩ませました。蝮<sup>さ</sup>に螫<sup>さ</sup>され  
 ると命を失うと云うので、虱や南京虫に無神経の苦力らも、蝮と  
 聞くと顔の色を変えました。

「新聞記者に危険はありませんか。」

これはしばしばたずねられますが、決して危険がないとは云え  
 ません。従軍記者も安全の場所にばかり引き籠<sup>かご</sup>つていては、新し  
 い報告も得られず、生きた材料も得られませんかから、危険を冒<sup>おか</sup>し

て奔走しなければなりません。文字通りに、砲烟弾雨ほうえんだんうの中をくぐることもしばしばあります。日清戦争には二六新報の遠藤君えんどうが威海衛いかいえいで戦死しました。日露戦争には松本日報の川島君かわしまが沙河で戦死しました。川島君は砲弾の破片に撃たれたのです。私もその時、小銃弾に帽子を撃ち落とされましたが、幸いに無事でした。その弾丸がもう一寸いっすんと下がっていたら、唯今ただいまこんなお話をしているだけです。私のほかにも、こういう危険に遭遇して、危く免れた人々は幾らもあります。殊に今こんにち日は空爆ということもありますから、いよいよ油断はなりません。

今度の事変にも、北支に、上海に、もう幾人かの死傷者を出したようです。この事変がどこまで拡大するか知れませんが、従軍

記者諸君のあいだに此の以上の犠牲者を出さないようにと、心から祈って居ります。

(昭和22・8稿・『思ひ出草』所収)

## 苦力とシナ兵

## 一

昨今は到るところで満洲の話が出るので、わたしも在満当時のむかしが思い出されて、いわゆる今こんじゃく昔やくの感が無いでもない。

それは文字通りの今昔で、今から約三十年の昔、私は東京日日新聞の従軍記者として、日露戦争当時の満洲を奔走していたのであ



る。

それについての思い出話を新聞紙上にも書いたが、それからそれへと繰り出して考えると、まだ云い残したことが随分ある。そのなかで苦力クーリーのことを少しばかり書いてみる。

シナの苦力は世界的に有名なもので、それがどんなものであるかは誰でも知っているのであるから、今あらためてその生活などに就いて語ろうとするのではない。ただ、ひと口に苦力といえ、最も下等な人間で、横着で、狡猾こうかつで、吝りん嗇しよくで、不潔で、ほとんど始末の付かない者のように認められているらしいが、必ずしもそんな人間ばかりで無いと云うことを、私の実験によって語りたいと思うのである。

私が戦地にある間に、前後三人の苦力を雇った。最初は王福、次は高秀庭、次は丁禹良というのであった。

最初の王福は一番若かった。彼は二十歳で、金州の生まれであると言った。戦時であるから、かれらも用心しているのかも知れないが、極めて柔順で、よく働いた。一日の賃銀は五十銭であつたが、彼は朝から晩まで実によく働いて、われわれ一行七人の炊事から洗濯その他の雑用を、何から何まで彼一人で取り賄つてくれた。

彼は煙草をのむので、私があるとき菊世界という巻蓆一袋をやると、彼は拝して受取つたが、それを喫まなかつた。自分の兄は日本軍の管理部に雇われているから、あしたの朝これを持つ

て行ってやりたいと云うのである。われわれの宿所から管理部までは十町ほども距はなれている。彼は翌朝、忙がしい用事すきの隙をみて、その苺を管理部の兄のところへ届けに行つた。

それから二、三日の後、私が近所を散歩していると、彼は他の苦力と二人づれで、路みちばたの露店の饅頭まんとうを食っていたが、私の姿をみると直すぐに駈けて来た。連れの苦力は彼の兄であつた。兄は私にむかつて、丁寧に先日の苺の礼を述べた。いかに相手が苦力でも、一袋の苺のために兄弟から代るがわるに礼を云われて、私はいささか極まりが悪かつた。

その後、注意して見ると、彼は時どきに兄をたずねて、二人が連れ立って何か食いに行くらしい。どちらが金を払うのか知らな

いが、兄弟仲のいいことは明らかに認められた。私は兄の顔をみると、莩をやることにしていたが、二、三回の後に兄はことわつた。

大人たいじんの莩の乏しいことは私たちも知っていると、彼は云うのである。実際、戦地では莩に不自由している。彼はさらに片言かたことの日本語で、こんな意味のことを云つた。

「管理部の人、みな莩に困っています。この莩、わたくしに呉れるよりも、管理部の人にやってください。」

私は無言でその顔をながめた。勿論、多少のお世辞もまじっているであろうが、苦力の口から斯こういう言葉を聞こうとは思わなかつたのである。これまでとかくに彼らを侮あなどつていたことを、私

は心ひそかに恥じた。

金州の母が病氣だという知らせを聞いて、王の兄弟は暇ひまを取って郷里に帰った。帰る時に、兄も暇いとまご乞いに来たが、兄は特に私にむかって、大人はからだが弱そうであるから、秋になったらば用心しろと注意して別れた。

王福の次に雇われて来たのが、高秀庭である。高は苦力の本場の山東省さんとうの生まれであるが、年は二十二歳、これまで上海シャンハイに働いていたそうで、ブロークンながらも少しく英語を話すので調法であつた。これも極めて柔順で、すこぶる伶俐れいりな人間であつた。

高を雇い入れてから半月ほどの後に、遼陽りょうよう攻撃戦が始まつ

たので、私たちは自分の身に着けられるだけの荷物を身に着けた。残る荷物はふた包みにして、高が天てん秤びん棒で肩にかついだ。そうして、軍の移動と共に前進していたのであるが、この戦争が始まると、雨は毎日降りつづいた。満洲の秋は寒い。八月の末でも、夜は焚火がほしい位である。その寒い雨に夜も昼も濡ぬれていた為に、一行のうちに風邪をひく者が多かった。私もその一人で、鞍あ山さん店てん附近にさしかかった時には九度二分の熱になってしまった。他の人々も私の病気を心配して、このままで雨に晒さらされているのは良くあるまいというので、苦力の高を添えて私を途中にとどめ、他の人々は前進することになった。鞍山店あさんてんは相当に繁昌どこしている土地らしいが、ここらの村落の農家はみな何処どこへか避難して、

どの家にも人の影はみえない。高は雨の中を奔走して、比較的綺麗な一軒のあき家を見つけて来てくれた。そこへ私を連れ込んで、彼は直ぐに高<sup>コーリヤン</sup>梁を焚いて湯を沸かした。珈<sup>コーヒー</sup>琲に砂糖を入れて飲ませてくれた。前方では大砲や小銃の音が絶え間なしにきこえる。雨はいよいよ降りしきる。こうして半日を寝て暮らすうちに、その日もいつか夜になった。高は蠟燭をとぼして、夕飯の支度にかかった。

日が暮れると共に、わたしは一種の不安を感じ始めた。以前の王福の正直は私もよく知っていたが、今度の高秀庭の性質はまだ本当にわからない。私の荷物は勿論、一行諸君の荷物もひと纏めにして、彼がみな預かっているのである。私が病人であるのを幸

いに、夜なかに持ち逃げでもされては大変である。九度以上の熱があるうが、苦しかろうが、今夜は迂濶うかつに眠られないと、私は思った。

そうは思いながらも、高の煮てくれた粥かゆを食って、用意の薬を飲むと、なんだかうとうとと眠くなって来た。ふと気が付くと、枕もとの蠟燭が消えている。マッチを擦って時計をみると、今夜はもう九時半を過ぎている、高の姿はみえない。はっと思つて、私は直ぐに飛び起きた。

しかし荷物の包みはそのままになっている。調べてみると、品物には異状はないらしい。それでやや安心したが、それにしても彼はどこへ行ったのであろう。二、三度呼んでみたが返事もない。



台所の土間にも姿はみえない。この雨の夜にどこへも行くはずはない、あるいは何かの事情で私を置き去りにして行ったのかとも思った。なにしろ、これだけの荷物がある以上、油断してはいられないと思ったので、私は毛布を着て起き直った。砲声はやや衰えたが、雨の音は止まない。夜の寒さは身にしみて来た。

それから二時間ほどの後である。高は濡れて帰って来た。彼は一枚の毛布を油紙のようなものに包んで抱えていた。

これで事情は判明した。彼は昼間から私の容体を案じていたのであるが、日が暮れていよいよ寒くなつて来たので、彼は私のために更に一枚の毛布を工面くめんに行つたのである。われわれの食物その他はすべて管理部で支給されるのであるから、彼は管理部をた

ずねて行つた。戦闘開始中は管理部も後方に引き下がっているのであるから、彼は暗い寒い雨の夜に一里余の路を引返して、ように管理部のありかを探し当てたが、管理部でも毛布までは支給されないという。第一、余分の毛布もないのである。それでも彼はいろいろに事情を訴えて、一枚の古毛布を借りて来て、病める岡大人——岡本の一字を略して云う——に着せてくれる事になったのである。

私は感謝を通り越して、なんだか悲しいような心持になった。前にもいう通り、私たちはとかくに苦力らを侮蔑する心持がある。その誤りをさきに王福の兄弟に教えられ、今はまた、高秀庭に教えられた。いたずらに皮相を覩て其の人を侮蔑する——自分はそ

んな卑しい、浅はかな心の所有者であるかと思うと、私は涙ぐましくなった。その涙は感激の涙でなく、一種の自責の涙であった。

私は高のなさけに因<sup>よ</sup>つて、その夜は二枚の毛布をかさねて眠った。あくる朝は一度ほども熱が下がったのと、前方の戦鬪がいよいよ激烈になって来たのとで、私は病いを努<sup>つと</sup>めて前進することにした。高は彼の<sup>か</sup>古毛布を斜めに背負つて、天秤の荷物をかついで、私のあとに続いて来た。雨はまだやまなかつた。

最後の丁禹良はやや魯鈍<sup>ろどん</sup>に近い人間で、特に取立てて語るほどの事もなかつたが、いわゆる馬鹿正直のたぐいで、これも忠実勤勉であった。それでも「わたしも今に高のようになりたい」などと云っていた。高秀庭はその勤勉が管理部の眼にもとまり、私た

ちの方でも推薦して苦力頭の一人に採用されたからである。苦力頭は軍隊使用の苦力らの取締役のようなもので、胸には徽章きしやうをつけ、手には紫の総ふさの付いている鞭むちを持っている。丁のような人の眼にも、それが羨うらやましく見えたのであろう。

彼らに就いては、まだ語ることもあるが、余り長くなるからこの位にとどめて置く。いずれにしても、私たちの周囲にいた苦力らは前に云ったような次第で、ことごとく忠実善良の人間ばかりであった。私たちの運がよかったのかも知れないが、あながちにそうばかりとも思われない。

多数のなかには、横着な者も狡猾な者もいるには相違ないが、苦力といえば一概に劣等の人間と決めてしまうのは、正しい観察

ではないと思われる。それと反対に、私は苦力という言葉を聞く  
と、王福の兄弟や、高秀庭や、丁禹良らの姿が眼に浮かんで、苦  
力はみな善良の人間のように思われてならない。これも勿論、正  
しい観察ではあるまいが――。

## 二

今度は少しくシナの兵士について語りたい。

シナの兵隊も苦力と共に甚だ評判の悪いものである。シナ兵は  
怯懦きようだである、曰く何いわ、曰く何、一つとしてよいことは無いよう  
に云われている。しかも彼らの無規律であり怯懦であるのは、根

本の軍隊組織や制度が悪いためであつて、彼らの罪ではない。

現在のシナのような、軍隊組織や制度の下もとにあつては、いかなる兵でも恐らく勇敢には戦い得まいと思う。個人としてのシナ兵が弱いのではなく、根本の制度が悪いのである。新たに建設された満洲国はどんな兵制を設けるか知らないが、在来の制度や組織を変革して、よく教えよく戦わしむれば、十分に国防の任務を果たし得る筈である。

それよりも更に変革しなければならないのは、軍隊に対する一般国民の観念である。由来、文を重んずるはシナの国風であるが、それが余りに偏重し過ぎていて、文を重んずると反対に武を嫌い、武を憎むように慣らされている。シナの人民が兵を軽蔑し憎悪す

ることは、実に我々の想像以上である。

「好漢 不当兵へいにあたらず」とは昔から云うことであるが、いやしくも兵

と名が付けば、好漢どころか、悪漢、無頼漢を通り越して、ほとんど盗賊類似のように考えられている。そういう国民のあいだから忠勇の兵士を生み出すことの出来ないのは判り切っている。

私は遼陽城外の劉りゅうという家うちに二十日余り滞在していたことがあ  
る。農であるが、先ずここらでは相当の大家たいけであるらしく、男の  
雇人が十数人も働いていた。そのなかに二十五、六の若い男があ  
つて、やはり他の雇人と同じ服装をして同じように働いているが、  
その人柄がどこやら他の朋輩ほうばいと違って、私たちに対しても  
特に丁寧に挨拶する。私たちのそばへ寄って来て特に親しく話し

かけたりする。すべてが人を恋しがるような風が見えて、時には何となく可哀そうなように感じられることがある。早く云えば、ままこ継子が他人を慕うというような風である。

これには何か仔細しさいがあるかと思つて、あるとき他の雇人に訊いてみると、果たして仔細がある。彼はこの家の次男で、本来ならば相当の土地を分配されて、相当の嫁を貰つて、立派に一家の旦那様で世を送られる身の上であるが、わかげ若気の誤まり——と、他の雇人は云つた。——十五、六歳の頃から棒を習つた。それまではまだ好よいのであるが、それから更に進んで兵となつて、ほうてん奉天歩隊に編入された。しよせん所詮、両親も兄も許す筈はないから、彼は無断で実家を飛び出して行つたのである。



それから二、三年の後、彼は伍長か何かに昇進して、軍服をつけて、赤い毛を垂れた軍帽をかぶって、久しぶりで実家をおとずれると、両親も兄も逢わなかつた。雇人らに命じて、彼を門外へ追い出させた。さらに転じて近所の親類をたずねると、どこの家でも門を閉じて入れなかつた。彼はすごすごと立ち去つた。

それからまた二、三年、前後五、六年の軍隊生活を送つた後に、彼は兵に倦あきたか、故郷が恋しくなつたか、軍服をぬいで実家へ帰つて来たが、実家では入れなかつた。親類も相手にしなかつた。それでも土地の二、三人が彼を憫あわれんで、彼のために実家や親類に嘆願して、今後は必ず改心するといふ誓言もとの下に、両親や兄のもとに復歸することを許された。先ず勘当が赦ゆるされたという形で

ある。

しかも彼は直ちに劉家の次男たる待遇を受けることを許されなかつた。帰参は叶かなつたというもの、当分は他の雇人と同格の待遇で、雇人同様に立ち働かなければならなかつた。彼はその命令に服従して、朝から晩まで泥だらけになつて働いているのである。当分と云つても、もう二年以上になるが、彼はまだ本当の赦免に逢わない。彼は今年二十六歳であるが、恐らく三十歳になるまではそのままであろうという。

その話を聞かされて、私はいよいよ可哀そうになつた。いかに国風とは云いながら、兵になつたと云うことがそれ程の罪であるうか。それに伴つて、何か他に悪事でも働いたというならば格別、

単に軍服を身に纏つたと云うだけのことで、これほどの仕置を加えるのは余りに残酷であると思つた。彼が肩身を狭くして、一種の継子のような風をして、他国人の私たちを恋しがるのも無理はない。その以来、私は努めて彼に対して親しい態度を執るようになる、彼もよろこんで私に接近して来た。

ある日、私が城内へ買物にゆくと、その帰り途中で彼に逢つた。彼も何か買物にやられたとみえて、大きい包みをついでいた。それでも直ぐに私のそばへ駆け寄つて来て、私の荷物を持つてくれた。一緒に帰る途中、私は彼にむかつて「お前も骨が折れるだろう。」と慰めるように云うと、彼は「私が悪いのだ。」と答えた。彼自身も飛んだ心得違ひをしたように後悔しているらしかつ

た。

これはほんの一例に過ぎないが、良家の子が兵となれば、結局こんなことになるのである。入營の送迎に旗を立ててゆく我が国風とは、あまりに相違しているではないか。いかなる名将勇士でも、国民の後援がなければ思うような働きは出来ない。その国民がこの如くに兵を嫌い兵を憎むようでは、士気の振わないのも当然であるばかりか、まじめな人間は兵にならない。兵の素質の劣悪もまた当然であると云うことを、私はつくづく感じた。

平和を愛するのはいい。しかしこれほどに武を憎む国民は世界の優勝国民になり得ない。シナはあまりに文弱であり過ぎる。これと反対の一例を私が実験しているだけに、この際いよいよその

感を深うしたのである。

劉家へ来るひと月ほど以前に、私は海城かいじょう北方の李家屯りかとんという所に四日ばかり滞在したことがある。これも相当の大家であったが、私が宿泊の第一日には家人は全く姿をみせず、老年の雇人ひとりが来て形式的の挨拶をしただけで、万事の待遇が甚だ冷淡であった。

その第二日に、その家の息子らしい十二、三歳の少年が私の居室の前に遊んでいた。彼は私の持っている扇をみて、しきりに欲しそうな顔をしているので、私はその白扇に漢詩の絶句をかいてやると、彼はよろこんで貰って行った。すると、一時間あまりの後に、その家の長男という二十二、三歳の青年が衣服をあらため

て挨拶に来て、先刻の扇の礼を云った。青年は相当の教育を受けているらしく、自由に筆談が出来るので、だんだん話し合ってみると、この一家の人々は私がカーキー服を来て半武装をしているのを見て、やはり軍人であると思つていたらしい。しかも白扇の題詩を見るに及んで、私が軍人でないことを知つたといふのである。日本の軍人に漢詩を作る人はたくさんあるが、シナにはないと見える。

ともかくも私が文字の人であることを知ると共に、一家内の待遇が一変した。長男が去ると、やがてまた入れ代つて主人が挨拶に来た。日が暮れる頃には酒と肉を贈つて来た。他の雇人らも私をみるといちいち丁寧に挨拶するようになった。長男の青年は毎

朝かならず挨拶に来て、何か御用は無いかと云った。私がいよいよ出発する時には、主人や息子たちは衣服をあらためて門前まで送つて来た。他の雇人らも総出で私に敬礼した。

敬意を表されて腹の立つ者はない。私もその当時は内々得意であつたが、後に遼陽城外の劉家に来て、かの奉天歩隊の勘当息子をみるに及んで、彼らが余りに文を重んじ、武を軽んずるの甚しきを憐れあわむような心持にもなつて来た。これではシナの兵は弱い筈である。

多年の因習、いっちよう一 朝に一洗することは不可能であるとしても、新興国の当路者がここに意を致すことなくば、富国はともあれ、強兵の実は遂に挙がるまいと思われる。

(昭和8・1「文藝春秋」)



## 満洲の夏

### 池

この頃は満洲の噂がしきりに出るので、私も一種今昔の感に堪えない。わたしの思い出は可なり古い。日露戦争の従軍記者として、満洲に夏や冬を送った当時のことである。

満洲の夏——それを語るごとに、いつも先ず思い出されるのは

とくりじ  
得利寺の池である。得利寺は地名で、今ではここに満鉄の停車場がある。わたしは八月の初めにここを通過したが、朝から晴れた日で、午後の日盛りはいよいよ暑い。文字通り、雨のような汗が顔から一面に流れ落ちて来た。

「やあ、池がある！」

沙漠でオアシスを見いだしたように、私たちはその池をさして駈けてゆくと、池はさのみ広くもないが、岸には大きい幾株の柳がすずしい蔭を作つて、水には紅白の荷はずばな花が美しく咲いていた。汗をふきながら池の花をながめて、満洲にもこんな涼味に富んだ所があるかと思つた。池のほとりには小さい塾のようなものがあつて、先生は半裸体で子どもに三字経を教えていた。わたしは

この先生に一椀の水を貰って、その返礼に宝丹一個を贈って別れた。

その池、その荷花——今はどうなっているであろう。

## 龍

蓋平がいへいに一宿した時である。ここらの八月はじめは日が長い。晴れた日がほんとうに暮れ切るのは、午後十時頃である。

その午後六時半頃から約四十分ほど薄暗くなったかと思うと、また再び明るくなった。海の方面に大雨が降ったらしいという。やがて七時半に近い頃である。あたりの土着民が俄にわかに騒ぎ出し

た。

「龍ロン！ 龍ロン！」

みな口々に叫んで表へかけ出すので、私も好奇心に駆られて出てみると、西の方角——おそらく海であろうと思われる方角にあたって、大空に真まっくろ黒な雲が長く大きく動いている。その黒雲のあいだを縫って、金色の光るものが切れぎれに長くみえる。勿論、その頭らしい物は見えないが、金龍の胴とも思われるものが見えつ隠れつ輝いているのである。

雲は墨よりも黒く、金色は燦さんとして輝いている。太陽の光線がどういう反射作用をするのか知らないが、見るところ、まさに描ける龍である。

龍を信ずる満洲人が「龍！」と叫ぶのも無理はないと、私は思  
つた。

## 蝸

南京虫は日本にもたくさん輸入されているから、改めて紹介す  
るまでもないが、満洲の夏において最も我々をおびやかしたもの  
は蝸さそりであつた。南京虫を恐れない満洲の民も、蝸と聞けば恐れて  
逃げる。

蝸も南京虫とおなじく、人家の壁の崩れや、柱の割れ目などに  
潜ひそんでいる。時には枯草などをたばねた中にも隠れている。しか

も南京虫とは違つて、その毒は生命に関する。私はある騎兵が右手の小指を蝎に螫さされて、すぐに劍をぬいてその小指を切断したのを見た。

蝎の毒は蝮まむしに比すべきものである。殊に困るのは、その形が甚だ小さく、しかも人家の内に棲せい息そくしていることである。蝎の年を経たものは大きき琵琶びわの如しなどと、シナの書物にも出ているが、そんなのは滅多にあるまい。私の見たのは、いずれもこおろぎぐらいであつた。

土地の人は格別、日本人が蝎に襲われたという噂を、近来あまり聞かないのは幸いである。満洲開発と共に、こういう毒虫は絶滅させなければなるまい。

蝮は敵に囲まれた時は自殺する。おのが尻尾しっぽの剣先をおのが首に突き刺して仆たおれるのである。動物にして自殺するのは、恐らく蝮のほかにあるまい。蝮もまた一種の勇者である。

## 水

満洲の水は悪いというので、軍隊が基地点へゆき着くと、軍医部では直ぐにそこらの井戸の水を検査して「飲ムベシ」とか「飲ムベカラズ」とか云う札ふだを立てることになっていた。

私が海城村落の農家へ泊まりに行くと、あたかも軍医部員が検査に来て、家の前の井戸に木札を立てて行くところであつた。見

ると、その札に曰く「人馬飲ムベカラズ」

人間は勿論、馬にも飲ませるなど云うのである。これは大変だと思つて、呼びとめて訊くと、「あんな水は絶対に飲んではいけません」という返事である。この暑いのに、眼の前の水を飲むことが出来なくては困ると、わたしはすこぶる悲観していると、それを聞いて宿の主人は声をあげて笑い出した。

「はは、途方もない。わたしの家はここに五代も住んでいます。

私も子供のときから、この井戸の水を飲んで育つて来たのですよ。」

今更ではないが「慣れ」ほど怖ろしいものは無いと、わたしはつくづく感じさせられた。しかも満洲の水も「人馬飲ムベカラズ」



ばかりではない。わたしが普蘭店ふらんてんで飲んだ噴き井戸の水などは清冽珠せいれつたまのごとく、日本にもこんな清水は少なからうと思うくらいであつた。

## 蛇

海城の北門外に十日ほど滞留していた時である。八月は満洲の雨季であるので、わが国の梅雨季のように、とにかく細かい雨がじめじめと降りつづく。

わたしたちの宿舎のとなりろうしに老子の廟があつて、滞留の間にあたかもその祭日に逢つた。雨も幸いに小歇こやみになつたので、泥でいね

凜凛の路を踏んで香かさを献ささげに来る者も多い。縁日商人も店なを列ならべ  
 ている。大道芸人の笙しょうを吹くもの、蛇皮線じゃびせんをひく者、四よつ竹だけを  
 鳴らす者なども集まっている。

その群れのうちに蛇人だにん——蛇つかいの二人連れがまじっていた。  
 おそらく兄弟であろう、兄は二十歳前後、弟は十五、六であるが、  
 いずれも俳優かとも思われるような白面はくめんの青年と少年で、服装  
 も他の芸人に比べるとすこぶる瀟洒しょうしゃたる姿であった。

兄は首にかけている箱から二匹の黒と青との蛇を取出して、手て  
 のひらのひら掌の上に乗せると、弟は一種の小さい笛を吹く。兄は何か歌い  
 ながら、その蛇を踊らせるのである。踊ると云つても、二匹が絡  
 み合つて立つぐらゐに過ぎないのであるが、何という楽器か知ら

ないが悲しい笛の音、何という節か知らないが悲しい歌の声、わたしは云い知れない凄<sup>せい</sup>愴<sup>そう</sup>の感に打たれて、この蛇つかいの兄弟は蛇の化身ではないかと思つた。

## 雨

満洲は雨季以外には雨が少ないと云われているが、わたしが満洲に在るあいだは、大戦中のせいか、ずいぶん雨が多かつた。

夏季は夕立めいた雨にもしばしば出逢つた。俄<sup>にわか</sup>雨<sup>あめ</sup>が大いに

降ると、思いもよらない処に臨時の河が出来るので、交通に不便を来たすことが往々ある。臨時の河であるから知れたものだと、

多寡<sup>たか</sup>をくくつて徒涉<sup>としよう</sup>を試みると、案外に水が深く、流れが早く、あやうく押し流されそうになつたことも再三あつた。何が捕れるか知らないが、その臨時の河に網を入れている者もある。

遼陽の南門外に宿っている時、宵<sup>よい</sup>から大雨、しかも激しい雷鳴が伴つて、大地震のような地響きがするばかりか、真<sup>まつ</sup>青<sup>さお</sup>な電光が昼のように天地を照らすので、戦争に慣れている私たちも少なからず脅<sup>おび</sup>かされた。

## 東京陵

遼陽の城外に東京陵<sup>トシキンリよう</sup>という古陵がある。昔ここに都してい

た遼（契丹）りよう きつたんの代りの陵墓で、周囲には古木がおいしげつて、野草のあいだには石馬や石羊の横たわっているのが見いだされる。

伝えていう、月夜雨夜にここを過ぎると、凄麗の宮女きゆうじよに逢うことがある。宮女は笛を吹いている。その笛の音ねにひかれて、宮女のあとを慕って行くものは再び帰って来ないという。シナの小説にでもありそうな怪談である。

わたしはそれを宿舎の主人に聞きただすと、その宮女は夜ばかりでなく、昼でも陰った日には姿をあらわすことがあると云う。ほんとうに再び帰って来ないのかと念を押すと、そう云つて置く方が若い人たちの為であろうと、主人は意味ありげに笑つた。

その笑い顔をみて、わたしも覺つた。そんな怖ろしい宮女なら

ば尋ねに行くのは止めようと云うと、  
「ハオデー好的」と、主人はまた笑った。

(昭和7・6「都新聞」)

## 仙台五色筆

仙台せんだいの名産のうちごしきふでに五色筆というのがある。宮城野みやぎのの萩、  
 末まつやまの松山の松、実方さねかた中將の墓おに生おうる片葉すすきの薄、野田のだの玉たまが  
 川わの葭よし、名取なとりの蓼たで、この五種を軸としたもので、今では一年  
 の産額十万円に達していると云う。わたしも松島まつしま記念大会に招  
 かれて、仙台、塩竈しおがま、松島、金華山きんかざんなどを四日間巡回した旅  
 行中の見聞を、手当り次第に書きなぐるにあたって、この五色筆

の名をちよつと借用することにした。

わたしは初めて仙台の地を踏んだのではない。したがって、この地普通の名所や故蹟こせきに対しては少しく神経がにぶっているから、初めて見物した人が書くように、地理や風景を面白く叙述するわけには行かない。ただ自分が感じたままを何でもまっすぐに書く。印象記だか感想録だか見聞録だか、何だか判わからない。

### 三人の墓

仙台の土にも昔から大勢おおぜいの人が埋められている。その無数の白骨の中には勿論、隠れたる詩人や、無名の英雄も潜ひそんでいて



あろうが、とにかく世にきこえたる人物の名をかぞえると、わたしがお辞儀しても口惜くやしくないと思う人は三人ある。曰いわく、伊達だてま政宗さむね。曰いわく、林子平はやししへい。曰いわく、支倉六右衛門はせくらろくえもん。今度もこの三人の墓を拝した。

政宗の姓はダテと読まずに、イダテと読むのが本当らしい。その証拠には、ローマに残っている古文書こもんじよにはすべてイダテマサムネと書いてあると云う。ローマ人には日本字が読めそうもないから、こつちで云う通りをそのまま筆記したのであろう。なるほど文字の上から見てもイダテと読みそうである。伊達という地名は政宗以前から世に伝えられている。藤原秀衡ふじわらのひでひらの子供にも錦にしき戸太郎とたろう、伊達次郎というのがある。もつとも、これは西木戸太

郎、館次郎たてが本当だとも云う。太平記にも南部太郎、伊達次郎など云う名が見えるが、これもイダテ次郎と読むのが本当かも知れない。どのみち、昔はイダテと唱えたのを、後に至つてダテと読ませたに相違あるまい。

いや、こんな詮議はどうでもいい。イダテにしても、ダテにしても、政宗はやはり偉いのである。独眼龍どくがんりゆうなどという水滸すいこで伝式あだなの渾名あだなを付けないでも、偉いことはたしかに判っている。その偉い人の骨は瑞鳳殿ずいほうでんというのに斂おさめられている。さきぎころの出水くすに頹くずされた広瀬川ひろせの堤どてを越えて、昼もくらい杉並木の奥深くはいると、高い不規則な石段の上に、小規模の日光廟げんぜんが厳然とそびえている。

わたしは今この瑞鳳殿の前に立った。丈拔群たけの大きい黒犬は、あたかも政宗が敵にむかう如き勢いで吠えかかつて来た。大きな犬は瑞鳳殿の向う側にある小さな家から出て来たのである。一人の男が犬を叱りながら続いて出て来た。

彼は五十以上であろう。色のやや蒼あおい、瘦形やさがたの男で、短く刈つた鬢びんのあたりは斑まだらに白く、鼻の下の髭ひげにも既に薄い霜がおりかかっていた。紺がすりの単衣ひとえものに小倉こくらの袴はかまを着けて、白足袋たびに麻裏ぞうりの草履はを穿はいていた。伊達家の旧臣で、ただ一人この墳墓を守っているのだと云う。

わたしはこの男の案内によつて、靴をぬいで草履に替え、しずかに石段を登った。瑞鳳殿しると記した白字の額を仰ぎながら、さら

に折り曲がった廻廊を渡つてゆくと、かかる場所へはいるたびにいつも感ずるような一種の冷たい空気が、流るる水のように面をおもて掠めて来た。わたしは無言で歩いた。男も無言でさきに立つて行った。うしろの山の杉木立では、秋の蝉せみが破れた笛やを吹くように咽むせんでいた。

さらに奥深く進んで、衣冠を着けたる一個の偶像を見た。この瞬間に、わたしもまた一種の英雄崇拜者であると云うことをつくづく感じた。わたしは偶像の前に頭こうべをたれた。男もまた肅然として頭をたれた。わたしはやがて頭をあげて見返ると、男はまだ身動きもせず、うやうやしく礼らいはい拝していた。

私の眼からは涙がこぼれた。

この男は伊達家の臣下として、昔はいかなる身分の人であつたか知らぬ。また知るべき必要もあるまい。彼はただ白髪しらの遺臣として長く先君の墓所を守つていたのである。維新前の伊達家は数千人の家来をもつていた。その多数のうちには官吏や軍人になつた者もあろう、あるいは商業を営んでいる者もあろう。あるいは農業に従事している者もあろう。栄枯浮沈、その人々の運命に因つていろいろに変化しているであろうが、とにもかくにも皆それぞれに何らかの希望をもつて生きているに相違ない。この男には何の希望がある。無論、名誉はない。おそらく利益もあるまい。彼は洗さらい晒しの着物を着て、木綿の袴はかまを穿いて、人間の一生を暗い冷たい墓所の番人にささげているのである。

土の下にいる政宗が、この男に声をかけてくれるであろうか。彼はわが命の終るまで、一度も物を云つてくれぬ主君に仕えているのである。彼は経ヶ峯きよがみねの雪を払つて、冬の暁に墓所の門きよを浄めるのであろう。彼は広瀬川の水を汲んで、夏の日きよに霊前の花を供えるのであろう。こうして一生を送るのである。彼に取つてはこれが人間一生の務めである。名誉もいらぬ、利益もいらぬ、これが臣下の務めと心得ているのである。わたしは伊達家の人々に代つて、この無名の忠臣に感謝せねばならない。

こんなことを考えながら門を出ると、犬はふたたび吠えて来た。

林子平の墓は仙台市の西北、伊達堂山の下にある、むくげ槿の花の多

い田舎道をたどってゆくと、路の角に「伊達堂下、此奥に林子平の墓あり」という木札を掛けている。寺は龍雲院というのである。

黒い門柱がぬつと立ったままで、扉は見え<sup>とびら</sup>ない。左右は竹垣に囲まれている。門をはいると右側には百日紅<sup>さるすべり</sup>の大木が真紅<sup>まっか</sup>に咲いていた。狭い本堂にむかつて左側の平地に小さな石碑がある。

碑のおもては荒れてよく見えないが、六無齋<sup>ろくむさい</sup>友直居士の墓とお

ぼろげに読まれる。竹の花筒には紫苑<sup>しおん</sup>や野菊がこぼれ出すほどに

いっぱい生けてあつた。そばには二個の大きな碑が建てられて、

一方は太政大臣<sup>だじよう</sup>三条実美<sup>さんじようさねとみ</sup>篆額<sup>てんがく</sup>、齋藤<sup>さいとう</sup>竹堂<sup>ちくどう</sup>撰文、一方

は陸奥守<sup>むつのかみ</sup>藤原<sup>ふじわら</sup>慶邦<sup>よしくに</sup>篆額<sup>せんがく</sup>、大槻<sup>おおつき</sup>磐溪<sup>ばんけい</sup>撰文とある。いずれ

も林子平の伝記や功績を記したもので、立派な瓦家根の家の中に

相對して屹きつりつ立りつしている。なにさま堂々たるものである。

林子平はどんなに偉くつても一個の士分の男に過ぎない。三条公や旧藩主は身分の尊い人々である。一個の武士を葬った墓は、雨叩きになつても頽くずれても誰も苦情は云うまい。身分の尊い人々の建てられた石碑は、粗末にしては甚だ恐れ多い。二個の石碑が斯くの如く注意を加えて、立派に丁寧ていねいに保護されているのは、むしろ当然のことかも知れない。仙台人はまことに理智の人である。わが六無齋居士の墓石は風雨多年の後には頽れるかも知れない。いや、現にもう頽れんとしつつかある。他の二個の堂々たる石碑は、おそらく百年の後までも朽ちまい。わたしは仙台人の聡明に感ずると同時に、この両面の対照に就いていろいろのことを考えさせ



られた。

ローマに使いした支倉六右衛門の墓は、青葉神社に隣りする光明院の内にある。ここも長い不規則の石段を登って行く。本堂らしいものは正面にある。前の龍雲院に比べるとやや広いが、これもどちらかと云えば荒廢に近い。

案内を乞うと、白地のひとえもの単衣そくはつを着た東髪そくはつの若い女が出て来た。本堂の右に沿うて、折り曲がった細い坂路をだらだらと降りると、片側は竹藪たけやぶに仕切られて、片側には杉の木立の間から桑畑が一面に見える。坂を降り尽くすと、広い墓地に出た。

墓地を左に折れると、石の柵さくをめぐらした広い土の真んなかに、

小さい五輪りんの塔が立っている。支倉の家はその子の代に一旦亡びたので、墓あしかの在所も久しく不分明であつたが、明治二十七年に至つて再び発見された。草深い土の中から掘り起したもので、五輪の塔とは云うけれども、地・水・火の三輪をとどむるだけで、風ふう・空くうの二輪は見当らなかつたと云う。今ここに立っているのは其の三個の古い石である。

この墓は発見されてから約二十年になる。その間にはいろいろな人が来て、清い水も供えたであろう、美しい花も捧げたであろう。わたしの手にはなんにも携えていなかった。あいにく四辺あたりに何の花もなかつたので、わたしは名も知れない雑草のひと束を引き抜いて来て、謹つつしんで墓の前に供えた。

秋風は桑の裏葉を白くひるがえして、畑は一面の虫の声に占領されていた。

### 三人の女

仙台や塩竈しおがまや松島で、いろいろの女の話聞いた。その中で三人の女の話を書いてみる。もとより代表的婦人を選んだという訳でもない、また格別に偉い人間を見いだしたというのでもない、むしろ平凡な人々の身の上を、平凡な筆に因って伝うるに過ぎないのかも知れない。

塩竈街道の燕沢、いわゆる「蒙古の碑」の付近に比丘尼びくに坂とい

うのがある。坂の中途に比丘尼塚の碑がある。無名の塚にも何らかの因縁を付けようとするのが世の習いで、この一片の碑にも何かの由来が無くてはならない。

伝えて云う。天てんぎよう慶の昔、平たいらのまさかど将門むらとが亡びた時に、彼は

十六歳の美しい娘を後に残して、田原藤太の矢先にかかった。娘は陸みちのく奥おくに落ちて来て、尼あまとなつた。ここに草いの庵おりを結んで、謀む叛人ほんと呼ばれた父の菩提ぼだいを弔とむらいながら、往たき来びとの旅たび人に甘酒あまじゆを施ほしていた。比丘尼塚あまのつとの主ぬしはこの尼である。

わたしは今ここで、将門に娘があつたか無かつたかを問いたくない。将門の遺族そうまが相馬そうまへはなぜ隠れないで、わざわざこんな処へ落ちて来たかを論じたくない。わたしは唯、平親王へいしんのう将門の忘

れ形見という系図を持った若い美しい一人の尼僧が、陸奥むつの秋風こころもに法衣ころもの袖を吹かせながら、この坂の中程に立っていたと云うことを想像したい。

かまくら鎌倉とうけいの東慶寺には、とよとみひでより豊臣秀頼の忘れ形見という天秀てんしゆ

うに尼の墓がある。かれとこれとは同じような運命を荷になつて生まれ

たとも見られる。芝居や浄瑠璃で伝えられる将門の娘瀧夜叉姫たきやしやひめよりも、この尼の生涯の方が詩趣もある、哀れも深い。

尼は清い童貞の一生を送つたと伝えられる。が、わたしはそれを讚美するほどに残酷でありたくない。塩竈の町は遠い昔から色の港で、出船入り船を迎える女郎山の古い名が今も残っている。

春もたけなわなる朧月夜おぼろに、塩竈通いのそそり節が生暖い風を送

られて近くきこえた時、若い尼は無念無想で経を読んでいられたであろうか。秋の露の寒い夕暮れに、陸奥へくだる都の優しい商あ人きうどが、ここの軒にたたずんで草鞋わらじの緒を結び直した時、若い尼は甘い酒のほかは何物をも与えたくはなかつたであろうか。かれは由よしなき仏門に入ったことを悔まなかつたであろうか。しかも世を阻せばめられた謀叛人むほんの娘は、これよりほかに行くべき道は無かつたのである。かれは一門滅亡の恨みよりも、若い女として此の恨みに堪えなかつたのではあるまいか。

かれは甘い酒を人に施したが、人からは甘い情けを受けずに終つた。死んだ後には「清い尼」として立派な碑を建てられた。かれは実に清い女であつた。しかし将門の娘は不幸なる「清い尼」

では無かつたろうか。

「塩竈街道に白菊植えて」と、若い男が唄つて通つた。尼も塩竈街道に植えられて、さびしく咲いて、寂しく萎しほんだ白菊であつた。

これは比較的にな有名な話で、今さら紹介するまでも無いかも知れないが、将門の娘と同じような運命の女だと云うことが、わたしの心を惹いた。

松島の観音堂のほとりに「軒場の梅のきば」という古木がある。紅こうれ

蓮んに尼にという若い女は、この梅の樹のもとに一生を送つたのであ

る。紅蓮尼は西さいぎよう行ぎやう法師が「桜は浪に埋もれて」と歌に詠んだ

でわのくにきさがた

出羽国象潟あきうどの町に生まれた、商人の娘であつた。父という人は

三十三カ所の観音詣もつでを思い立って、一人で遠い旅へ迷い出ると、陸奥松島の掃部かもんという男と道中で路連れになった。掃部も観音詣での一人旅であつた。二人は仲睦まじく諸国を巡礼し、つつがなく故郷へ帰ることになつて、白河の関たもとで袂たもとを分かつた。関には昔ながらの秋風が吹いていたであらう。

その時に、象潟の商人は尽きぬ名残なごりを惜しむままに、こういう事を約束した。私には一人の娘がある、お前にも一人の息子があゝるそうだ。どうか此の二人を結び合わせて、末長く睦むつみ暮らそうではないか。

掃部も喜んで承諾した。松島の家へ帰り着いてみると、息子のこたろう小太郎は我が不在るすの間に病んで死んだのであつた。夢かとはばかり



驚き歎いていると、象潟からは約束の通りに美しい娘を送つて来たので、掃部はいよいよ驚いた。わが子の果敢はかなくなつたことを語つて、娘を象潟へ送り還そうとしたが、娘はどうしても肯きかなかつた。たとい夫たるべき人に一度も対面したことも無く、又その人が已すでに此の世にあらずとも、いったん親と親とが約束したからには、わたしは此の家の嫁である、決して再び故郷へは戻らぬと、涙ながらに云い張つた。

哀れとも無残とも云いようがない。私はこんな話を聞くと、身震いするほどに怖ろしく感じられてならない。わたしは決してこの娘を非難ひなんしようとは思わない。むしろ世間の人並に健気けなげな娘だと褒めてやりたい。しかもこの可憐の娘を駆つていわゆる「健気

な娘」たらしめた其の時代の教えというものが怖ろしい。

子をうしなつた掃部夫婦もやはり其の時代の人であつた。つまりは其の願いに任せて、夫の無い嫁を我が家にとどめておいたが、これに婿を迎えるという考えもなかつたらしい。こうして夫婦は死んだ。娘は尼になつた。

観音堂のほとりには、小太郎が幼い頃に手ずから植えたという一本の梅がある。紅蓮尼はここに庵いおりを結んだ。

さけかしな今はあるじと眺むべし

軒端の梅のあらむかぎりは

嘘か本当か知らぬが、尼の詠み歌として世に伝えられている。

尼はまた、折りおりの手すさびに煎餅を作り出したので、のちの

人が尼の名を負わせて、これを「紅蓮」と呼んだと云う。

比丘尼坂でも甘酒を売っている。松島でも紅蓮を売っている。

甘酒を飲んで煎餅をかじって、不運な女二人を吊うと云うのも、  
下戸げこのわたしに取ってはまことにふさわしいことであつた。

最後には「先代菘」で名高い政岡まさおかを挙げる。私はいわゆる伊

達騒動というものに就いて多くの知識を持っていない。仙台で出

版された案内記や絵葉書によると、院まるほん本で名高い局政岡つぼねとは三

沢初子さわはつこのことだそうで、その墓は榴ヶ岡つっじ下の孝勝寺にある。墓

は鉄柵をめぐらして頗る莊重に見える。

初子は四十八歳で死んだ。かれは伊達綱宗つなむねの側室そばめで、その子

の亀千代かめちよ（綱村つなむら）が二歳で封ほうをつぐや、例のお家騒動しゅったが、出来、したのである。私はその裏面の消息を詳しく知らないが、とにかく反対派が種々の陰謀をめぐらした間に、初子は伊達安芸あきらと心をあわせて、陰に陽に我が子の亀千代を保護した。その事蹟が誤まって、かの政岡の忠節として世に伝えられたのだと、仙台人は語っている。あるいは云う、政岡は浅岡あさおかで、初子とは別人である。あるいは云う、当面の女主人公は初子で、老女浅岡が陰に助力したのである。

こんな疑問は大槻博士にでも訊いたら、忽たちまちに解決することであらうが、私は仙台人一般の説に従って、初子をいわゆる政岡として評したい。忠義の乳母めのとももとより結構ではあるが、真実の母

としてかの政岡をみた方がさらに一層の自然を感じはしまいか。事実のいかんは別問題として、封建時代に生まれた院本作者が、女主人公を忠義の乳母と定めたのは当然のことである。もし其の作者が現代に生まれて筆を執ったらば、おそらく女主人公を慈愛心の深い真実の母と定めたであろう。とにかく嘘でも本当でも構わない、わたしは「伽羅先代萩」めいぼくせんだいはぎでおなじみの局政岡をこの初子という女に決めてしまった。決めてしまっても差支えがない。

仙台市の町はずれには、到るところに杉の木立とむくげまがき榎の籬とが見られる。寺も人家も村落もすべて杉と榎とを背景にしていると云つてもいい。伊達騒動当時の陰謀や暗殺は、すべてこの背景を有する舞台の上に演じられたのであろう。

## 塩竈神社の神楽

わたしが塩竈の町へ入り込んだのは、松島経営記念大会の第一日であった。碧あお暗い海の潮を呑んでいる此の町の家々は彩いろがみ紙で造った花紅葉はなもみじを軒にかざつて、岸につないだ小船も、水に浮かんだ大船も、ことごとく一種の満艦飾を施していた。帆柱には赤、青、黄、紫、その他いろいろの彩紙が一面に懸け渡されて、秋の朝風に飛ぶようにひらめいている。これを七たなばた夕の笹のようだと形容しても、どうも不十分のように思われる。解り易く云えば、子供のもてあそぶ千代紙の何百枚を細かく引き裂いて、四方八方

へ一度に吹き散らしたという形であつた。

「松島行きに乗合船は今出ます。」と、頻りに呼んでいる男がある。呼ばれて値を付けている人も大勢あつた。

その混雑の中をくぐつて、塩竈神社の石段を登つた。ここの名物という塩竈や、貝多羅葉樹ばいたらようじゆや、泉の三郎の鉄燈籠かなどうろうや、いずれも昔から同じもので、再遊のわたしには格別の興味を与えなかつたが、本社を拝して横手の広場に出ると、大きな神樂堂かぐらには笛と太鼓の音が乱れてきこえた。

「面白そうだ。行つて見よう。」

同行の麗水れいすい・秋しゅうこう 臯さな 両君と一緒に、見物人を掻き分けて臆

面もなしに前へ出ると、神樂は今や最中であつた。果たして神樂

といふのか、舞樂ぶがくといふのか、わたしにはその区別もよく判らなかつたが、とにかくに生まれてから初めてこんなものを見た。

囃子は笛二人、太鼓二人、踊る者は四人で、いずれも鍾馗しやうきのような、からすてんぐ烏天狗のような、一種不可思議おもての面を着けていた。袴は普通のもので、めいめいの単衣ひとえものを袒はだぬぎにして腰に垂れ、浅黄または紅あかで染められた唐草模様の襦袢じゆばん（？）の上に、舞樂の衣装のようなものを襲かさねていた。頭には黒または唐黍色もろこしの毛をかぶっていた。腰には一本の塗ぬりり鞆ざやの刀を佩さしていた。

この四人が野蛮人の舞踊のように、円陣を作つて踊るのである。笛と太鼓はほとんど休みなしに囃はやしつづける。踊り手も休み無しにぐるぐる廻まわっている。しまいには刀を抜いて、飛び違い、行き



違いながら烈しく踊る。単に踊ると云つては、詞ことばが不十分であるかも知れない。その手振り足振りは頗すこぶる複雑なもので、尋常様のお神楽のたぐいではない。しかも其の一挙手一投足がちつとも狂わないで、常に楽器と同一の調子を合わせて進行しているのは、よほど練習を積んだものと見える。服装と云い、踊りと云い、普通とは変つて頗る古雅こがなものであつた。

かたわらに在る土地の人に訊くと、あれは飯野いいのがわ川の踊りだと云う。飯野川というのは此の附近の村の名である。要するに舞樂を土台にして、これに神樂と盆踊りとを加味したようなものか。わたしは塩竈へ来て、こんな珍しいものを観たのを誇りたい。

私は口をあいて一時間も見物していた。踊り手もまた息もつか

ずに踊っていた。笛吹けども踊らぬ者に見せてやりたいと私は思つた。

### 孔雀船の舟唄

塩竈から松島へむかう東京の人々は、鳳凰丸ほうおうと孔雀丸くじゃくに乗せられた。われわれの一行は孔雀丸に乗った。

伝え聞く、伊達政宗は松島の風景を愛賞して、船遊びのために二艘そうの御座船ござふねを造らせた。鳳凰丸と孔雀丸すなわとが即ちそれである。

風流の仙台太守たいしゆは更に二十余章の舟唄を作らせた。そのうちには自作もあると云う。爾来、代々の藩侯も同じ雛型ひながたに因つて同

じ船を作らせ、同じ海に浮かんで同じ舟唄を歌わせた。

われわれが今度乗せられた新しい二艘の船も、むかしの雛型に寸分たがわずに造らせたものだそうで、ただ出しゅつたい来たいを急いだ為ために船べりに黒漆こくしつを施すの暇がなかったと云う。船には七人の老人が羽織袴で行儀よく坐っていた。わたしも初めはこの人々を何者とも知らなかった、また別に何の注意をも払わなかった。

船が松の青い島々をめぐるて行くうちに、同船の森もり知事ちじが起たつて、かの老人たちを紹介した。今こんにち日にちこの孔雀丸くわんぐわんを浮かべるに就ついて、旧藩時代の御座船の船頭を探し求めたが、その多数は既に死に絶えて、僅かに生き残っているのは此の数人に過ぎない。どうか此の人々の口から政宗公以来伝わって来た舟唄のひとふし一節いちせつを聴

いて貰いたいとのことであつた。

素朴の老人たちは袴の膝に手を置いて、肅然と坐っていた。私はこれまでも多くの人に接した、今後もまた多くの人に接するであろうが、かくの如き敬<sup>けいけん</sup>虔の態度を取る人々はしばしば見られるものではあるまいと思つた。わたしも覚えず襟を正しゆうして向き直つた。この人々の顔は赭<sup>あか</sup>かつた、頭の髪は白かつた。いずれも白扇を取り直して、やや伏目になつて一斉に歌い始めた。唄は「鎧<sup>よろい</sup>口説<sup>くど</sup>き」と云うので、藩祖政宗が最も愛賞したものだとか伝えられている。

やら目出たやな。初春の好き日をとしの着<sup>き</sup>長<sup>せなが</sup>は、えい、小桜をどしとなりにつける。えい、さて又夏は卯の花の、えい、

垣根の水にあらひ革。秋になりての其色は、いつも軍に勝いくさつたかつい色ろの、えい、紅葉にまがふ錦革。冬は雪げの空晴れて、えい、かぶと青の星の菊の座も、えい、華やかにこそ威毛おどしげの、思ふかたき仇かたきを打ち取りて、えい、わが名を高くあげまくも、えい、つるぎ剣は箱に納め置く、弓矢ふくろを出さずして、えい、富貴の国とぞなりにける。やんら……。

わたしらはこの歌の全部を聴き取るほどの耳をもたなかった。勿論、その巧拙などの判ろう筈はない。塩竈神社の神楽を観た時と同じような感じを以って、ただ一種の古雅なるものとして耳を傾けたに過ぎなかった。しかしその唄の節よりも、文句よりも、いちじるしく私の心を動かしたのは、歌う人々の態度であつたこ

とを繰り返して云いたい。

政宗以来、孔雀丸は松島の海に浮かべられた。この老人たちも封建時代の最後の藩侯に仕えて、御座船の御用を勤めたに相違ない。孔雀丸のまんなかには藩侯が乗っていた。その左右には美しい小姓どもが控えていた。末座には大勢の家来どもが居列んでいた。船には竹に雀の紋をつけた幔幕<sup>まんまく</sup>が張り廻<sup>まわ</sup>されていた。海の波は畳のように平らかであった。この老人たちは臚<sup>ろ</sup>をあやつりながら、声を揃えてかの舟唄を歌った。

それから幾十年の後に、この人々はふたたび孔雀丸に乗った。老いたるかれらはみずから臚擢<sup>ろかいと</sup>を把<sup>と</sup>らなかつたが、旧主君の前にあると同一の態度を以って謹んで歌った。かれらの眼の前には袴<sup>かみしも</sup>

も見えなかつた、大小も見えなかつた。異人のかぶつた山高帽子や、フロックコートがたくさんに列んでいた。この老人たちは恐らくこの奇異なる対照と変化とを意識しないであろう、また意識する必要も認めまい。かれらは幾十年前の古い美しい夢を頭に描きながら、幾十年前の古い唄を歌っているのである。かれらの老いたる眼に映るものは、袴である、大小である、竹に雀の御紋である。山高帽やフロックコートなどは眼にはいろいろ筈がない。

私はこの老人たちに対して、一種尊敬の念の湧くを禁じ得なかつた。勿論その尊敬は、悲壯と云うような觀念から惹き起される一種の尊敬心で、例えば頽<sup>たいは</sup>廃<sup>はい</sup>した古廟に白髪<sup>れいじん</sup>の伶<sup>れいじん</sup>人が端坐して簫<sup>ふえ</sup>の秘曲を奏している、それとこれと同じような感があつた。

わたしは巻煙草をくわえながら此の唄を聴くに忍びなかつた。

この唄は、この老人たちの生命いのちと共に、次第に亡びて行くのであろう。松島の海の上でこの唄の声を聴くのは、あるいはこれが終りの日であるかも知れない。わたしはそぞろに悲しくなった。

しかし仙台の国歌とも云うべき「さんさ時雨」が、芸妓の生なまぬ

鈍るい肉声に歌われて、いわゆる緑りよくしゆ酒紅燈の濁った空気の中

に、何の威厳もなく、何の情趣も無しに迷っているのに較べると、この唄はむしろこの人々と共に亡びてしまう方が優ましかも知れない。この人々のうちの最年長者は、七十五歳であると聞いた。

## 金華山の一夜



金華山きんかざんは登り二十余町、さのみ嶮けんしゅん峻しゅんな山ではない、むしろ美しい青い山である。しかも茫茫たる大海のうちに屹立きつりつしている、その眼界はすこぶる闊ひろい、眺望雄大と云つてよい。わたしが九月二十四日の午後この山に登った時には、麓ふもとの霧は山腹の細雨こさめとなつて、頂上へ来ると西の空に大きな虹が横たわつていた。

海中の孤島、黄金山神社のほかには、人家も無い。参詣の者はみな社務所に宿を借るのである。わたしも泊まった。夜が更けると、雨が瀧のように降つて来た。山を震わすように雷らいが鳴つた。

稲妻が飛んだ。

「この天気では、あしたの船が出るか知ら。」と、わたしは寝ながら考えた。

これを案じているのは私ばかりではあるまい。今夜この社務所には百五十余人の参詣者が泊まっているという。この人々も同じ思いでこの雨を聴いているのであろうと思つた。しかも今日では種々の準備が整つている。海が幾日も暴れて、山中の食料がつきた場合には、対岸の牡鹿半島おじかにむかつて合図の鐘を撞くと、半島の南端、鮎川村あゆかわの忠実なる漁民は、いかなる暴風雨の日でも約二十八丁の山やまどり雉の渡しを乗つ切つて、必ず救助の船を寄せることになつてゐる。

こう決まつているから、たとひ幾日この島に閉じ籠められても、

別に心配することも無い。わたしは平気で寝ていられるのだ。が、昔はどうであつたらう。この社の創建は遠い上代じょうだいのことで、その年時も明らかでないと言もつとう。尤もその頃は牡鹿半島と陸続きであつたらうと思こわれるが、とにかく斯ういう場所を撰んで、神を勸請かんじようしたという昔の人の聡明に驚かざるを得ない。ここには限らず、古来著名の神社仏閣が多くは風光明媚めいびの地、もしくは山谷嶮峻そうの地を相そして建てられていると云う意味を、今更のようにつくづく感じた。これと同時に、古来人間の信仰の力というものを怖ろしいほどに思い知つた。海陸ともに交通不便の昔から年々幾千万の人間は木の葉このような小さい舟に生命を托して、この絶はなれ島しまに信仰の歩みを運んで来たのである。ある場合には十日

も二十日も風浪に阻はばめられて、ほとんど流人るにん同様の艱難かんなんを嘗なめたこともあつたらう。ある場合には破船して、千尋ちひろの浪の底に葬られたこともあつたらう。昔の人はちつともそんなことを怖れなかつた。

今の信仰の薄い人——少なくとも今のわたしは、ほとんど保険付きともいふべき大きな汽船に乗つて来て、しかも食料欠乏の憂いは決して無いという確信を持つていながら、一夜の雷雨にたちまち不安の念をきざすのである。こんなことで、どうして世の中に生きていられるだろう。考えると、何だか悲しくなつて来た。

雷雨は漸ようやくやんだ。山の方では鹿の声が遠くきこえた。あわれな無信仰者は初めて平和の眠りに就いた。枕もとの時計はもう一

時を過ぎていた。

(大正2・10「やまと新聞」)

## 秋の修善寺

(一)

(明治四十一年) 九月の末におくればせの暑中休暇を得て、伊豆いずの修善寺しゅうぜんじ温泉に浴し、養気館ようきかんの新井方あらいにとどまる。所し作為よざいのないままに、毎日こんなことを書く。

二十六日。きのうは雨にふり暮らされて、宵から早く寢床には

いったせいか、今朝は五時というのにもう眼が醒めた。よんどころなく煙草をくゆらしながら、襖ふすまにかいた墨絵の雁かりと相對するのと約半時間。おちこちに鶏とりが勇ましく啼ないて、庭の流れに家鴨あひるも啼ないている。水の音はひびくが雨の音はきこえない。

六時、入浴。その途中に裏二階から見おろすと、台所口とも思われる流れの末に長さ三尺しゃくほどの蓮れんこん根をひたしてあるのが眼についた。湯は菖蒲あやめの湯で、伝説にいう、源三位頼政げんざんみよまさの室菖蒲あやめの前まえは豆州ずしゅうながおか長岡ながおかに生まれたので、頼政滅亡の後、かれは故郷に歸かえつて河内かわうち村の禅長寺に身をよせていた。そのあいだに折りおりここへ来て入浴したので、遂にその湯もあやめの名を呼ばれる事になったのである。もし果たしてそうであるならば、猪いの早はや

太<sup>た</sup>ほどにもないぞうひようはむしや 雑兵葉武者のわれわれ風情が、遠慮なしに頭からざぶざぶ浴びるなどは、遠つ昔の上じようろう 臍の手前、いささか恐れ多き次第だとも思つた。おいおいに朝湯の客がはいつて来て、「好よい天気になつて結構です。」と口々に云う。なにさま外は晴れて水は澄んでゐる。硝子戸ガラスド越しに水中の魚の遊ぶのがあざやかにみえた。

朝飯をすました後、例の範のり頼の墓に参詣した。墓は宿から西北へ五、六丁、小山というところにある。稲田や芋畑いものあいだを縫いながら、雨後のぬかるみを右へ幾曲がりして登つてゆくと、その間には紅い彼岸花ひがなばながおびただしく咲いていた。墓は思うにもまして哀れなものであつた。片手でも押し倒せそうな小さい仮



家で、柎ひいらぎや柘植つげなどの下枝おほに掩おほわれながら、南向きに寂しく立っていた。秋の虫は墓にのぼって頻しきりに鳴いていた。

この時、この場合、何なんびと人も恍こうとして鎌倉時代の人となるであろう。これを雨うげつもの月物がたり語式ごしきにつづれば、範頼の亡霊がここへ現われて、「汝なんじ、見よ。源氏げんじの運も久しからじ。」などと、恐ろしい呪のろいの声を放つところであろう。思いなしか、晴れた朝がまた陰かげつて来た。

拝し終つて墓畔の茶屋に休むと、おかみさんは大いに修善寺の繁昌を説き誇った。あながちに笑うべきでない。人情として土地自慢は無理もないことである。とこうするあいだに空はふたたび晴れた。きのうまではフランネルあわせに袷羽織あわせを着るほどであったが、

晴れると俄かにまた暑くなる。芭蕉翁は「木曾殿と背中あはせの寒さ哉」と云ったそうだが、わたしは蒲殿と背中あわせの暑さにおどろいて、羽織をぬぎに宿に帰ると、あたかも午前十時。

午後、東京へ送る書信二、三通をしたためて、また入浴。欄干に倚つて見あげると、東南につらなる塔の峰や観音山などが、きようは俄かに押し寄せたように近く迫つて、秋の青空がいつそう高く仰がれた。庭の柿の実はやや黄ばんで来た。真向うの下座敷では義太夫の三味線がきこえた。

宿の主人が来て語る。主人は頗る劇通であつた。午後三時ふたび出て修禪寺に参詣した。名刺を通じて古宝物の一覽を請うと、宝物は火災をおそれて倉庫に秘めてあるから容易に取出す

ことは出来ない。しかも、ここ兩三日は法要で取込んでいるから、どうぞその後にお越し下されたいと懇懃いんぎんに断わられた。

去つて日枝神社ひえに詣でると、境内に老杉多く、あわれ幾百年を経たかと思えるのもあつた。石段の下に修善寺駐在所がある。範頼が火を放つて自害した真光院というのは、今の駐在所のあたりにあつたと云い伝えられている。して見ると、この老いたる杉のうちには、ほろびてゆく源氏の運命を眼のあたりに見たのもあろう。いわゆる故国は喬木あるの謂いひにあらずと、唐土の賢人は云つたそうだが、やはり故国の喬木はなつかしい。

ひきもの挽物細工の玩具などを買つて帰ろうとすると、町の中ほどで

赤い旗をたてた楽隊に行きあつた。活動写真の広告である。山の

ふところに抱かれた町は早く暮れかかつて、桂川かつらの水のうえには薄もやい靄もやが這っている。

修善寺がよいの乗合馬車は、いそがしそうに鈴を鳴らして川下の方から駆かけて来た。

夜は机にむかつて原稿などをかく、今夜は大湯おおゆ換えに付き入浴八時かぎりと触れ渡された。

(二)

二十七日。六時に起きて入浴。きょうも晴れつづいたので、浴客はみな元気がよく、桂川の下流へ釣に行こうというのもあって、

風呂場はすこぶる賑わっている。ひとりの西洋人が悠然としては  
 いて来たが、湯の熱いのに少しおどろいた体であつた。

朝飯まえに散歩した。路は変らぬ河岸であるが、岩に堰かれ、  
 旭日にかがやいて、むせび落つる水のやや浅いところに家鴨数十  
 羽が群れ遊んでいて、川に近い家々から湯の烟りがほの白くあが  
 っているなど、おのずからなる秋の朝の風情を見せていた。岸の  
 とところどころに芒が生えている。近づいて見ると「この草取るべ  
 からず」という制札を立ててあつて、後の月見の材料にと貯えて  
 置くものと察せられた。宿に帰つて朝飯の膳にむかうと、鉢にう  
 ず高く盛つた松茸に秋の香が高い。東京の新聞二、三種をよんだ  
 後、頼家の墓へ参詣に行った。

桂橋を渡り、旅館のあいだを過ぎ、まとば的場の前などをぬけて、塔の峰の麓に出た。ところどころに石段はあるが、路は極めて平坦で、ぞうき雑木が茂っているあいだに高い竹藪がある。むくげ槿の花の咲いている竹籬たけがきに沿うて左に曲がると、正面に釈迦堂がある。頼家のぶつ仏果円満を願うがために、母政子まさこの尼が建こんりゆう立したものであると云う。かまくら鎌倉の覇業を永久に維持する大いなる目的の前には、あるに甲斐かひなき我が子を捨て殺しにしたものの、さすがに子は可愛ごうまいものであつたらうと推し量ると、ふだんは虫の好かないごうま傲慢ごうまんの尼將軍その人に対しても、一種同情の感をとどめ得なかつた。

さらに左に折れて小高い丘にのぼると、高さ五尺にあまる楕円

形の大石に征夷大將軍源左金吾頼家尊靈と刻み、煤すすびた堂の軒げんきんどうには笹龍胆ささりんどうの紋を打った古い幕が張つてある。堂の広さはわずかに二坪ぐらいで、修善寺町の方を見おろして立つている。あたりには杉や楓かえてなど枝をかわして生い茂つて、どこかで鴉からすが啼ないている。

すさまじいありさまだとは思つたが、これに較べると、範頼の墓は更に甚だしく荒れまさつている。叔父御おいよりも甥おひの殿の方がまだしもの果報があると思ひながら、香を手向たむけて去ろうとする、入れ違けいひに來て磬けいを打つ参詣者があつた。

帰り路で、ある店に立つてゆで栗をかうと実に廉やすい。わたしばかりでなく、東京の客はみな驚くだろうと思われた。宿に帰つて

読書、障子の紙が二カ所ばかり裂けている。眼に立つほどの破れではないが、それにささやく風の音がややもすれば耳について、秋は寂しいものだとしみじみ思わせるうちに、宿の男が来て貼りかえてくれた。向う座敷は障子をあげ放して、その縁側に若い女客が長い洗い髪を日に乾かしているのが、榎えのきの大樹を隔ててみえた。

午後は読書に倦うんで、肱ひじまくら枕まくらを極めているところへ宿の主人が来た。主人はよく語るので、おかげで退屈を忘れた。

きょうも水の音に暮れてしまったので、電燈でんとうの下で夕飯ゆふめしをすませて、散歩がてら理髪店へゆく。大仁おおひと理髪組合の掲示をみると、理髪料十二銭、またそのわきに附記して、「但し角刈とハイカラ



は二銭増しの事」とある。いわゆるハイカラなるものは、どこへ廻つても余計に金の要ることと察せられた。店先に張子の大きい達磨ダルマを置いて、その片眼を白くしてあるのは、なにか願掛がんけでもしたのかと訊きいたが、主人も職人も笑つて答えなかつた。楽隊の声こゑが遠くきこえる。また例の活動写真の広告らしい。

理髪店を出ると、もう八時を過ぎていた。露の多い夜気は冷やびやと肌にしみて、水に落ちる家々の灯かげは白くながれている。空には小さい星が降るかと思うばかりに一面にきらめいていた。

宿に帰つて入浴、九時を合あ図に寢床にはいると、廊下で、「按摩あんまは如何いかさま」という声こゑがきこえた。

## (三)

二十八日。例に依つて六時入浴。今朝は湯加減が殊によろしいように思われて身神爽快。天気もまたよい。朝飯もすみ、新聞もよみ終つて、ふらりと宿を出た。

月末に近づいたせいか、この頃は帰る人が一日増しに多くなつた。大<sup>おおひと</sup>仁行きの馬車は家々の客を運んでゆく。赤とんぼが乱れ飛んで、冷たい秋の風は馬のたてがみを吹き、人の袂を吹いている。宿の女どもは門<sup>かど</sup>に立ち、または途中まで見送つて、「御機嫌よろしゅう……来年もどうぞ」などと口々に云っている。歌による草枕、かりそめの旅とはいえど半月ひと月と居<sup>いな</sup>馴染めば、これ

もまた一種の別れである。涙もろい女客などは、朝夕親しんだ宿の女どもと云い知れぬ名残なごりの惜しまれて、馬車の窓から幾たびか見返りつつ揺られて行くのもあつた。

修禅寺に詣でると、二十七日より高祖忌執行の立札があつた。宝物一覽を断わられたのも、これが為であるとうなずかれた。

転じて新井別邸の前、寄席のまえを過ぎて、見晴らし山というのに登った。半腹の茶店に休むと、今来た町の家々は眼の下になつて、修禅寺の麓いらかはさすがに一角をぬいて聳そびえていた。

この茶店には運動場があつて、二十歳はたちばかりの束髪むすみの娘がブランコに乗っていた。もちろん土地の人ではないらしい。山の頂上は俗に見晴らし富士と呼んで、富士を望むのによろしいと聞いた

ので、細い山路をたどってゆくと、裳すそにまつわる萩すすきや芒すすきがおどろに乱れて、露の多いのに堪えられなかつた。登るにしたがつて勾配がようやく険けわしく、駒下駄ではとかく滑ろうとするのを、剛情にふみこたえて、まずは頂上と思われるあたりまで登りつくと、なるほど富士は西の空にはつきりと見えた。秋天片雲無きの口にここへ来たのは没怪もっけの幸いであつた。帰りは下り坂を面白半分に駆け降りると、あぶなく滑つて転びそうになること兩三度、降りてしまつたら汗が流れた。

山を降りると田圃たんぼみち路で、田の畔くろには葉鶏頭の真紅まっかなのが眼に立つた。もとの路を還らずに、人家のつづく方を北にゆくと、桜さくらがおかヶ岡の麓を過ぎて、いつの間にか向う岸へ廻つたとみえて、図はから

ずも頼家の墓の前に出た。きのう来て、今日もまた偶然に来た。おのずからなる因縁浅からぬように思われて、ふたたび墓に香をささげた。

頼家の墓所は単に塔の峰の麓とのみ記憶していたが、今また聞けば、ここを指月ヶ岡しげつがおかと云うそうである。頼家が討たれた後に、母の尼が来たり弔つて、空ゆく月を打ち仰ぎつつ「月は変らぬものを、変り果てたるは我が子の上よ。」と月を指さして泣いたので、人々も同じ涙にくれ、爾来ここを呼んで指月ヶ岡と云うことになったとか。しようじよう蕭条たる寒村の秋のゆうべ、不幸なる我が子の墓前に立つて、一代の女将軍が月下に泣いた姿を想いやると、これもまた画くべく歌うべき悲劇であるように思われた。かれが

斯くまでに涙を呑んで経営した覇業も、源氏より北条ほうじょうに移つて、北条もまた亡びた。これにくらべると、秀頼ひでよりと相抱いて城と俱ともにほろびた淀君よどぎみの方が、人の母としては却つて幸いであつたかもしれない。

帰り路に虎溪橋こけいきょうの上でカーキ色の軍服を着た廃兵に逢つた。

その袖には赤十字の徽章をつけていた。宿に帰つて主人から借りた修善寺案内記を読み、午後には東京へ送る書信二通をかいだ。

二時ごろ退屈して入浴。わたしの宿には当時七、八十人の滞在客がある筈であるが、日中のせいか広い風呂場には一人もみえなかつた。菖蒲の湯を買い切りにした料簡りょうけんになつて、全身を湯にひたしながら、天然の岩を枕にして大の字に寝ころんでいると、

いい心持を通り越して、すこし茫となつた気味である。氣つけに温泉二、三杯を飲んだ。

主人はきょうも来て、いろいろの面白い話をしてくれた。主人の去つた後は読書。絶え間なしに流れてゆく水の音に夜昼の別わかちはないが、昼はやがて夜となつた。

食後散歩に出ると、行くともなしに、またもや頼家の方へ足が向く。なんだか執とり着かれたような気もするのであつた。墓の下ねの三洲園という蒲焼屋では三味線の音が騒ねがしくきこえる。頼家尊霊も今夜は定めて陽気に過させ給うであらうと思ひやると、われわれが問い慰めるまでもないと理窟をつけて、墓へはまいらずに帰ることにした。あやなき闇のなかに湯の匂いのする町家へた

どつてゆくと、夜はようやく寒くなつて、そこらの垣にはたおりむし機織虫が鳴いていた。

わたしの宿のうしろに寄席があつて、これも同じ主人の所有である。草履ばきの浴客が二、三人はいつてゆく。私も続いてはいるうかと思つたが、ビラをみると、一流うかれ節三河屋何某一座、これには少しく恐れをなして躊躇していると、雨がはらはらと降つて来た。仰げば塔の頂上から、がま蝦蟆のような黒雲が這い出している。いよいよ恐れて早々に宿に逃げ歸つた。

歸つて机にむかえば、下の離れ座敷でもまたもや義太夫が始まつた。近所の宿でも三味線の音がきこえる。今夜はひどく賑やかな晩である。



十時入浴して座敷に帰ると、桂川も溢あふれるかと思うような大雨となつた。

(掲載誌不詳、『十番随筆』所収)

## 春の修善寺

十年ぶりで三島みしま駅から大仁おおひと行きの汽車に乗り換えたのは、午後四時をすこし過ぎた頃であつた。大場だいば駅附近を過ぎると、此処ここらももう院線の工事に着手しているらしく、路ばたの空地あきちに投げ出された鉄材や木材が凍つたような色をして、春のゆう日にうす白く染められている。村里のところどころに寒そうに顫ふるえている小さい竹藪は、折りからの強い西風にふき煽あおられて、今にも折れ

るかとはばかりに撓たわみながら鳴っている。広い桑畑には時どき小さい旋風をまき起して、黄龍のような砂の渦が汽車を目がけてまっしぐらに襲つて来る。

このいかにも暗い、寒い、すさまじい景色を窓から眺めながら運ばれてゆく私は、とても南の国へむかつて旅をしているというのびやかな気分にはなれなかつた。汽車のなかに沼津ぬまつの人が乗りあわせていて、三、四年まえの正月に愛鷹丸あしたかまるが駿河湾するがで沈没した当時の話を聞かせてくれた。その中にこんな悲しい挿話があつた。

沼津の在に強盗傷人の悪者があつて、その後久しく伊豆の下田しもだに潜伏していたが、ある時なにかの動機から翻然ほんぜん悔悟かいごした。そ

の動機はよく判らないが、理髪店へ行つて何かの話を聞かされたのらしいと云う。かれはすぐに下田の警察へ駆け込んで過去の罪を自首したが、それはもう時効じこうを経過しているので、警察では彼を罪人として取扱うことが出来なかつた。かれは失望して沼津へ歸つた。それからだんだん聞き合せると、当時の被害者はとうに世を去つてしまつて、その遺族のゆくえも判らないので、彼はよいよ失望した。

元來、彼は沼津の生まれではなかつた——その出生地をわたしは聞き洩らした——せめては故郷の菩提寺に被害者の石碑を建こんり立ゆうして、自分の安心あんじんを得たいと思ひ立つて、その後一年ほどは一生懸命に働いた。そうして、幾らかの金を作つた。彼はその

金をふところにしてかの愛鷹丸に乗り込むと、駿河の海は怒つて暴あれて、かれを乗せた愛鷹丸はヨナ（旧約聖書の中の予言者）を乗せた船のように、ゆれて傾いた。しかも、罪ある人ばかりでなく、乗組みの大勢をも併せて海のなかへ投げ落してしまった。彼は悪魚の腹にも葬られずに、数時間の後に引揚げられたが、彼はその金を懐ろにしたままで凍え死んでいた。

これを話した人は、彼の死はその罪ざいごう業の天罰であるかのよう  
に解釈しているらしい口ぶりであつた。天はそれほど酷むじいもの  
であろうか——わたしは暗い心持でこの話を聴いていた。

南なんじょう条じょう

駅えきを過ぎる頃から、畑にも山にも寒そうな日の影すらも消えてしまつて、ところどころにかの砂すな畑なべりが巻きあがつて

いる。その黄いろい渦が今は灰ほのしろ白くみえるので、あたりがだんだんに薄暗くなつて来たことが知られた。汽車の天井には旧式な灯の影がおぼつかなげに揺れている。この話が済むと、その人は外套がいたうの袖をかきあわせて、肩をすくめて黙つてしまった。私も黙つていた。

三島から大仁までたつた小一時間、それが私に取つては堪えられないほどに長い暗いわび旅であつた。ゆき着いた大仁の町も暗かつた。寒い風はまだ吹きやまないで、旅館の出迎えの男どもが振り照らす提灯の灯ひのかげに、乗合馬車の馬のたてがみのふる顫えて乱れているのが見えた。わたしは風を恐れて自動車に乗つた。

修善寺の宿につくと、あくる日はすぐに指月ヶ岡にのぼって、頼家の墓に参詣した。わたしの戯曲「修禅寺物語」は、十年前の秋、この古い墓のまえに額ぬかづいた時に私の頭に湧き出した産物である。この墓と会津あいづの白虎隊の墓とは、わたしに取って思い出が多い。その後、私はどう変ったか自分にはよく判らないが、頼家公の墓はよほど変っていた。

その当時の日記によると、丘の裾には鰻うなぎ屋が一軒あつたばかりで、丘の周囲にはほとんど人家がみえなかつた。墓は小さい堂のなかに祀まつられて、堂の軒には笹龍胆ささりんどうの紋を染めた紫の古びた幕が張り渡されていて、その紫の褪さめかかった色がいかにも品のよい、しかも寂しい、さながら源氏の若い將軍の運命を象徴する

かのように見えたのが、今もありありと私の眼に残っている。ところが、今度かさねて来てみると、堂はいつの間にか取払われてしまつて、懐かしい紫の色はもう尋ねるよすがもなかつた。なんの掩おほいをも持たない古い墓は、新しい大きい石の柱に囲まれていた。いろいろの新しい建物が丘の中腹までひしひしと押しつめて来て、そのなかには遊芸稽古所などという看板も見えた。

頼家公の墳墓の領域がだんだんに狭せばまつてゆくのは、町がだんだんに繁昌してゆくしるしである。むらさきの古い色を懐かしがる私は、町の運命になんの交渉ももたない、一個の旅人たびびとに過ぎない。十年前にくらべると、町はいちじるしく賑やかになつた。多くの旅館は新築をしたのもある。建て増しをしたのもある。温



泉俱樂部クラブも出来た、劇場も出来た。こうして年毎に発展してゆく此の町のまん中にさまよつて、むかしの紫をしの偲んでいる一個の貧しい旅びとであることを、町の人たちは決して眼にも留めないであらう。わたしは冷たい墓と向い合つてしばらく黙つて立つていた。

それでも墓のまえには三束の線香が供えられて、その消えかかつた灰が霜柱のあつい土の上に薄白くこぼれていた。日あたりが悪いので、黒い落葉がそこらに凍り着いていた。墓を拝して帰ろうとして不ふ図見かえると、入口の太い柱のそばに一つの箱が立っていた。箱の正面には「將軍源頼家おみくじ」と書いてあつた。その傍の小さい穴の口には「一錢銅貨を入れると出ます」と書き

添えてあつた。

源氏の将軍が預言者であつたか、売<sup>うらない</sup>卜者であつたか、わたしは知らない。しかし此の町の人たちは、果たして頼家公に霊あるものとして斯<sup>こ</sup>ういうものを設けたのであろうか、あるいは湯治客の一種の慰みとして設けたのであろうか。わたしは試みに一錢銅貨を入れてみると、カラカラという音がして、下の口から小さく封じた活版刷のお神籤<sup>みくじ</sup>が出た。あけて見ると、第五番凶とあつた。わたしはそれが当然だと思つた。将軍にもし霊あらば、どのお神籤にもみんな凶が出るに相違ないと思つた。

修禅寺はいつ詣<sup>ま</sup>つても感じのよいお寺である。寺といえばとかくに薄暗い湿っぽい感じがするものであるが、このお寺ばかりは

高いところ<sup>さわや</sup>に在つて、東南の日を一面にうけて、いかにも明るい爽かな感じ<sup>さわや</sup>をあたえるのが却つて雄大莊嚴の趣を示している。衆<sup>し</sup>生<sup>ゆじよう</sup>をじめじめした暗い穴へ引き摺つてゆくので無くて、赫<sup>かくや</sup>灼<sup>く</sup>たる光明を高く仰がしめると云うような趣がいかにも尊げにみえる。

きようも明るい日<sup>い</sup>が大きい<sup>いらか</sup>藁<sup>わら</sup>を一面に照らして、堂の家根<sup>やね</sup>に立っている幾匹<sup>からじし</sup>の唐獅子の眼を光らせている。脚絆<sup>あし</sup>を穿いたお婆さんが正面の階段の下に腰をかけて、藍<sup>あゐ</sup>のように晴れ渡つた空を仰いでいる。玩具<sup>おもちゃ</sup>の刀をさげた小児<sup>こども</sup>がお百度石に倚りかかつている。大きい桜の木の肌がつやつやと光っている。丘の下には桂川の水の音がきこえる。わたしは桜の咲く四月の頃にここへ来たい

と思った。

避寒の客が相当にあるとは云つても、正月ももう末に近いこの頃は修善寺の町も静かで、宿の二階に坐つてしていると、聞えるものは桂川の水の音と修禅寺の鐘の声ばかりである。修禅寺の鐘は一日に四、五回撞く。時刻をしらせるのではない、寺の勤ごんぎんぎよう行の知らせらしい。ほかの時はわたしもいちいち記憶していないが、夕方の五時だけは確かにおぼえている。それは修禅寺で五時の鐘をつき出すのを合図のように、町の電燈が一度に明るくなるからである。

春の日もこの頃はまだ短い。四時をすこし過ぎると、山につつまれた町の上にはもう夕闇がおりて来て、桂川の水にも鼠色の霏もや

がながれて薄暗くなる。河原に遊んでいる家鴨あひるの群れの白い羽もおぼろになる。川沿いの旅館の二階の欄干にほしてある紅い夜具がだんだんに取り込まれる。この時に、修禅寺の鐘の聲が水にひびいて高くきこえると、旅館にも郵便局にも銀行にも商店にも、一度に電燈の花が明るく咲いて、町は俄かに夜のけしきを作つて来る。旅館はひとしきり忙せわしくなる。大仁から客を運び込んでくる自動車や馬車や人力車の音がつづいて聞える。それが済むとまたひっそりと鎮まつて、夜の町は水の音に占領されてしまう。二階の障子をあけて見渡すと、近い山々はみな一面の黒いかげになつて、町の上には家々の湯けむりが白く迷っているばかりである。

修禅寺では夜の九時頃にも鐘を撞く。

それに注意するのはおそらく一山の僧たちだけで、町の人々の上にはなんの交渉もないらしい。しかし湯治客のうちにも、町の人のうちにも、いろいろの思いをかかえてこの鐘の声を聴いているのもあろう。現にわたしが今泊まっている此の部屋だけでも、新築以来、何百人あるいは何千人の客が泊まって、わたしが今坐っているこの火鉢のまえで、いろいろの人がいろいろの思いでこの鐘を聴いたのであろう。わたしが今無心に掻きまわしている古い灰の上にも、やるせ遺瀨ない女の悲しい涙のあとが残っているかも知れない。温泉場に来ているからと云って、みんなのんきな保養客ばかりではない。この古い火鉢の灰にもいろいろの苦しい悲しい人間の魂が籠こもっているのかと思うと、わたしはその灰をじつと見つ

めているのに堪えられないように思うこともある。

修禪寺の夜の鐘は春の寒さを呼び出すばかりでなく、火鉢の灰の底から何物をか呼び出すかも知れない。宵つ張りの私もここへ来てからは、九時の鐘を聴かないうちに寝ることにした。

(大正7・3「読売新聞」)

妙義の山霧

(上)

笠さをかぶった四十五、六の案内者かみなりを呼んで来てくれました。ゆ  
 うべの雷かみなりは幸いにやみましたが、きょうも雨を運びそうな薄黒い  
 雲が低くまよって、山も麓も一面の霧に包まれています。案内者すげが



とわたしは笠をならべて、霧のなかを爪さき上がりに登って行き  
ました。

私は初めてこの山に登る者です。案内者は当然の順序として、  
まずわたしを白雲山はくうんざんの妙義神社に導きました。社殿は高い石段  
の上にそびえていて、小さい日光にっこうとも云うべき建物です。こう  
いう場所には必ずあるべきはずの杉の大樹が、天と地とを繋ぎ合  
せるように高く高く生い茂って、社前にぬかずく参拝者の頭こうべの上  
をこんもりと暗くしています。私たちはその暗い木の下蔭をたど  
って、山の頂きへと急ぎました。

杉の林は尽きて、さらに雑木ぞうきの林となりました。路のはたには  
秋の花が咲き乱れて、芒すすきの青い葉は旅人たびびとの袖にからんで引き止

めようとします。どこやらでは鶯うぐいすが鳴いています。相も変らぬ爪さき上がりに少しく倦うんで来たわたしは、小さい岩に腰を下ろして巻煙草をすいはじめました。霧が深いのでマツチがすぐに消えます。案内者も立ち停まって同じく煙管きせるを取り出しました。

案内者は正直そうな男で、煙草のけむりを吹く合い間にいろいろの話をして聞かせました。妙義登山者は年々殖ふえる方であるが暑中は比較的にすくない、一年じゅうで最も登山者の多いのは十月の紅葉の時節で、一日に二百人以上も登ることがある。しかし昔にくらべると、妙義の町はたいそう衰えたそうで、二十年前までは二百戸以上をかぞえた人家が今では僅かに三十二戸に減ってしまったと云います。

「なにしろ貸座敷が無くなったので、すっかり寂さびれてしまひましたよ。」

「そうかねえ。」

わたしは巻煙草の吸すい殻がらを捨てて起つと、案内者もつづいて歩き出しました。山霧は深い谷の底から音も無しに動いて来ました。

案内者は振り返りながらまた話しました。上じょう州しゅう 一円に廢娼

を實行したのは明治二十三年の春で、その当時妙義の町には八戸の妓楼ぎろうと四十七人の娼妓があつた。妓楼の多くは取り毀されて桑畑となつてしまつた。磯部いそべや松井田まついだからかよつて来る若い人々のそそり唄も聞えなくなつた。秋になると桑畑には一面に虫が鳴く。こうして妙義の町は年毎に衰えてゆく。

谷川の音が俄かに高くなつたので、話し声はここで一旦消されてしまいました。頂上の方からむせび落ちて来る水が岩や樹の根に堰せかれて、狭い山路を横ぎつて乱れて飛ぶので、草鞋わらじを湿ぬらさずに過ぎる訳には行きませんでした。案内者は小さい石の上をひよいひよいと飛び越えて行きます。わたしもおぼつかない足取りで其の後を追いましたが、草鞋はぬれていい加減に重くなりまりました。

水の音をうしろに聞きながら、案内者はまた話し出しました。

維新前の妙義町は更に繁昌したものだそうで、普通の中仙道は松井田から坂本さかもと、軽井沢かるいざわ、沓掛くつかけの宿しゆくじゆく々々を経て追分おいわけにかかると、そのあいだには横川よこかわの番所があり、碓氷うすい

の関所があるので、旅人の或る者はそれらの面倒を避けて妙義の町から山伝いに信州の追分へ出る。つまり此の町が関の裏路になつていたので。山ふところの夕暮れに歩み疲れた若い旅人が青黒い杉の木立こたちのあいだから、妓楼の赤い格子を仰ぎ視た時には、沙漠でオアシスを見いだしたように、かれらは忙いそがわしくその軒下に駈け込んで、色の白い山の女に草鞋の紐ひもを解かせたでしょう。「その頃は町もたいそう賑やかだったと、年寄りが云いますよ。」

「つまり筑波つくばの町のような工合だね。」

「まあ、そうでしょうよ。」

霧はいよいよ深くなつて、路をさえぎる立木の梢こずえから冷たい雫しずくがばらばらと笠の上に降つて来ました。草鞋はだんだんに重くな

りました。

「旦那、気をおつけなさい。こういう陰った日には山蛭やまびるが出ます。」

「蛭が出る。」

わたしは慌てて自分の手足を見廻すと、たった今、ひやりとしたのは樹のしずくばかりではありませんでした。普通よりはやや大きいかと思われる山蛭が、足袋と脚絆との間を狙って、左の足首にしつかりと吸い付いていました。吸い付いたが最後、容易に離れまいとするのを無理に引きちぎって投げ捨てると、三角に裂けた疵きずぐち口まっかから真紅な血が止め度もなしにぽとぽと流れて出ます。

「いつの間にか、やられた。」

こう云いながらふと気が付くと、左の腕もむずむずするようです。袖をまくって覗いて見ると、どこから這い込んだのか二の腕にも黒いのがまた一匹。慌てて取って捨てましたが、ここからも血が湧いて出ます。案内者の話によると、蛭の出るのは夏季の陰った日に限るので、晴れた日には決して姿を見せない。丁度きょうのような陰ってしめった日に出るのだそうで、わたしはまことに有難い日に来合せたのでした。

なにしろ血が止まらないのには困りました。見ているうちに左の手はぬらぬらして真紅になります。もう少しの御辛抱ですと云いながら案内者は足を早めて登って行きます。わたしもつづいて

急ぎました。

路はやがて下りくだになつたようですが、わたしはその「もう少し」というところを目的めあてに、ただ夢中で足を早めて行きましたからよくは記憶していません。それから愛宕神社あたごの鳥居というのが眼にはいりました。ここから路は二筋に分かれているのを、私たちは右へ取つて登りました。路はだんだんに峻けわしくなつて来て、岩の多いのが眼につきました。

妙義葡萄酒ぶどうしゆ醸造所たじというのに辿り着いて、ふたりは縁台に腰をかけました。家のうしろには葡萄園があるようですが、表構えは茶店のような作り方で、ここでは登山者に無代ただで梅酒というのを飲ませます。喉のどが渴かわいているので、わたしは舌鼓を打つて遠慮



なしに二、三杯飲みました。そのあいだに案内者は家内から藁わらを二、三本貫つて来て、藁の節を蛭の吸い口に当てて堅く縛つてくれました。これはどこでもやることで、蛭の吸い口から流れる血はこうして止めるよりほかは無いのです。血が止まって、わたしも先ずほつとしました。

それにしても手足に付いた血の痕あとを始末しなければなりません。足の方はさのみでもありませんでしたが、手の方はべっとり紅くなっています。水を貰つて洗おうとすると、ただ洗つても取れるものではない、一旦は水を口にふくんで、いわゆるふくみず水にして手てぬぐい拭か紙いに湿しめし、しずかに拭き取るのが一番よろしいと、案内者が教えてくれました。その通りにしてハンカチーフで拭き取る

と、なるほど綺麗に消えてしまいました。

「むかしは蛭に吸われた旅の人は、妙義の女郎の唧み水で洗って貰ったもんです。」

案内者は煙草を吸いながら笑いました。わたしもさっきの話を思い出さずにはいられませんでした。

信州路から上州へ越えてゆく旅人が、この山蛭に吸われた腕の血を妙義の女に洗って貰ったのは、昔からたくさんあったに相違ありません。うす暗い座敷で行燈あんどうの火が山風にゆれています。

江戸絵を貼った屏風びょうぶをうしろにして、若い旅人が白い腕をまくつてみると、若い遊女が紅さした口に水をふくんで、これを三栖みす紙がみにひたして男の腕を拭いています。窓のそとでは谷川の音がき

こえます。こんな舞台が私の眼の前に夢のように開かれました。

しかも其の美しい夢はたちまちに破られました。案内者は笠を持って起たち上がりました。

「さあ、旦那、ちつと急ぎましょう。霧がだんだんに深くなつて来ます。」

旅人と遊女の舞台は霧に隠されてしまいました。わたしも草鞋の紐を結び直して起きました。足もとには岩が多くなつて来ました。頭の上には樹がいよいよ繁つて来ました。わたしは山蛭を恐れながら進みました。谷に近い森の奥では懸かけ巢すが頻しきりに鳴いています。鸚おうむ鵒むのように人の口真似をする鳥だとは聞いていましたが、見るのは初めてです。枝から枝へ飛び移るのを見ると、形は鳩はとの

ようで、腹のうす赤い、羽のうす黒い鳥でした。小鳥を捕つて食う悪鳥だと云うことです。ジイジイという鳴く音を立てて、なんだか寂しい声です。

岩が尽きると、また冷たい土の路になりました。ひと足踏むごとに、土の底からにじみ出すようなうるおいが草鞋に深く浸み透つて来ます。狭い路の両側には芒すすきや野菊のたぐいが見果てもなく繁り合つて、長く長く続いています。ここの山やまぶき吹は一重が多いと見えて、みんな黒い実を着けていました。

よくは判りませんが、一旦くだつてから更に半里ぐらいも登つたでしょう。坂路はよほど急になつて、仰げば高い窟いわやの上に一本の大きな杉の木が見えました。これが中の嶽なかたけの一本杉と云うので、

われわれは既に第二の金洞山きんとうざんに踏み入っていたのです。金洞山は普通に中の嶽と云うそうです。ここから第三の金雞山きんけいざんは真正面に見えるのだそうですが、この時に霧はいよいよ深くなつて来て、正面の山どころか、自分が今立っている所の一本杉の大樹さえも、半分から上は消えるように隠れてしまつて、枝をひろげた梢は雲に駕のる妖怪のように、不思議な形をしてただ朦朧もつろうと宙に泛うかんでいるばかりです。峰も谷も森も、もうなんにも見えなくなつてしまいました。「山あひの霧はさながら海に似て」という古人の歌に嘘はありません。しかも浪かと誤まる松風の声は聞えませんでした。山の中は気味の悪いほどに静まり返つて、ただ遠い谷底で水の音がひびくばかりです。ここでも鶯の声をときどき

に聞きました。

(下)

一本杉の下には金洞舎もとという家があります。この山の所有者の住居で、かたわら登山者の休憩所に充ててあるのです。二人はこの縁台を仮りて弁当をつかいました。弁当は菱屋で拵こしらえてくれたもので、山女の塩辛く煮たのと、玉子焼と蓮根れんこんと奈良漬の胡瓜きとを菜さいにして、腹のすいているわたしは、折詰の飯をひと粒も残さずに食ってしまいました。わたしはここで絵葉書を買って記念のスタンプを捺おして貰いました。東京の友達にその絵葉書を

送ろうと思つて、衣兜かくしから万年筆を取り出し書きはじめると、あたかもそれを覗き込むように、冷たい霧は黙つてすうと近寄つて来て、わたしの足から膝へ、膝から胸へと、だんだんに這い上がつて来ます。葉書の表は見るみる湿ぬれて、インキはそばから流れてしまいます。わたしは癩癬をおこして書くのをやめました。そうして、自分も案内者もこの家も、あわせて押し流して行きさうな山霧の波に向き合つて立ちました。

わたしは日露戦役の当時、げんかいなだ玄海灘でおそろしい濃霧に逢つたことを思い出しました。海の霧は山よりも深く、甲板の上で一尺さきに立っている人の顔もよく見えない程でした。それから見ると、今日の霧などはほとんど比べ物にならない位ですが、その時

と今とはこつちの覚悟が違います。戦時のように緊張した気分をもっていない今のわたしは、この山霧に対しても甚だしく悩まされませんでした。

二人がここを出ようとすると、下の方から七人連れの若い人が来ました。磯部の鉱泉宿でゆうべ一緒になった日本橋辺の人たちです。これも無論に案内者を雇っていましたが、行く路は一つです。ここからこつちも一緒になって登りました。途中に菅公硯すざりの水というのがあります。菅すが原が道みち真まは七歳の時までこの麓に住んでいたのだそうで、麓には今も菅原村の名が残っていると云います。案内者は正直な男で、「まあ、ともかくも、そういう伝い説つたえになっ

ています。」と、余り勿も体たいぶらずに説明してくれました。



「さあ、来たぞ。」

前の方で大きな声をする人があるので、わたしも気がついて見あげると、名に負う第一の石門せきもんは蹄鉄ていてつのような形をして、霧の間から屹きつと聳そびえていました。高さ十丈じゅうに近いとか云います。見聞の狭いわたしは、はじめてこういう自然の威力の前に立ったのですから、唯あつと云ったばかりで、ちよつと適当な形容詞を考え出すのに苦しんでいるうちに、かの七人連れも案内者も先に立つてずんずん行き過ぎてしまいます。私もおくれまいと足を早めました。案内者をあわせて十人の人間は、鯨くじらに呑まれる鰯いわしの群れのように、石門の大きな口へだんだんに吸い込まれてしまいました。第一の石門を出る頃から、岩の多い路はいちじるしく屈曲し

て、あるいは高く、あるいは低く、さらに半月形をなした第二の石門をくぐると、蟹かにの横這いとか、釣瓶つるべさがりとか、片手繰りとか、いろいろの名が付いた難所に差しかかるのです。なにしろ碌ろく々くろくに足がかりも無いような高いなめらかな岩の間を、長い鉄のくさりにすがって降りるのですから、余り楽ではありません。案内者はこんなことを云って嚇おどしました。

「いまは草や木が茂っていて、遠い谷底が見えないからまだ楽です。山が骨ばかりになってしまつて、下の方が遠く幽かすかに見えた日には、大抵な人は足がすくみますよ。」

成程そうかも知れませんが。第二第三の石門をくぐり抜ける間は、わたしも少しく不安に思いました。みんなも黙って歩きました。

もし誤まってひと足踏みはずせば、わたしもこの紀行を書くの自由を失ってしまわなければなりません。第四の石門まで登り詰めて、武尊岩ぶそんいわの前に立った時には、人も我れも汗びつしよりになっていました。日本やまと武尊たけるのみこともこの岩まで登って来て引つ返されたと言うので、武尊岩の名が残っているのだそうです。そのそばには天狗の花畑というのがあります。いずこの深山みやまにもある習いで、四季ともに花が絶えないので此の名が伝わったのでしよう。今は米躑躅こめつっじの細かい花が咲いていました。

日本武尊にならつて、わたしもここから引つ返しました。当人がしいて行きたいと望めば格別、さもなければ妄みだりにこれから先へは案内するなど、警察から案内者に云い渡してあるのだそうで

す。

下山げざんの途中は比較的比較的に楽楽でした。来た時とは全く別の方向を取って、水の多い谷底の方へ暫く降しばらつて行きますと、さらに草や木の多い普通の山路に出ました。どんなに陰陰つた日でも、正午前後には一旦明るくなるのだそうですが、今日はあいにくに霧が晴れませんでした。面白そうに何か騒いでいる、かの七人連れをあとに残して、案内者と私とは霧の中を急いで降りました。足の方が少しく楽楽になったので、わたしはまた例のおしやべりを始めますと、案内者もこころよく相手相手になって、帰途かえりにもいろいろの話をしてくれました。その中にこんな悲劇がありました。

「旦那は妙義神社の前に田沼たぬま神官の碑たぬまというのが建っているのを

ご覧でしたらう。あの人は可哀そうに斬り殺されたんです。明治三十一年の一月二十一日に……。」

「どうして斬られたんだね。」

「相手はまあ狂人ですね。神官のほかに六人も斬ったんですもの。それは大変な騒ぎでしたよ。」

妙義町ひらけて以来の椿事ちんじだと案内者は云いました。その日は大雪の降った日で、正午を過ぎる頃に神社の外で何か大きな声を出して叫ぶ者がありました。神官の田沼万次郎まんじろうが怪しんで、折柄そこに居合せた宿屋の番頭に行つて見て来いと云い付けました。番頭が行つて見ると、ひとりの若い男が袒ぬぎはだになつて雪の中に立っているのです。その様子がどうも可怪おかしいので、お前は誰だと

声をかけると、その男はいきなりに刀を引き抜いて番頭を目がけて斬つてかかりました。番頭は驚いて逃げたので幸いに無事でしたが、その騒ぎを聞いて社務所から駆け付けて来た山伏の何某なにがしは、出合いがしらに一と太刀斬られて倒れました。これが第一の犠牲でした。

男はそれから血刀を振りかざして、まっしぐらに社務所へ飛び込みました。そうして、不意に驚く人々を片端から追い詰めて、あたるに任せて斬りまくったのです。田沼神官と下女とは庭に倒れました。神官の兄と弟は敵を捕えようとして内と庭とで斬られました。またそのほかにも二人の負傷者ができました。庭から門前の雪は一面に紅くひたされて、見るからに物すごい光景を現じ

ました。血に狂った男はまだ鎮まらないで、相手嫌わずに雪の中を追い廻すのですから、町の騒ぎは大変でした。

半鐘が鳴る。消防夫が駈け付ける。町の者は思い思いの武器を持って集まる。四方八方から大勢が取り囲んで攻め立てたのですが、相手は死に物狂いで容易に手に負えません。そのうちに一人の撃ったピストルが男の足にあたって思わず小膝を折ったところへ、他の一人の槍がその脇腹にむかつて突いて来ました。もうこれ迄までです。男の血は槍やとびぐち口や棒やすき鋤やくわ鋏を染めて、からだは雪に埋められました。検視の来る頃には男はもう死んでいました。神官と山伏と下女とは即死です。ほかの四人は重傷ながら幸いに命をつなぎ止めました。わたしの案内者も負傷者を病院へ運ん

だ一人だそうです。

「そこで、その男は何者だね。」

わたしは縁台に腰をかけながら訊きました。くだりの路も途中からはもと来た路と一つになって、私たちはふたたび一本杉の金洞舎の前に出たのです。案内者も腰をおろして、茶を飲みながらまた話しました。

磯部から妙義へ登る途中に、西横野にしよこのという村があります。かの惨劇の主人公はこの村の生まれで、前年の冬に習志野ならしのの聯隊から除隊になって戻って来た男です。この男の兄というのは去年から行くえ不明になっているので、母もたいそう心配していました。すると、前に云った二十一日の朝、彼は突然に母にむかって、こ



れから妙義へ登ると云い出したのです。この大雪にどうしたのかと母が不思議がりますと、実はゆうべ兄にいさんに逢つたと云うのです。ゆうべの夢に、妙義の奥の箱はこぶち淵ふちという所へ行くと、黒い淵の底から兄さんが出て来て、おれに逢いたければ明日あしたここへ尋ねて来て、淵にむかつて大きな声でおれを呼べ、きつと姿を見せてやろうと云う。そんなら行こうと堅く約束したのだから、どうしても行かなければならないと云い張つて、母が止めるのも肯きかずにととうとう出て行つたのです。それからどうしたのかよく判りません。人を斬つた刀は駐在所の巡査の剣を盗み出したのだと云います。

しかし其の箱淵へ尋ねて行く途中であつたのか、あるいは淵に

臨んで幾たびか兄を呼んでも答えられずに、むなしく帰る途中であつたのか、それらのことはやはり判りません。とにかくに意趣いしゆも遺恨もない人間を七人までも斬つたと云うのは、考えてもおそろしい事です。気が狂つたに相違ありますまい。しかも大雪のふる日に妙義の奥に分け登つて、底の知れない淵にむかつて、恋しい兄の名を呼ぼうとした弟の心を思いやれば、なんだか悲しい悼いたましい気もします。殺された人々は無論気の毒です。殺した人も可哀そうです。その箱淵という所へ行つて見たいような気もしましたが、ずっと遠い山奥だと聞きましたからやめました。

帰途かえりにも葡萄酒醸造所に寄つて、ふたたび梅酒の御馳走になりました。アルコールがはいっていないのですから、わたしには口

当りがたいそう好よいのです。少々ばかりのお茶代を差し置いてここを出る頃には、霧も雨に変わって来たようですから、いよいよ急いで宿へ帰り着いたのは丁度午後三時でした。登山したのは午前九時頃でしたから、かれこれ六時間ほどを山めぐりに費した勘定です。

菱屋で暫く休息して、わたしは日の暮れないうちに磯部へ戻ることにしました。案内者に別れて、菱屋の門かどを出ると、笠の上にはポツポツという音がきこえます。蛭ではありません。雨の音です。山の上からは冷たい風が吹きおろして来ました。貸座敷の跡だと云うあたりには、桑の葉がぬれて戦そよいでいました。

(大正3・9「木太刀」)

## 磯部の若葉

きようもまた無数の小猫の毛を吹いたような細かい雨が、磯部いそべの若葉を音もなしに湿ぬらしている。家々の湯の烟りも低く迷っている。疲れた人のような五月の空は、時どきに薄く眼をあいて夏らしい光りを微かに洩らすかと思うと、又すぐに睡ねむそうにどんよりと暗くなる。鶏が勇ましく歌つても、雀がやかましく囀さえずつても、  
上州じょうしゅうの空は容易に夢から醒めそうもない。

「どうも困ったお天気でございます。」

人の顔さえ見れば先ず斯こういうのが此の頃の挨拶になつてしまつた。廊下や風呂場で出逢う逗とまりゆう留の客も、三度の膳を運んで来る旅館の女中たちも、毎日この同じ挨拶を繰り返している。わたしも無論その一人である。東京から一つの仕事を抱えて来て、此処ここで毎日原稿紙にペンを走らしている私は、ほかの湯治客ほどに雨の日のつれづれに苦しまないのであるが、それでも人の口真似をして「どうも困ります」などと云っていた。

実際、湯治とか保養とかいう人たちは別問題として、上州のこころは今が一年じゆうで最も忙がしい養ようさん蚕さん季節で、なるべく湿ぬれた桑の葉をお蚕こさまに食わせたくなくと念じている。それを考

えると「どうも困ります」も、決して通り一遍の挨拶ではない。ここらの村や町の人たちを取っては重大の意味をもっていることになる。土地の人たちに出逢った場合には、わたしも真面目に「どうも困ります」と云うことにした。

どう考えても、きょうも晴れそうもない。傘をさして散歩に出ると、到る処の桑畑は青い波のように雨に畑っている。妙義みょうぎの山も西に見えない。赤城あかぎ、榛名はるなも東北に陰っている。蓑笠みのかさの人が桑を荷になつて忙がしそうに通る、馬が桑を重そうに積んでゆく。その桑は苴むしろにつつんであるが、柔らかそうな青い葉は茹ゆでられたようにぐったりと湿れている。私はいよいよ痛切に「どうも困ります」を感じずにはいられなくなった。そうして、鉛のような雨

雲を無限に送り出して来る、いわゆる「上<sup>じょう</sup>毛<sup>もう</sup>の三名山」なるものを呪わしく思うようになった。

磯部には桜が多い。磯部桜といえは上州の一つの名所になっていて、春は長野<sup>ながの</sup>や高崎<sup>たかさき</sup>、前橋<sup>まえばし</sup>から見物に来る人が多いと、土地の人は誇っている。なるほど停車場に着くと直ぐに桜の多いのが誰の眼にもはいる。路ばたにも人家の庭にも、公園にも丘にも、桜の古木が枝をかわして繁っている。磯部の若葉はすべて桜若葉である<sup>と</sup>云つてもいい。雪で作つたような向い<sup>ばね</sup>の鳩の群れがたぐさんに飛んで来ると、湯の町を一ぱいに掩つている若葉の光りが生きたように青く輝いて来る。ごむほおずきを吹くような蛙<sup>かわず</sup>の

声が四方に起ると、若葉の色が愁うれうるように青黒く陰つて来る。

晴れの使いとして鳩の群れが桜の若葉をくぐつて飛んで来る日には、例の「どうも困ります」が、暫く取り払われるのである。その使いも今日は見えない。宿の二階から見あげると、妙義みちにつづく南の高い崖みちは薄黒い若葉に埋められている。

旅館の庭には桜のほかあおぎり えんじゆに青梧と槐とを多く栽うえてある。痩せ

た梧の青い葉はまだ大きい手を拵げないが、古い槐の新しい葉は枝もたわわに伸びて、軽い風にも驚いたように顛ふるえている。そのほかに梅と楓と躑つじ躑と、これらが寄り集まって夏の色を緑に染めているが、これは幾分の人工を加えたもので、門かどを一步出ると、自然はこの町の初夏を桜若葉で彩いろどろうとしていることが直ぐにう



なずかれる。

雨が小歇こやみになると、町の子供や旅館の男が箒ほうきと松明たいまつを持って桜の毛虫を燻やいでいる。この桜若葉を背景にして、自転車が通る。桑を積んだ馬が行く。方々の旅館で昼替えを始める。逗留客が散歩に出る。芸妓げいしやが湯にゆく。白い鳩が餌えさをあさる。黒い燕つばめが往来なかで宙返りを打つ。夜になると、蛙が鳴く、梟ふくろうが鳴く。門付けかどづの芸人が来る。碓氷川うすいがわの河鹿かじかはまだ鳴かない。

おとしの夏ここへ来たときに下磯部の松岸寺しょうがんじへ参詣したが、今年も散歩ながら重ねて行った。それは「どうも困ります」の陰った日で、桑畑を吹いて来るしめった風は、宿の浴衣ゆかたの上にフラ

ンネルをかさねた私の肌に冷やびやと沁しみる夕方であつた。

寺は安あんなか中みちを東に切れた所で、ここら一面の桑畑が寺内ま

で余ほど侵入しているらしく見えた。しかし、由緒ある古刹こせつであ

ることは、立派な本堂と広大な墓地とで容易に証明されていた。

この寺は佐々木盛綱ささきもりつなとおおのくろべえと大野九郎兵衛との墓を所有しているの

で名高い。佐々木は建けん久きゆうのむかし此の磯部に城を構えて、今

も停車場の南に城山の古蹟を残している位であるから、苔こけの蒼い

墓石は五輪塔のような形式でほとんど完全に保存されている。こ

れに列ならんで其の妻の墓もある。その傍には明治時代に新しく作ら

れたという大きい石碑もある。

しかし私に取つては、大野九郎兵衛の墓の方が注意を惹ひいた。

墓は大きい台石の上に高さ五尺ほどの楕円形の石を据えてあつて、石の表には慈望遊謙墓、右に寛延〇年と彫つてあるが、磨滅しているので何年かよく読めない。墓のありかは本堂の横手で、大きい杉の古木をうしろにして、南にむかつて立っている。その傍にはまた高い桜の木が聳えていて、枝はあたかも墓の上を掩うように大きく差し出ている。周囲にはたくさんの古い墓がある。杉の立木は昼を暗くする程に繁っている。「仮名手本忠臣蔵」の作者竹田出雲たけだいずもに斧九太夫おのくだゆうという名を与えられて以来、ほとんど人非人のモデルであるように、あまねく世間に伝えられている大野九郎兵衛という一個の元禄武士げんろくは、ここを永久の住み家と定め

ているのである。

一昨年初めて参詣した時には、墓のありが知れないので寺僧に頼んで案内してもらった。彼は品のよいにやくそう若僧で、いろいろ詳しく話してくれた。その話に拠よると、その当時のこの磯部には浅野家あさの所領の飛び地が約三百石ほどあった。その縁故に因つて、大野は浅野家滅亡の後ここに来て身を落ちつけたらしい。そうして、大野とも云わず、九郎兵衛とも名乗らず、単に遊謙ゆうけんと称する一個の僧となつて、小さい草堂そうどうを作つて朝夕に経を読み、かたわらには村の子供たちを集めて読み書きを指南していた。彼が直筆じきひつの手本というものが今も村に残っている。磯部に於ける彼は決して不人望ではなかつた。弟子たちにも親切に教えた、いろいろの慈善をも施した、碓氷川の堤防も自費で修理した。墓碑に

寛延の年号を刻んであるのを見ると、よほど長命であつたらしい。独身の彼は弟子たちの手に因つて其の亡骸なきがらをここに葬られた。

「これだけ立派な墓が建てられているのを見ると、村の人にはよほど敬慕されていたんでしようね。」と、わたしは云つた。

「そうかも知れません。」

僧は彼に同情するような柔らかい口振りであつた。たとえ不忠者にもせよ、不義者にもあれ、縁あつて我が寺内に骨を埋めたからは、平等の慈悲を加えたいという宗教家の温かい心か、あるいは別に何らかの主張があるのか、若い僧の心持は私には判らなかつた。油蟬の暑苦しく鳴いている木の下で、わたしは厚く礼を云つて僧と別れた。僧の瘦せた姿は大きな芭蕉ばしやうの葉のかげへ隠れ

て行つた。

自己の功名の犠牲として、罪のない藤戸ふじとの漁民を惨殺した佐々木盛綱は、忠勇なる鎌倉武士の一人として歴史家に讃美されている。復讐ふくしゅうの同盟に加わることを避けて、先君の追福と陰徳とに余生を送つた大野九郎兵衛は、不忠なる元禄武士の一人として浄瑠璃じょうるりの作者にまで筆誅されてしまった。私はもう一度かの僧を呼び止めて、元禄武士に対する彼の詐いつわらざる意見を問ただい糺して見ようかと思つたが、彼の迷惑を察してやめた。

今度行つてみると、佐々木の墓も大野の墓も旧もとのまままで、大野の墓の花筒には白いつつじが生けてあつた。かの若い僧が供えたのではあるまいか。わたしは僧を訪わずに歸つたが、彼の居間ら

しい所には障子が閉じられて、低い四つ目垣の裾すそに芍薬しゃくやくが紅あかく咲いていた。

旅館の門を出て右の小道をはいると、丸い石を列べた七、八段の石段がある。登り降りには余り便利でない。それを登り尽くした丘の上に、大きい薬師堂が東にむかつて立っていて、紅白の長い紐を垂れた鰐わにぐち口が懸かっている。木連格子きつれの前には奉納の絵馬もたくさんに懸かっている。めの字を書いた額も見える。千社せんじや札ふだも貼つてある。右には桜若葉の小高い崖がけをめぐらしているが、境内はさのみ広くもないので、堂の前の一段低いところにある家々の軒は、すぐ眼の下に連なつて見える。わたしは時にここへ散

歩に行つたが、いつも朝が早いので、参詣らしい人の影を認めたことはなかつた。

それでもたつた一度若い娘が拜んでいるのを見たことがある。

娘は十七、八らしい。髪は油気の薄い銀杏いちようがえしに結つて、紺こんがすり

飛白ひとえものの単衣ひとえものに紅い帯を締めていた。その風体はこの丘の下

にある鉱泉会社のサイダー製造にかよつてゐる女工らしく思われ

た。色は少し黒いが容貌きりようは決して醜みにくい方ではなかつた。娘は湿

れた番傘を小脇に抱えたままで、堂の前に久しくひざまずいてい

た。細かい雨は頭の上の若葉から漏れて、娘のそそけた鬢びんに白い

雫しずくを宿しているのも何だか酷むごたらしい姿であつた。わたしは暫く

立つていたが、娘は容易に動きそうもなかつた。



堂と真向いの家はもう起きていた。家の軒には桑籠くわかごがたくさん積まれて、若い女房が蚕かいこのだなの前にたすき纏たすきがけで働いていた。若い娘は何を祈っているのか知らない。若い人妻は生活に忙がしそ  
うであった。

どこかで蛙が鳴き出したかと思うと、雨はさアさアと降って来た。娘はまだ一心に拝んでいた。女房は慌てて軒下の桑籠を片付け始めた。

(大正5・6「木太刀」)

## 栗の花

栗くりの花、柿の花、日本でも初夏の景物にはかぞえられています  
が、俳味に乏しい我々は、栗も柿もすべて秋の梢にのみ眼をつけ  
て、夏のさびしい花にはあまり多くの注意を払っていませんでし  
た。秋の木の実を見るまでは、それらはほとんど雑木ぞうきに等しいも  
ののように見なしていましたが、その軽けい蔑べつの眼は歐洲大陸へ渡  
つてから余ほど變つて来ました。この頃の私は決して栗の木を軽

蔑みしようとは思いません。必ず立ちどまって、その梢をしばらく  
瞰みあげるようになりました。

ひと口に栗と云つても、ここらの国々に多い栗の木は、普通に  
ホース・チェストナツトと呼ばれて、その実を食うことは出来な  
いと云います。日本でいうどんぐりのたぐいであるらしく思われ  
る。しかしその木には実に見事な大きいのがたくさんあつて、花  
は白と薄紅との二種あります。倫ロンドン敦市中にも無論に多く見られ  
るのですが、わたしが先ず軽蔑の眼を拭ぬぐわせられたのは、キウ・  
ガーデンをたずねた時でした。

五月中旬からロンドンも急に夏らしくなつて、日曜日の新聞を  
見ると、ピカデリー・サーカスにゆらめく青いパラソルの影、チ

ヤーリング・クロスに光る白い麦藁帽むぎわらの色、ロンドンももう夏のシーズンに入ったと云うような記事がみえました。その朝に高田商会のT君がわざわざ誘いに来てくれて、きようはキウ・ガーデンへ案内してやろうと云う。

早速に支度をして、ベーカーストリートの停車場から運ばれてゆくと、ガーデンの門前にゆき着いて、先ずわたしの眼をひいたのは、かのホース・チエストナツトの並木でした。日本の栗の木のいたずらにひよろひよろしているのとは違つて、こんもりと生い茂つた木振りきぶといい、葉の色といい、それが五月の明るい日の光にかがやいて、真昼の風に青く揺らめいているのはいかにも絵にでもありそうな姿で、私はしばらく立ち停まつてうっかりと眺

めていました。

その日は帰りにハンプトン・コートへも案内されました。コートに接続して、プッシー・パークと云うのがあります。この公園で更に驚かされたのは、何百年を経たかと思われるような栗の大木が大きな輪を作つて列ならんでいることでした。見れば見るほど立派なもので、私はその青い下蔭に小さくたたずんで、再びうっかりと眺めていました。ハンプトン・コートには楡にれの立派な立木もあります。到底この栗の林には及びませんでした。

あくる日、近所の理髪店へ行つて、きのうはキウ・ガーデンからハンプトン・コートを廻つて来たという話を見ると、亭主はあの立派なチェストナットを見て来たかと云いました。ここらでも

その栗の木は名物になっているとみえます。その以来、わたしも栗の木に少なからぬ注意を払うようになって、公園へ行つても、路ばたを歩いてても、いろいろの木立こだちのなかで先ず栗の木に眼をつけるようになりました。

それから一週間ほどたって、私は例のストラッドフォード・オン・アヴォンに沙翁さおうの故郷をたずねることになりました。そうして、ここでアーヴィングが「スケッチ・ブック」の一節を書いたとか伝えられているレッド・ホース・ホテルという宿屋に泊まりました。日のくれる頃、案内者のM君O君と一緒にアヴォンの河のほとりを散歩すると、日本の卵うの花に似たようなメー・トリートリーの白い花がそこらの田舎家の垣からこぼれ出して、うす明るいト

ワイライトの下にむら消えの雪を浮かばせているのも、まことに初夏のたそがれらしい静寂な気分を誘い出されましたが、更にわたしの眼を惹いたのはやはり例の栗の立木でした。河のバンクには栗と柳の立木がつづいています。

ここらの栗もプツシー・パークに劣らない大木で、この大きい葉のあいだから白い花がぼんやりと青い水の上に映って見えます。その水の上には白鳥が悠々と浮かんでいて、それに似たような白い服を着た若い女が二人でボートを漕いでいます。M君の動議で小船を一時間借りることになって、栗の木の下にある貸船屋に交渉すると、亭主はすぐに承知して、そこに繋いである一艘の小船を貸してくれて、河下の方へあまり遠く行くなと注意してくれま

した。承知して、三人は船に乗り込みましたが、私は漕ぐことを知らないのです、櫂かいの方は両君にお任せ申して、船のなかへ仰向けに寝転んでしまいました。

もう八時頃であろうかと思われましたが、英国の夏の日はなかなか暮れ切りません。蒼白い空にはうす紅い雲がところどころに流れています。両君の櫂もあまり上手ではないらしいのですが、流れが非常に緩いので、船は静かに河下へくだって行きます。云い知れないのんびりした気分になって、私は寝転びながら岸の上をながめていると、大きい栗の梢を隔てて沙翁記念劇場の高い塔が丁度かの薄紅い雲のしたに聳えています。その塔には薄むらさきの藤の花がからみ付いていることを、私は昼のうちに見て置き



ました。

船はいい加減のところまで下ったので、さらに方向を転じて上流の方へ遡さかのぼることになりました。灯の少ないここの町はだんだんに薄暗く暮れて来て、栗の立木も唯ひと固まりの暗い影を作るようになりましたが、空と水とはまだ暮れそうな気色けしきもみえないので、水明かりのする船端ふなばたには名も知れない羽虫の群れが飛び違っています。白鳥はどこまぎたばこの巣へ帰ったのか、もう見えなくなりました。起き直って、巻まきたばこ 蓑すいを一本すって、その契すい殻がらを水に投げ込むと、あたかもそれを追うように一つの白い花がゆらゆらと流れ下って来ました。透かしてみると、それは栗の花でした。

## 栗の花アヴォンの河を流れけり

句の善悪はさておいて、これは実景です。わたしは幾たびか其の句を口のうちに繰り返しているあいだに、船は元の岸へ戻つて来ました。両君は櫂を措おいて出ると、私もつづいて出ました。貸船屋の奥には黄いろい蠟燭ともが点つています。亭主が出て来て、大きい手の上に船賃を受けとつて、グードナイトとただ一言、ぶつきらぼうに云いました。

岸へあがつて五、六間けんゆき過ぎてから振り返ると、低い貸船屋も大きい栗の木もみな宵闇のなかに沈んで、河の上がただうす白く見えるばかりでした。どこかで笛の声が遠くきこえました。ホ

テルへ帰ると、われわれの部屋にも蝋燭がともしてありました。

ホテルの庭にも大きい栗の木があります。いつの間に空模様が変わったのか、夜なかになると雨の音がきこえました。枕もとの蝋燭を再びともして、カーテンの間から窓の外をのぞくと、雨の雫は栗の葉をすべって、白い花が暗いなかにはろほろと落ちていました。

夜の雨、栗の花、蝋燭の灯、アーヴィングの宿った家——わたしは日本を出発してから曾て経験したことのないような、しみみりとした安らかな気分になって、沙翁の故郷にこの一夜を明かしました。明くる朝起きてみると、庭には栗の花が一面に白く散っていました。

(大正八年五月、倫敦にて——大正8・7「読売新聞」)

## ランス紀行

六月七日、午前六時頃にベッドを這い降りて寒暖計をみると八十度。きょうの暑さも思いやられたが、ぐずぐずしてはいられない。同宿のI君をよび起して、早々に顔を洗って、紅茶とパンのみ込んで、ブルヴァー・ド・クリシーの宿を飛び出したのは七時十五分前であつた。

How to See the battlefields——抜目のないトーマス・クツクの巴<sup>パ</sup>

リ支店では、この四月からこういう計画を立てて、仏蘭西戦場の団体見物を勧誘している。われわれもその団体に加入して、きょうこのランスの戦場見物に行こうと思ひ立つたのである。切符はきのうのうちに買ってあるので、今朝はまっすぐにガル・ド・レストの停車場へ急いでゆく。

宿からはさのみ遠くもないのであるが、パリへ着いてまだ一週間を過ぎない我々には、停車場の方角がよく知れない。おまけに電車はストライキの最中で、一台も運転していない。その影響で、タキシードも容易に見付からない。地図で見当をつけながら、ともかくもガル・ド・レストへゆき着いたのは、七時十五分頃であった。七時二十分までに停車場へ集合するという約束であったが、

クツクの帽子をかぶった人間は一人もみえない。停車場は無暗むやみに混雑している。おぼつかないフランス語でクツクの出張所をたずねたが、はつきりと教えてくれる人がない。そこらをまごまごしているうちに、七時三十分頃であろう、クツクの帽子をかぶった大きい男をようよう見付け出して、あの汽車に乗るのだと教えてもらった。

混雑のなかをくぐりぬけて、自分たちの乗るべき線路のプラットホームに立って、先ずほつとした時に、ロンドン倫敦で知己ちぎになったO君とZ君とが写真機械携帯で足早にはいつて来た。

「やあ、あなたもですか。」

「これはいい道連れが出来ました。」

これできようの一行中に四人の日本人を見いだしたわけである。たがいに懐かしそうな顔をして、しばらく立ち話をしていると、クツクの案内者が他の人々を案内して来て、レザーヴしてある列車の席をそれぞれに割りあてる。日本人はすべて一室に入れられて、そのほかに一人の英国紳士が乗り込む。紳士はもう六十に近い人であろう、容貌といい、服装といい、いかにも代表的のイングリッシュ・ゼントルマンらしい風采ふうさいの人物で、丁寧えしやくに会釈まきたばして我々の向うに席を占めた。O君があわてて喫すいかけた巻。莨この火を消そうとすると、紳士は笑いながら徐しずかに云った。

「どうぞお構いなく……。わたしも喫すいます。」

七時五十三分に出る筈の列車がなかなか出ない。一行三十余人



はことごとく乗り込んでしまつても、列車は動かない。八時を過ぎて、ようように汽笛は鳴り出したが、速力はすこぶる鈍い。にぶ一時間ほども走ると、途中で不意に停車する。それからまた少し動き出したかと思うと、十分ぐらいでまた停車する。英国紳士はクツクの案内者をつかまえて其の理由を質問していたが、案内者も困った顔をして笑っているばかりで、詳しい説明をあたえない。こういう始末で、一進一止、はかど 捗らないことおびただしく、われわれももううんざりして来た。きょうの一行に加わつて来た米国の兵士五、六人は、列車が停止するたびに車外に飛び出して路ばたの草花などを折っている。気の早い連中には実際我慢が出来ないであろうと思いやられた。

窓をあけて見渡すと、何というところか知らないが、青い水が線路を斜めに横ぎつて緩く流れている。その岸には二、三本の大きい柳の枝が眠そうに靡なびいている。線路に近いところには低い堤のたくが蜿たぐつてつづいて、紅い雛芥子ひなげしと紫のブリュー・ベルとが一面に咲きみだれている。薄すすきのような青い葉も伸びている。米国の兵士はその青い葉をまいて笛のように吹いている。一丁も距はなれた畑のあいだに、三、四軒の人家の赤煉瓦が朝の日に暑そうに照らされている。

「八十五、六度だろう。」と、I君は云った。汽車が停まるとすこぶる暑い。われわれが暑がつて顔の汗を拭いているのを、英国紳士は笑いながら眺めている。そうして、「このくらいならば歩

いた方が早いかも知れません。」と云った。われわれも至極しごく同感で、口を揃えてイエス・サアと答えた。

英国紳士は相変らずにやにや笑っているが、我々はもう笑ってはいられない。

「どうかして呉れないかなあ。」

気休めのように列車は少し動き出すかと思うと、又すぐに停まってしまう。どの人もあきあきしたらしく、列車が停まるとみな車外に出てぶらぶらしていると、それを車内へ追い込むように夏の日光はいよいよ強く照り付けてくる。眼鏡をかけている私もまぶしい位で、早々に元の席へ逃げて帰ると、列車はまた思い出したように動きはじめる。こんな生なまぬる鈍い汽車でよく戦争が出来

たものだと云う人もある。なにか故障が出来たのだろうと弁護する人もある。戦争中にあまり激しく使われたので、汽車も疲れたのだろうと云う人もある。午前十一時までには目的地のランスに到着する筈の列車が二時間も延着して、午後一時を過ぎる頃によろようその停車場にゆき着いたので、待ち兼ねていた人々は一度にどやどやと降りてゆく。よく見ると、女は四、五人、ほかはみな男ばかりで、いずれも他国の人たちであろう、クツクの案内者二人はすべて英語を用いていた。

大きい栗の下をくぐって停車場を出て、一丁ほども白い土の上をたどってゆくと、レストラン・コスモスという新しい料理店のまえに出た。仮普請同様の新築で、裏手の方ではまだ職人が忙が

しそうに働いている。一行はここの二階へ案内されて、思い思いにテーブルに着くと、すぐに午餐ごきんの皿を運んで来た。空腹のせい  
か、料理はまずくない。片端から胃の腑へ送り込んで、ミネラル  
ウォーターを飲んでいると、自動車の用意が出来たと知らせてく  
る。又どやどやと二階を降りると、特別に注文したらしい人たち  
は普通の自動車に二、三人ずつ乗り込む。われわれ十五、六人は  
大きい自動車へ一緒に詰め込まれて、ほこりの多い町を通りぬけ  
てゆく。案内者は車の真ま先つさきに乗っていて、時どきに起立して説  
明する。

ランスという町について、わたしはなんの知識も有もたない。今  
度の戦争で、一度は敵に占領されたのを、さらにフランスの軍隊

が回復したということのほかには、なんにも知らない。したがって、その破壊以前のおもかげを偲ぶことは出来ないが、今見るところでは可なりに美しい繁華な市街であつたらしい。それを先ず敵の砲撃で破壊された。味方も退却の際には必要に応じて破壊したに相違ない。そうして、いったん敵に占領された。それを取返そうとして、味方が再び砲撃した。敵が退却の際にまた破壊した。こういう事情で、幾たびかの破壊を繰り返されたランスの町は禍である。市街はほとんど全滅と云つてもよい。ただ僅かに大通りに面した一部分が疎まばらに生き残っているばかりで、その他の建物は片端から破壊されてしまった。大火事か大地震のあとでも恐らく斯こうはなるまい、大火事ならば寧むしろ綺麗に灰にしてしまうかも

知れない。

滅茶滅茶に叩き毀された無残の形骸けいがいをなまじいに留めているだけに痛々しい。無論、砲火に焼かれた場所もあるに相違ないが、なぜその火が更に大きく燃え広がって、不幸な町の亡骸なきがらを火葬にしてしまわなかったか。形見かたみこそ今は仇あだなれ、ランスの町の人たちもおそらく私と同感であろうと思われる。

勿論、町民の大部分はどこへか立ち退いてしまって、破壊された亡骸の跡始末をする者もないらしい。跡始末には巨額の費用を要する仕事であるから、去年の休戦以来、半年以上の時間をあだに過して、いたずらに雨や風や日光のもとにその惨状を晒しているのである。敵国から償金を受取って一生懸命に仕事を急いで

も、その回復は容易であるまい。

地理を知らない私は——ちつとぐらい知つていても、この場合にはとうてい見当は付くまいと思われるが——自動車の行くままに運ばれて行くばかりで、どこがどうなったのかちつとも判らないが、ヴェスルとか、アシドリユウとか、アノウとかいう町々が、その惨状を最も多く描き出しているらしく見えた。大抵の家は四方の隅々だけを残して、建物全体がくずれ落ちて見えている。なかには傾きかかったままで、破れた壁がから辛くも支えられているものもある。家の大部分が黒く焦げながら、不思議にその看板だけが綺麗に焼け残っているのは、却つて悲しい思いを誘い出された。

ここらには人も見えない、犬も見えない。骸がいこつ骨のように白つ



ぼい破壊のあとが真昼の日のもとにいよいよ白く横たわっているばかりである。この頹れた建物くずの下には、おじいさんが先祖伝来と誇っていた古い掛時計も埋められているかも知れない。若い娘の美しい嫁入衣裳も埋められているかも知れない。子供が大切にしていた可愛らしい人形も埋められているかも知れない。それらに魂はありながら、みんな声さえも立てないで、静かに救い出される日を待っているのかも知れない。

乗合いの人たちも黙っている。わたしも黙っている。案内者はもう馴れ切ったような口調で高々と説明しながら行く。幌ほろのない自動車の上には暑い日が一面に照りつけて、眉のあたりには汗が滲にじんでくる。死んだ町には風すらも死んでいると見えて、きょう

はそよりとも吹かない。散らばっている石や煉瓦を避けながら、狭い路を走ってゆく自動車の前後には白い砂けむりが舞いあがるので、どの人の帽子も肩のあたりも白く塗られてしまった。

市役所も劇場もその前づらだけを残して、内部はことごとく頽れ落ちていゝる。大きい寺も伽藍堂がらんどうになってしまつて、正面の塔に据え付けてあるクリストの像が欠けて傾いている。こうした古い寺には有名な壁画などもたくさん保存されていたのであろうが、今はどうなつたか判るまい。一羽の白い鳩がその旧蹟を守るように寺の門前に寂しくうずくまっているのを、みんなが珍しそうに指さしていた。

町を通りぬけて郊外らしいところへ出ると、路の両側はフラン

ス特有のブルヴァーになって、大きい栗の木の並木がどこまでも  
続いている。栗の花はもう散り尽くして、その青い葉が白い土の  
うえに黒い影を落している。木の下には雛芥子ひなげしの紅い小さい花が  
しおらしく咲いている。ここらへ来ると、時どきは人通りがあつ  
て、青白い夏服をきた十四、五の少女が並木の下を俯向きうつむながら  
歩いてゆく。かれは自動車の音におどろいたように顔をあげると、  
車上の人たちは帽子を振る。少女は嬉しほほえそうに微笑みながら、こ  
れも頻しきりにハンカチーフを振る。砂煙が舞い上がって、少女の姿  
がおぼろになった頃に、自動車も広い野原のようなどころに出た。  
戦争前には畑ざんごうになっていたらしいが、今では茫茫たる野原であ  
る。原には大きい塹壕のあとが幾重にも残っていて、ところど

ころには鉄条網も絡み合ったままで光っている。立木はほとんどみえない。眼のとどく限りは雛芥子の花に占領されて、血を流したように一面に紅い。原に沿うた長い路をゆき抜けると、路はだんだんに登り坂になって、石の多い丘の裾についた。案内者はここが百八高地というのであると教えてくれた。

自動車から卸おろされて、思い思いに丘の方へ登ってゆくと、そこには絵葉書や果物などを売る店が出ている。ここへ来る見物人を相手の商売らしい。同情も幾分か手伝って、どの人も余り廉やすくない絵葉書や果物を買った。

丘の上にも塹壕がおびただしく続いていて、そこらにも鉄条網や砲弾の破片が見いだされた。丘の上にも立木はない。石の間に

はやはり雛芥子が一面に咲いている。戦争が始まってから四年の間、芥子の花は夏ごとに紅く咲いていたのであろう。敵も味方もこの花を友として、苦しい塹壕生活をつづけていたのであろう。そうして、この優しい花を見て故郷の妻子を思い出したのもある。この花よりも紅い血を流して死んだのもあろう。ある者は生き、ある者はほろび、ある者は勝ち、ある者は敗れても、花は知らぬ顔をして今年の夏も咲いている。

これに対して、ある者を傷<sup>いた</sup>み、ある者を呪うべきではない。勿論、商船の無制限撃沈を試みたり、都市の空中攻撃を企てたりした責任者はある。しかしながら戦争そのものは自然の勢いである。歐洲の大勢<sup>たいせい</sup>が行くべき道を歩んで、ゆくべき所へゆき着いたので

ある。その大勢に押し流された人間は、敵も味方も悲惨である。野に咲く百合を見て、ソロモンの栄華を果敢はかなしと説いた神の子は、この芥子の花に対して何と考えるであろう。

坂を登るのでいよいよ汗になった我々は、干枯ひからびたオレンジで渴かつを癒いやしていると、汽車の時間が追っているから早く自動車に乗れと催促される。二時間も延着した祟たたりで、ゆっくり落着いてはいられないと案内者が気の毒そうに云うのも無理はないので、どの人もおとなしく自動車に乗り込むと、車は待ちかねたように走り出したが、途中から方向をかえて、前に来た路とはまた違った町筋をめぐってゆく。路は変つても、やはり同じ破壊の跡である。プレース・ド・レパプリクの噴水池は涸かれ果てて、まんなかに飾

られた女神の像の生白い片腕がもがれている。

停車場へ戻つて自動車を降りると、町の入口には露店をならべて、絵葉書や果物のたぐいを売っている男や女が五、六人見えた。砲弾の破片で作られた巻苘の灰皿や、独逸兵のヘルメツトを摸したインキ壺なども売っている。そのヘルメツトは剣を突き刺したり、斧を打ち込んだりしてあるのが眼についた。摸造品ばかりでなく、ほん物のドイツ将校や兵卒のヘルメツトを売っているものもある。おそらく戦場で拾ったものであろう。その値をきいたら九十フランだと云つた。勿論、云い値で買う人はない。ある人は五十フランに値切つて二つ買ったとか話していた。

「なにしろ暑い。」

異口同音に叫びながら、停車場のカフェーへ駆け込んで、一息にレモン水を二杯のんで、顔の汗とほこりを忙がしそうに拭いていると、四時三十分の汽車がもう出るという。あわてて車内に転がり込むと、それがまた延着して、八時を過ぎる頃にようようぱりに送り還された。

(大正8・9「新小説」)

この紀行は大正八年の夏、パリの客舎で書いたものである。その当時、かのランスの戦場のような、むしろそれ以上のおそろしい大破壊を四年後の東京のまん中で見せ付けられようとは、思いも及ばないことであつた。よそ事のように眺めて来た大破壊のあとが、今やありありと我が眼のまえに拈げられているではないか。



わたしはまだ異国の夢が醒めないのではないかと、時どきに自分を疑うことがある。

（大正十二年十月追記『十番随筆』所収）

旅すずり

(一) 心太

川<sup>かわ</sup>越<sup>ごえ</sup>の喜<sup>き</sup>多<sup>たい</sup>院<sup>いん</sup>に桜を観る。ひとえはもう盛りを過ぎた。紫<sup>し</sup>衣<sup>い</sup>の僧は落花の雪を袖に払いつつ行く。境<sup>けい</sup>内<sup>だい</sup>の掛茶屋にはいつて休む。なにか食うものはないかと婆さんにきくと、心<sup>こころ</sup>太<sup>てん</sup>ばかりだと云う。試みに一皿を買えば、あたい八厘。

花をさそう風は梢をさわがして、茶店の軒も葭簀も一面に白い。わたしは悠然として心太を啜る。天海僧正の墓のまえで、わたしは少年の昔にかえった。

(明治32・4)

(二) 天狗

ひろしま  
まち  
広島の街をゆく。冬の日は陰つて寒い。

たちま  
忽ちに横町から天狗があらわれた。足駄を穿いて、矛をついて、  
どこへゆくでもなし、迷うが如くに徘徊している。一人ならず、  
そこからも此処からも現われた。みな十二、三歳の子供である。

宿に帰つて聞けば、きようは亥子の祭りだという。あまたの小

天狗はそれがために出現したらしい。空はやがて時雨しぐれとなった。神通力じんつうりきのない天狗どもは、雨のなかを右往左往に逃げてゆく。その父か叔父であろう。四十前後の大男は、ひとりの天狗を小脇に抱えて駈け出した。

(明治37・二)

(三) 鼓子花

午後三時頃、白河しらかわ停車場前の茶店に休む。隣りの床几しょうぎには二十四、五の小粋な女が腰をかけていた。女は茶店の男にむかつて、黒磯くろいそへゆく近路を訊いている。あるいてゆく積りらしい。まあ、ともかくも行ってみようかと独り言を云いながら、女は

十銭の茶代を置いて出た。

茶屋女らしいねと私が云えば、どうせ食詰者くいづめものでしょうよと、店の男は笑いながら云った。

夏の日は暑い。垣の鼓子花ひるがおは凋しおれていた。

(明治39・8)

(四) 唐辛

日光の秋八月、中禪寺ちゆうぜんじをさして旧道をたどる。

紅い鳥が、青い樹間このまから不意に飛び出した。形は山鳩に似て、翼つばさも口くちばしもみな深紅しんくである。案内者に問えば、それは俗に唐とう辛が

辛らしといい、鳴けば必ず雨がふるといふ。

鳥はたちまち隠れてみえず、谷を隔ててふた声、三声。われわれは恐れて路を急いだ。

仲の茶屋へ着く頃には、山も崩るるばかりの大おお雨あめとなった。

(明治33・8)

(五) 夜泊の船

船は門も司じに泊かる。小春の海は浪おどろかず、風も寒くない。

酒を売る船、菓子を売る船、うろうろと漕ぎまわる。石炭をつむ女の手拭が白い。

対岸の下しもの関せきはもう暮れた。寿じゆえい永いのみささぎはどの辺であ

ろう。

なにを呼ぶか、人の声が水に響いて遠おちこち近こちにきこえる。四面の  
 かかり船は追いおいに灯を掲げた。すべて源氏の船ではあるまい  
 か。わたしは敵に囲まれたように感じた。  
 (明治39・11)

(六) 蟹

遼陽城外、すべて緑りよくよう楊ようの村である。秋あき雨さめの晴れたゆうべ  
 に宿舎の門かどを出ると、斜陽は城楼の壁に一いち抹まつの余紅よこうをとどめ、  
 水のごとき雲は喇嘛塔ラマを掠かすめて流れてゆく。

南門外は一面の畑で、馬も隠るるばかりの高梁コウリヤンが、俯しつ仰ぎ

つ秋風に乱れている。

村落には石の井いどがあつて、その辺は殊やなぎに楊が多い。楊の下には清国人しんが籃かごをひらいて蟹かにを売っている。蟹の大なるは尺を越えたのもある。

「半江紅樹売鱸魚」は王漁洋おうぎよようの詩である。夕陽村落、楊の深いところに蟹を売っているのも、一種の詩料になりそうな画趣で、今も忘れない。

(明治37・10)

(七) 三条大橋

京は三条のほとりに宿った。六月はじめのあさ日は鴨川かもがわの流



れに落ちて、雨後の東山ひがしやまは青いというよりも黒く眠っている。  
 このあたりで名物という大津おおつの牛が柴車しばぐるまを牽ひいて、今や大  
 橋を渡つて来る。その柴の上には、誰たが風流ぞ、むらさきの露の  
 したたる菖蒲の花が挟まんである。

紅い日傘をさした舞妓まいこが橋を渡つて来て、あたかも柴車とすれ  
 違つてゆく。

所は三条大橋、前には東山、見るものは大津牛、柴車、花菖蒲、  
 舞妓と絵日傘——京の景物はすべてここに集まった。

(明治42・6)

(八) 木蓼

信濃しなのの奥にふみ迷つて、おぼつかなくも山路をたどる夏のゆうぐれに、路ばたの草木の深いあいだに白点々、さながら梅の花の如きを見た。

後に聞けば、それは木蓼またたびの花だという。猫にまたたびことわざの諺はかねて聞いていたが、その花を見るのは今が初めであつた。

天地蒼茫そうぼうとして暮れんとする夏の山路に、蕭然しょうぜんとして白く咲いているこの花をみた時に、わたしは云い知れない寂しさをおぼえた。

(大正3・8)

(九) 鶏

あきさめ  
秋雨を衝ついて箱根はこねの旧道を下くだる。笈おいの平たいらの茶店ちあみに休むと、神か崎さき与よ五ご郎ろうが博ばく勞ろうの丑うし五ご郎ろうに詫わ証じ文ぶんをかいた故蹟こせきという立て札たてざがみえる。

五、六日まえに修学旅行の学生の一隊がそこに休んで、一羽の飼かひい鶏けいをぬすんで行いつたと、店のおかみさんが甘酒あまざけを汲くみながら口惜くちやくしそうに語かたつた。

「あいつ泥坊だ。」と、三つばかりの男の児こが母のあとに付いて、まわらぬ舌のしで罵ののつた。この児こに初めて泥坊どろぼうという詞ことばを教おしえた学生がくせいらは、今頃いまごろどこの学校がっこうで勉強べんきやうしているであろう。(大正10・10)

## (十) 山蛭

妙義の山をめぐるあいだに、わたしは山蛭やまびるに足を吸われた。

いくら洗つても血のあとが消えない。ただ洗つても消えるものではない。水を口にふくんで、所謂いわゆるふくみ水にして、それを手拭か紙しめに湿して拭き取るのが一番いいと、案内者が教えてくれた。

蛭むしに吸われた旅の人は、妙義の女郎のふくみ水で洗つて貰つたのですと、かれは昔を偲び顔にまた云つた。上州一円は明治二十三年から廃娼はいしょうを実行されているのである。

雨のように冷たい山霧は妙義の町を掩つて、そこが女郎屋の跡だというあたりには、桑の葉が一面に暗くそよいでいた。



## 温泉雑記

## 一

ことしの梅雨も明けて、温泉場繁昌の時節が来た。この頃では人の顔をみれば、この夏はどちらへお出いでになりますかと尋ねたずり、尋ねられたりするのが普通の挨拶になったようであるが、私たちの若い時——今から三、四十年前までは決してそんなことは

無かつた。

もちろん 勿論、むかしから湯治にゆく人があればこそ、どこの温泉場

も繁昌していたのであるが、その繁昌の程度が今と昔とはまったく相違していた。各地の温泉場が近年いちじるしく繁昌するようになったのは、何と云つても交通の便が開けたからである。

江戸時代には箱根の温泉まで行くにしても、第一日は早朝に品し川ながわをた発たつて程ほどヶ谷がやか戸塚とつかに泊まる、第二日は小田原おだわらに泊まる。

そうして、第三日にはじめて箱根の湯本ゆもとに着く。但しそれは足の

達者な人たちの旅で、病人や女や老人の足の弱い連れでは、第一日かながわが神奈川泊まり、第二日ふじさわが藤沢、第三日おだわらが小田原、第四日に至つて初めて箱根に入り込むというのであるから、往復だけでも

七、八日はかかる。それに滞在の日数を加えると、どうしても半月以上に達するのであるから、金と暇とのある人びとでなければ、湯治場とうじばめぐりなどは容易に出来るものではなかった。

江戸時代ばかりでなく、明治時代になって東海道線の汽車が開通するようになって、まず箱根まで行くには国府津こうづで汽車に別れる。それから乗合いのガタ馬車にゆられて、小田原を経て湯本に着く。そこで、湯本泊まりならば格別、さらに山の上へ登ろうとすれば、人力車か山駕籠に乗るのほかはない。小田原電鉄が出来て、その不便がやや救われたが、それとても国府津、湯本間だけの交通にとどまって、湯本以上の登山電車が開通するようになったのは、大正のなかば頃からである。そんなわけであるから、



一泊でもかなりに気忙きせわしい。いわんや日歸りに於いてをやである。それが今日こんにちでは、一泊はおろか、日歸りでも悠々と箱根や熱海たみに遊んで来ることが出来るようになったのであるから、鉄道省その他の宣伝と相俟あいまつて、そこらへ浴客が続々吸収せらるるのも無理はない。それと同時に、浴客の心持も旅館の設備なども全く昔とは変つてしまった。

いつの世にも、温泉場に来るものは病人と限つたわけでは無い。健康な人間も遊山ゆざんがてらに來浴するのではあるが、原則としては温泉は病いを養うところと認められ、大体において病人の浴客が多かつた。それであるから、入浴に来る以上、一泊や二泊で帰る客は先ず少ない。短くても一週間、長ければ十五日、二十日、あ

るいはひと月以上も滞在するのは珍しくない。私たちの若い時には、江戸以来の習慣で、一週間をひと回りまわといい、二週間をふた回りといい、既に温泉場へゆく以上は少なくともひと回りは滞在して来なければ、何のために行ったのだから判らないということになる。ふた回りか三回り入浴して来なければ、温泉の効きき目はな  
いものと決められていた。

たとい健康の人間でも、往復の長い時間をかंगाえると、一泊や二泊で引揚げて来ては、わざわざ行った甲斐が無いということにもなるから、少なくとも四、五日や一週間は滞在するのが普通であつた。

温泉宿へ一旦踏み込んだ以上、客もすぐには帰らない。宿屋の方でも直ぐには帰らないものと認めているから、双方ともに落着いた心持で、そこにおのずから暢のびやかな気分が作られていた。

座敷へ案内されて、まず自分の居どころが決まると、携帯の荷物をかたづけて、型のごとくに入浴する。そこでひと息ついた後、宿の女中にむかって両隣りの客はどんな人々であるかを訊きく。病人であるか、女づれであるか、子供がいるかを詮議した上で、両隣りへ一応の挨拶にゆく。

「今日からお隣りへ参りましたから、よろしく願います。」

宿の浴衣を着たままで行く人もあるが、行儀のいい人は衣服をあらためて行く。単に言葉の挨拶ばかりでなく、なにかの土産みやげを持参するのもある。前にも云う通り滞在期間が長いから、大抵の客は甘納豆あまなっとうとか金米糖こんまいとうとかいうたぐいの干菓子ひがしをたずさえて来るので、それを半紙に乗せて盆の上に置き、ご退屈でございましょうからと云つて、土産のしるしに差出すのである。

貰つた方でもそのままには済まされないから、返礼のしるしとして自分が携帯の菓子類を贈る。携帯品のない場合には、その土地の羊羹ようかんか煎餅せんべいのたぐいを買つて贈る。それが初対面の時ばかりでなく、日を経ていよいよ懇意になるにしたがつて、ときどきに鮓すしや果物などの遣り取りをすることもある。

わたしが若いときに箱根に滞在していると、両隣りともに東京の下町したまちの家族づれで、ほとんど毎日のようにいろいろの物をくれるので、すこぶる有難迷惑に感じたことがある。交際好きの人になると、自分の両隣りばかりでなく、他の座敷の客といつの間にか懇意になって、そことも交際しているのがある。温泉場で懇意になったのが縁となって、帰京の後にも交際をつづけ、果ては縁組みをして親類になったなどというものもある。

両隣りに挨拶するのも、土産ものを贈るのも、ここに長く滞在すると思えばこそで、一泊や二泊で立ち去ると思えば、たがいに面倒な挨拶もしないわけである。こんな挨拶や交際は、一面からいえば面倒に相違ないが、又その代りに、浴客同士のあいだに一

種の親しみを生じて、風呂場で出逢つても、廊下で出逢つても、互いに打ち解けて挨拶をする。病人などに対しては容体をきく。要するに、一つ宿に滞在する客はみな友達であるという風で、なんとなく安らかな心持で昼夜を送ることが出来る。こうした湯治場気分は今こんにち日は求め得られない。

浴客同士のあいだに親しみがあると共に、また相当の遠慮も生じて来て、となり座敷には病人がいるとか、隣りの客は勉強してゐると思えば、あまりに酒を飲んで騒いだり、夜ふけまで碁ごを打ったりすることは先ず遠慮するようにもなる。おたがいの遠慮——この美德はたしかに昔の人に多かつたが、殊に前に云つたような事情から、むかしの浴客同士のあいだには遠慮が多く、今日

のような傍若無人の客は少なかった。

## 三

しかしまた一方から考えると、今日こんにちの一般浴客が無遠慮にな  
るといふのも、所詮しよせんは一夜泊まりのたぐいが多く、浴客同士の  
あいだに何の親しみもないからであろう。殊に東京近傍の温泉場  
は一泊または日帰りの客が多く、大きい革包カバンや行李こくりをさげて乗り  
込んでくるから、せめて三日や四日は滞在するのかと思うと、き  
よう来て明日あしたはもう立ち去るのが幾らもある。こうなると、温泉  
宿も普通の旅館と同様で、文字通りの温泉旅館であるから、それ

に対して昔の湯治場気分などを求めるのは、頭から間違っているかも知れない。

それにしても、今日の温泉旅館に宿泊する人たちは思い切つてサバサバしたものである。洗面所で逢つても、廊下で逢つても、風呂場で逢つても、お早うございますの挨拶さえもする人は少ない。こちらで声をかけると、迷惑そうに、あるいは不思議そうな顔をして、しぶしぶながら返事をする人が多い。男は勿論、女でさえも洗面所で顔をあわせて、お早うはおろか、黙礼さえもしないのがたくさんある。こういう人たちは外国のホテルに泊まつて、見識らぬ人たちからグード・モーニングなどを浴びせかけられたら、びっくりして宿換えをするかも知れない。そんなことを考え



て、私はときどきに可笑おかしくなることもある。

客の心持が変わると共に、温泉宿の姿も昔とはまったく変った。むかしの名所ずえ絵や風景画を見た人はみな承知であろうが、大抵の温泉宿は茅葺かやぶき屋根であつた。明治以後は次第にその建築もあらたまつて、東京近傍にはさすがに茅葺きのあとを絶つたが、明治三十年頃までの温泉宿は、今から思えば実に粗末なものであつた。

勿論、その時代には温泉宿にかぎらず、すべての宿屋が大抵古風なお粗末なもので、今日の下宿屋と大差なきものが多かつたのであるが、その土地一流の温泉宿として世間にその名を知られている家でも、次の間つきの座敷を持っているのは極めて少ない。

そんな座敷があつたとしても、それは僅かに二間ふたまか三間みまで、特別の客を入れる用心に過ぎず、普通はみな八畳か六畳か四畳半の一室で、はなは甚だしきは三畳などという狭い部屋もある。

いい座敷には床の間、ちがいは棚は設けてあるが、チャブ台もなければ、机もない。茶ちやだんす箆すや茶道具なども備えていないのが多い。近来はどこの温泉旅館にも机、すずり硯しよかんせん、書翰箋、封筒、電報用紙のたぐいは備えてあるが、そんなものはいっさい無い。

それであるから、こういう所へ来て私たちの最も困つたのは、机のないことであつた。宿に頼んで何か机を貸してくれというと、大抵の家では迷惑そうな顔をする。やがて女中が運んでくるのは、物置の隅からでも引摺り出して来たような古机で、ひきだし抽斗ひきだしの毀れ

ているのが、脚の折れかかっているのが、始末。読むにも書くにも実に不便不愉快であるが、仕方がないから先ずそれで我慢するのほかは無。したがって、筆や硯にも碌なものはない。それでも型ばかりの硯箱を違い棚に置いてある家はいが、その都度つどに女中に頼んで硯箱を借りるような家もある。その用心のために、古風の矢立やたてなどを持参してゆく人もあつた。わたしなども小さい硯や墨や筆をたずさえて行つた。もちろん、万年筆などは無い時代である。

こういう不便が多々ある代りに、むかしの温泉宿は病いを養うに足るような、安らかな暢のびやかな気分のびに富んでいた。今の温泉宿は万事が便利である代りに、なんとなくがさついて落着きのない、

一夜どまりの旅館式になつてしまった。

一利一害、まことに已<sup>や</sup>むを得ないのであろう。

#### 四

万事の設備不完全なるは、一々数え立てるまでもないが、肝腎の風呂場とても今日のようなタイル張りや人造石の建築は見られない。どこの風呂場も板張りである。普通の銭湯とちがって温泉であるから、板の間がとかくにぬらぬらする。近来は千人風呂とかプールとか唱えて、競つて浴槽を大きく作る傾きがあるが、むかしの浴槽はみな狭い。畢<sup>ひつきよう</sup>、浴客の少なかつた為でもある。

うが、どこの浴槽も比較的狭いので、多人数がこみ合つた場合には頗<sup>すこぶ</sup>る窮屈であつた。

電燈のない時代は勿論、その設備が出来てからでも、地方の電燈は電力が十分でないと見えて、夜の風呂場などは濛<sup>もう</sup>々<sup>もう</sup>たる湯<sup>ゆ</sup>烟<sup>げ</sup>にとざされて、人の顔さえもよく見えないくらいである。まして電燈のない温泉場で、うす暗いランプのひかりをたよりに、夜ふけの風呂などに入っていると、山風の声、谷川の音、なんだか薄気味の悪いように感じられることもあつた。今日でも地方の山奥の温泉場などへ行けば、こんなところが無いでもないが、以前は東京近傍の温泉場も皆こんな有様であつたのであるから、現在の繁華に比較して実に隔世の感に堪えない。したがって、昔から

温泉場には怪談が多い。そのなかでやや異色のものを左に一つ紹介する。

柳里恭りゅうりきようの「雲萍雜志うんぴょうざつし」のうちに、こんな話がある。

「有馬に湯あみせし時、日くれて湯桁ゆげたのうちに、耳目鼻のなき瘦法師の、ひとりほとくと入りたるを見て、余は大いに驚き、物かげよりうかゞふうち、早々湯あみして出でゆく姿、骸骨の絵にたがふところなし。狐狸こりどもの我をたぶらかすにやと、その夜は湯にもいらで臥ふしぬ。夜あけて、この事を家あるじに語りければ、それこそ折ふしは来り給ふ人なり。かの女尼は大坂の唐物商人伏見屋てふ家のむすめにて、しかも美人の聞えありけれども、姑しゅうとの病みておはせし時、隣より失火ありて、火の早く病床にせまりし

かど、助け出さん人もなければ、かの尼とびいりて抱へ出しまる  
らせしなり。そのとき焼けたゞれたる傷にて、目は豆粒ばかりに  
明きて物見え、口は五分ほどあれど食ふに事足り、今年はや七十  
歳ばかりと聞けりといへるに、いと有難き人とおもひて、後も折  
ふしは人に語りいでぬ。」

これは怪談どころか、一種の美談であるが、その事情をなんに  
も知らないで、暗い風呂場で突然こんな人物に出逢つては、さす  
がの柳沢権太夫やなぎさわごんたゆうもぎよつとしたに相違ない。元来、温泉は病  
人の入浴するところで、そのなかには右のごとき畸形や異形いぎようの  
人もまじっていたであろうから、それを誤り伝えて種々の怪談を  
生み出した例も少なくないであろう。

## 五

次に記すしるのは、ほんとうの怪談らしい話である。

安政あんせい三年の初夏である。江戸番町ばんちようの御厩谷おんまやだにに屋敷を持

っている二百石の旗本根津民次郎ねづたみじろうは箱根へ湯治に行った。根津は

その前年十月二日の夜、本所ほんじよの知人の屋敷を訪問している際に、

かのおそろしい大地震に出逢つて、幸いに一命に別条はなかつたが、左の背から右の腰へかけて打撲傷を負つた。

その当時はさしたることも無いように思っていたが、翌年の春になつても痛みが本当に去らない。それが打ち身のようになつ



て、暑さ寒さに祟たたられては困るといので、支配頭がしらの許可を得て、箱根の温泉で一カ月ばかり療養することになったのである。旗本と云つても小身しょうしんであるから、伊助いすけという中間ちゆうげんひとり連れて出た。

道中は別に変つたこともなく、根津の主従は箱根の湯本、塔の沢を通り過ぎて、山の中のある温泉宿に草鞋わらじをぬいだ。その宿の名はわかつているが、今も引きつづいて立派に営業を継続しているから、ここには秘して置く。

宿は大きい家で、ほかに五、六組の逗留客があつた。根津は身体に痛み所があるので下座敷のひと間を借りていた。着いて四日目の晩である。入梅に近いこの頃の空は曇り勝ちで、きょうも

宵から細雨こさめが降っていた。夜も四つ（午後十時）に近くなつて、根津もそろそろ寢床にはいろうかと思つていると、何か奥の方がさわがしいので、伊助に様子を見せにやると、やがて彼は歸つて来て、こんなことを報告した。

「便所に化け物が出たそうです。」

「化け物が出た……。」と、根津は笑つた。「どんな物が出た。」

「その姿は見えないのですが……。」

「一体どうしたというのだ。」

その頃の宿屋には二階の便所はないので、逗留客はみな下の奥の便所へ行くことになつてゐる。今夜も二階の女の客がその便所へかよつて、そこから第一の便所の戸を開あけようとしたが、開か

ない。さらに第二の便所の戸を開けようとしたが、これも開かない。そればかりでなく、うちからは戸をコツコツと軽く叩いて、うちには人がいると知らせるのである。そこで、しばらく待って、いるうちに、ほかの客も二、三人来あわせた。いつまで待っても出て来ないので、その一人が待ちかねて戸を開けようすると、やはり開かない。前とおなじように、うちからは戸を軽く叩くのである。しかも二つの便所とも同様であるので、人々はすこしく不思議を感じて来た。

かまわないから開けてみると云うので、男二、三人が協力して無理に第一の戸をこじ開けると、内には誰もいなかった。第二の戸をあけた結果も同様であった。その騒ぎを聞きつけて、ほかの

客もあつまつて来た。宿の者も出て来た。

「なにぶん山の中でございますから、折りおりにこんなことがございませぬ。」

宿の者はこう云つただけで、その以上の説明を加えなかつた。伊助の報告もそれで終つた。

その以来、逗留客は奥の客便所へゆくことを嫌つて、宿の者の便所へかようことにしたが、根津は血氣盛りといい、且は武士かつという身分の手前、自分だけは相変らず奥の便所へ通つていると、それから二日目の晩にまたもやその戸が開かなくなつた。

「畜生、おぼえている。」

根津は自分の座敷から脇差を持ち出して再び便所へ行つた。戸

の板越しに突き透してやろうと思ったのである。彼は片手に脇差をぬき持つて、片手で戸を引きあげると、第一の戸も第二の戸も仔細なしにするりと開いた。

「畜生、弱い奴だ。」と根津は笑った。

根津が箱根における化け物話は、それからそれへと伝わった。

本人も自慢らしく吹ふい聴ちようしていたので、友達らは皆その話を知っていた。

それから十二年の後である。明治元年の七月、越後えちごの長岡城が西軍のために落された時、根津も江戸を脱走して城しろ方かたに加わっていた。落城の前日、彼は一緒に脱走して来た友達に語った。

「ゆうべは不思議な夢をみたよ。君たちも知っている通り、大地

震の翌年に僕は箱根へ湯治に行つて宿屋で怪しいことに出逢つたが、ゆうべはそれと同じ夢をみた。場所も同じく、すべてがその通りであつたが、ただ変つてゐるのは……僕が思い切つてその便所の戸をあけると、中には人間の首が転がっていた。首は一つで、男の首であつた。」

「その首はどんな顔をしていた。」と、友達のひとりが訊いた。

根津はだまつて答えなかつた。その翌日、彼は城外で戦死した。

## 六

昔はめつたに無かつたように聞いているが、温泉場に近年流行

するのは心中沙汰しんじゆうざたである。とりわけて、東京近傍の温泉場は交通便利の関係から、ここに二人の死に場所を選ぶのが多くなつた。旅館の迷惑はいうに及ばず、警察もその取締りに苦心しているようであるが、容易にそれを予防し得ない。

心中もその宿を出て、近所の海岸から入水じゆすいするか、山や森へ入り込んで劇薬自殺を企てるたぐいは、旅館に迷惑をあたえる程度も比較的に軽いが、自分たちの座敷を舞台に使用されると、旅館は少なからぬ迷惑こうむを蒙ることになる。

地名も旅館の名もしばらく秘して置くが、わたしが曾かつてある温泉旅館に投宿した時、すこし書き物をするのであるから、なるべく静かな座敷を貸してくれというと、二階の奥まった座敷へ案内

され、となりへは当分お客を入れない筈であるから、ここは確かに閑静であるという。成程それは好都合であると喜んでいると、三、四日の後、町の挽地<sup>ひきちもの</sup>物屋へ買物に立ち寄った時、偶然にあることを聞き出した。ひと月ほど以前、わたしの旅館には若い男女の劇薬心中があつて、それは二階の何番の座敷であると云うことがわかつた。

その何番は私の隣室で、当分お客を入れないといつたのも無理はない。そこは幽霊(?)に貸切りになつてゐるらしい。宿へ帰ると、私はすぐに隣り座敷をのぞきに行つた。夏のことであるが、人のいない座敷の障子は閉めてある。その障子をあけて窺<sup>うかが</sup>つたが、別に眼につくような異状もなかつた。



その日もやがて夜となつて、夏の温泉場は大抵寝鎮まつた午後十二時頃になると、隣りの座敷で女の軽い咳せきの音がきこえる。勿論、気のせいだとは思いながらも、私は起きてのぞきに行つた。何事も無いのを見さだめて帰つて来ると、やがて又その咳の音がきこえる。どうも気になるので、また行つてみた。三度目には座敷のまなかへ通つて、暗い所にしばらく坐つていたが、やはり何事もなかつた。

わたしが隣り座敷へ夜中に再三出入りしたことを、どうしてか宿の者に覺られたらしい。その翌日は座敷の置換えをするという口実のもとに、わたしはここと全く没交渉の下座敷へ移されてしまった。何か詰まらないことを云い触らされては困ると思つたの

であろう。しかし女中たちは私にむかつて何んにも云わなかった。私も云わなかった。

これは私の若い時のことである。それから三、四年の後に、

「金色夜叉」の塩原温泉の件くだりが読売新聞紙上に掲げられた。

それを読みながら、私はんがえた。私がもし一カ月以前にかの

旅館に投宿して、はざまかんいち間貫一とおなじように、隣り座敷の心中の

相談をぬすみ聴いたとしたならば、私はどんな処置を取ったであろうか。貫一のように何千円の金を無雑作に投げ出す力がないとすれば、所詮は宿の者に密告して、ひとまず彼らの命をつなぐと  
いうような月並の手段を取るのほかはあるまい。貫一のような金  
持でなければ、ああいう立派な解決は付けられそうもない。

「金色夜叉」はやはり小説であると、わたしは思った。

(昭和6・7「朝日新聞」)



Ⅲ 暮らしの流れ



## 素人脚本の歴史

雑誌の人が来て、何か脚本の話を書けという。ともかくも安請合いに受け合ったものの、さて何を書いてよいか判らない。現在日本の演劇しげいをどう書いてよいのか、自分も実は宇宙に迷って行き悩んでいるのであるから、とてもここで大きい声で脚本の書き方などを講釈するわけには行かない。何か偉そうなことをうっかり喋しゃべってしまって、その議論が自分自身でも明日はすっかり変つ

てしまうようなことが無いとも限らない。で、そんな危ないことには手を着けないことにして、ここでは自分がこれまで書いた七、八十種の脚本に就いて、一種の経験談のようなものを書き列べて見ようかとも思ったが、それも長くなるのでやめた。ここではただ、素人しろうとの書いた脚本がどうして世に出るようになったかという歴史を少しばかり書く。

わたしはここで自分の自叙伝を書くとうとするのではない。しかし自分の関係したことを主題にして何か語ろうという以上、自然に多く自分を説くことになるかも知れない。それはあらかじめお含み置きを願っておきたい。



わたしが脚本というものに筆を染めた処女作は「紫宸殿ししんでん」と  
 いう一幕物で、頼政よりまさの鶴退治ぬえを主題にした史劇であつた。後に  
 訂正して、明治二十九年九月の歌舞伎新報に掲載されたが、勿もちろん  
 論ん、どこの劇場でも採用される筈はずはなかつた。その翌年の二月、  
 條野採菊翁じようのさいぎくが伊井蓉峰君いじようほうに頼まれて「茲江戸子ここがえどっこ」という六  
 幕物を書くことになつた。故榎本武揚えのもとたけあき子爵ごりようかくの五稜郭戦争を  
 テーマテーマ主題にしたものである。採菊翁は多忙だといふことで、榎本虎とらひ  
 彦君こと私とが更に翁の依頼をうけて二幕ずつを分担して執筆す  
 ることになつた。筋は無論、翁から割当てられたもので、自分た  
 ち二人はほとんどその口授のままを補綴ほていしたに過ぎなかつた。劇  
 場は後の宮戸座みやとざであつた。

それが三月の舞台に上つたののほを観ると、わたしは失望した。私  
 が書いた部分はほとんど跡形もないほど変つていた。私はそれを  
 榎本君に話すと、榎本君は笑いながら「それだから僕は観に行か  
 ないよ」と云つた。榎本君は福地桜痴先生ふくちおうちに従つて、楽屋の空気  
 にもう馴れている人である。榎本君の眼には、年の若い私の無経  
 験がむしろ可笑おかしく思われたかも知れなかつた。採菊翁自身が執筆  
 の部分はどうか知れないが、榎本君が担当の部分にも余程の大お  
 鉈おなたを加えられていたらしかつた。勿論、この時代にはそれがむ  
 しろ普通のことしろうとで、素人——榎本君は素人ではないが、その当  
 時はまだ其の伎倆ぎりょうを認められていなかつた——が寄り集まつて  
 書いた脚本が、こういう風に鉈おなたを加えられたり、鱸なますにされたりす

るのは、あらかじめ覚悟してかからなければならぬのであつた。わたしが榎本君に対して不平らしい口吻こうぶんを洩らしたのは、要するに演劇しばいの事情というものに就ついて私の盲目を証拠立てていたのであつた。

「素人の書いたものは演劇にならない。」

それが此の時代に於いては動かすべからざる格言モットーとして何なんび人にも信ぜられていた。劇場内部のいわゆる玄人くろうとは勿論のこと

と、外部の素人もみんなそう信じていた。今日こんにちの眼から観れば、みずから侮あなどること甚はなはだしいようにも思われるかも知れないが、なんと理窟を云つても劇場当事者の方で受付けてくれないのであるから、外部の素人は田作ごまめの齒ぎしりでどうにもならない。たとい

鉈でぶつかかれても鱈にきざまれても、採用されれば非常の仕合せで、鉈にも鱈にも最初から問題にされてはいないのであった。もつとも福地先生はこういうことを云っていられた。

「いくら楽屋の者が威張つても仕方がない。今のままでいれば、やがて素人の世界になるよ。」

しかし、この世界がいつ自分たちの眼の前に開かれるか。ほとんど見当が付かなかつた。福地先生は外部から脚本を容れることを拒むこぼような人ではなかつた。むしろ大抵の場合には「結構です」と云つて推薦するのを例としていた。しかも推薦されるような脚本はちつとも提供されなかつた。それには二種の原因があつた。第一には、たとい福地先生は何と云おうとも、劇場全体に素人を

侮蔑<sup>ぶべつ</sup>する空氣が充満して、外部から輸入される一切の脚本は先ず敬して遠ざけるといふ方針が暗々のうちに成立つていたのである。第二には、どんな鉅を受けても、鱸にされても、何でもかでも上場されればいと云つて提出されるような脚本は、實際に於いて其の品質が劣つていた。また、ある程度まで其の品質に見るべきものがあるような脚本を書き得る人は、鉅や鱸の拷問<sup>ごうもん</sup>に堪えられなかつた。

以上の理由で、どの道、外部から新しい脚本を求めるといふことは不可能の状態にあつた。劇場当事者の方でも強<sup>し</sup>いて求めようとはしなかつた。いわゆる玄人と素人との間には大いなる溝<sup>みぞ</sup>があつた。

もう一つには、だんきくぎ 団菊左と云うような諸名優が舞台を踏まえていて、たとい脚本そのものはどうであらうとも、これらの技芸に對する世間の信仰が相當の觀客を引き寄せるに何らの不便を感じしめなかつたからである。こういう種々の原因が絡み合つて、内部と外部との中間には、袖そではぎ 萩が取りつくろつている小柴垣こしばがきよりも大きい関が据えられて、戸を叩くにも叩かれぬ鉄くろがねの門が高く鎖とぎされていたのであつた。

「どうぞお慈悲にただ一言……。」

お君きみの袖乞いことばを真似るのが忌いやな者は、黙つて門の外に立つているよりほかはなかつた。

ところが、やがて其の厳しい門を押し破つて、和田合戦の板わだ はんが額くのように闖ちんにゆう入した勇者があらわれた。その闖入者は松居まついし松葉君しょうようであつた。この門破りが今日の人の想像するような、決して容易なものではない。松葉君の悪戦は実に想像するに余りある位で、彼はブラツデーネスになつたに相違ない。そうして明治三十二年の秋に、明治座で史劇「悪源太あくげんた」を上場することに なつた。俳優は初代の左団次さだんじ一座であつた。続いて三十四年の秋に、同じく明治座で「源三位げんざんみ」を書いた。つづいて「後藤又兵衛ごとうまたべえ」や「敵国降伏」や「エルナニー」が出た。

「素人の書いたものでも商売になる。」

こういう理屈がいくらか劇場内部の人たちにも理解されるよう

になつて来た。わたしは松葉君よりも足かけ四年おくれて、明治

三十五年の歌舞伎座一月興行に「こがねのしやちうわさのたかなみ金 鯨 樽 高 浪」という

四幕物を上場することになった。これに就ついては岡鬼太郎君がおかおにたろう

大いに力がある。その春興行には五世菊五郎きくごろうが出勤する筈であ

つたが、病気で急に欠勤することになつて、一座は芝翫しかん（後の歌

右衛門たえもん）、梅幸ばいこう、八百蔵やおぞう（後の中車ちゆうしゃ）、松助まつすけ、家橘かきつ（後

の羽左衛門うざえもん）、染五郎そめごろう（後の幸四郎こうしろう）というような顔触れで、

二番目は円朝えんちよう物の「荻江おぎえの一節ひとくし」と内定していたのである

が、それも余り思わしくないと云うので、当時の歌舞伎座専務の

井上竹二郎いのうえたけじろう氏から何か新しいものはあるまいかと鬼太郎君に相

談をかけると、鬼太郎君は引受けた。かねて條野採菊翁と私の三



人合作で書いてみよう」と云っていた。「金鯨」というものがあるの  
 で、鬼太郎君は其の筋立てをすぐに話すと、井上氏はそれを書いて  
 見せてくれと云った。

それはかの柿かきの木金助ききんすけが紙鳶たこに乗って、名古屋の城の金の鯨し  
やちほこ

鉾ほこを盗むという事実を仕組んだもので、鬼太郎君は序幕と三  
 幕目を書いた。三幕目は金助が鯨鉾を盗むところで、家橘の金助  
 が常磐津ときわづを遣つかつて奴やつこの凧たこの浄瑠璃じやうるりめいた空中の振事ふりごとを見せる  
 のであつた。わたしは二幕目の金助の家を書いた。ここはチョボ  
 入りの世話場せわばであつた。採菊翁は最後の四幕目を書く筈であつた  
 が、途中で病気のために筆を執ることが出来なくなつたので、私  
 が年末の急稿でそのあとを綴とじ合せた。

この脚本を上演するに就いては、内部では相当に苦情があつたらしく聞いている。俳優側からも種々の訂正が持ち出されたらしい。しかし井上氏は頑がんとして受けなかつた。この二番目の脚本にはいつさい手を着けてはならないと云い渡した。そうして、とうとうそれを押し通してしまった。

井上氏はその当時にあつて、実に偉い人であつたと思う。

その演劇しげいは正月の八日が初日であつたように記憶している。その前年の暮れに、私が途中で榎本君に逢うと、彼は笑いながら

「君、怒つちやいけないよ」と云つた。果たして稽古の際に楽屋へ行くと、我々の不愉快を誘い出すようなことが少なくなかつた。手を着けてはならないと井上氏が宣告して置いたにも拘かかわらず、俳優

優くしやや座付作者たちから種々の訂正を命ぜられた。我々もよんどころなく承諾した。三幕目の常磐津は座の都合で長唄に変更することになったのは我々もかねて承知していたが、狂言作者の一人は脚本を持って来て「これをどうぞ長唄にすぐ書き直してください」と、皮肉らしく云った。つまりお前たちに常磐津と長唄とが書き分けられるかと云う肚はらであつたらしい。我々も意地になつて承知した。その場で鬼太郎君が筆を執つて、私も多少の助言をして、二十分ばかりでもかくも其の唄くだりの件だけを全部書き直して渡した。すると、つづいて番附のカタリをすぐに書いてくれと云った。そうして「これは立たて作者つくりの役ですから」と、おなじく皮肉らしく云った。我々はすぐにカタリを書いて渡した。すると、

先に渡した唄をまた持つて来て一、二カ所の訂正を求めた。

「こんなべらぼうな文句じや踊れないと橘屋たちばなやが云いますから」と、その作者はべらぼうという詞ことばに力を入れて云った。

金助を勤める家橘が果たしてそう云ったかどうか知らないが、ともかくも其の作者は家橘がそう云った事として我々に取次いだ。べらぼうと云われて、我々もさすがにむつとした。榎本君に注意されたのはここだなと私は思った。いつそ脚本を取り返して帰ろうかと二人は相談したが、その時は鬼太郎君よりも私は軟派であった。もう一つには、榎本君の注意が頭に泌みているせいでもあろう。結局、鬼太郎君を宥なだめてべらぼうの屈辱を甘んじて受けることになった。そうして、先方の註文通りに再び訂正することに

なつた。

それは暮れの二十七日で、二人が歌舞伎座を出たのは夜の八時過ぎであつた。晴れた晩で、銀座の町は人が押し合うように賑わつていたが、わたしは何だか心寂しかった。銀座で鬼太郎君に別れた。その頃はまだ電車が無いので、私は暗い寒い堀端ほりばたを徒歩で麴町こうじまちへ帰つた。前に云つた宮戸座の時は、ほんの助手に過ぎないのであつて、曲がりなりにも自分たちが本当に書いたものを上場されるのは今度が初めてである。私は嬉しい筈であつた。嬉しいと感じるのが当り前だと思つた。しかし私はなんだか寂しかった。いつそ脚本を撤回してしまえばよかつたなども考えた。

「もう脚本は書くまい。」

わたしはお堀の暗い水の上で啼いている雁がんの声を聴きながら、  
そう思った。

正月になって、歌舞伎座がいよいよ開場すると、我々の二番目  
もさのみ不評ではなかった。勿論、こんにちから観れば冷汗が出  
るほどに、俗受けを狙った甘いものであるから、ひどい間違いは  
なかったらしい。評判が悪くないので、わたしはお堀の雁の声を  
もう忘れてしまって、つづけて何か書こうかなどと鬼太郎君とも  
相談したことがあった。しかし、そうは問屋で卸おろさなかった。鉄  
の門は再び閉められてしまった。我々は再びもとの袖萩になって  
しまった。なんでも我々の脚本を上場したと云うことが作者部屋  
の問題になって、外部の素人の作を上場するほどなら、自分たち

の作も続々上場して貰いたいとか云う要求を提出されて、井上氏もその鎮圧に苦しんだとか聞いている。そんな事情で、われら素人の脚本はもう歌舞伎座で上演される見込みは絶えてしまった。

その当時に帝国劇場はなかった。新富座はたしか芝鶴しかくが持主で、またごろう又五郎などの一座で興行をつづけていて、ここではとても新しい脚本などを受付けそうもなかった。

「差当り芝居を書く見込みはない。」

わたしは一旦あきらめた。その頃は雑誌でも脚本を歓迎してくれなかった。いよいよ上演と決まった脚本でなければ掲載してくれなかった。どっちを向いても、脚本を書くなどと云うことは無駄な努力であるらしく思われた。私も脚本を断念して、小説を書

こうと思ひ立つた。

明治三十六年に菊五郎と團十郎とが年を同じゆうして死んだ。

これで劇界は少しく動揺するだろうと窺つてみると、内部はともあれ、表面にはやはりいちじるしい波紋を起さなかつた。私はいよいよ失望した。三十七年には日露戦争が始まつた。その四月に歌舞伎座で森鷗外<sup>もりおうがい</sup>博士の「日蓮<sup>にちれん</sup>辻説法<sup>つじせつぽう</sup>」が上場された。恐らくそれは舎弟の三木竹二君<sup>みきたけじ</sup>の榊<sup>あつせん</sup>旋<sup>よ</sup>に因るものであるうが、劇界では破天荒の問題として世間の注目を惹<sup>ひ</sup>いた。戦争中にも拘らず、それが一つの呼物になつたのは事実であつた。

その頃から私は従軍記者として満洲へ出張していたので、内地の劇界の消息に就いてはなんにも耳にする機会がなかつた。その



年の八月に左団次の死んだことを新聞紙上で僅かに知つたに過ぎなかつた。實際、軍国の劇壇には余りいちじるしい出来事も無かつたらしかつた。

明治三十八年五月、わたしが戦地から歸つた後に、各新聞社の演劇担当記者らが集まつて、若葉会という文士劇を催した。今日では別に珍しい事件でも何でもないが、その当時にあつては、これは相當に世間の注目を惹くべき出来事であつた。第一回は歌舞伎座で開かれて、わたしが第一の史劇「天目山」二幕を書いた。そのほかには、かの「日蓮辻説法」も上演された。これが私の劇作の舞台に上せられた第二回目で、作者自身が武田勝頼に扮す

るつもりであつたが、その当時わたしは東京日日新聞社に籍を置いていたので、社内からは種々の苦情が出たのに辟易へきえきして、急に鬼太郎君に代つて貰もらうことにした。

山崎やまざき紫紅君の「上杉謙信うえすぎけんしん」が世に出たのも此の年であつ

たと記憶している。舞台は真砂座まささいざで伊井蓉峰君が謙信に扮したの

である。これが好評で、紫紅君は明くる三十九年の秋に『七つ桔き

梗きよう』という史劇集を公おおけにした。松葉君はこの年の四月、演劇

研究のために洋行した。文芸協会はこの年の十一月、歌舞伎座で坪内逍遙つぽうちしやう博士の「桐一葉きりひとば」を上演した。

若葉会は更に東京毎日新聞社演劇会と變つて、同じ年の十二月、明治座で第一回を開演することになったので、私は史劇「新羅しんら

三郎ぶろう」二幕を書いた。つづいて翌四十年七月の第二回（新富座）には「阿新丸くまわかまる」二幕を書いた。同年十月の第三回（東京座）には「十津川戦記とつかわ」三幕を書いた。同時に紫紅君の「甕破柴田かめわりしばた」一幕を上場した。勿論、これらはいずれも一種の素人芝居に過ぎないので、普通の劇場とは没交渉のものであつたが、それでもたゞび重なるに連れて、いわゆる素人の書いた演劇というものが玄人の眼にも、だんだんに泌みて来たと見えて、その年の十二月、紫紅君は新派の河合武雄君かわいたけおに頼まれて史劇「みだれ笹」一幕（市村座）を書いた。山岸荷葉君やまぎしかようもこの年、小団次君こだんじらのために「ハムレット」の翻訳史劇（明治座）を書いた。

翌四十一年の正月、左団次君が洋行帰りの第一回興行を明治座

で開演して、松葉君が史劇「袈裟けさと盛遠もりとお」二幕を書いた。三月の第二回興行には紫紅君の「歌舞伎物語」四幕が上場された。その年の七月、かの川上音二郎かわかみおとじろう君が私をたずねて来て、新たに革新興行の旗揚げをするに就いて、維新当時の史劇を書いてくれと云った。私は承知してすぐに「維新前後」（奇兵隊と白虎隊）六幕を書いた。前の奇兵隊の方は現存の関係者が多いので、すこぶる執筆の自由を妨げられたが、後の白虎隊の方は勝手に書くことが出来た。それは九月の明治座で上演された。

もう此の後は新しいことであるから、くだくだしく云うまでもない。要するに茲こゝらが先ずひとくぎり、四十二年以来は素人の脚本を上場することが別に何らの問題にもならなくなった。鉄の

扉もだんだんに弛ゆるんで、いつとは無しに開かれて来た。勿論、全然開放とまでは行かないが、潜くぐり門ぐらいはどうやらこうやら押せば明くようになって来た。

普通の劇場は一般の観客を相手の営利事業であるから、芸術本位の脚本を容れると云うまでにはまだ相当の時間を要するに相違ないが、ともかくも商売になりそうな脚本ならば、それが誰の作であろうとも、あまり躊ちゆう躇ちよしないで受取るようになったのは事実である。一方には文芸協会その他の新劇団が簇そう出しゅつして、競つて新脚本を上演して、外部から彼らを刺戟しげきしたのも無論あずかつて力がある。又それに連れて、この数年来、幾多の新しい劇作家があらわれたのは誰しも知っていると云うところである。

新進気鋭の演劇研究者の眼から観たらば、わが劇壇の進歩は実に遅々たるもので、實際齒がゆいに相違ない。しかし公平に観たところを云えば、成程それは兎の如くに歩んではいけないが、確実に亀の如くには歩んでいると思われる。亀の歩みも焦しれつたいには相違ないが、それでも一つ処に停止していないのは事実である。十六年前に、わたしがお堀端で雁の声を聴いた時にくらべると、表面はともあれ、内部は驚かれるほどに変わっている。更に十年の後には、どんなに変るかも知れないと思っている。その当時、自分がひどく悲観した経験があるだけに、現在の状態もあながちに悲観するには及ばない。たとい亀の歩みでも、牛の歩みでも、歩一歩ずつ進んでいるには相違ないと云うことだけは信じている。

ただ、焦りたい。しかしそれも已むを得ない。

これまで書いて来たことは、専ら歌舞伎劇の方面を主にして語つたものである。新派の方は当座の必要上、昔から新作のみを上場していたのは云うまでもない。しかし、その新派の方に却つてこの頃は鉄の扉が閉じられて来たらしく、いつもいつも同じような物を繰り返しているようになって来た。今のありさまで押して行くと、歌舞伎の門の方が早く開放されるらしい。私はその時節の来るのを待っている。

(大正7・ニ「新演芸」)

## 人形の趣味

××さん。

どこでお聞きになったのか知りませんが、わたしに何か人形の話をしろという御注文でしたが、実のところ、わたしは何も専門的に玩具おもちゃや人形を研究したり蒐しゅう集しゅうしたりしているわけではないのです。しかし私がおもちゃを好み、ことに人形を可愛がつているのは事実です。



勿論、人に吹聴ふいちようするような珍しいものもないせいでもありますが、わたしはこれまで自分が人形を可愛がると云うようなことを、あまり吹聴したことはありません。竹田出雲たけだいずもは机のうえに人形をならべて浄瑠璃をかいたと伝えられています。イプセンのデスクの傍わきにも、熊が踊ったり、猫がオルガンを弾いたりしている人形が控えていたと云います。そんな先例が幾らもあるだけに、わたしも何んだかそれらの大家たいかの真似をしているように思われるのも忌いやですから、なるべく人にも吹聴しないようにしていたのですが、書棚などの上にいっぱい列ならべてある人形が自然に人の眼について、二、三の雑誌にも玩具の話を書かされたことがあります。しかしそんなわけですから、わたしは単に人形の愛好者というだ

けのことで、人形の研究者や蒐集家でないことを最初にくれぐれもお断わり申して置きます。したがって、人形や玩具などに就いてなにかの通つうをならべるような資格はありません。

人形に限らず、わたしもすべて玩具のたぐいが子供のときから大好きで、縁日などへゆくと扱より取りの二銭八厘の玩具をむやみに買いあつめて来たものでした。二銭八厘——なんだか奇妙な勘定ですが、わたしの子供の頃、明治十八、九年頃までは、どういふ勘定から割り出して来たものか、縁日などで売っている安い玩具は、大抵二銭八厘と相場が決まっていたものでした。更に廉やすいのは一銭というのもありました。勿論、それより高価のももありましたが、われわれは大抵二銭八厘から五銭ぐらいの安物をよろこ

んで買いあつめました。今の子供たちにくらべると、これがほんとうの「幼稚」<sup>ようち</sup>と云うのかも知れません。しかし其の頃のおもちゃは大方すたれてしまつて、たまたま縁日の夜店の前などに立つても、もう少年時代のむかしを偲ぶ<sup>しの</sup>よすがはありません。とにかく子供のときからそんな習慣が付いているので、わたしは幾つになつても玩具や人形のたぐいに親しみをもつていて、十九<sup>つづ</sup>や二十<sup>はた</sup>歳<sup>ち</sup>の大<sup>おお</sup>供<sup>ども</sup>になつてもやはり玩具屋を覗く癖<sup>のぞ</sup>が失<sup>う</sup>せませんでした。そんな関係から、原稿などをかく場合にも、机の上に人形をならべるといふ習慣が自然に付きはじめたので、別に深い理屈があるわけでもなかつたのです。しかし習慣というものは怖ろしいもので、それがだんだんに年を経るにしたがつて、机の上に人形が

ないと何んだか物足らないような気分で、ひどく心さびしく感じられるようになってしまいました。それも二つや三つ列べるならばまだいいのですが、どうもそれでは物足らない。少なくとも七つ八つ、十五か十六も雑然と陳列させるのですから、机の上の混雑はお話になりません。最初の頃は、脚本などをかく場合には、半紙の上に粗末な舞台面の図をかいて、俳やくしや優の代りにその人形をならべて、その位置や出入りなどを考えながら書いたものですが、今ではそんなことをしません。しかし何かしら人形が控えていないと、なんだか極きまりが付かないようで、どうも落ちついた気分になれません。小説をかく場合でもそうです。脚本にしろ、小説にしろ、なにかの原稿を書いていて、ひどく行き詰まったような

場合には、棚から手あたり次第に人形をおろして来て、机の上に一面ならべます。自分の書いてある原稿紙の上にまでごたごたと陳列します。そうすると、不思議にどうかこうにか「窮すれば通ず」というようなことになりますから、どうしてもお人形さんに対して敬意を表さなければならぬことになるのです。旅行をする場合でも、出先で仕事をする<sup>と</sup>判っている時にはかならず相<sup>かばん</sup>当の人形を鞆に入れて同道して行きます。

人形とわたしとの関係はそういうわけでありますから、仮<sup>こじらいれき</sup>りにも人形と名のつくものならば何んでもいいので、別に故事来歴<sup>こじらいれき</sup>などを詮議しているわけではありません。要するに店仕舞いのおもちや屋という格で、二足三文の瓦<sup>がらくた</sup>楽多<sup>がたくた</sup>がただ雑然と押し合っている

だけのことでですから、何かおめずらしい人形がありますかなどと訊かれると、早速返事に困ります。それでたびたび赤面したことがあります。おもちゃ箱を引っくり返したようだというのは、全くわたしの書棚で、初めて来た人に、「お子供衆が余程たくさんおありですか」などと訊かれて、いよいよ赤面することがあります。

その瓦楽多のなかでも、わたしが一番可愛がっているのは、シナのあやつり人形の首で、これはちよつと面白いものです。先年三越呉服店で開かれた「劇に関する展覧会」にも出品したことがあります。この人形の首をはじめて見たのは、わたしが日露戦争に従軍した時、満洲の海城かいじょうの城外に老子ろうしの廟びやうがあつて、そ

の祭日に人形をまわしに来たシナの芸人の箱のなかでした。わたしは例の癖がむらむらと起つたので、そのシナ人に談判して、五つ六つある首のなかから二つだけを無理に売って貰いました。なにしろ土焼きですから、よほど丁寧に保管していたのですが、戦場ではなかなか保護が届かないので、とうとう二つながらこわ毀れてしまいました。がっかりしたが仕方がないので、そのまま東京へ帰って来ますと、それから二年ほどたつて、「木太刀」の星野ほしのば麦人君くじんの手を経て、神戸の堀江君ほりえという未見の人からシナの操り人形の首を十二個送られました。これも三つばかりは毀れていましたが、南京ナンキンで買ったのだとか云うことで、わたしが満洲で見たものと同じとも変りませんでした。わたしは一旦紛失したお

家の宝物いえ ほうもつを再びたずね出したように喜んで、もろもろの瓦樂多  
のなかでも上坐に押し据えて、今でも最も敬意を表しています。  
殊ことにそのなかの孫悟空そんごくうは、わたしが申まをす歳の生まれである因縁  
から、取分けて寵愛ちやうあいしているわけです。

そのほかの人形は——京きやう、伏見ふしみ、奈良なら、博多はかた、伊勢いせ、秋田あきた、山  
形まがたなど、どなたも御存知のものばかりで、例の今戸焼いまどやきもたく  
さんあります。シナ、シヤム、インド、イギリス、フランスなど  
も少しばかりあります。人形ではやはり伏見が面白いと思うので  
すが、近年は彩色などがだんだんに悪くなつて来たようです。伏  
見の饅頭人形まんじゆうなどは取分けて面白いと思います。伊勢の生子人形うぶこ  
も古風で雅味があります。庄内しょうないの小芥子人形こけしは遠い土地だけ



に余り世間に知られていないようですが、木製の至極粗末な人形で、赤ん坊のおしやぶりのようなものですが、その裳すその方を持つて肩をたたくと、その人形の首が丁度いい工合に肩の骨にコツコツとあたります。勿論、非常に小さいものもありますから、肩を叩くのが本来の目的ではありませんが、その地方では大人でも湯治などに出かける時には持つてゆくと云います。こんなたぐいを穿せん索さくしたら、各地方にいろいろの面白いものがあります。カントン

広東製の竹彫りの人形にもなかなか精巧に出来たのがあります。一つの竹の根でいろいろのものを彫り出すのですから、ずいぶん面倒なものであろうかと思いやられますが、わたしの持つて

いるなかでは、蝦蟆がま仙人が最も器用に出来ています。先年外国へ

行つた時にも、なにか面白いものはないかと方々探しあるきましたが、どうもこれほど云うほどのものを見当りませんでした。戦争のために玩具の製造などはほとんど中止されてしまつて、どこのおもちや屋にも日本製品が跋扈ばっこしているというありさまで、うっかりすると外国からわざわざ日本製を買い込んで来ることになるので、わたしもひどく失望しました。フランスでちつとばかり買つて来ましたけれど、取り立てて申し上げるほどのものではありません。

なにか特別の理由があつて、一つの人形を大切にする人、または家重代いえじゆうだいというようなわけで古い人形を保存する人、一種の骨董趣味こつとうで古い人形をあつめる人、ただ何が無しに人形という

ものに趣味をもつて、新古を問わずにあつめる人、かぞえたらばいろいろの種類があることでしょうが、わたしは勿論、その最後の種類に属すべきものです。で、甚だ我<sup>がでんいんすい</sup>田引水のようですが、特別の知識をもつて秩序的に研究する人は格別、単にその年代が古いとか、世間にめずらしい品であるとか云うので、特殊の人形を珍重する人はほんとうの人形好きとは云われまいかと思われま  
す。そういう意味で人形を愛するのは、単に一種の骨董癖に過ぎ  
ないので、古い硯すずりを愛するのも、古い徳利とっくりを愛するのも、所しよせ  
詮んは同じことになってしまいます。人形はやはりどこまでも人  
形として可愛がつてやらなければなりません。その意味に於いて、  
人形の新古や、値こつげの高下や、そんなことを論ずるのはそもそも末

で、どんな粗製の今戸焼でもどこかに可愛らしいとか面白いとかいう点を発見したならば、連れて帰って可愛がつてやることです。

ぶがく舞樂の面を毎日眺めていて、とうとう有名な人相見になつたとかいう話を聴いています。が、實際いろいろの人形をながめていると、人間というものに就いてなにか悟さとるところがあるようにも思われます。少なくとも美しい人形や、可愛らしい人形を眺めていると、こつちの心もおのずとやわらげられるのは事実です。わたしは何か気分がむしゃくしゃするような時には、伏見人形の鬼おにや、今戸焼たぬきの狸などを机のうえに列べます。そうして、その鬼や狸の滑こっけい稽な顔をつくづく眺めていると、自然に頭がくつろいで来るように思われます。

くどくも云う通り、人形といえは相当に年代の古いものとか、精巧に出来ているものとか、値段の高いものとか、いちいちそういうむずかしい註文を持出すから面倒になるので、わたしから云えばそれらは真の人形好きではありません。勿論、わたしのように瓦樂多をむやみに陳列するには及びませんが、たとい二つ三つでも自分の気に入った人形を机や書棚のうえに飾って、朝夕に愛玩するのは決して悪いことではないと思います。人形を愛するの心は、すなわち人を愛するの心であります。品の新しいとか古いとか、値の高いとか廉やすいとかいうことは問題ではありません。なんでも自分の気に入ったものでさえあればいいのです。廉やすいものを飾って置いては見つともないなどと云っているようでは、俱ともに

人形の趣味を語るに足りないと思います。廉い人形でよろしい、せいぜい三十銭か五十銭のものでよろしい、その数も二つか三つかでもよろしい。それを坐右に飾って朝夕に愛玩することを、わたしは皆さんにお勧め申したいと思います。

不良少年を感化するために、園芸に従事させて花卉かきに親しませるという方法が近年行なわれて来たようです。わたしは非常によいことだと思えます。それとおなじ意味で、世間一般の少年少女にも努めて人形を愛玩させる習慣を作らせたいと思つています。単に不良少女ばかりでなく、大人の方たちにもこれをお勧め申したいと思つています。なんの木偶でくの坊ぼう——とひと口に云つてしまえばそれ迄までですが、生きた人間にも木偶の坊に劣つたのではないと

は云えませんが。魂のない木偶の坊から、われわれは却つて生きた魂を伝えられることがないとも限りません。

我田引水と云われるのを承知の上で、私はここに人形趣味を大いに鼓吹こすいするのであります。  
 (大正9・10「新家庭」)

この稿をかいたのは、足かけ四年の昔で、それら幾百の人形は大正十二年九月一日をなごりに私と長い別れを告げてしまった。かれらは焼けて碎けて、もとの土に帰ったのである。九月八日、焼け跡の灰かきに行つた人たちが、わずかに五つ六つの焦げた人形を掘り出して来てくれた。

わびしさや袖の焦げたる秋の雛ひな

(『十番随筆』所収)

## 震災の記

なんだか頭がまだほんとうに落着かないので、まとまったことは書けそうもない。

去年七十七歳で死んだわたしの母は、十歳とおの年に日本橋で安あんせ政いの大地震おおに出逢ったそうで、子供の時からたびたびそのおそろしい昔話を聴かされた。それが幼い頭にしみ込んだせいか、わたしは今でも人一倍の地震ぎらいで、地震と風、この二つを最も



恐れている。風の強く吹く日には仕事が出来ない。少し強い地震があると、又そのあとにゆり返しが来はしないかという予覚におびやかされて、やはりどうも落着いていられない。

わたしが今まで経験したなかで、最も強い地震としていつまでも記憶に残っているのは、明治二十七年六月二十日の強震である。晴れた日の午後一時頃と記憶しているが、これも随ずいぶん分ひどい揺れ方で、市内に潰つぶれ家もたくさんあった。百六、七十人の死傷者もあった。それに伴って二、三カ所にボヤも起つたが、一軒焼けか二軒焼けぐらいで皆消し止めて、ほとんど火事らしい火事はなかった。多少の軽いゆり返しもあったが、それも二、三日の後は鎮まった。三年まえの尾濃震災びのうにおびやかされている東京市内

の人々は、一時ぎようさんにおどろき騒いだが、一日二日と過ぎるうちにそれもおのずと鎮まった。勿論、安政度の大地震とはまるで比較にならないくらいの小さいものであったが、ともかくも東京としては安政以来の強震として伝えられた。わたしも生まれてから初めてこれほどの強震に出逢ったので、その災禍のあとをたずねるために、当時すぐに銀座の大通りから、上野へ出て、さらに浅草へまわって、汗をふきながら夕方に帰って来た。そうして、しきりに地震の惨害を吹ふいちよう聴ちようしたのであった。その以来、わたしに取って地震というものが、一層おそろしくなった。わたしはいよいよ地震ぎらいになった。したがって、去年四月の強震のときにも、わたしは書きかけていたペンを捨てて庭先へ逃げ出した。

こういう私がなんの予覚もなしに大正十二年九月一日を迎えたのであった。この朝は誰も知っている通り、二百十日前後にありがちの何となく穏かならない空模様で、驟しゅうう雨が折りおりに見舞って来た。広くもない家のなかはいやに蒸し暑かった。二階の書齋には雨まじりの風が吹き込んで、硝子戸をゆする音がさわがしいので、わたしは雨戸を閉め切って下座敷の八畳に降りて、二、三日まえから取りかかっている週刊朝日の原稿を書きつづけていた。庭の垣根から柵のうえに這いあがった朝顔と糸瓜へちまの長い蔓つるや大きい葉がもつれ合って、雨風にざわざわと乱れてそよいでいるのも、やがて襲ってくる暴風雨あらしを予報するように見えて、わたしの心はなんだか落ちつかなかった。

勉強して書きつづけて、もう三、四枚で完結するかと思うところへ、国民図書刊行会の広谷君が雨を冒して来て、一時間ほど話して帰った。広谷君は私の家から遠くもない麴町やまもとちよう山元町に住んでいるのである。広谷君の帰る頃には雨もやんで、うす暗い雲の影は溶けるように消えて行つた。茶の間で早い午飯ひるめしを食つているうちに、空は青々と高く晴れて、初秋の強い日のひかりが庭一面にさし込んで来た。どこかで蝉せみも鳴き出した。

わたしは箸はしを措おいて起たつた。天氣が直つたらば、仕事場をいつもの書齋に変えようと思つて、縁先へ出てまぶしい日を仰いだ。

それから書きかけの原稿紙をつかんで、玄関の二畳から二階へ通つてゐる階はしごだん子段を半分以上も昇りかけると、突然に大きい鳥が

羽搏はばたきをするような音がきこえた。わたしは大風が吹き出したのかと思つた。その途端にわたしの踏んでゐる階子がみりみりと鳴つて動き出した。壁も襖ふすまも硝子窓も皆それぞれの音を立てて揺れはじめた。

勿論、わたしはすぐに引つ返して階子をかけ降りた。玄関の電燈は今にも振り落されそうに揺れている。天井から降つてくるらしい一種のほこりが私の眼鼻にしみた。

「地震だ。ひどい地震だ。早く逃げろ。」

妻や女中に注意をあたえながら、ありあわせの下駄を突っかけて、沓くつぬぎ脱から硝子戸の外へ飛び出すと、碧あおぎり桐の枯葉がばさばさとして落ちて来た。門の外へ出ると、妻もつづいて出て来た。女中

も裏口から出て来た。震動はまだやまない。私たちはまっすぐに立っているに堪えられないで、門柱に身を寄せて取りすがつていと、向うのA氏の家からも細君や娘さんや女中たちが逃げ出して来た。わたしの家の門構えは比較的堅固に出来ている上に、門の家根が大きくて瓦の墜落を避ける便宜があるので、A氏の家族は皆わたしの門前に集まって来た。となりのM氏の家族も来た。

おおぜい大勢が門柱にすがって揺られているうちに、第一回の震動がようやくに鎮まった。ほっと一息ついて、わたしはともかくも内へ引っ返してみると、家内には何の被害もないらしかった。掛時計の針も止まらないで、十二時五分を指していた。二度のゆり返しを恐れながら、急いで二階へあがって窺うと、柵いっぱい飾つ

てある人形はみな無難であるらしかったが、ただ一つ博多人形の夜叉王やしやおうがうつ向きに倒れて、その首が悼いたましく碎けて落ちているのがわたしの心を寂しくさせた。

と思う間もなしに、第二回の烈震がまた起つたので、わたしは転げるように階子をかけ降りて再び門柱に取りすがつた。それがやむと、少しの間を置いて更に第三第四の震動がくり返された。

A氏の家根瓦がばらばらと揺れ落された。横町の角にある玉突場の高い家根からつづいて震い落される瓦の黒い影が鴉からすの飛ぶようにみだれて見えた。

こうして震動をくり返すからは、おそらく第一回以上の烈震はあるまいという安心と、我れも人も幾らか震動に馴れて来たのと、

震動がだんだんに長い間隔を置いて来たのとで、近所の人たちも少しく落着いたらしく、思い思いに椅子いすや床しょうぎ几ぎや花はな筵むしろなどを持ち出して来て、門のまえに一時の避難所を作った。わたしの家でも床几を持ち出した。その時には、赤坂の方面に黒い煙りがむくむくとうずまきあが颯あがつていた。三番町の方角にも煙りがみえた。取分けて下した町まち方面の青空に大きい入道雲のようなものが真つ白にあがっているのが私の注意をひいた。雲か煙りか、晴天にこの一種の怪物の出現を仰ぎみた時に、わたしは云い知れない恐怖を感じた。

そのうちに見舞の人たちがだんだんに駈けつけて来てくれた。その人たちの口から神田方面の焼けていることも聞いた。銀座通



りの焼けていることも聞いた。警視庁が燃えあがって、その火先が今や帝劇を襲おうとしていることも聞いた。

「しかしここらは無難で仕合せでした。ほとんど被害がないと云つてもいいくらいです。」と、どの人も云つた。まったくわたしの附近では、家根瓦をふるい落された家があるくらいのこと、いちじるしい損害はないらしかつた。わたしの家でも眼に立つほどの被害は見いだされなかつた。番町方面の煙りはまだ消えなかつたが、そのあいだに相当の距離があるのと、こつちが風かざ上かみに位しているのと、誰もさほどの危険を感じていなかつた。それでもこの場合、個々に分かれているのは心さびしいので、近所の人たちは私の門前を中心として、椅子や床几や花むしろを一つと

ころに寄せあつめた。ある家からは茶やビスケットを持ち出して来た。ビールやサイダーの壇びんを運び出すのもあつた。わたしの家からも梨なしを持ち出した。一種の路上茶話会がここに開かれて、諸家の見舞人が続々もたらしてくる各種の報告に耳をかたむけていた。そのあいだにも大地の震動は幾たびか繰り返された。わたしは花むしろのうえに坐つて、「地震かとう加藤」の舞台を考えたりしていた。

こうしているうちに、日はまったく暮れ切つて、電燈のつかない町は暗くなった。あたりがだんだんに暗くなるに連れて、一種の不安と恐怖とがめいめいの胸を強く圧して来た。各方面の夜の空が真紅まっかにあぶられているのが鮮やかにみえて、時どきに凄まじすき

い爆音もきこえた。南は赤坂から芝の方面、東は下町方面、北は番町方面、それからそれへと続いて、ただ一面にあかく焼けていた。震動がようやく衰えてくると反対に、火の手はだんだんに燃えひろがってゆくらしく、わずかに剩すところあまは西口の四谷方面だけで、私たちの三方は猛火に囲まれているのである。茶話会の群れのうちから若い人はひとり起たち、ふたり起つて、番町方面の状況を偵察に出かけた。しかしどの人の報告も火先が東にむかっているから、南の方の元園町方面はおそらく安全であろうということに一致していたので、どこの家でも避難の準備に取りかかるうとはしなかった。

最後の見舞に来てくれたのは演芸画報社の市いちむら村君で、その住

居は土手三番町であるが、火先がほかへそれたので幸いに難をまぬかれた。京橋の本社は焼けたろうと思うが、とても近寄ることが出来ないとのことであつた。市村君は一時間ほども話して歸つた。番町方面の火勢はすこし弱つたと伝えられた。

十二時半頃になると、近所が又さわがしくなつて来て、火の手が再び熾さかんになつたという。それでも、まだまだと油断して、わたしの横町ではどこでも荷ごしらえをするらしい様子もみえなかつた。午前一時頃、わたしは麴町の大通りに出てみると、電車みちは押し返されないような混雑で、自動車が走る、自転車が走る。荷車を押してくる。荷物をかついでくる。馬が駆ける。提灯が飛ぶ。いろいろのいでたちをした男や女が気ちがい眼まなこでかけあはる。

英国大使館まえの千鳥ちどりヶ淵公園附近に逃げあつまっていた番町方面の避難者は、そこも火の粉がふりかかって来るのにうろたえて、さらに一方口の四谷方面にその逃げ路を求めようとするらしく、人なだれを打って押し寄せてくる。

うっかりしていると、突き倒され、踏みにじられるのは知れているので、わたしは早々に引返して、さらに町内の酒屋の角に立って見わたすと、番町の火は今や五味坂上ごみざかの三井邸みついでのうしろに迫って、怒涛どとうのように暴れ狂う焰ほのおのなかに西洋館の高い建物がはつきりと浮き出して白くみえた。

迂回うかいしてゆけば格別、さし渡しにすれば私の家から一町あまりに過ぎない。風上であるの、風向きが違うのと、今まで多寡たかをく

くつていたのは油断であつた。——こう思いながら私は無意識にそこにある長床几に腰をかけた。床几のまわりには酒屋の店の者や近所の人たちが大勢寄りあつまつて、いずれも一心に火をながめていた。

「三井さんが焼け落ちれば、もういけない。」

あの高い建物が焼け落ちれば、火の粉はここまでかぶつてくるに相違ない。わたしは床几をたちあがると、その眼のまえには広い青い草原が横たわっているのを見た。それは明治十年前後の元園町の姿であつた。そこには疎まばらに人家が立っていた。わたしが今立っている酒屋のところには、おてつ牡丹餅の店があつた。そこらには茶畑もあつた。草原にはところどころに小さい水が流れ

ていた。五つ六つの男の児が肩もかくれるような夏草をかき分けて、しきりにばったを探していた。そういう少年時代の思い出がそれからそれへと活動写真のようにわたしの眼の前にあらわれた。「旦那。もうあぶのうございませぬ。」

誰が云ったのか知らないが、その声に気がついて、わたしはすぐに自分の家へ駈けて帰ると、横町の人たちももう危険の迫つて来たのを覚つたらしく、路上の茶話会はいつか解散して、どこの家でも俄かに荷にわごしらえを始め出した。わたしの家の暗いなかにも一本の蠟燭ろうそくの火が微かすかにゆれて、妻と女中と手伝いの人があるわただしく荷作りをしていた。どの人も黙っていた。

万一の場合には紀尾井町のきおいちよう小林こばやし蹴ししゅう月君げつくんのところへ立ち退く

ことに決めてあるので、私たちは差しあたりゆく先に迷うようなことはなかったが、そこへも火の手が追つて来たらば、更にごへ逃げてゆくか、そこまで考えている余裕はなかった。この際、いくら欲張ったところでどうにも仕様はないので、私たちはめいめいの両手に持ち得るだけの荷物を持ち出すことにした。わたしは週刊朝日の原稿をふところに捻<sup>ね</sup>じ込んで、バスケットと旅行用の鞆とを引っさげて出ると、地面がまた大きく揺らいた。

「火の粉が来るよう。」

どこかの暗い家根のうえで呼ぶ声が遠くきこえた。庭の隅にはこおろぎの音がさびしく聞えた。蠟燭をふき消した私の家のなか  
は闇になった。



わたしの横町一円が火に焼かれたのは、それから一時間の後であつた。小林君の家へゆき着いてから、わたしは宇治拾遺物語にあつた絵仏師の話进行出した。彼は芸術的満足を以つて、わが家の焼けるのを笑いながちながめていたと云うことである。わたしはその烟りさえも見ようとはしなかつた。

(大正12・10「婦人公論」)

## 十番雑記

昭和十二年八月三十一日、火曜日。午前は陰、午後は晴れて暑い。

虫干しながらの書庫の整理も、連日の秋暑に疲れ勝ちでとかくに撈取はかどらない。いよいよ晦日みそかであるから、思い切って今日じゅうに片付けてしまおうと、汗をふきながら整理をつづけていると、手文庫の中から書きさしの原稿類を相当に見いだした。いずれも

書き捨ての反古ほご同様のものであったが、その中に「十番雑記」というのがある。私は大正十二年の震災に麴町の家を焼かれて、その十月から翌年の三月まで麻布の十番に仮寓かぐうしていた。唯今見いだしたのは、その当時の雑記である。

わたしは麻布にある間に『十番随筆』という随筆集を發表している。その後にも『猫柳ねこやなぎ』という随筆集を出した。しかも

「十番雑記」の一文はどれにも編入されていない。傾きかかった古家の薄暗い窓のもとで、師走の夜の寒さにすくみながら、当時の所懐と所見とを書き捨てたままで別にそれを發表しようとも思わず、文庫の底に押込んでしまったのであろう。自分も今まで全く忘れていたのを、十四年後のきょう偶然発見して、いわゆる懐

旧の情に堪えなかつた。それと同時に、今更のように思い浮かんだのは震災十四周年の当日である。

「あしたは九月一日だ。」

その前日に、その当時の形見ともいうべき「十番雑記」を発見したのは、偶然とはいいながら一種の因縁がないでも無いように思われて、なんだか捨て難い気にもなったので、その夜の灯のもとで再読、この随筆集に挿入することにした。

## 仮住居

十月十二日の時雨しぐれふる朝に、私たちは目白めじろの額田ぬかだろ六福つぷく方を立

ち退いて、麻布宮村町みやむらちようへ引き移ることになった。日蓮宗の寺の門前で、玄関が三畳、茶の間が六畳、座敷六畳、書齋が四畳半、女中部屋が二畳で、家賃四十五円の貸家である。裏は高い崖がけになつていて、南向きの庭には崖の裾の草堤が斜めに押し寄せていた。崖下の家はあまり嬉しくないなどと贅沢めったを云っている場合でない。なにしろ大震災の後、どこにも滅多めったに空家のあるう筈はなく、さんざんに探し抜いた揚句の果てに、河野義博君こうのよしひろの紹介でよう此処ここに落着くことになったのは、まだしもの幸いであると云わなければなるまい。これでもかくも一時の居どころは定まつたが、心はまだ本当に定まらない。文字通りに、箸一つ持たない丸焼けの一家族であるから、たとい仮住居にしても一戸を持つと

なれば、何かと面倒なことが多い。ふだんでも冬の設けに忙がい時節であるのに、新世帯もちの我々はいよいよ心ぜわしい日を送らねばならなかった。

今度の家は元来が新しい建物でない上に、震災以来ほとんどそのままになっていたので、壁はところどころ崩れ落ちていた。障子も破れていた。襖も傷ふすまんでいた。庭には秋草が一面に生いしげっていた。移転の日に若い人たちがあつまつて、庭の草はどうにか綺麗に刈り取ってくれた。壁の崩れたところも一部分は貼ってくれた。襖だけは家主からきようじや経師屋の職人をよこして応急の修繕をしてくれたが、それも一度ぎりで姿をみせないで、家内総がかりで貼り残しの壁を貼ることにした。幸いに女中が器用なので、

まず日本紙で下貼りをして、その上を新聞紙で貼りつめて、さらに壁紙で上貼りをして、これもどうにか斯うにか見苦しくないようになつた。そのあくる日には障子も貼りかえた。

その傍らに、わたしは自分の机や書棚やインクスタンドや原稿紙のたぐいを買ひあるいた。妻や女中は火鉢や盥やバケツや七輪のたぐいを毎日買ひあるいた。これで先ず不完全ながらも文

房具や世帯道具がひと通り整うと、今度は冬の近いのに脅かされなければならなかつた。一枚の冬着さえ持たない我々は、どんな粗末なものでも好いから寒さを防ぐ準備をしなければならぬ。

夜具の類は出来合いを買つて間にあわせることにしたが、一家内の者の羽織や綿入れや襦袢や、その針仕事に女たちはまた忙が

しく追い使われた。

目白に避難の当時、それぞれに見舞いの品を贈つてくれた人もあつた。ここに移転してからも、わざわざ祝いに来てくれた人もあつた。それらの人々に対して、妻とわたしとが代るがわるに答礼に行かなければならなかつた。市内の電車は車台の多数を焼失したので、運転系統がいろいろに変更して、以前ならば一直線にゆかれたところも、今では飛んでもない方角を迂回して行かなければならない。十分か二十分でゆかれたところも、三十分五十分を要することになる。勿論どの電車も満員で容易に乗ることは出ない。市内の電車がこのありさまであるから、それに連れて省線の電車がまた未曾有みぞうの混雑を来たしている。それらの不便のた



めに、一日いらいらながら駈けあゝるいても、わずかに二軒か三軒しか廻り切れないような時もある。又そのあいだには旧宅の焼け跡の整理もしなければならぬ。震災に因つて生じたもろもろの事件の始末も付けなければならぬ。こうして私も妻も女中らも無暗むやみにあわただしい日を送っているうちに、大正十二年も暮れて行くのである。

「こんな年は早く過ぎてしまふ方がいい。」

まあ、こんなことでも云うよりほかはない。なにしろ余ほどの老人でない限りは、生まれて初めてこんな目に出逢つたのであるから、狼狽混乱、どうにも仕様のないのが当りまえであるかも知れないが、罹災りさい以来そのあと始末に四カ月を費して、まだほんと

うに落着かないのは、まったく困ったことである。年が改あらたまったと云つて、すぐに世のなかが改まるわけでないのは判り切つてゐるが、それでも年があらたまつたらば、心持だけでも何とか新しくなり得るかと思うが故に、こんな不ふし祥な年は早く送つてしまいたいと云うのも普通の人情かも知れない。

今はまだ十二年の末であるから、新しい十三年がどんな年で現われてくるか判らない。元旦も晴か雨か、風か雪か、それすらもまだ判らない位であるから、今から何も云うことは出来ないが、いずれにしても私はこの仮住居で新しい年を迎えなければならぬ。それでもバラツクに住む人たちのことを思えば何でもない。たとひ家を焼かれても、家財と蔵書いっさいをうしなつても、わ

たしの一家は他に比較してまだまだ幸福であると云わなければならない。わたしは今までも奢侈おごりの生活を送っていないから、今後、今度も特に節約をしようとも思わない。しかし今度の震災のために直接間接に多大の損害をうけているから、その幾分を回復するべく大いに働かなければならない。まず第一に書庫の復興を計らなければならない。

父祖の代から伝わっている刊本写本五十余种、その大部分は回収の見込みはない。父が晩年の日記十二冊、わたし自身が十七歳の春から書きはじめた日記三十五冊、これらは勿論あきらめるよりはほかはない。そのほかにも私が随時に記入していた雑記帳、随筆、書抜き帳、おぼえ帳のたぐい三十余冊、これも自分としては

すこぶる大切なものであるが、今さら悔むのは愚痴である。せめてはその他の刊本写本だけでもだんだんに買い戻したいと念じているが、その三分の一も容易に回収は覚束なそうである。この頃になって書棚の寂しいのがひどく眼についてならない。諸君が汲きゆうきゆう々々として帝都復興の策を講じているあいだに、わたしも勉強して書庫の復興を計らなければならぬ。それがやはりなんらかの意義、なんらかの形式に於いて、帝都復興の上にも貢献するところがあろうと信じている。

わたしの家では、これまでも余り正月らしい設備をしたこともないのであるから、この際とても特に例年と変ったことはない。年賀状は廃するつもりであったが、さりとして平生懇親にしている

人々に対して全然無沙汰で打ち過ぎるのも何だか心苦しいので、震災後まだほんとうに一身一家の安定を得ないので歳末年始の礼を欠くことを葉書にしたためて、年内に発送することにした。そのほかには、春に対する準備もない。

わたしの庭には大きい紅梅がある。家主の話によると、非常に美事な花をつけると云うことであるが、元日までには恐らく咲くまい。

（大正十二年十二月二十日）

えびら  
籠の梅

狸坂くらやみ坂や秋の暮

これは私がここへ移転当時の句である。わたしの門前は東西に通ずる横町の細路で、その両端には南へ登る長い坂がある。東の坂はくらのやみ坂、西の坂は狸坂と呼ばれている。今でもかなりに高い、薄暗いような坂路であるから、昔はさこそと推し量られて、狸坂くらのやみ坂の名も偶然でないことを思わせた。時は晩秋、今のわたしの身を取っては、この二つの坂の名がいつそう幽暗の感を深うしたのであった。

坂の名ばかりでなく、土地の売り物にも狸羊羹、狸せんべいなどがある。カフェー・たぬきと云うのも出来た。子供たちも「麻布十番狸が通る」などと歌っている。狸はここらの名物であるら

しい。地形から考えても、今は格別、むかし狐や狸の巢窟そうくつであつたらしく思われる。私もここに長く住むようならば、綺堂をあらためて狸堂とか狐堂とか云わなければなるまいかなどとも考える。それと同時に、「狐に穴あり、人の子は枕する所無し」が、今の場合まつたく痛切に感じられた。

しかし私の横町にも人家が軒なみに建ち続いているばかりか、横町から一步ふみ出せば、麻布第一の繁華の地と称せらるる十番の大通りが眼の前に拡がっている。ここらは震災の被害も少なく、もちろん火災にも逢わなかつたのであるから、この頃は私たちのような避難者がおびただしく流れ込んで来て、平常よりも更に幾層の繁昌をましている。殊に歳の暮れに押し詰まって、ここらの

繁昌と混雑はひと通りでない。余り広くもない往来の両側に、居付きの商店と大道の露店とが二重に隙間もなく列ならんでいるあいだを、大勢の人が押し合つて通る。又そのなかを自動車、自転車、人力車、荷車が絶えず往来するのであるから、油断をすれば車輪ひに轆おかれるか、路ばたの大溝おへでも転げ落ちないとも限らない。実に物凄いほどの混雑で、麻布十番狸が通るなどは、まさに数百年のむかしの夢である。

「震災を無事にのがれた者が、ここへ来て怪我をしては詰まらな  
いから、気をつけろ。」と、わたしは家内の者にむかつて注意し  
ている。

そうは云つても、買物が種々あるというので、家内の者はたび



たび出てゆく。わたしもやはり出て行く。そうして、何かしら買って帰るのである。震災に懲りたのと、経済上の都合とで、無用の品物はいっさい買い込まないことに決めているのであるが、それでも当然買わなければ済まないような必要品が次から次へと現われて来て、いつまで経っても果てしが無いように思われる。ひと口に瓦<sup>がらくた</sup>楽多というが、その瓦<sup>がらくた</sup>楽多道具をよほどたくさんに貯えなければ、人間の家一戸を支えて行かれないものであると云うことを、この頃になってつくづく悟<sup>さと</sup>った。私たちがばかりでなく、すべての罹災者は皆どこかで此の失費と面倒とを繰り返しているのであろう。どう考えても、怖るべき禍いであつた。

その鬱<sup>うっ</sup>憤<sup>ぶん</sup>をここに洩らすわけではないが、十番の大通りはひ

どく路の悪い所である。震災以後、路普請なども何分手廻り兼ねるのであろうが、雨が降ったが最後、そこらは見渡す限り一面の泥ぬかるみで、ほとんど足の踏みどころもないと云つてよい。その泥濘ぬかるみのなかにも露店が出る、買物の人も出る。売る人も、買う人も、足もとの悪いなどには頓着していられないのであろうが、私のような気の弱い者はその泥濘におびやかされて、途中から空むなしく引返して来ることがしばしばある。

しかも今夜は勇気をふるい起して、そのぬかるみを踏み、その混雑を冒して、やや無用に類するものを買つて来た。わたしの外套の袖の下に忍ばせている梅の枝と寒菊の花がそれである。移転以来、花を生けて眺めるといふ気分にもなれず、花を生けるよう

な物も具えていないので、さきごろの天<sup>てんちよう</sup>長<sup>ちよう</sup>祝日に町内の青年  
団から避難者に対して戸毎に菊の花を分配してくれた時にも、そ  
の厚意を感謝しながらも、花束のまま庭の土に挿し込んで置く  
に過ぎなかった。それがどういう気まぐれか、二、三日前に古道  
具屋の店先で徳利のような花瓶を見つけて、ふとそれを買ひ込ん  
で来たのが始まりで、急に花を生けて見たくなつたのである。

庭の紅梅はまだなかなか咲きそうもないので、灯ともし頃によ  
うやく書き終つた原稿をポストに入れながら、夜の七時半頃に十  
番の通りへ出てゆくと、きのう一日降り暮らした後であるから、  
予想以上に路が悪い。師走<sup>しわす</sup>もだんだんに数え日<sup>かずび</sup>に迫つたので、混  
雑もまた予想以上である。そのあいだをどうにか斯<sup>こ</sup>うにか潜りぬ

けて、夜店の切花屋で梅と寒菊とを買うには買ったが、それを無事に保護して帰るのがすこぶる困難であつた。甲の男のかかえて来るチャブ台に突き当るやら、乙の女の提げてくる風呂敷づつみに擦れ合うやら、ようようのことで安田銀行支店の角まで帰り着いて、人通りのやや少ないところで袖の下からかの花を把り出して、電燈のひかりに照らしてみると、寒菊はまず無難であつたが、梅は小枝の折れたのもあるばかりか、花も蕾つぼみもかなりに傷められて、梶原源太が「かじわらげんた箬えびらの梅」という形になつていた。

「こんなことなら、あしたの朝にすればよかつた。」

この源太は二度の駆けをする勇氣もないので、寒菊の無難をせめてもの幸いに、箬の梅をたずさえて今夜はそのまま帰ってくる

と、家には中嶋俊雄なかしまとしおが来て待つていた。

「渋谷の道玄坂しづや どうげんざか辺は大変な繁昌で、どうして、どうして、この辺どころじゃありませんよ。」と、彼は云った。

「なんと云つても、焼けない土地は仕合せだな。」

こう云いながら、わたしは梅と寒菊とを書斎の花瓶にさした。  
底冷えのする宵である。  
(十二月二十三日)

## 明治座

この二、三日は馬鹿に寒い。けさは手水鉢ちようずばちに厚い氷を見た。

午前八時頃に十番の通りへ出てみると、末広座の前にはアーチ

を作っている。劇場の内にも大勢の職人が忙がしそうに働いている。震災以来、破損のままに捨て置かれたのであるが、来年の一月からは明治座と改称して松竹合名会社の手で開場し、左団次一座が出演することになったので、俄かに修繕工事に取りかかったのである。今までは繁華の町のまんなか、死んだ物のように寂せきばくく寞として横たわっていた建物が、急に生き返って動き出したかとも見えて、あたりが明るくなったように活気を生じた。焚火たきびの煙けむりが威勢よく舞いあがっている前に、ゆうべは夜明かしであったと笑いながら話している職人もある。立ち停まって珍しそうにそれを眺めている人たちもある。

足場をかけてある座の正面には、正月二日開場の口上看板がも

う揚がつている。二部興行で、昼の部はただのぶ忠信のみちゆき道行、いざり璧の仇討、とりべやま鳥辺山心中、夜の部はしんちようき信長記、なにわ浪華のはるさめ春雨、ふたおもて双面  
 という番組も大きく貼り出してある。

左団次一座が麻布の劇場に出勤するのは今度が初めてである上に、震災以後東京で興行するのもこれが初めてであるから、その前景気は甚だ盛んで、麻布十番の繁昌にまた一層の光彩を添えた観がある。どの人も浮かれたような心持で、劇場の前に群れ集まって来て、なにを見るときも無しにたたずんでいるのである。

私もその一人であるが、浮かれたような心持は他の人々に倍していることを自覚していた。明治座が開場のことも、左団次一座が出演のことも、又その上演の番組のことも、わたしは疾とうから

承知しているのではあるが、今やこの小さい新装の劇場の前に立つた時に、復興とか復活とか云うような、新しく勇ましい心持が胸いっぱいに漲るみなぎのを覚えた。

わたしの脚本が舞台上演されたのは、東京だけでもすでに百数十回にのぼっているのと、もう一つには私自身の性格の然らしむるところとで、わたしは従来自分のさくぶつ作物の上演ということに就いては余りに敏感でない方である。勿論、不愉快なことではないが、又さのみに愉快とも感じていないのであった。それが今日にかぎって一種の昂奮を感じるように覚えるのは、単にその上演目録のうちには鳥辺山心中と、信長記と、浪華の春雨と、わたしの作物が三種までも加わっていると云うばかりでなく、震災のため



に自分の物いっさいを失ったように感じていた私に取って、自分  
はやはり何物をか失わずにいたと云うことを心強く感じさせたか  
らである。以上の三種が自分の作として、得意の物であるか不得  
意の物であるかを考えている暇ひまはない。わたしは焼け跡の灰の中  
から自分の財を拾い出したように感じたのであった。

「お正月から芝居がはじまる……。左団次が出る……。」と、そ  
こらに群がっている人の口から、一種の待つある如きさざめきが  
伝えられている。

わたしは愉快にそれを聴いた。私もそれを待っているのである。  
少年時代のむかしに復かえつて、春を待つという若やいだ心が私の胸  
に浮き立った。幸か不幸か、これも震災の賜物である。

「いや、まだほかにもある。」

こう気がついて、わたしは劇場の前を離れた。横町はまだ滑りそうに凍っているその細い路を、わたしの下駄はカチカチと踏んで急いだ。家へ帰ると、すぐに書齋の戸棚から古いバスケットを取り出した。

震災の当時、蔵書も原稿もみな焼かれてしまったのであるが、それでもいよいよ立ち退くというまぎわに、書齋の戸棚の片隅に押し込んである雑誌や新聞の切抜きを手あたり次第にバスケットへつかみ込んで来た。それから紀尾井町、目白、麻布と転々する間に、そのバスケットの底を丁寧に調べてみる気も起らなかった

が、麻布にひとまず落着いて、はじめにそれを検査すると、幾束かの切抜きがあらわれた。それは何かの参考のために諸新聞や雑誌を切り抜いて保存して置いたもので、自分自身の書いたものは二束に過ぎないばかりか、戯曲や小説のたぐいは一つもない、すべてが随筆めいた雑文ばかりである。その随筆も勿論全部ではない、おそらく三分の一か四分の一ぐらいでもあろうかと思われた。

それだけでも掴み出して来たのは、せめてもの幸いであつたと思ふにつけて、一種の記念としてそれらを一冊に纏めてみようかと思ひ立つたが、何かと多忙に取りまぎれて、きょうまで其の儘ままになつていたのである。これも失われずに残されている物であると思ふと、わたしは急になつかしくなつて、その切抜きをいちい

ちにひろげて読みかえした。

わたしは今まで随分たくさんの雑文をかいている。その全部のなかから撰み出したらば、いくらから見られるものも出来るかと思うのであるが、前にもいう通り、手あたり次第にバスケットへつかみ込んで来たのであるから、なかには書き捨ての反古ほご同様なものもある。その反古も今のわたしにはまた捨て難い形見のようにも思われるので、なんでもかまわずに掻きあつめることにした。

こうなると、急に気ぜわしくなつて、すぐにその整理に取りかかると、冬の日は短い。おまけに午後には二、三人の来客があつたので、一向に仕事は撈取らず、どうにか斯こうにか片付いたのは夜の九時頃である。それでも門前には往来の足音が忙がしそうに

聞える。北の窓をあけて見ると、大通りの空は灯のひかりで一面に明るい。明治座は今夜も夜業よなべをしているのであろうなどとも思った。

さて纏まったこの雑文集の名をなんと云っていいか判らない。今の仮住居の地名をそのままに、仮に『十番随筆』ということにして置いた。これもまた記念の意味にほかならない。

(昭和12・10刊『思い出草』所収)

## 風呂を買うまで

わたしは入浴が好きで、大正八年の秋以来あさ湯の廃止されたのを悲しんでいる一人である。あさくさせんぞくまち浅草千束町辺の湯屋では依然

として朝湯を焚くという話をきいて、山の手から遠くそれを羨うらやんでいたのであるが、そこも震災後はどうなったか知らない。

わたしが多年ゆき馴れた麴町の湯屋の主人は、あさ湯廃止、湯銭値上げなどという問題について、いつも真つさきに立って運動

する一人であるという噂を聞いて、どうもよくない男だとわたしは自分勝手に彼を呪つてのろいたのであるが、呪われた彼も、呪つたわたしも、時をおなじゆうして震災の火に焼かれてしまった。その後わたしは目白に一旦立ち退いて、雑司ヶ谷ぞうしがやきしもじんの鬼子母神附近の湯屋にゆくことになった。震災後どこの湯屋も一週間ないし十日間休業したが、各組合で申し合せでもしたのか知れない、再び開業するときには大抵その初日と二日目とを無料入浴デーにしたのが多い。わたしも雑司ヶ谷の御園湯みそのゆという湯屋でその二日間無料の恩恵を蒙った。恩恵に浴すとはまったく此の事であろう。それから十月の初めまで私は毎日この湯にかよっていた。九月二十五日は旧暦の十五夜で、わたしはこの湯屋の前で薄すすきを持っている若

い婦人に出逢った。その婦人もこの近所に避難している人であることを予て知<sup>かね</sup>っているので、薄<sup>うす</sup>ら寒い秋風に靡<sup>なび</sup>いているその薄の葉摺れが、わたしの暗いところをひとしお寂しくさせたことを記憶している。

わたしはそれから河野義博君の世話で麻布の十番に近いところに貸家を見つけて、どうにか先ず新世帯を持つことになった。十番は平生でも繁昌している土地であるが、震災後の繁昌と混雑はまた一層甚だしいものであった。ここらにも避難者がたくさん集まっているので、どこの湯屋も少しおくれで行くと、芋を洗うような雑沓<sup>ざつとく</sup>で、入浴する方が却って不潔ではないかと思われるくらいであったが、わたしはやはり毎日かささずに入浴した。ここ



では越こしの湯ゆと日の出湯というのかよって、十二月二十二、二十三日の両日は日の出湯で柚湯ゆずにはいった。わたしは二十何年ぶり、ほかの土地のゆず湯を浴びたのである。柚湯、菖蒲湯しょうぶ、なんとなく江戸らしいような気分を誘い出すもので、わたしは「本日ゆず湯」のビラをなつかしく眺めながら、湯屋の新しい硝子戸をくぐった。

宿無しも今日はゆず湯の男哉

二十二日は寒い雨が降った。二十三日は日曜日で晴れていた。どの日もわたしは早く行ったので、風呂のなかはさのみに混雑し

ていなかっただが、ゆず湯というのは名ばかりで、湯に浮かんでい  
る柚の数のあまりに少ないのにやや失望させられた。それでも新  
しい湯にほんのりと匂う柚の香は、この頃とかくに尖り勝ちなわ  
たしの神経を不思議にやわらげて、震災以来初めてほんとうに入  
浴したような、安らかな爽かな気分になった。

麻布で今年の正月をむかえたわたしは、その十五日に再びかな  
りの強震に逢った。去年の大震で傷んでいる家屋が更に破損して、  
長く住むには堪えられなくなった。家主も建て直したいというの  
で、いよいよ三月なかばにここを立ち退いて、さらに現在の<sup>おおく</sup>大  
久保<sup>ほひやくにんまち</sup>百人町に移転することになった。いわゆる東移西転、ど  
こにどう落着くか判らない不安をいだきながら、ともかくもここ

を仮りの宿りと定めているうちに、庭の桜はあわただしく散つて、ここらの躑躅つづじの咲きほこる五月となつた。その四日と五日は菖蒲湯である。ここでは都湯というのに毎日かよつていたが、麻布のゆず湯とは違つて、ここの菖蒲は風呂いっぱいに青い葉をうかべているのが見るから快こころよかつた。大かた子供たちの仕事であろうが、青々とぬれた菖蒲の幾束が小桶に挿してあつたのも、なんとなく田舎めいて面白かつた。四日も五日もあいにくに陰つていたが、これで湯あがりに仰ぎ視る大空も青々と晴れていたら、さらに爽快であらうと思われた。

湯屋は大久保駅の近所にあつて、わたしの家からは少し遠いので、真夏になつてから困ることが出来た。日盛りに行つては往復

がなにぶんにも暑い。ここらは勤め人が多いので、夕方から夜にかけては湯屋がひどく混雑する。

わたしの家に湯殿はあるが、据風呂がないので内湯を焚くわけに行かない。幸いに井戸の水は良いので、七月から湯殿でぎょうず行水いを使うことにした。大おおだらい鹽しほに湯をなみなみとた湛たえさせて、

遠慮なしにぎぶぎぶ浴びてみたが、どうも思うように行かない。

行水——これも一種の俳味を帯びているものには相違ないので、わたしは行水にちなんだ古人の俳句をそれからそれへと繰り出して、つと努めて俳味をよび起そうとした。わたしの家の畑には唐もろこしもある、小さい夕顔棚もある、虫の声もきこえる。月並ながらも行水というものに相当した季題の道具立てはまずひと通り揃

っているのであるが、どうも一向に俳味も俳趣も泛かび出さない。

行水をつかつて、唐もろこしの青い葉が夕風にほの白くみだれているのを見て、わたしは日露戦争の当時、満洲で野天風呂を浴びたことを思い出した。海城、遼陽その他の城内にシナ人の湯屋があるが、城から遠い村落に湯屋というものはない。幸いに大抵の民家には大きい甕かめが一つ二つは据えてあるので、その甕を畑のなかへ持ち出して、高粱コウリヤンを焚いて湯を沸かした。満洲の空は高い、月は鏡のように澄んでいる。畑には西瓜すいかや唐茄子とうなすが蔓を這わせて転がっている。そのなかで甕から首を出して鼻唄を歌っていると、まるで狐に化かされたような形であるが、それも陣中のいっきよう一興として、その愉快は今でも忘れない。甕は焼き物であるから、湯

があまりに沸き過ぎた時、うかつにその縁ふちなどに手足を触れると、  
火傷やけどをしそうな熱さで思わず飛びあがることもあった。

しかしそれは二十年のむかしである。今のわたしは野天風呂で  
鼻唄をうたっている勇氣はない。行水も思つたほどに風流でない。  
狭くても窮屈でも、やはり据風呂を買おうかと思つている。そこ  
でまた宿無しが一句うかんだ。

宿無しが風呂桶を買ふ暑さ哉

(大正13・7 「読売新聞」)

## 郊外生活の一年

震災以来、諸方を流転して、おちつかない日を送ること一年九カ月で、月並の文句ではあるが光陰流水の感に堪えない。大久保へ流れ込んで来たのは十三年の三月で、もう一年以上になる。東京市内に生まれて、東京市内に生活して、郊外というところは友人の家をたずねるか、あるいは春秋の天気のよい日に散歩にでも出かける所であると思つていた者が、測<sup>はか</sup>らずも郊外生活一年の経

験を積むことを得たのは、これも震災の賜物たまものと云つていいかも知れない。勿論、その賜物に対してかなりの高価を支払つてはいるが……。

はじめでここへ移つて来たのは、三月の春寒はるさむがまだ去りやらない頃で、その月末の二十五、二十六、二十七日の三日間は毎日つづいて寒い雨が降つた。二十八日も朝から陰つて、ときどきに雪を飛ばした。わたしの家の裏庭から北に見渡される戸山ヶ原には、春らしい青い色はちつとも見えなかつた。尾州びしゅう侯の山荘以来の遺物かと思われる古木が、なんの風情も無しに大きい枯れ枝を突き出しているのと、陸軍科学研究所の四角張つた赤煉瓦あかれんがの建築と、東洋製菓会社の工場に聳えている大煙突と、風の吹く日には



原一面に白く巻きあがる砂煙りと、これだけの道具を列べただけでも大抵は想像が付くであろう。実に荒涼索莫さくぼく、わたしは遠い昔にさまよい歩いた満洲の冬を思い出して、今年の春の寒さがひとしお身にしみるように感じた。

「郊外はいやですね。」と、市内に住み馴れている家内の女たちは云った。

「むむ。どうも思ったほどによくはないな。」と、わたしも少しく顔をしかめた。

省線電車や貨物列車のひびきも愉快ではなかった。陸軍の射しゃて場的きばのひびきも随分騒がしかった。戸山ヶ原で夜間演習のときは、小銃を乱射するにも驚かされた。湯屋の遠いことや、買物の

不便なことや、いちいち数え立てたらいろいろあるので、わたしも此処ここまで引つ込んで来たのを悔むような気にもなったが、馴れたらどうにかなるだろうと思っっているうちに、郊外にも四月の春が来て、庭にある桜の大木二本が満開になった。枝は低い生垣いけがきを越えて往来へ高く突き出しているので、外から遠く見あげると、その花の下かげに小さく横たわっている私の家は絵のようにみえた。戸山ヶ原にも春の草が萌もえ出して、その青々とした原の上に、市内ではこのごろ滅多に見られない大きい鳶とんびが悠々と高く舞っていた。

「郊外も悪くないな。」と、わたしはまた思い直した。

五月になると、大久保名物の躑躅つづじの色がここら一円を俄かに明

るくした。躑躅園は一軒も残っていないが、今もその名所のなごりをとどめて、少しでも庭のあるところに躑躅の花を見ないことはない。元来の地味がこの花に適しているのであろうが、大きい木にも小さい株にも皆めざましい花を付けていた。わたしの庭にも紅白は勿論、むらさきや樺かばいろ色の変り種も乱れて咲き出した。わたしは急に眼がさめたような心持になって、自分の庭のうちを散歩するばかりでなく、暇さえあれば近所をうろついて、そこらの家々の垣根のあいだを覗のぞきあるいた。

庭の広いのと空地あきちの多いのを利用して、わたしも近所の人真似に花壇や畑を作った。花壇には和洋の草花の種をめちやくちやにまいた。畑には唐蜀黍とうもろこしや夏大根の種をまき、茄子なすや瓜うりの苗を

植えた。ゆうがおの種も播まき、へちまの棚も作つつた。不ぶ精しやう者もののわたしに取とつては、それらの世話がなかなかの面倒であつつたが、いやしくも郊外に住すむ以上、それが当然の仕事のようにも思われれて、わたしは朝晩の泥いじりを厭いとわなかつた。六月の梅雨のころになると、花壇や畑には茎くきや蔓つるがのび、葉や枝がひろがつて、庭一面に濡ぬれていた。

夏になつて、わたしを少しく失望させたのは、蛙かわずの一向に鳴かないことであつつた。筋向うの家の土手下の溝とどぶで、二、三度その鳴き声を聴いたことがあつつたが、そのほかにはほとんど聞えなかつた。麴町辺でも震災前には随分その声を聴いたものであるが、郊外のここらでどうして鳴かないのかと、わたしは案外に思つつた。

蛩も飛ほたるばなかつた。よそから貰つた蛩を庭に放したが、そのひかりはひと晩ほたるぎりで皆どこへか消え失せてしまった。さみだれの夜に、しずかに蛙を聴き、ほたるを眺めようとしていた私の期待は裏切られた。その代りに犬は多い。飼ひ犬と野良犬がしきりに吠えている。

幾月か住んでいるうちに、買物の不便にも馴れた。電車や鉄砲の音にも驚かなくなつた。湯屋が遠いので、自宅で風呂を焚くことにした。風呂の話は別に書いたが、ゆうぐれの涼しい風にみだれる唐蜀黍の花や葉をながめながら、小さい風呂にゆつくりと浸っているのも、いわゆる郊外気分というのであろうと、暢のんき気に悟るようにもなつた。しかもそう暢気に構えてばかりもいられない

時が来た。八月になると早つづきで、さなきだに水に乏しいこころひでりから一帯の居住者は、水を憂いずにはいられなくなつた。どこの家でも井戸の底を覗くようになって、わたしの家主の親類の家などでは、駅を越えた遠方から私の井戸の水を貰いに来た。この井戸は水の質も良く、水の量も比較的が多いので、てきめん覲面に苦しむほどのことはなかつたが、一日のうちで二時間ないし三時間は汲めないような日もあつた。庭の撒水まきみずを儉約する日もあつた。折角の風呂も休まなければならぬような日もあつた。わたしも一日に一度ずつは井戸をのぞきに行つた。夏ばかりでなく、冬でも少し照りつづくと、ここらは水切れに脅おびやかされるのであると、土地の人は話した。

蛙や虫とおなじように、ここでは虫の声もあまり多く聞かれなかつた。全然鳴かないと云うのではないが、思ったほどには鳴かなかつた。麴町にいた時には、秋の初めになるとはたおりむし機織虫などが無暗むやみに飛び込んで来たものであるが、ここではその鳴く声さえも聴いたことはなかつた。庭も広く、草も深いのに、秋の虫が多く聴かれないのは、わたしの心を寂しくさせた。虫が少ないと共に、藪蚊やぶかも案外に少なかつた。わたしの家で蚊やりを焚いたのは、前後ふた月に過ぎなかつたように記憶している。

秋になつては、コスモスと紫苑しおんがわたしの庭を賑わした。夏の日ざかりに向日葵ひまわりが軒を越えるほど高く大きく咲いたのも愉快であつたが、紫苑が枝や葉をひろげて高く咲き誇つたのも私をよろ

こぼせた。紫苑といえ、いかにも秋らしい弱々しい姿をのみ描かれてはいるが、それが十分に生長して、五株六株あるいは十株も叢むらをなしているときは、かの向日葵などと一様に、むしろ男性的の雄大な趣を示すものである。薄むらさきの小さい花が一つにかたまつて、青い大きい葉の蔭から雲のようにたなびき出ているのを遠く眺めると、さながら松のあいだから桜を望むようにも感じられる。世間一般からは余りに高く評価されない花ではあるが、ここへ来てから私はこの紫苑がひどく好きになった。どこへ行つても、わたしは紫苑を栽うえたいと思つてゐる。

唐蜀黍もよく熟したが、その当時わたしは胃腸を害していたので、それを焼く煙りを唯ながめているばかりであつた。糸瓜へちまも大



きいのが七、八本ぶらさがって、そのなかには二尺を越えたのもあつた。

郊外の冬はあわれである。山里は冬ぞ寂しさまさりける——まさかにそれほどでもないが、庭の枯れ芒すすぎが木枯らしを恐れるようになる、再びかの荒涼索莫そうもくがくり返されて、宵々ごとに一種の霜そうぎ気が圧して来る。朝々ごとに庭の霜柱が深くなる。晴れた日も珍しい小鳥がさええずつて来ない。戸山ヶ原は青い衣をはがれて、古木もその葉をふるい落すと、わずかに生き残った枯れ草が北風と砂煙りに悼いたましくむせんで、かの科学研究所の煉瓦や製菓会社の煙突が再び眼立って来る。夜は火の廻りの柝きの音が絶えずきこえて、霜に吠える家々の犬の声かけわしくなる。朝夕の寒気は市

内よりも確かに強いので、感冒にかかり易いわたしは大いに用心しなければならなかった。

郊外に盗難の多いのはしばしば聞くことであるが、ここらも用心のよい方ではない。わたしの横町にも二、三回の被害があつて、その賊は密行の刑事巡査に捕えられたが、それから間もなく、わたしの家でも窃盗せつとうに見舞われた。夜が明けてから発見したのであるが、賊はなぜか一物いちもつをも奪い取らないで、新しいメリンスの覆面頭巾を残して立ち去つた。一応それを届けて置くと、警察からは幾人の刑事巡査が来て丁寧なかなに現場を調べて行つたが、賊は不良青年の群れで、その後に中野なかのの町で捕われたように聞いた。わたしの家の女中のひとりが午後十時ごろに外から帰つて来る途

中、横町の暗いところで例の痴漢に襲われかかったが、折りよく  
巡査が巡回して来たので救われた。とかくにこの種の痴漢が出没  
するから婦人の夜間外出は注意しろと、町内の組合からも<sup>とうしゃ</sup>謄写  
版<sup>ばん</sup>の通知書をまわして来たことがある。わたしの住んでいる百  
人町には幸いに火災はないが、淀橋辺には頻繁の火事沙汰がある。  
こうした事件は冬の初めが最も多い。

「郊外と市内と、どちらが好<sup>よ</sup>うございます。」

私はたびたびこう訊かれることがある。それに対して、どちら  
も同じことですねと私は答えている。郊外生活と市内生活と、所<sup>し</sup>  
詮<sup>せん</sup>は一長一短で、公平に云えば、どちらも住みにくいと云うの  
ほかはない。その住みにくいのを忍ぶとすれば、郊外か市内か、

おのおのその好むところに従えばよいのである。

(大正<sub>レ</sub>4 「読売新聞」)

## 薬前薬後

### 草花と果物

盂蘭盆うらぼんの迎え火を焚くという七月十三日のゆう方に、わたしは突然に強い差込みに襲われてたお仆れた。急性の胃痙攣いけいれんである。医師の応急手当で痙攣の苦痛は比較的早く救われたが、元来胃腸を害しているというので、それから引きつづいて薬を飲む、粥かゆ

を啜<sup>すす</sup>る、おなじような養生法を半月以上も繰り返して、八月の一日からともかくも病床をぬけ出すことになった。病人によい時季と云うのもあるまいが、暑中の病人は一層難儀である。わたしはかなり疲労してしまった。今でも机にむかつて、まだ本当に物を書くほどの氣力がない。

病臥中、はじめの一週間ほどは努<sup>つと</sup>めて安静を守っていたが、日がだんだんに経つにつれて、気分のない日の朝晩には縁側へ出て小さい庭をながめることもある。わたしが現在住んでいるのは半蔵門に近いバラック建の二階家で、家も小さいが庭は更に小さく、わずかに八坪余りのところへ一面に草花を栽えている。

若い書生が勤勉に手入れをしてくれるので、わたしの病臥中に

も花壇はちつとも狼藉ろうぜきたる姿をみせていない。夏の花、秋の草、みな恙つつがなく生長している。これほどの狭い庭に幾種の草花類が栽えられてあるかと試みにかぞえてみると、ダリヤ、カンナ、コスモス、百合、撫子なでしこ、石竹せきちく、桔梗、矢車草、風露草ふうろそう、金魚草、月見草、おいらん草、孔雀草くじやく、黄蜀葵おうしよつき、女郎花おみなえし、男郎花おとこえし、秋海棠しゅうかいどう、水引、鶏頭、葉鶏頭、白粉おしろい、鳳仙花、紫苑、菘、芒すすき、日まわり、姫日まわり、夏菊と秋の菊数種、ほかに朝顔十四鉢——まずザツとこんなもので、一種が一株というわけではなく、一種で十余株の多きのほに上っているのもあるから、いかによく整理されていたところで、その枝や葉や花がそれからそれへと掩おおい重おもなって、歌によむ「八重葎やえむぐらしげれる宿」と云いそうな姿である。

そのほかにも桐や松や、柿や、椿、木犀もくせい、山茶花さざんか、八つ手、躑躅つじ、山吹のたぐいも雑然と栽えてあるので草木繁茂、枝や葉をかき分けなければ歩くことは出来ない。

「狭いところへよくも栽え込んだものだな。」と、わたしは自分ながら感心した。

狭い庭を藪にして、好んで藪蚊の棲み家を作っている自分の物好きを笑うよりも、こうして僅かに無趣味と殺風景から救われようと努めているバラック生活の寂しさを、今更のように考えさせられた。

わたしの家ばかりでなく、近所の住居といわず、商店といわず、バラックの家々ではみな草花を栽えている。二尺か三尺の空地に



もダリヤ、コスモス、白まわり、白粉のたぐいが必ず栽えてあるのは、震災以前にかつて見なかったことである。われわれは斯うして救われるのほかはないのであろうか。

わたしの現在の住宅は、麴町通りの電車道に平行した北側の裏通りに面しているので、朝は五時頃から割引きの電車がひびく。夜は十二時半頃まで各方面からのぼつて来る終電車の音がきこえる。それも勿論そうぞうしいには相違ないが、私の枕を最も強くゆすぶるものは貨物自動車と馬力ばりきである。これらの車は電車通りの比較的狭いのを避けて、いずれもわたしの家の前の裏通りを通り抜けることにしているので、昼間はともあれ、夜はその車輪の音が枕の上にいっそう強く響いて来るのである。

病中不眠勝ちのわたしは此の頃その響きをいよいよ強く感じるようになつた。夜も宵のあいだはまだよい。終電車もみな通り過ぎてしまつて、世間が初めてひっそりと鎮まつて、いわゆる草木も眠るといふ午前二時三時の頃に、ガタガタといい、ガラガラという響きを立てて、ほとんど絶え間も無しに通り過ぎるトラックと馬力の音、殊に馬力は速力が遅く、且は幾台もつながつて通るので、枕にひびいている時間が長い。

病中わたしに取つて更に不幸というべきは、この夜半の馬力が暑いあいだ最も多く通行することである。なんでも多摩川のあたりから水蜜桃すいみつとうや梨などの果物の籠を満載して、神田の青物市場へ送つて行くので、この時刻に積荷を運び込むと、あたかも朝あさ

市に間に合うのだそうである。その馬力が五台、七台、ないし十余台もつながって行くのは、途中で奪われない用心であると云う。いずれにしても、それが此の頃のわたしを悩ますことはひとりでない。

「これほどに私を苦しめて行くあの果物が、どこの食卓を賑わして、誰の口にはいるか。」

私は寝ながらそんなことを考えた。それに付けて思い出されるのは、わたしが巴里パリに滞在していた頃、夏のあかつきの深い靄もやが一面にとぎしている大きい並木の街まちに、馬の鈴の音がシャンシヤン聞える。靄に隠されて、馬も人も車もみえない。ただ鈴の音が遠く近くきこえるばかりである。それは近在から野菜や果物を送

つて来る車で、このごろは桜ん坊が最も多いということであった。その以来わたしは桜ん坊を食うたびに、並木の靄のうちに聞える鈴の音を思い出して、一種の詩情の湧いて来るのを禁じることが出来ない。

おなじ果物を運びながらも、東京の馬力では詩趣も無い、詩情も起らない。いたずらに人の神経を苛いらだ立たせるばかりである。

### 雁と蝙蝠

七月二十四日。きのうの雷雨のせいか、きようは土用どように入つてから最も涼しい日であった。昼のうちは陰かげつていたが、宵には薄うす

すづき  
月のひかりが洩れて、涼しい夜風がすだれ越しにそよそよと枕元へ流れ込んで来る。

病氣から例の神経衰弱を誘い出したのと、連日の暑氣と、朝から晩まで寝て暮らしているのとで、毎晩どうも安らかに眠られない。今夜は涼しいから眠られるかと、十時頃から蚊帳かやを釣らせることにしたが、窓をしめ、雨戸をしめると、やはり蒸し暑い。十時を過ぎ、十二時を過ぎて、電車の響きもやや絶えだえになつた頃から少しうとうとして、やがて再び眼をさますと、襟首には気味のわるい汗がにじんでいる。その汗を拭いて、床の上に起き直つて団扇うちわを使っていると、トタン葺ぶきの家根に雨の音がはらはらと聞える。そのあいだに鳥の声が近くきこえた。

それは雁がんの鳴く声で、お堀の水の上から聞えて来ることを私はすぐに知った。お堀に雁の群れが降りて来るのは珍しくないが、それには時候が早い。土用に入つてまだ幾日も過ぎないのに、雁の来るのはめずらしい。群れに離れた孤雁こがんが何かの途惑いをして迷つて来たのかも知れないと思つていると、雁は雨のなかにふた声三声つづけて叫んだ。

しずかにそれを聴いているうちに、私の眼のさきには昔の麴町のすがたが泛うかび出した。そこには勿論、自動車などは通らなかつた。電車も通らなかつた。スレート葺きやトタン葺きの家根も見えなかつた。家根といえは瓦葺きか板葺きである。その家々の家根の上を秋風が高く吹いて、ゆう日のひかりが漸ようやく薄れて来る

ころに、幾羽の雁の群れが列をなして大空を高く低く渡ってゆく。  
巷ちまたに遊んでいる子供たちはそれを仰いで口々に呼ぶのである。

「あとの雁が先になつたら、筭こうがい取らしよ。」

わたしも大きい口をあいて呼んだ。雁の行は正しいものであるが、時にはその声々に誘われたように後列の雁が翼を振って前列を追いぬけることがある。あるいは野に伏兵ふくへいありとでも思うのか、前列後列が俄かに行を乱して翔かけりゆく時がある。空飛ぶ鳥が地上の人の号令を聞いたかのように感じられた時、子供たちは手を拍うって愉快を叫んだ。そうして、その鳥の群れが遠くなるまで見送りながら立ち尽くしていると、秋のゆうぐれの寒さが襟にしみて来る。

秋になると、毎年それをくり返していたので、私に取っては忘れがたい少年時代の思い出の一つとなつてはいるが、この頃では秋になつても東京の空を渡る雁の影も稀まれになつた。まして往来のまんなかに突つ立つて、「笄取らしよ。」などと声を噎からして叫んでいるような子供は一人もないらしい。

雁で思い出したが、蝙蝠こうもりも夏の宵の景物の一つであつた。

江戸時代の錦絵には、柳の下に蝙蝠の飛んでいるさまを描いているのをしばしば見る。粋な芸妓などが柳橋あたりの河岸かしをあるいている、その背景には柳と蝙蝠を描くのがほとんど紋切り型のようにもなつてはいる。実際、むかしの江戸市中にはたくさん棲んでいたそうで、外国やシナの話にもあるように、化け物屋敷とい



う空家を探険してみたらば、そこに年古<sup>ふ</sup>る蝙蝠が棲んでいるのを発見したというような実話が幾らも伝えられている。大きい奴になると、不意に飛びかかって人の生き血を吸うのであるから、一種の吸血鬼と云つてもよい。相馬の古御所<sup>そうまふるごしよ</sup>の破れた翠簾<sup>すいれん</sup>の外に大きい蝙蝠が飛んでいたなどは、確かに一段の鬼気を添えるもので、昔の画家の働きである。

しかし市中に飛んでいる小さい蝙蝠は、鬼気や妖気の問題を離れて、夏柳の下をゆく美人の影を追うにふさわしいものと見なされている。私たちも子供のときには蝙蝠を追いまわした。

夏のゆうぐれ、うす暗い家の奥からは蚊やりの煙りが灰白<sup>ほのしろ</sup>く流れ出て、家の前には涼み台が持ち出される頃、どこからとも知

らず、一匹か二匹の小さい蝙蝠が迷つて来て、あるいは街を横切り、あるいは軒端のきばを伝つて飛ぶ。蚊喰い鳥という異名いみようの通り、かれらは蚊を追っているのである。それをまた追いながら、子供たちは口々に叫ぶのである。

「こうもり、こうもり、山椒食わしよ。」

前の雁とは違つて、これは手のとどきそうな低いところを舞いあるいているから、何とかして捕えようというのが人情で、ある者は竹竿を持ち出して来るが、相手はひらひらと軽く飛び去つて、容易に打ち落すことは出来ない。蝙蝠を捕えるには泥草鞋どろわらじを投げるがよいと云うことになっているので、往來に落ちてゐる草鞋や馬の沓くつを拾つて来て、「こうもり来い。」と呼びながら投げ付

ける。うまくあたつて地に落ちて来ることもあるが、又すぐに飛び揚がつてしまつて、十とおに一つも子供たちの手には捕えられない。たとい捕え得たところで、どうなるものでもないのであるが、それでも夢中になつて追ひあるく。

その泥草鞋があやまつて、往来の人に打ちあたる場合も少なくない。白地の帷かたびら子を着た紳士の胸や、白粉おしろいをつけた娘の横よこづ面らなどへ泥草鞋がぽんと飛んで行つても、相手が子供であるから腹も立てない。今日ならば明らかに交通妨害として、警官に叱られるところであろうが、昔のいわゆるお巡りさんまわは別にそれを咎とがめなかつたので、私たちは泥草鞋をふりまわして夏のゆうぐれの町を騒がしてあるいた。

街路樹に柳を栽えている町はあるが、その青い蔭にも今は蝙蝠の飛ぶを見ない。勿論、泥草鞋や馬の沓などを振りまわしているような馬鹿な子供はいない。

こんなことを考えているうちに、例の馬力が魔の車とでも云いそうな響きを立てて、深夜の町を軋きしつて来た。その昔、京の町を過ぎたという片輪車かたわぐるまの怪談を、私は思い出した。

### 駐車場の趣味

以前は人形や玩具おもちゃに趣味をもつて、新古東西の瓦楽多がらくたをかなりに蒐集していたが、震災にその全部を灰にしてしまつてから、

再び蒐集するほどの元気もなくなった。殊に人形や玩具については、これまで新聞雑誌に再三書いたこともあるから、今度は更に他の方面について少しく語りたい。

これは果たして趣味といふべきものかどうだか判らないが、とにかく私は汽車の停車場というものに就いてすこぶる興味をもっている。汽車旅行をして駅々の停車場に到着したときに、車窓からその停車場をながめる。それがすこぶるおもしろい。尊い寺は門から知れると云うが、ある意味に於いて停車場は土地そのものの象徴と云つてよい。

そんな理窟はしばらく措<sup>お</sup>いて、停車場として最もわたしの興味をひくのは、小さい停車場か大きい停車場かの二つであつて、ど

ちら付かずの中ぐらいの停車場はあまり面白くない。殊におもしろいのは、ひと列車に二、三人か五、六人ぐらいしか乗り降りしないような、寂しい地方の小さい停車場である。そういう停車場はすぐに人家のある町や村へつづいていない所もある。降りても人力車くるま一台も無いようなところもある。停車場の建物も勿論小さい。しかもそこには案外に大きい桜や桃の木などがあつて、春は一面に咲きみだれている。小さい建物、大きい桜、その上を越えて遠い近い山々が青く霞かすんでみえる。停車場のわきには粗末な竹垣などが結つてあつて、汽車のひびきに馴れている鶏が平気で垣をくぐつて出たりはいつたりしている。駅員が慰み半分につつているらしい小さい菜畑なども見える。

夏から秋にかけては、こういう停車場には大きい百日紅さるすべりや大きい桐や柳などが眼につくことがある。真紅まっかに咲いた百日紅のかげに小さい休み茶屋の見えるのもある。芒すすきの乱れているのもコスモスの繁っているのも、停車場というものを中心にして皆それぞれの画趣を作っている。駅の附近に草原や畑などが続いていて、停車している汽車の窓にも虫の声々が近く流れ込んで来ることもある。東海道五十三次をかいだ広ひろしげ重じゆうが今生きていたら、こうした駅々の停車場の姿をいちいち写生して、おそらく好個の風景画を作り出すであろう。

停車場はその土地の象徴であると、わたしは前に云ったが、直接にはその駅長や駅員らの趣味もうかがわれる。ある駅ではその

設備や風致ふうちにすこぶる注意を払っているらしいのもあるが、その注意があまりに人工的になって、わざとらしく曲がりくねった松を栽えたり、檜葉ひばをまん丸く刈り込みしてあるのは、折角ながら却っておもしろくない。やはり周囲の野趣やしゆをそのまま取り入れて、あくまでも自然に作った方がおもしろい。長い汽車旅行に疲れた乗客の眼もそれに因つていかに慰められるか判らない。汽車そのものが文明的の交通機関であるからと云つて、停車場の風致までを生半なまはんか可な東京風などに作ろうとするのは考えものである。

大きい停車場は車窓から眺めるよりも、自分が構内の人となつた方がよい。勿論、そこには地方の小停車場に見るような詩趣も



画趣も見いだせないのであるが、なんとなく一種の雄大な感が湧く。そうして、そこには単なる混雑以外に一種の活気が見いだされる。汽車に乗る人、降りる人、かならずしも活気のある人たちばかりでもあるまい。親や友達の死を聞いて帰る人もあろう。自分の病いのために帰郷する人もあろう。地方で失敗して都会へ職業を求めに来た人もあろう。千差万別、もとより一概には云えないのであるが、その人たちが大きい停車場の混雑した空気につつまれた時、たれもかれも一種の活気を帯びた人のように見られる。単に、あわただしいと云ってしまえばそれ迄であるが、わたしはその間に生き生きした気分を感じて、いつも愉快に思う。

汽車の出たあとの静けさ、殊に夜汽車の汽笛のひびきが遠く消

えて、見送りの人々などが静かに帰ってゆく。その寂しいような心持もまたわるくない。

わたしは麴町に長く住んでいるので、秋の宵などには散歩ながら四谷の停車場へ出て行く。この停車場は大でもなく小でもなく、わたしには余り面白くない中くらいのところであるが、それでも汽車の出たあとの静かな気分を味わうことが出来る。堤の松の大樹の上に冴えた月のかかっている夜などは殊によい。若いときは格別、近年は甚だ出不精になって、旅行する機会もだんだんに少なくなつたが、停車場という乾燥無味のような言葉も、わたしの耳にはなつかしく聞えるのである。（大正15・8「時事新報」）

## 私の机

ある雑誌社から「あなたの机は」という問合せが来たので、こんな返事をかいて送る。

天神机——今はあと方もなくなってしまいました。私が子供の時代には、まだそれが一般に行なわれていて、手習いをする子は皆それに向かったものです。わたしもその一人でした。今でも「寺子屋」の芝居をみると、何だか昔がなつかしいように思われ

ます。

これも今はあまり流行はやらないようですが、以前は普通に用いる机は桐材が一番よいと云う事になっていました。木肌きはだが柔らかなので、倚りかかる場合その他にも手当りが柔らかかでよいと云うのでした。その代りに疵きずが付き易い。文鎮をおとしてもすぐに疵が付くというわけですから、少し不注意に取扱うと疵だらけになる。それが桐材の欠点で、自然にすたれて来たのでしよう。それから一閑張いっかんばりの机が一時は流行しました。それも柔らかかでよいのと、軽くてよいのと、値段が割合に高くないのとで、一時は非常に持て囃はやされましたが、何分にも紙を貼つたものであるから傷み易い。水などを零こぼすと、すぐにぶくぶくと膨ふくれる。そんな欠点があるの

で、これもやがて廃れ<sup>すた</sup>ました。それでもまだ小机やチャブ台用としては幾分か残っているようです。

わたしは十五のときに一円五十銭で買った桐の机を多年使用していました。下宿屋を二、三度持ちあるいたり、三、四度も転居したりしたので、ほとんど完膚<sup>かんぷ</sup>なしと云うほどに疵だらけになっていましたが、それが使い馴れていて工合<sup>ぐあい</sup>がよいので、ついそのままに使いつづけていました。しかし十五の時に買った机ですか、少し小さいのが何分不便で、大きな本など拵<sup>と</sup>げる場合には、机の上をいちいち片付けてかからなければならぬ。とうとう我慢が出来なくなつて、大正十二年の春、近所の家具屋に注文して大きい机を作らせました。木材はなんでもよいと云つたら、樽<sup>せん</sup>で作

つて来たので、非常に重い上に実用専一のすこぶる殺風景なものが出来あがりしました。その代り、机の上が俄かに広くなったので、仕事をするときに参考書などを幾冊も拡げて置くには便利になった。

さりとして、三十七、八年も親しんでいた古机を古道具屋の手にわたすにも忍びないので、そのまま戸棚の奥に押し込んで置くと、その年の九月が例の震災で、新旧の机とも灰となってしまいました。新の方に未練はなかったが、旧の方は久しい友達で、若いときからその机の上でいろいろのものを書いた思い出——誰でもそうであろうが、取り分けわれわれのような者は机というものに対していろいろの思い出が多いので、それが灰になってしまったと

云うことは、かなりに私のこころを寂しくさせました。

震災の後、目白の額田六福の家に立ち退いているあいだは、この小机を借りて使っていました。十月になって麻布へ移転する時、何を措<sup>お</sup>いても机はすぐに入用であるので、高田の四つ家町<sup>まち</sup>へ行つて家具屋をあさり歩きました。勿論、その当時のことであるから択<sup>よ</sup>り好みは云つていられない。なんでも机の形をしていれば好<sup>よ</sup>いぐらいの考えで、十二円五十銭の机を買つて来た。これも材質は博<sup>よ</sup>で、それにラックスを塗つたもので、すこぶる頑丈に出来ているのです。もう少し体裁のよいのもあつたのですが、私は背が高いので机の脚も高くなければ困る。そういう都合で、脚の高いのを取得<sup>とりえ</sup>に先ずそれを買ひ込んで、そのまま今日まで使つて

いるわけです。その後にくらかま優しの机を見つけなくてもありませんが、震災以来、三度も居所を変えて、いまだに仮越しの不安定の生活をつづけているのですから、震災記念の安机が丁度相当かとも思って、現にこの原稿もその机の上で書いているような次第です。

わたしは近眼のせいもありましたが、机は明るいところに据えなければ、読むことも書くことも出来ません。光線の強いのを嫌う人もありますが、わたしは薄暗いようなところでは何だか頼りないような気がして落着かれません。それですから、一日のうちにも幾度も机の位置をかえることがあります。したがって、余りに重い机は持ち運ぶに困るのですが、机にむかった感じを云えば、



どうも重くて大きい方がドツシリとして落着かれるようです。チヤブ台の上などで原稿をかく人がありますが、私には全然できません。それがために、旅行などをして困ることがあります。

もう一つ、これは年来の習慣ですが、わたしは自宅にいる場合、飯を食うときのほかは机の前を離れたことはほとんどありません。読書するとか原稿を書くとか云うのでなく、ただぼんやりとしているときでも必ず机の前に坐っています。鳥で云えば一種の止まり木とでも云うのでしょうか。机の前を離れると、なんだかぐら付いているようで、自分のからだを持て余してしまうのです。妙な習慣が付いたものです。

（大正十一年・九「婦人公論」）

## 読書雑感

なんと云つても此の頃は読書子に取つては恵まれた時代である。円本は勿論、改造文庫、岩波文庫、春陽堂文庫のたぐい、二十銭か三十銭で自分の読みたい本が自由に読まれるというのは、どう考えても有難いことである。

趣味から云えば、廉価版の安つぽい書物は感じが悪いという。それも一応は尤も<sup>もつと</sup>であるが、読書趣味の普及された時代、本を読

みたくても金が無いという人々に取っては、廉価版は確かに必要である。また、著者としても、豪華版を作つて少数の人に読まれるよりも、廉価版を作つて多数の人に読まれた方がよい。五百人六百人に読まれるよりも、一万人二万人に読まれた方が、著者としては本懐でなければならぬ。

それに付けても、わたしたちの若い時代に比べると、当世の若い人たちは確かに恵まれていると思う。わたしは明治五年の生まれで、十七、八歳すなわち明治二十一、二年頃から、三十歳前後すなわち明治三十四、五年頃までが、最も多くの書を読んだ時代であつたが、その頃にはもちろん廉価版などというものは無い。第一に古書の翻刻が甚だ少ない。

したがって、古書を読もうとするには江戸時代の原本を尋ねなければならぬ。

その原本は少ない上に、あたいやす価も廉くない。わたしは神田の三久みかわやきゆうべえ（三河屋久兵衛）という古本屋へしばしばひやかしに行ったが、貧乏書生の悲しさ、読みたい本を見付けても容易に買うことが出来ないのであった。金さえあれば、おれも学者になれるのだと思つたが、それがどうにもならなかつた。

私にかぎらず、原本は容易に獲えられず、その価もまた廉くない関係から、その時代には書物の借覧ということが行なわれた。蔵書家に就いてその蔵書を借り出して来るのである。ところが、蔵書家には門外不出を標ひょうぼう榜ぼうしている人が多く、自宅へ来て読む

というならば読ませてやるが、貸出しはいつさい断わるというのである。そうになると、その家を訪問して読ませて貰うのほかは無い。

日曜日のほかに余暇のないわたしは、それからそれへと紹介を求めて諸家を訪問することになったが、それが随分難儀な仕事であつた。由来、蔵書家というような人たちは、東京のまん中に余り多く住んでいない。大抵は場末の不便なところに住んでいる。電車の便などのない時代に、本郷小石川や本所深川辺まで尋ねて行くことになる、その往復だけでも相当の時間を費<sup>ついや</sup>してしまふので、肝腎の読書の時間が案外に少ないことになるにはすこぶる困つた。

なにしろ馴染<sup>なじ</sup>みの浅い家へ行つて、悠々と坐り込んで書物を読んでゐるのは心苦しいことである。蔵書家と云つても、広い家に住んでゐるとは限らないから、時には玄関の二畳ぐらいの処に坐つて読まされる。時にはまた、立派な座敷へ通されて恐縮することもある。腰弁当で出かけても、碌<sup>ろくろく</sup>々に茶も飲ませてくれない家がある。そうかと思うと、茶や菓子を出して、おまけに鰻飯などを食わせてくれる家がある。その待遇は千差万別で、冷遇はいささか不平であるが、優待もあまりに気の毒でたびたび出かけるのを遠慮するようにもなる。冷遇も困るが、優待も困る。その加減がどうもむずかしいのであつた。

そのあいだには、上野の図書館へも通つたが、やはり特別の書

物を読もうとすると、蔵書家をたずねる必要が生ずるので、わたしは前に云うような冷遇と優待を受けながら、根こんよく方々をたずね廻った。ただ読んでいるばかりでは済まない。時には抜書きをすることもある。万年筆などの無い時代であるから、矢立やたてと罫紙けいしを持参で出かける。そうした思い出のある抜書き類も、先年の震災でみな灰となつてしまった。

そういう時代に、博文館から日本文字全書、温知叢書おんち、帝国文庫などの翻刻物を出してくれたのは、われわれに取つて一種の福ふ音くいんであつた。勿論、ありふれた物ばかりで、別に珍奇の書は見いだされなかつたが、それらの書物を自分の座右に備え付けて置かれるというだけでも、確かに有難いことであつた。

その後、古書の翻刻も続々行なわれ、わたしの懐ろにも幾分の余裕が出来て、買いたい本はどうか買えるようにもなったが、その昔の読書の苦しみは身にしみて覚えている。わたしはその経験があるだけに、書物の装幀そうていなどには余り重きを置かない。なんでも安く買えて、それを自分の手もとに置くことの出来るのを第一義としている。

前にもいう通り、わたしが矢立と罫紙を持って、風雨を冒して郊外の蔵書家を訪問して、一生懸命に筆写して来た書物が、こんに今日では何々文庫として二十銭か三十銭で容易に手に入れることが出来るのは、読書子に取って実に幸福であると云わなければならぬ。廉価版が善い、悪いのと贅沢をいふべきでは無い。



博文館以外にも、その当時に古書を翻刻してくれた人々は、その目的が那辺なへんにあらうとも、われわれに取ってはみな忘れ難い恩人であつた。その人々も今は大かた此の世にいないであらう。その書物も次第に堙滅いんめつして、今は古本屋の店頭にもその形をとどめなくなつた。私もその翻刻書類を随分蒐集していたが、それもみな震災の犠牲になつてしまつたのは残り惜しい。

わたしは比較的に好運の人間で、これまでに余りひどい目に逢つたことも無かつたが、震災のために、多年の日記、雑記帳、原稿のたぐいから蔵書一切を焼き失つたのは、一生一度の償つぐない難き災禍であつた。この恨みは綿々として尽きない。

(昭和8・3「書物展望」)

## 回想・半七捕物帳

### 捕物帳の成り立ち

初めて「半七捕物帳」を書こうと思い付いたのは、大正五年の四月頃とおぼえています。その頃わたしはコナン・ドイルのシャーロック・ホームズを飛びとびに読んでいたが、全部を通読したことが無いので、丸善へ行ったついでに、シャーロック・ホーム

ズのアドヴェンチュアとメモヤーとレターンの三種を買って来て、一気に引きつづいて三冊を読み終えると、探偵物語に対する興味が油然と湧き起つて、自分もなにか探偵物語を書いてみようという気になったのです。勿論、その前にもヒュームなどの作も

読んでいましたが、わたしを刺戟したのはやはりドイルの作です。

しかしまだ直ぐには取りかかれないので、さらにドイルの作を獲つて、かのラスト・ギャリーや、グリーン・フラダヤ、爐畔物

語や、それらの短篇集を片っ端から読み始めました。しかし一方に自分の仕事があつて、その頃は時事新報の連載小説の準備もしなければならなかつたので、読書もなかなか撈取らず、最初からでは約ひと月を費して、五月下旬にようやく以上の諸作を読み終

りました。

そこで、いざ書くという段になって考えたのは、今までに江戸時代の探偵物語というものが無い。大岡政談や板倉政談はむしろ裁判を主としたものであるから、新たに探偵を主としたものを書いてみたら面白かろうと思ったのです。もう一つには、現代の探偵物語を書くとき、どうしても西洋の模倣に陥り易いおそ虞れがあるの  
で、いつそ純江戸式に書いたならば一種の変った味のもので出来  
るかも知れないと思ったからでした。幸いに自分は江戸時代の風  
俗、習慣、法令や、町奉行、与力、同心、岡っ引などの生活に就  
いても、ひと通りの予備知識を持っているので、まあ何とかなる  
だろうという自信もあつたのです。

その年の六月三日から、まず「お文くみたましいの魂」四十三枚をかき、それから「石燈籠」四十枚をかき、更に「勘平の死」四十一枚を書くこと、八月から国民新聞の連載小説を引き受けなければならぬ事になりました。時事と国民、この二つの新聞小説を同時に書いているので、捕物帳はしばらく中止の形になっていると、そのころ文芸倶楽部の編集主任をしていた森 暁ぎようこう 紅君から何か連載物を寄稿しろという注文があったので、「半七捕物帳」という題名もとの下にまず前記の三種を提出し、それが大正六年の新年号から掲載され始めたので、引きつづいてその一月から「湯屋の二階」  
「お化師匠ばけ」「半鐘の怪」「奥女中」を書きつづけました。雑誌の上では新年号から七月号にわたって連載されたのです。

そういうわけで、探偵物語の創作はこれが序開きであるので、自分ながら覚束ない手探りの形でしたが、どうやら人気になったと云うので、更に森君から続篇をかけと注文され、翌年の一月から六月にわたって又もや六回の捕物帳を書きました。その後も諸雑誌や新聞の注文をうけて、それからそれへと書きつづけたので、捕物帳も案外多量の物となって、今まで発表した物話は四十数篇あります。

半七老人は実在の人か——それに就いてしばしば問い合せを受けます。勿論、多少のモデルが無いでもありませんが、大体に於いて架空の人物であると御承知ください。おれは半七を知っているとか、半七のせがれは齒医者であるとか、或いは時計屋である

とか、甚だしいのはおれが半七であると自称している人もあるそうですね、それは恐らく、同名異人で、わたしの捕物帳の半七老人とは全然無関係であることを断わっておきます。

前にも云った通り、捕物帳が初めて文芸倶楽部に掲載されたのは大正六年の一月で、今から振り返ると十年余りになります。その文芸倶楽部の誌上に思い出話を書くにつけて、今更のように月日の早いのに驚かされます。(昭和2・8「文芸倶楽部」)

### 半七紹介状

明治二十四年四月第二日曜日、若い新聞記者が浅草公園弁天山

の惣菜そうざい（岡田）へ午飯ひるめしを食いにはいった。花盛りの日曜日であるから、混雑は云うまでも無い。客と客とが押し合うほどに混み合っていた。

その記者の隣りに膳をならべているのは、六十前後の、見るから元氣のよい老人であった。なにしろ客が立て込んでいたので、女中が時どきにお待まちどお遠さまの挨拶をして行くだけで、注文の料理はなかなか運ばれて来こない。記者は酒を飲まない。隣りの老人は一本の徳利とくりを前に置いているが、これも深くは飲まないとみえて、退屈しのぎに猪口ちよこをなめている形である。

花どきであるから他のお客様はみな景氣がいい。酔っている男、笑っている女、賑やかを通り越して騒そうぞう々々しい位であるが、その



なかで酒も飲まず、しかも独りぼっちの若い記者は唯ぼんやりと坐っているのである。隣りの老人にも連れはない。注文の料理を待つているあいだに、老人は記者に話しかけた。

「どうも賑やかですね。」

「賑やかです。きようは日曜で天気もよし、花も盛りですから。」  
と、記者は答えた。

「あなたは酒を飲みませんか。」

「飲みません。」

「わたくしも若いときには少し飲みましたが、年を取つては一向いけません。この徳利も退屈しのぎに列べてあるだけで……」

……」

「ふだんはともあれ、花見の時に下戸げこはいけませんね。」

「そうかも知れません。」と、老人は笑った。

「だが、芝居でも御覧なさい。花見の場で酔っ払っているような奴は、大抵お腰元なんぞに嫌われる敵かたきやく役で、白塗りの色男はみんな素面しらふですよ。あなたなんでも二枚目だから、顔を赤くしていないでしょう。あははははは。」

こんなことから話はほぐれて、隣り同士が心安くなつた。老人がむかしの浅草の話などを始めた。老人は瘦やせぎすの中ちゆうぜい背せいで、小粋な風采といい、流暢な江戸弁といい、紛まぎれもない下町の人種である。その頃には、こういう老人がしばしば見受けられた。

「お住居は下町ですか。」と、記者は訊きいた。

「いえ、新宿の先で……。以前は神田に住んでいましたが、十四五年前から山の手の場末へ引つ込んでしまひまして……。馬子唄で幕を明けるようになってなつちやあ、江戸っ子も型なしです。」と、老人はまた笑つた。

だんだん話しているうちに、この老人は文ぶんせい政六年未ひつじどし年の生まれで、ことし六十九歳であるというのを知つて、記者はその若いのに驚かされた。

「いえ、若くもありませんよ。」と、老人は云つた。「なにしろ若い時分からだから体に無理をしているので、年を取るとがつくり弱ります。もう意気地はありません。でも、まあ仕合せに、口と足だけは達者で、杖も突かずに山の手から観音さままで御参詣に出て

来られます。などと云うと、観音さまの罰ばちが中あたる。御参詣は附けたりで、実はわたくしもお花見の方ですからね。」

話しながら飯を食って、ふたりは一緒にここを出ると、老人はうららかな空をみあげた。

「ああ、いい天気だ。こんな花見日びより和は珍らしい。わたくしはこれから向島むこうしまへ廻ろうと思うのですが、御迷惑でなければ一緒にお出でになりませんか。たまには年寄りのお附合いもするものですよ。」

「はあ、お供しましょう。」

二人は吾妻橋あづまばしを渡つて向島へゆくと、ここもおびただしい人出である。その混雑をくぐつて、二人は話しながら歩いた。自分

はたんとも食わないのであるが、若い道連れに奢おごつてくれる積つりらしく、老人は言問ことと団子いだんごに休んで茶を飲んだ。この老人はまったく足が達者で、記者はとうとう梅うめ若わかまで連れて行かれた。

「どうです、くたびれましたか。年寄りのお供は余計にくたびれるもので、わたしも若いときに覚えがありますよ。」

長い堤つつみを引返して、二人は元の浅草へ出ると、老人は辞退する道連れを誘よつて、奴やつこうなぎの二階へあがった。蒲焼で夕飯を食つてここを出ると、広小路の春の灯は薄い霧もやのなかに沈んでいた。

「さあ、入相いりあいがボーンと来る。これからがあなたがたの世界でしよう。年寄りはここでお別れ申します。」

「いいえ、わたしも真直まっすぐに帰ります。」

老人の家は新宿のはずれである。記者の家も麴町である。同じ方角へ帰る二人は、門跡前もんぜきまえから相乗りの人力車に乗った。車の上でも話しながら帰って、記者は半蔵門のあたりで老人に別れた。言問では団子の馳走になり、奴では鰻の馳走になり、帰りの車代も老人に払わせたのであるから、若い記者はそのままでは済まされなれないと思つて、次の日曜に心ばかりの手みやげを持つて老人をたずねた。その家のありかは、新宿といつてもやがて淀橋に近しいところで、その頃はまったくの田舎であつた。先日聞いておいた番地をたよりに、尋ねたずねて行き着くと、庭は相当に広いが、四間よまばかりの小さな家に、老人は老婢おばあやと二人で閑静に暮らしているのであつた。

「やあ、よくおいでなすつた。こんな処は堀の内のお祖師そしさまへでも行く時のほかは、あんまり用のない所で……。」と、老人は喜んで記者を迎えてくれた。

それが縁となつて、記者はしばしばこの老人の家を尋ねることになった。老人は若い記者にむかつて、いろいろのむかし話を語つた。老人は江戸以来、神田に久しく住んでいたが、女房に死に別れてからここに引込んだのであるという。養子が横浜で売込商のようなことをやっているのです、その仕送りで気楽に暮らしているらしい。江戸時代には建具屋を商売にしていたと、自分では説明していたが、その過去に就いては多く語らなかつた。

老人の友達のうちに町奉行所の捕とり方かたすなわち岡っ引の一人が

あつたので、それからいろいろの捕物の話を聞かされたと言うのである。

「これは受け売りですよ。」

こう断わって、老人は「半七捕物帳」の材料を幾つも話して聞かせた。若い記者はいちいちそれを手帳に書き留めた。——ここまで語れば大抵判るであろうが、その記者はわたしである。但し、老人の本名は半七ではない。

老人の話が果たして受け売りか、あるいは他人に托して自己を語っているのか、おそらく後者であるらしく想像されたが、彼はあくまでも受け売りを主張していた。老人は八十二歳の長命で、明治三十七年の秋に世を去った。その当時、わたしは日露戦争の



従軍新聞記者として満洲に出征していたので、帰京の後にその訃ふを知ったのは残念であった。

「半七捕物帳」の半七老人は実在の人物であるか無いかという質問に、わたしはしばしば出逢うのであるが、有るとも無いとも判はつきり

然と答え得ないのは右の事情に因るのである。前にも云う通り、かの老人の話が果たして受け売りであれば、半七のモデルは他にある筈である。もし彼が本人であるならば、半七は実在の人物であるとも云い得る。いずれにしても、わたしはかの老人をモデルにして半七を書いている。住所その他は私の都合で勝手に変更した。

但し「捕物帳」のストーリー全部が、かの老人の口から語られ

たのではない。他の人々から聞かされた話もまじっている。その話し手をいちいち紹介してはられないから、ここでは半七のモデルとなった老人を紹介するにとどめて置く。

(昭和二・八「サンデー毎日」)

## 歯なしの話

七月四日、アメリカ合衆国の独立記念日、それとは何の関係もなしに、左の上の奥歯二枚が俄かに痛み出した。歯の悪いのは年来のことであるが、今度もかなりに痛む。おまけに六日は三十四度という大暑、それやこれやに悩まされて、ひどく弱った。

九日は帝国芸術院会員が初度の顔合せというので、私も文相からの案内を受けて、一旦は出席の返事を出しておきながら、更に

それを取消して、当夜はついに失礼することになった。歯はいよいよ痛んで、ゆるぎ出して、十一日には二枚ながら抜けてしまった。

わたしの母は歯が丈夫で、七十七歳で世を終るまで一枚も欠損せず、硬い煎餅でも何でもバリバリと齧かじった。それと反対に、父は歯が悪かった。ややもすれば歯痛に苦しめられて、上下に幾枚の義歯を嵌はめ込んでいた。その義歯は柘植つげの木で作られていたように記憶している。私は父の系統をひいて、子供の時から齧むしば歯の患者であつた。

思えば六十余年の間、私はむし歯のために如何ばかり苦しめられたかわからない。むし歯は自然に抜けたのもあり、医師の手に

よつて抜かれたのもあり、年々に脱落して、現在あます所は上歯二枚と下歯六枚、他はことごとく入歯である。その上歯二枚が一度に抜けたのであるから、上<sup>うわあご</sup>頤は完全に歯なしとなつて、総入歯のほかはない。

世に総入歯の人はいくらもある。現にわたしの親戚知人のうちにも幾人かを見いだすのであるが、たとい一枚でも二枚でも自分の生歯があつて、それに義歯を取付けているうちは、いささか気丈夫であるが、それがことごとく失われたとなると、一種の寂<sup>せきり</sup>寥<sup>よう</sup>を覚えずにはいられない。大きくいえば、部下全滅の將軍と同様の感がある。

馬<sup>ば</sup>琴<sup>きん</sup>も歯が悪かつた。「里見八犬伝」の終りに記されたのによ

ると、「逆上のぼせ口痛の患ひ起りしより、年五十に至りては、齒はみな年々にぬけて一枚もあらずなりぬ」とある。馬琴はその原因を讀書執筆の過勞に歸しているが、単に過勞のためばかりでなく、生来が齒質の弱い人であつたものと察せられる。五十にして総入齒になつた江戸時代の文豪にくらべれば、私などはまだ仕合せの方であるかも知れないと、心ひそかに慰めるのほかはない。殊に江戸時代と違つて、齒科の技術も大いに進歩している今日に生まれ合せたのは、更に仕合せであると思わなければならぬ。それにしても、前にいう通り、一種の寂寥の感は消えない。

私をさんざん苦しめた後に、だんだんに私を見捨てて行く上齒と下齒かずの数かず、その脱落の歴史については、また数かずの思い

出がある。それをいちいち語ってもいられず、聞いてくれる人もあるまいが、そのなかで最も深く私の記憶に残っているのは、奥歯の上一枚と下一枚の抜け落ちた時である。いずれも右であった。北支事変の風雲急なる折柄、殊にその記憶がまざまざと甦よみがえつて来るのである。

明治三十七年、日露戦争の当時、わたしは従軍新聞記者として満洲の戦地へ派遣されていた。遼陽陥落の後、私たちの一行六人は北門外の ターシーフアン 大紙房 という村に移って、劉という家の一室に止宿していたが、一室といっても別棟の広い建物で、満洲普通の農家ではあるが、比較的清浄に出来ているので、私たちは喜んでそこにひと月ほどを送った。

先年の震災で当時の陣中日記を焼失してしまったので、正確にその日を云い得ないが、なんでも九月二十日前後とおぼえている。四十歳ぐらいの主人がにこにこしながらはいつて来て、今夜は中ちゆうしゆう秋であるから皆さんを招待したいという。私たちは勿論承知して、今夜の宴に招かれることになった。

山中ばかりでなく、陣中にも曆れきじつ日がない。まして陰曆の中秋などは我々の関知する所でなかったが、二、三日前から宿の雇人らが遼陽城内へしばしば買物に出てゆく。それが中秋の月を祭る用意であることを知って、もう十五夜が来るのかと私たちも初めて気がついた。それがいよいよ今夜となって、私たちはその御馳走に呼ばれたのである。ここの家は家族五人のほか雇人六人も



使つていて、まず相当の農家であるらしいので、今夜は定めて御馳走があるだろうなどと、私たちはすこぶる嬉しがって、日の暮れるのを待ち構えていた。

きょうは朝から快晴で、満洲の空は高く澄んでいる。まことに申し分のない中秋である。午後六時を過ぎた頃に、明月が東の空に大きく昇った。ここの月は銀色でなく、銅色である。それは大陸の空気が澄んでいるためであると説明する人もあつたが、うそか本当か判らない。いずれにしても、銀盤とか玉盤とか形容するよりも、銅盤とか銅鏡とかいう方が当てているらしい。それが高く闊い碧空ひろに大きく輝いているのである。

この家の主人夫婦、男の兄、女の兄、主人の弟、そのほかに幾

人の雇人らが袖をつらねて門前に出た。彼らは形を正して、その月を拝していた。それから私たちを母屋おもやへ招じ入れて、中秋の宴を開くことになったが、案の如くに種々の御馳走が出た。豚、羊、鶏、魚、野菜のたぐい、あわせて十種ほどの鉢や皿が順々に運び出されて、私たちは大いに満腹した。そうしてお世辞半分に「好々的ホーホーデー」などと叫んだ。

宴会は八時半頃に終つて、私たちは愉快にこの席を辞して去つた。中には酩酊して、自分たちの室へやへ帰ると直ぐに高たかい軒びきで寝てしまった者もあつた。あるいは満腹だから少し散歩して来るといふ者もあつた。私も容易に眠られなかつた。それは満腹のためばかりでなく、右の奥の下歯が俄かに痛み出したのである。久し

振りで種々の御馳走にあずかつて、いわゆる餓虎がこの肉を争うが如く、遠慮もお辞儀もなしに貪り食らった祟りたたが忽ちにあられ来たつたものと知られたが、軍医部は少し離れているので、薬をもらいに行くことも出来ない。持ち合せの宝丹を塗ったぐらいでは間に合わない。私はアンペラの敷物の上どころがって苦しんだ。

齒はいよいよ痛む。いつそ夜風に吹かれたらよいかも知れないと思つて、私はよほど腫はれて来たらしい右の頬をおさえながら、どこを的あてともなしに門外まで迷い出ると、月の色はますますあかるく、門前の小川の水はきらきらと輝いて、堤の柳の葉は霜をおびたように白く光っていた。

わたしは夜なかまでそこらを歩きまわつて、二度も歩哨の兵士

にとがめられた。宿へ帰って、午前三時頃から疲れて眠って、あくる朝の六時頃、洗面器を裏手の畑へ持ち出して、寝足らない顔を洗っていると、昨夜来わたしを苦しめていた下歯一枚がぼろりと抜け落ちた。私は直ぐにそれをつまんで白<sup>パイサイ</sup>菜の畑のなかに投げ込んだ。そうして、ほつとしたように見あげると、今朝の空も紺<sup>こんじょう</sup>青に高く晴れていた。

もう一つの思い出は、右の奥の上歯一枚である。

大正八年八月、わたしが欧洲から帰航の途中、三日ばかりは例のモンズーンに悩まされて、かなり難儀の航海をつづけた後、風雨もすっかり収まって、明日はインドのコロンボに着くという日

の午後である。

私はモンスーン以来痛みつづけていた右の奥歯のことを忘れたように、熱海丸の甲板を愉快に歩いていた。船医の治療を受けて、きよ<sup>ひる</sup>うの午頃から歯の痛みも全く去ったからである。食堂の午<sup>ひるめ</sup>飯も今日は旨く食べられた。暑いのは印度洋であるから仕方がない。それでも空は青々と晴れて、海の風がそよそよと吹いて来る。暑さにゆだつて昼寝でもしているのか、甲板に散歩の人影も多くない。

モンスーンが去つたのと歯の痛みが去つたのと、あしたはインドへ着くという楽しみとで、私は何か大きい声で歌いたいような心持で、甲板をしばらく横行闊歩していると、偶然に右の奥の上

歯が揺らぐように感じた。今朝まで痛みつづけた歯である。指でつまんで軽く揺すつてみると、案外に安々と抜けた。

なぜか知らないが、その時の私はひどく感傷的になった。何十年の間、甘い物も食った。まずい物も食った。八百善の料理も食った。家台店のおでんも食った。そのいろいろの思い出がこの歯一枚をめぐって、廻り燈籠のように私の頭のなかに閃いて通った。

私はその歯を把つて海へ投げ込んだ時、あたかも二尾ひきの大きい鱻ふかが蒼黒い背をあらわして、船を追うように近づいて来た。私の歯はこの魚腹に葬られるかと見ていると、鱻はこんな物を呑むべく余りに大きい口をあいて、厨くりやから投げあたえる食い残りの魚肉を猟あきっていた。私の歯はそのまま千尋ちひろの底へ沈んで行つたらしい。

わたしはまだ暮れ切らない大洋の浪のうねりを眺めながら、暫くそこに立ち尽くしていた。

前の下歯と後の上歯と、いずれもそれが異郷の出来事であった為に、記憶に深く刻まれているのであろうが、こういう思い出はとかくにさびしい。残る下歯六枚については、余り多くの思い出を作りたくないものである。

（昭和22・7「報知新聞」）

## 我が家の園芸

上目黒へ移ってから三年目の夏が来るので、彼岸過ぎから花壇の種蒔たねまきはじめた。旧市外であるだけに、草花類の生育は悪くない。種をまいて相当の肥料をあたえて置けば、まず普通の花は咲くので、われわれのような素人でも苦労はないわけである。

そこで、毎年欲張って二十種ないし三十種の種をまいて、庭一面を藪やぶのようになっているのであるが、それでは藪蚊の棲み家を作



るおそれがあるので、今年はあまり多くを蒔かないことにした。それでも糸瓜へちまと百日草だけは必ず栽えようと思つている。

わたしは昔の人間であるせいか、西洋種の草花はあまり好まない。チューリップ、カンナ、ダリアのたぐいも多少は栽えるが、それに広い地面を分譲しようとは思わない。日本の草花でも優しげな、なよなよしたものは面白くない。桔梗ききようや女郎花おみなえしのたぐいは余り愛らしくない。わたしの最も愛するのは、糸瓜と百日草すずきと薄すずき、それに次いでは日まわりと鶏頭けいとうである。

こう列べたら、大抵の園芸家は大きな声で笑い出すであらう。岡本綺堂という奴はよくよくの素人で、とてもお話にはならないと相場を決められてしまふに相違ない。わたしもそれは万々ばんばん承

知しているが、心にもない嘘をつくわけには行かないから、正直に告白するのである。まあ、笑わないで聴いて貰いたい。

まず第一には糸瓜である。私はむかしから糸瓜をおもしろいものとして眺めていたが、自分の庭に栽えるようになったのは十年以来のことで、震災以後、大久保百人町にかりずまい仮住居をしている当時、庭のあき地を利用して、とうもろこし唐蜀黍の畑を作り、糸瓜の棚を作った。その棚はわたし自身が書生を相手にこしらえたもので、素人の作った棚が無事に保つもつかといささか不安を感じていたところが、棚はその秋の強い風雨にも恙つつがなく、糸瓜の蔓も葉も思うさま伸びて拡がって、大きい実が十五、六もぶらりと下がったので、私たちは子供のように手をたたいて嬉しかった。

その翌年の夏、銀座の天金の主人から、暑中見舞いとして式しきて亭いさんば三馬自画讚の大色紙の複製を貰った。それは糸瓜でなく、夕顔の棚の下に農家の夫婦が涼んでいる図で、いわゆる夕顔棚の下涼みであろう。それに三馬自筆の狂歌が書き添えてある。

なりひさご、なりにかまはず、すゝむべい

風のふくべの木蔭たづねて

これを見て、わたしは再び糸瓜の棚が恋しくなったが、その頃はもう麴町の旧宅地へ戻っていたので、市内の庭には糸瓜を栽えるほどの余地をあたえられなかった。そのまま幾年を送るうちに、一昨年从上目黒へ移り住むことになったので、今度は本職の植木屋に頼んで相当の棚を作らせると、果たして其の年の成績はよ

かった。昨年の出来もよかった。

わたしの家ばかりでなく、ここらには同好の人々が多いとみえて、所々に糸瓜を栽えている。棚を作っているのもあり、あるいは大木にからませているのもあり、軒から家根へ這わせているものもあるから、皆それぞれにおもしろい。由来、糸瓜というものはぶらりと下がっている姿が、なんとなく間が抜けて見えるので、とかくに軽蔑される傾きがあつて、人を罵る場合にも「へちま野郎」などと云うが、そのぶらりとしたところに一種の俳味があり、一種の野趣があることを知らなければならぬ。その実ばかりでなく、大きい葉にも、黄いろい花にも野趣横溢おういつ、静かにそれを眺めていると、まったく都会の塵ちりの浮世を忘れるの感がある。糸

瓜を軽蔑する人々こそ却つて俗人ではあるまいかと思う。

次は百日草で、これも野趣に富むがために、一部の人々からは安つぽく見られ易いものである。梅雨のあける頃から花をつけて、十一月の末まで咲きつづけるのであるから、実に百日以上である上に、紅、黄、白などの花が続々と咲き出すのは、なんとなく爽快の感がある。元来が強い草であるから、蒔きさえすれば生える、生えれば伸びる、伸びれば咲く。花壇などには及ばない、垣根の隅でも裏手の空地でも簇々そうそうとして発生する。あまりに強く、あまりに多いために、ややもすれば軽蔑され勝ちの運命にあることは、かの鳳仙花ほうせんかなどと同様であるが、わたしは彼を愛すること甚だ深い。

炎天の日盛りに、彼を見るのもいいが、秋の露がようやく繁く、こおろぎの声がいよいよ多くなる時、花もますますその色を増して、明るい日光の下もとに咲き誇っているのは、いかにも鮮あざやかである。しよせんは野人の籬落まがきに見るべき花で、富貴の庭に見るべきものではあるまいが、われわれの荒庭には欠くべからざる草花の一種である。

その次は薄すすきで、これには幾多の種類があるが、普通に見られるのは糸すすきすすき、縞すすき、鷹の羽すすきに過ぎない。しかも私の最も愛好するのは、そこらに野生の薄である。これは宿根しゅっこんの多年草であるが、もとより種まきの世話もなく、年々歳々生い茂って行くばかりである。野生のすすきは到るところに繁茂してい

るので、ひと口にカヤと呼ばれてほとんど園芸家には顧みられず、人家の庭に栽えるものでは無いとさえも云われているが、絵画や俳句ではなかなか重要な題材と見なされている。

十郎の簞みのにや編まん青薄

これは角田すみたちくれい竹冷翁の句であるが、まったく初夏の青すすきには優しい風情がある。それが夏を過ぎ、秋に入ると、ほとんど傍若無人ともいふべき勢いで生い拡がつてゆく有様、これも一種の爽快を感じずにはいられない。殊に尾花がようやく開いて、朝風の前になびき、夕月の下もとにみだれている姿は、あらゆる草花のう

ちで他にたぐいなき眺めである。

すすきは夏もよし、秋もよいが、冬の霜を帯びた枯れすすきも、十分の画趣と詩趣をそなえている。枯れかかると直ぐに刈り取つて風呂の下に投げ込むような徒やからともは俱ともに語るに足らない。しかも商売人の植木屋とて油断はならない。現に去年の冬の初めにも、池のほとりの枯れすすきを危うく刈り取られようとするのを発見して、わたしがあわてて制止したことがある。彼らもこの愛すべき薄を無名の雑草なみに取扱つていゝらしい。

市内の狭い庭園は薄を栽えるに適しないので、わたしは箱根や湯河原ゆがわらなどから持ち来たつて移植したが、いずれも年々に痩せて行くばかりであつた。上目黒に移つてから、近所の山や草原や川



端をあさつて、野生の大きい幾株を引き抜いて来た。誰も知つて  
いることであろうが、薄の根を掘るのはなかなかの骨折り仕事で、  
書生もわたしもがっかりしたが、それでもどうにか引き摺つて来  
て、池のほとり、垣根の隅、到るところに栽え込むと、ここらは  
さすがに旧郊外だけに、その生長はめざましく、あるものは七、  
八尺の高きに達して、それが白馬の尾髪をふり乱したような尾花  
をなびかせている姿は、わが家の庭に武蔵野の秋を見る心地こころちであ  
る。あるものは小さい池の岸を掩つて、水に浮かぶ鯉こいの影をかく  
している。あるものは四つ目垣に乗りかかつて、その下草を押し  
ている。生きる力のこれほどに強大なのを眺めていると、自分ま  
でがおのずと心強いようにも感じられて来るではないか。

すすきに次いで雄姿堂々たる草花は、鶏頭けいとうと向日葵ひまわりである。

いずれも野生的であり、男性的であること云うまでも無い。ひまわりも震災直後はバラツクの周囲に多く栽えられて一種の壯觀を呈していたが、区画整理のおいおい進しんちよく捗とくすると共に、その姿を東京市内から消してしまつて、わずかに場末の破れた垣根のあたりに、二、三本ぐらいつつ栽え残されているに過ぎなくなつた。しかも盛夏の赫かつかく々たる烈日のもとに、他の草花の凋しおれ返つているのをよそに見て、悠然とその大きい花輪をひろげているのを眺めると、暑い暑いなどと弱つてはいられないような気がする。

鶏頭も美しいものである。これにも種々あるらしいが、やはり普通の深しんく紅色がよい。オレンジ色も美しい。これも初霜の洗礼を

受けて、その濃い色を秋の日にかがやかしながら、見あぐるばかりに枝や葉を高く大きくひろげた姿は、まさに目ざましいと礼讚するほかは無い。わたしの庭ばかりでなく、近所の籬には皆これを栽えているので、秋日散歩の節には諸方の庭をのぞいて歩く。それが私の一つの楽しみである。葉鶏頭は鶏頭に比してやや雄大のおもむきを欠くが、天然の錦を染め出した葉の色の美しさは、なんとも譬えようがない。しかも私の庭の葉鶏頭は、どういうわけか年々の成績がよろしくない。他からいい種を貰って来ても、余り立派な生長を遂げない。私はこれのみを遺憾に思っている。

わたしの庭の草花は勿論これにとどまらないが、わたしの最も

愛するものは以上の数種で、いずれも花壇に栽えられているものでは無い。それにつけても、考えられるのは自然の心である。自然は人の労力を費すこと少なく、物資を費すこと少なきものを扱えらんで、最も面白く、最も美しく作っている。それは人間にあたえられる自然の恩恵である。人間はその恩恵にそむいて、無用の労力を費し、無用の時間を費し、無用の金銭を費して、他の変り種のような草花の栽培にうき身をやつしているのである。そうして、自然の恩恵を無条件に受け入れて楽しむものを、あるいは素人と云い、あるいは俗物と嘲あざけっているのである。こう云うのはあながちに私の負け惜しみではあるまい。

(昭10・3「サンデー毎日」)

## 最後の随筆

### 目黒の寺

住み馴れた麴町を去って、目黒に移住してから足かけ六年になる。そのあいだに「目黒町誌」をたよりにして、区内の旧蹟や名所などを尋ね廻っているが、目黒もなかなか広い。殊に新市域に編入されてからは、ひぶすまちよう碑衾町をも包含することになったので、

私のような出不精の者には容易に廻り切れない。

ほかの土地はともあれ、せめて自分の居住する区内の地理だけでもひと通りは心得て置くべきであると思いつながら、いまだに果たし得ないのは甚だお恥かしい次第である。その罪ほろぼしと云うわけでもないが、目黒の寺々について少しばかり思い付いたことを書いてみる。

目黒には有名な寺が多い。まず第一には目黒不動として知られている下目黒の瀧泉寺、祐天上人開山として知られている中目黒の祐ゆうてん天寺、政岡の墓の所在地として知られている上目黒の正覚寺などを始めとして、大小十六の寺院がある。私はまだその半分

ぐらいしか尋ねていないので、詳しいことを語るわけには行かないが、いずれも由緒の古い寺々で、旧市内の寺院とはおのずから其の趣を異にし、雑沓を嫌う私たちにはよい散歩区域である。ただ、どこの寺でも鐘を撞かないのがさびしい。

目黒には寺々あれど鐘鳴らず

鐘は鳴らねど秋の日暮るる

前にいつた瀧泉寺門前の料理屋角伊勢の庭内に、例の権八小むらさき紫の比翼塚が残っていることは、江戸以来あまりにも有名である。近頃はここに花柳界も新しく開けたので、比翼塚に線香

を供える者がますます多くなつたらしい。さびしい目黒村の古塚の下に、久しく眠っていた恋人らの魂も、このごろの新市内の繁昌には少しく驚かされているかも知れない。

正覚寺にある政岡の墓地には、比翼塚ほどの参詣人を見ないようであるが、近年その寺内にうちかけ襦袢姿の大きい銅像がこんりゆう建立さされて、人の注意を惹くようになった。云うまでもなく、政岡というのは芝居のかめい仮名で、本名は三沢初子である。初子の墓は仙台にもあるが、ここが本当の墳墓であるという。いずれにしても、小紫といい、政岡といい、芝居で有名の女たちの墓地が、さのみ遠からざる所に列んでいるのも、私にはなつかしく思われた。



草青み目黒は政岡小むらさき

芝居の女のおくつき所

寺を語れば、行人坂ぎょうにんざかの大円寺をも語らなければならぬ。行人坂は下目黒にあつて、寛永かんえいの頃、ここに湯殿山ゆどのさん行人派の寺が開かれた為に、坂の名を行人と呼ぶことになつたという。そんな考証はしばらく措おいて、目黒行人坂の名が江戸人にあまねく知られるようになったのは、明和めいわ年間の大火、いわゆる行人坂の火事以来である。

行人坂の大円寺に、通称長五郎坊主ちやうごろうという悪僧があつた。彼は放蕩破戒ほうとうはかいのために、住職や檀家に憎まれたのを恨んで、明和

九年二月二十八日の正午頃、わが住む寺に放火した。折りから西南の風が強かったので、その火は白金しろかね、麻布あさぶ方面から江戸へ燃えひろがり、下町全部と丸の内まるうちを焼いた。江戸開府以来の大火は、明暦めいれきの振袖火事と明和の行人坂火事で、相撲すもうでいえば両横綱の格であるから、行人坂の名が江戸人の頭脳に深く刻み込まれたのも無理はなかった。

そういう歴史も現代の東京人に忘れられて、坂の名のみが昔ながらに残っている。

かぐつちは目黒の寺に崇たりして

長五郎坊主江戸を焼きけり

瀧泉寺には比翼塚以外に有名の墓があるが、これは比較的知られていない。遊女の艶つやばなし話は一般に喧伝けんでんされ易く、学者の功績はとかく忘却され易いのも、世の習いであろう。それはいわゆる甘藷かんしよ先生の青木昆陽あおきこんようの墓である。もつとも、境内の丘上と丘下に二つの碑が建てられていて、その一は明治三十五年中に芝・麻布・赤坂三区内の焼芋商らが建立したもので、他は明治四十四年中に、都下の名士、学者、甘藷商らによつて建立されたものである。

こういうわけで、甘藷先生が薩摩芋移植の功労者であることは、学者や一部の人のあいだには長く記憶されているが、一般の人

はなんにも知らず、不動参詣の女たちも全く無頓着で通り過ぎて  
 しまうのは、残念であると云わなければなるまい。

芋食ひの美少女うましおとめら知るや如何いかに

目黒に甘藷先生の墓

(昭和13・10「短歌研究」)

燈籠流し

病後静養のために箱根に転地、強羅ごうらの一福旅館いちふくに滞在。七月  
 下旬のある日、散歩ながら強羅停車場へ出てゆくと三十一日午後

七時から蘆あしの湖こで燈籠とうろう流しを催すという掲示があつて、雨天順延と註しされていた。

けさの諸新聞の神奈川版かながわにも同様の記事が掲げられていたのを、私は思い出した。宿へ歸つて訊きいてみると、蘆の湖の燈籠流しは年々の行事で、八月一日は箱根神社の大祭、その宵宮よみやに催されるものであるという。

さらに案内記を調べると、今より一千一百余年前の天平勝てんぴやうしよ  
うほう宝年間に満卷上人という高僧が箱根権現やくしろの社とどに留まつていた。

湖水の西の淵ふちには九つの頭くちを有する悪龍が棲んでいて、土地の少女を其の生贄いけにえとして取り啖くちつていたが、満卷上人の神呪しんじゆによつてさすがの悪龍も永く蟄伏ちつぷくし、少女の生贄に代えて赤飯せきはんを

供えることになった。それが一種の神事となつて今も<sup>すた</sup>廃れず、大祭当日には赤飯を入れた白木の唐櫃<sup>からびつ</sup>を舟にのせて湖心に漕ぎ出で、神官が祝詞<sup>のりと</sup>を唱えてそれを水中に沈めるのを例とし、その前夜に燈籠流しを行なうことは前に云つた通りである。

流燈の由来はそれで判つた。ともかくも一度は見て置こうかと思つてみると、三十日の夜に額田<sup>ぬかだろつぶく</sup>六福が熱海から廻つて来た。

額田も私の話を聴かされて、あしたの晩は一緒に行こうという。

しかも三十一日の当日は朝のうちに俄雨、午後は曇天で霧が深い。元箱根までわざわざ登つて行つて、雨天順延では困ると、二人はすこしく躊躇していたが、恐らく雨にはなるまいと土地の人たちが云うのに励まされて、七時頃から二人は自動車に乗つて出た。

箱根遊船会社が拓ひらいたという専用道路をのぼって行くと、一路平坦、殊に先刻から懸念していた山霧は次第に晴れて、陰曆五日の月があらわれたので、まず安心とよろこんでいると、湖うみじり尻に着いた頃から燈籠の光がちらちら見えはじめた。元箱根に行き着くと、町はなかなか賑わっている。大祭を当込みの露店商人が両側に店をならべて、土地の人々と遊覧の人々の往来しげく、山の上とは思えないような雑沓である。昔も相当に繁昌したのではあろうが、所詮しよせんは蕭条しやうじやうたる山上の孤駅、その繁昌は今日の十分の一にも及ばなかったに相違ない。

満卷上人のむかしは勿論、曾我五郎の箱王丸はこおうまるが箱根権現に勤めていたのも遠い昔であるから、それらの時代の回顧はしばらく

措おいて近世の江戸時代になつても、箱根の関せきもり守たちはどの程度の繁昌をこの夜に見出したであらうか。第一に湖畔の居住者が少ない。遊覧客も少ない。今日では流燈の数およそ一千箇と称せられていますが、その燈籠の光も昔はさびしいものであつたらうと察せられる。

往来ばかりでなく、湖畔の旅館はみな満員である。私たちは車を降りて、空すいていそうな旅館にはいると、ここもやはり満員、広い食堂に椅子をならべて見物席にあててあるが、飲みながら観る者、食いながら観るもの、隅から隅まで押合うような混雑で、芸妓らもまじつて騒いでいる。東宝映画の一行もここに陣取つて、しきりに撮影の最中であつた。



燈籠は五色で、たなばたの色紙のようなもので貼られてある。それが大きい湖水の上に星のごとく乱れているのであるから、いかにも一種の壯観と云い得る。燈籠を流す舟のほかに、囃子の舟もまじっていて、太鼓の音が水にひびいて遠く近くきこえる。またそのあいだを幾艘の大きい遊覧船が満艦飾というように燈籠をかけつらね遊覧客を乗せて漕ぎ廻っている。まずはりようこく両国の川開きともいうべき、華やかな夜の光景である。

満卷上人に祈り伏せられた悪龍は、その後ふたたび姿をみせないが、くすりゆう九頭龍明神と呼ばれて、今も蘆の湖の神と仰がれている。大祭の前夜に行なわれる燈籠流しも、この九頭龍明神を祭るが為であるという。湖水の底に棲む龍神は、今夜の繁昌をいかに眺め

ているであろうか。神も恐らく今昔の感に堪たえないであろう。

燈籠流しは九時半ごろに終った。今まで湖上を照らしていた沢た

くさん

山の燈籠の火が一つ消え、二つ消えて、水は次第に暗くなった。舟の囃子もやんで、いつの間にか月も隠れた。見物の人々もおいおいに散って、岸の灯かげも薄くなった。私は云い知れない寂寥をおぼえて、闇の色の深くなり行く湖上を暫く眺めていた。

夜ふけに強羅まで戻るのも億おつくう劫であるので、私たちはここに

一泊、ほかの座敷にはほとんど徹夜で騒いでいる客もあった。夜があけると、昨夜の流燈はことごとく片付けられて、湖上には全くその影を見せなかった。誰が拾って来たのか、燈籠の一つが食堂のテーブルの上に置かれてあったので、私は手に取って眺めて

いると、拭<sup>ぬぐ</sup>ったような湖面は俄かに暗くなって、例の驟<sup>しゅう</sup>雨<sup>う</sup>がさつと降り出して来た。その雨のなかを何処<sup>どこ</sup>かで日ぐらしが啼いていた。

(昭和13・10「文藝春秋」)



# 青空文庫情報

底本：「綺堂むかし語り」光文社時代小説文庫、光文社

1995（平成7）年8月20日初版1刷発行

※「纏」と「纏」の混在は、底本通りです。

入力：fatsuki、鳩よー！編集部（「ゆず湯」のみ）

校正：松永正敏

2001年10月15日公開

2011年10月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 綺堂むかし語り

岡本綺堂

2020年 7月12日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>